

仙台市文化財調査報告書第 475 集

仙台東災害復旧関連区画整理事業 関係遺跡発掘調査報告Ⅱ

—平成 28・29・30 年度発掘調査報告書—

下飯田遺跡第 2 次・高田 B 遺跡第 2 次

2019 年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会

序 文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日頃からご理解、ご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

仙台市の東部一帯は、東日本大震災により甚大な被害をこうむった地域です。この地域の農業用地の復旧を目的として国（農林水産省東北農政局）により「仙台東災害復旧関連区画整理事業」が計画されました。事業地内の埋蔵文化財包蔵地に、水路やパイプライン、道路が建設されることになり、仙台市教育委員会が平成 26 年度から発掘調査を実施しておりました。本報告書は平成 28 年度から平成 30 年度までの調査成果をまとめたものです。下飯田遺跡第 2 次調査、高田 B 遺跡第 2 次調査の成果および、今泉遺跡隣接地、二木館跡隣接地を対象に実施した試掘調査の成果を収録しています。

仙台市教育委員会といたしましても、先人たちの残してきた貴重な文化遺産を保護し、市民の宝として保存、活用をはかりながら、永く後世に伝えていくことは、これからの「まちづくり」に欠かせない大切なことと考えています。東日本大震災被災地の復旧・復興が図られ、市民生活の回復がなされるとともに、ここに報告する調査成果が学術研究のみならず地域の歴史を解明するための資料として広く活用され、文化財に対するより深い関心とご理解をいただき、保護の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行に際しまして、ご協力、ご助言くださいました皆様に深く感謝申し上げます。

平成 31 年 3 月

仙台市教育委員会
教育長 佐々木 洋

例 言

1. 本書は「仙台東災害復旧関連区画整理事業」に伴い仙台市教育委員会が実施した、平成28年度の試掘確認調査と平成28年度及び平成29年度の高田B遺跡第2次発掘調査及び下飯田遺跡第2次発掘調査の成果とともに平成28年度の今泉遺跡隣接地、二木館跡隣接地の試掘調査の成果についてまとめたものである。
2. 下飯田遺跡の発掘調査は仙台市教育委員会が実施し、高田B遺跡の試掘確認調査、本発掘調査および本書の作成業務は、仙台市教育委員会が株式会社パスコに委託して実施した。
3. 報告書刊行にあたっては、仙台市教育委員会生涯学習部文化財課調査指導係 主濱光朗・高橋純平の監理の下、株式会社パスコが担当した。
4. 本書の執筆については第1章第1節を三浦一樹が、第2節以下第3章を平間亮輔と川又理枝株式会社パスコが、第4章を平間亮輔が、第5章を川又理枝が、第6章第1節を松本秀明(東北学院大学)が、第2節を吉川純子(古代の森研究舎)が、第7章第1節を川又理枝・植田真(株式会社パスコ)が、第2節を秋本雅彦が、第3節を川又理枝が執筆した。また、本報告書中の木製品に関する記載は荒井格(仙台市教育委員会生涯学習部文化財課調査指導係)と秋本雅彦(株式会社パスコ)の協議によった。
5. 本調査の実施に際し、東北農政局よりご協力を賜った。
6. 発掘調査及び資料の整理に際して、次の方々から多くのご指導・ご助言を賜った。記して感謝の意を表する次第である。
(五十音順・敬称略)
松本秀明(東北学院大学地域構想学科)、吉川純子(古代の森研究舎)
7. 本書の調査成果については、宮城県遺跡調査成果発表会資料などで紹介されているが、本書の記載内容がそれらに優先する。
8. 調査・整理に関する全ての資料は、仙台市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 本書に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の1:50,000地形図「仙台」の一部を改変して使用している。
2. 遺構図中の座標値は、「世界測地系」を基準とし、図中および本文記載の方位北は、全て座標北を基準としている。
3. 断面図中の数値は、海拔高度(T.P)を示す。
4. 本書中の土色の記載には『新版 標準土色帖』2000年版(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)を使用した。
5. 調査において検出された遺構については以下の遺構記号を使用し、遺構ごとに番号を付した。
SD:溝跡 SK:土坑 SR:河川跡 SX:性格不明遺構 P:ピット
6. 遺構図の縮尺はスケールとともに図中に示した。また、検出遺構の方位は、検出長軸をもって算出した。
7. 遺構図に関する凡例は、必要に応じ、その都度図中に示した。
8. 出土遺物の登録には以下の遺物記号を使用し、種別毎に番号を付した。
A:縄文土器 B:弥生土器 C:土師器(非ロクロ調整) E:須恵器 I:陶器 J:磁器 P:土製品 K:石器・礫石器・石製品
L:木製品
9. 出土状況図・写真図版に掲載した出土遺物の番号は、実測図に掲載したもの及び、写真を掲載したものについては登録番号をゴシック体で示した。
10. 遺物実測図の縮尺は、土器1/3、石器・礫石器・石製品1/1・1/2・1/3、木製品1/3・1/9を使用し、必要に応じて図中に示した。
11. 主な遺物の実測図表現と計測部位については図i、iiに示した。使用したトーン¹の凡例は図中に示した。
12. 遺物観察表において()は残存値・復元値を示している。なお、器高の計測は原則として断面とした。
13. 遺構一覧表において()は推定、[]は検出長を示している。
14. 掲載した遺物写真の縮尺は原則として遺物実測図に準じた。ただし、その縮尺での掲載が困難な場合は、縮尺を任意とした。
15. 本文中の「灰白色火山灰」(山田・庄子1980)は、これまでの仙台市域の調査報告や東北中北部の研究から、「十和田a火山灰(To-a)」¹と考えられている。降下年代は現在、西暦915年(延喜15年)と推定されており、本書もこれに従う。

註1

山田一郎・庄子真雄 1980 「宮城県に分布する灰白色火山灰」『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1979』

仙台市教育委員会 2000 『沼向遺跡第1～3次調査』仙台市文化財調査報告書第241集

小口雅史 2003 「古代北東北の広域テフラをめぐる問題—十和田aと白頭山(長白山)を中心に—」『日本律令の展開』吉川弘文館

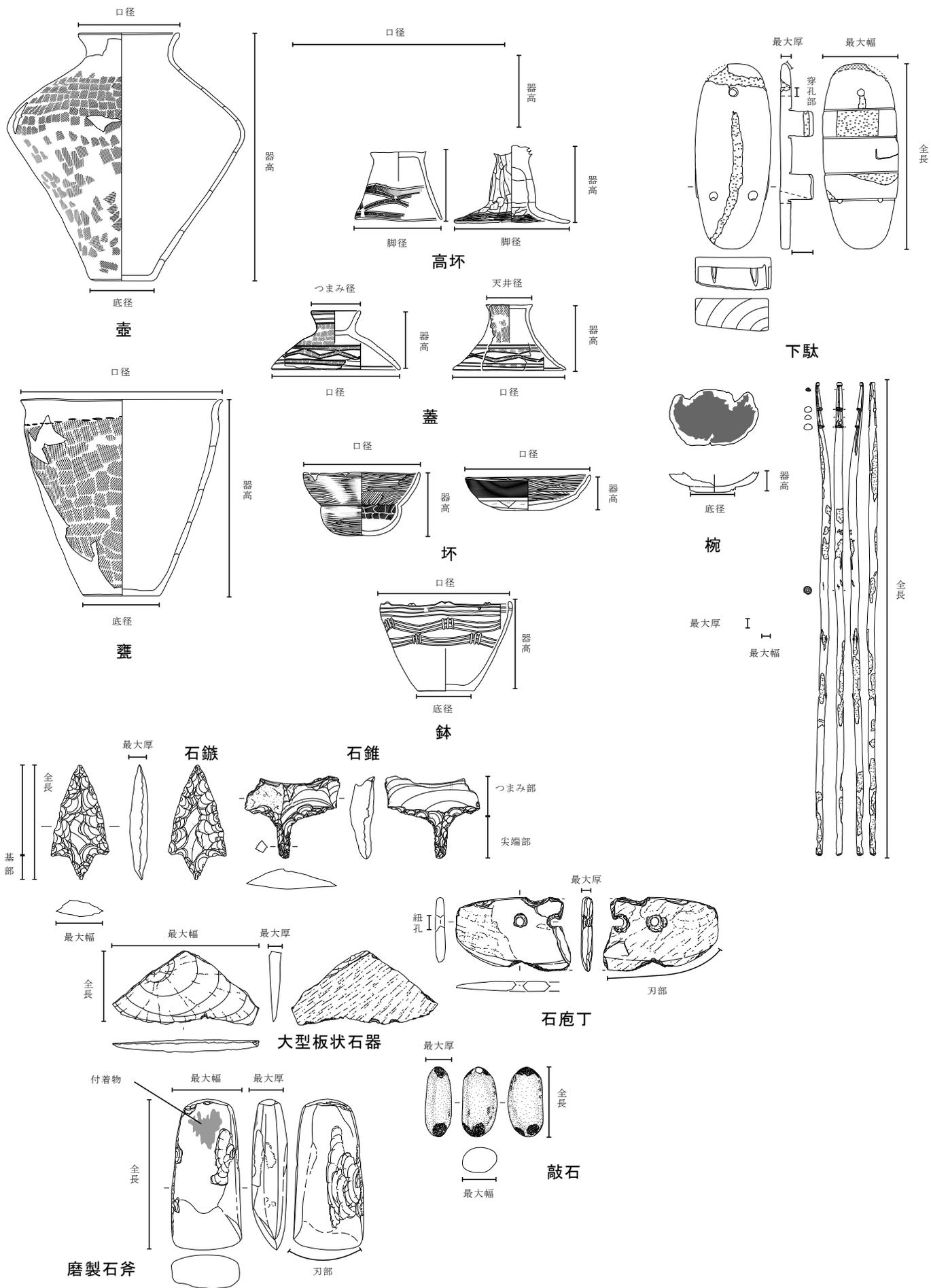


図 i 主な遺物の計測部位 (1)

目 次

第1章	調査に至る経緯と調査要項	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査要項	2
1.	六郷1ブロックにおける調査	2
2.	六郷5ブロックにおける調査	2
3.	報告書作製	3
第2章	地理的環境と歴史的環境	4
第1節	遺跡の立地と地理的環境	4
第2節	歴史的環境	5
第3章	調査の方法と経過	7
第4章	下飯田遺跡	2
第1節	基本層序	12
第2節	発見遺構と出土遺物	12
1.	1区(第6・7図、第3表)	12
2.	2区(第6・8図・第4表)	12
3.	3区	12
第5章	高田B遺跡	15
第1節	基本層序	15
第2節	試掘確認調査における確認遺構と出土遺物	21
1.	試掘調査区1(第13～21図、第6～8表)	21
2.	試掘調査区2(第22・23図、第9表)	28
3.	試掘調査区4(第24・25図、第10表)	29
4.	試掘調査区7(第26・27図、第11表)	30
5.	確認調査区8(第28～34図、第12～14表)	31
第3節	本発掘調査における確認遺構と出土遺物	38
1.	本調査区1	38
2.	本調査区2	48
3.	本調査区3	65
4.	本調査区4	72
5.	本調査区5(第67図)	85
6.	本調査区6・7(第84図)	110
7.	本調査区8(第104～108図・第69～71表)	137
8.	本調査区9(第109図・第72～77表)	141
第6章	自然科学分析	149
第1節	高田B遺跡にみられる津波堆積物と噴砂跡 松本秀明(東北学院大学地域構想学科)	149
第2節	高田B遺跡から出土した木製品の樹種同定 吉川純子(古代の森研究舎)	155

第7章	まとめ	161
第1節	下飯田遺跡の調査成果について	161
第2節	高田B遺跡の調査成果について	161
1.	各調査区の調査成果	161
2.	堆積物と出土遺物の傾向について	165
引用参考文献		168
写真図版		169
報告書抄録		

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	4	第24図	試掘調査区4位置図(1:8000)	29
第2図	下飯田遺跡、高田B遺跡周辺の地形分類図(浜堤列は松本・吉田2010による)	4	第25図	試掘調査区4 X層上面平面図(1/120)・断面図(1/60)	29
第3図	遺跡の位置と周辺遺跡分布図	5	第26図	試掘調査区7位置図(1:8000)	30
第4図	六郷2ブロックにおける工事範囲と調査区位置図	7	第27図	試掘調査区7 X層上面平面図(1/120)・断面図(1/60)・P01断面図(1/60)	30
第5図	六郷5ブロックにおける工事範囲と調査区位置図	11	第28図	確認調査区8位置図(1:8000)	31
第6図	調査区全体図(S=1/200)	13	第29図	確認調査区8-1 VI層上面平面図(1/100)・断面図(1/100)	32
第7図	1区西壁断面図(S=1/60)	14	第30図	確認調査区8-2 VI層上面平面図(1/100)・断面図(1/100)	33
第8図	2区SB1・SB2平面図・断面図(S=1/60)	14	第31図	確認調査区8-3 VI層上面平面図(1/100)・断面図(1/100)	34
第9図	基本土層柱状図(S=1/60)	17	第32図	確認調査区8-3 出土遺物 弥生土器	35
第10図	基本土層柱状図(S=1/60)	18	第33図	確認調査区8-3 出土遺物 石器	36
第11図	基本土層柱状図(S=1/60)	19	第34図	確認調査区8-4 VI層上面平面図(1/100)・断面図(1/100)	37
第12図	高田B遺跡調査区全体図(1:3000)	20	第35図	本調査区1位置図(1:8000)	38
第13図	試掘調査区1位置図(1:8000)	22	第36図	本調査区1-1 X層上面平面図(1/120)・断面図(1/60)	39
第14図	試掘調査区1_SD1確認範囲(1/1200)	22	第37図	本調査区1-2 X層上面平面図(1/120)・断面図(1/60)	41
第15図	試掘調査区1-1 V層上面平面図(1/120)・断面図(1/60)	23	第38図	本調査区1-3 X層上面平面図(1/120)・断面図(1/60)	42
第16図	試掘調査区1-4 V層上面平面図(1/120)・断面図(1/60)	23	第39図	本調査区1-4 平面図(1/120)・断面図(1/60)(1)	43
第17図	試掘調査区1-5 VI層上面平面図(1/120)・断面図(1/60)	24	第40図	本調査区1-5・6 X層上面平面図(1/120)・断面図(1/60)	45
第18図	試掘調査区1 SD01溝跡出土遺物 陶器	25	第41図	本調査区1-4・6 出土遺物 弥生土器	46
第19図	試掘調査区1 SD01溝跡出土遺物 木製品(1)	25			
第20図	試掘調査区1 SD01溝跡出土遺物 木製品(2)	26			
第21図	59試掘調査区1 SD01・SX01性格不明遺構出土遺物 木製品	27			
第22図	試掘調査区2位置図(1:8000)	28			
第23図	試掘調査区2-2 VIII層上面平面図(1/120)・断面図(1/60)	28			

第42図	本調査区2位置図(1:8000) ……	48	第75図	本調査区5中央部・南部 出土遺物 弥生土器(2) ……	98
第43図	本調査区2-1 X層上面平面図(1/120)・ 断面図(1/60) ……	49	第76図	本調査区5南部SD15 出土遺物 弥生土器 ……	99
第44図	本調査区2-2 断面図(1/60) ……	50	第77図	本調査区5区 出土遺物 石器(1) ……	102
第45図	本調査区2-2 VII・X層上面平面図(1/120) ……	51	第78図	本調査区5区 出土遺物 石器(2) ……	103
第46図	本調査区2-3 X層上面平面図(1/120)・ 断面図(1/60) ……	52	第79図	本調査区5区 出土遺物 石器(3) ……	104
第47図	本調査区2-4 平面図(1/120)・ 断面図(1/60)(折込) ……	55	第80図	本調査区5区 出土遺物 石器(4) ……	105
第48図	本調査区2-5 平面図(1/120)・ 断面図(1/60)(折込) ……	57	第81図	本調査区5区 出土遺物 石器(5) ……	106
第49図	本調査区2-2・4 出土遺物 弥生土器 ……	59	第82図	本調査区5区 出土遺物 石器(6) ……	107
第50図	本調査区2 出土遺物 石器・石製品 (打製石器・石製品) ……	61	第83図	本調査区5区 出土遺物 石器(7) ……	108
第51図	本調査区2 出土遺物 石器(大型板状石器) ……	62	第84図	本調査区6・7位置図(1:8000) ……	110
第52図	本調査区2 出土遺物 石器(敲打具類) ……	63	第85図	本調査区6・7 断面図(1/60) ……	111
第53図	本調査区2 出土遺物 木製品 ……	64	第86図	本調査区6・7 断面図(1/60) ……	113
第54図	本調査区3位置図(1:8000) ……	65	第87図	本調査区6・7 平面図(1/120)・ SK07個別遺構図(1/60) ……	115
第55図	本調査区3-1 X層上面平面図(1/120)・ 断面図(1/60) ……	66	第88図	平面図(1/120)・SK07個別遺構図(1/60) ……	117
第56図	本調査区3-2 平面図(1/120)・断面図(1/60) ……	67	第89図	本調査区6区 出土遺物 弥生土器 ……	120
第57図	本調査区3-3 平面図(1/120)・断面図(1/60) ……	69	第90図	本調査区7区 出土遺物 弥生土器(1) ……	121
第58図	本調査区4位置図(1:8000) ……	72	第91図	本調査区7区 出土遺物 弥生土器(2) ……	122
第59図	本調査区4-1 X層上面平面図(1/120)・ 断面図(1/60) ……	73	第92図	本調査区7区 出土遺物 弥生土器(3) ……	123
第60図	本調査区4-2 X層上面平面図(1/120)・ 断面図(1/60) ……	75	第93図	本調査区7区 出土遺物 弥生土器(4) ……	124
第61図	本調査区4-3 X層上面平面図(1/120)・ 断面図(1/60) ……	77	第94図	本調査区7区 出土遺物 弥生土器(5) ……	125
第62図	本調査区4-4 X層平面図(1/120)・断面図(1/60) ……	79	第95図	本調査区7区 出土遺物 弥生土器(6) ……	127
第63図	本調査区4-5 VII層上面平面図(1/120)・ 断面図(1/60) ……	80	第96図	本調査区7区 出土遺物 石器(1) ……	130
第64図	本調査区4-6・7・8 X層上面平面図(1/120)・ 断面図(1/60) ……	81	第97図	本調査区7区 出土遺物 石器(2) ……	131
第65図	本調査区4 出土遺物 弥生土器 ……	83	第98図	本調査区7区 出土遺物 石器(3) ……	132
第66図	本調査区4 出土遺物 石器・木製品 ……	84	第99図	本調査区7区 出土遺物 石器(4) ……	133
第67図	本調査区5位置図(1:8000) ……	85	第100図	本調査区7区 出土遺物 石器(5) ……	134
第68図	本調査区5北部 出土遺物 弥生土器 ……	86	第101図	本調査区7区 出土遺物 石器(6) ……	135
第69図	本調査区5北 平面図(1/120)・断面図(1/60) ……	87	第103図	本調査区8位置図(1:8000) ……	137
第70図	本調査区5北部 出土遺物 石器 ……	89	第104図	本調査区8 出土遺物 陶器 ……	137
第71図	本調査区5中央部 平面図(1/120)・断面図(1/60) ……	91	第105図	本調査区8 X層上面平面図(1/120)・ 断面図(1/60)・SR13礫敷き微細図(1/60) ……	138
第72図	本調査区5中央部・南部 平面図(1/120)・ 断面図(1/60) ……	93	第106図	本調査区8断面図(1/60) ……	139
第73図	本調査区5南部 平面図(1/120)・断面図(1/60) ……	95	第107図	本調査区8 出土遺物 石器 ……	139
第74図	本調査区5中央部・南部 出土遺物 弥生土器(1) ……	97	第108図	本調査区8 出土遺物 木製品 ……	140
			第109図	本調査区9位置図(1:8000) ……	141
			第110図	本調査区9 X層上面平面図(1/120)・ 断面図(1/60) ……	143
			第111図	本調査区9 出土遺物 弥生土器 ……	145
			第112図	本調査区9 出土遺物 石器(1) ……	146
			第113図	本調査区9 出土遺物 石器(2) ……	147
			第114図	本調査区9 出土遺物 石器(3) ……	150

挿表目次

第1表 仙台東災害復旧関連区画整理事業 関連遺跡一覧 1	第36表 本調査区4-5～8 土層注記表 …… 78
第2表 ブロック別発掘調査一覧 …… 2	第37表 本調査区4 出土遺物観察表 弥生土器 …… 83
第3表 1区西壁土層注記 …… 14	第38表 本調査区4 出土遺物観察表 石器 …… 84
第4表 2区西壁土層注記表 …… 14	第39表 本調査区4 出土遺物観察表 木製品 …… 84
第5表 試掘調査区確認土層等一覧表 …… 21	第40表 本調査区5北部 出土遺物 弥生土器観察表 …… 86
第6表 試掘調査区1区土層注記表 …… 24	第41表 本調査区5 土層注記表 …… 87
第7表 試掘調査区1 SD01溝跡出土遺物 陶器観察表 …… 25	第42表 本調査区5北 出土遺物 石器観察表 …… 89
第8表 試掘調査区1 SD1溝跡・SX1性格不明遺構出土遺物 木製品 …… 27	第43表 本調査区5中央部・南部 弥生土器観察表 …… 100
第9表 試掘調査区2 土層注記表 …… 28	第44表 本調査区5区出土石器 組成表(5区西+東+北) 101
第10表 試掘調査区4 土層注記表 …… 29	第45表 本調査区5区出土石器 観察表(遺構出土遺物) 102
第11表 試掘調査区4 土層注記表 …… 30	第46表 本調査区5区出土石器 観察表 …… 103
第12表 確認調査区8 土層注記表 …… 31	第47表 本調査区5区出土石器 観察表 …… 104
第13表 確認調査区8-3出土遺物 弥生土器観察表 …… 35	第48表 本調査区5区出土石器 観察表 …… 105
第14表 確認調査区8-3出土遺物 石器観察表 …… 36	第49表 本調査区5区出土石器 観察表 …… 106
第15表 本調査区一覧表 …… 38	第50表 本調査区5区出土石器 観察表 …… 107
第16表 本調査区1-1 基本土層注記表 …… 39	第51表 本調査区5区出土石器 観察表 …… 108
第17表 本調査区1-2・3 基本土層注記表 …… 41	第52表 本調査区6・7・11 …… 117
第18表 本調査区1-4 基本土層注記表 …… 43	第53表 本調査区6 土器観察表 …… 120
第19表 本調査区1-5・6 基本土層注記表 …… 45	第54表 本調査区7 土器観察表 …… 121
第20表 本調査区1-4・6 出土遺物 弥生土器観察表 …… 47	第55表 本調査区7 土器観察表 …… 122
第21表 本調査区2-1 基本土層注記表 …… 49	第56表 本調査区7 土器観察表 …… 123
第22表 本調査区2-2 土層注記表 …… 50	第57表 本調査区7 土器観察表 …… 124
第23表 本調査区2-3 基本土層注記表 …… 52	第58表 本調査区7 土器観察表 …… 126
第24表 本調査区2-4 基本土層注記表 …… 55	第59表 本調査区7 土器観察表 …… 127
第25表 本調査区2-5 基本土層注記表 …… 57	第60表 本調査区6・7区出土石器 組成表 …… 129
第26表 本調査区2-2・4出土遺物観察表 弥生土器 …… 60	第61表 本調査区7 出土石器 観察表 …… 130
第27表 本調査区2 出土遺物観察表(3) …… 61	第62表 本調査区7 出土石器 観察表 …… 131
第28表 本調査区2出土遺物観察表 石器(大型板状石器) 62	第63表 本調査区7 出土石器 観察表 …… 132
第29表 本調査区2 出土遺物観察表 石器(敲打具類) 63	第64表 本調査区7 出土石器 観察表 …… 133
第31表 本調査区2 出土遺物観察表(木製品) …… 64	第65表 本調査区7 出土石器 観察表 …… 134
第30表 本調査区2 石器組成表 …… 64	第66表 本調査区7 出土石器 観察表 …… 135
第32表 本調査区3-1・2 基本土層注記表 …… 67	第67表 本調査区7 出土石器 観察表 …… 136
第33表 本調査区3-3 基本土層注記表 …… 69	第78表 φスケール, mmスケールと粒子の名称 …… 152
第34表 本調査区4-1 土層注記表 …… 73	第79表 高田B遺跡出土木製品の樹種 …… 155
第35表 本調査区4-2～4 土層注記表 …… 75	第80表 第2表 器種別樹種集計 …… 156

第1章 調査に至る経緯と調査要項

第1節 調査に至る経緯

本遺跡群の調査については、平成26年5月1日付で農林水産省東北農政局仙台東土地改良建設事業所長より、「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（平成26年5月14日付H26教生文第501号により回答）が仙台市教育委員会に提出されたことにより、仙台東災害復旧関連区画整理事業と遺跡との関わりが確認され、宮城県教育委員会文化財保護課による指導に基づいて、事業対象地27ブロック中、7ブロックの15遺跡が文化財保護法第94条による協議対象とされた（第1表）。

平成26年度（一部は27年度）は、六郷2-1・3-1・3-2 2ブロック（第4・5図）における水路工事および表土漉き取り工事範囲を対象として、屋敷東遺跡・藤田新田遺跡隣接地・下飯田遺跡と同隣接地・築道遺跡において、試掘・確認調査および一部本発掘調査を実施した（仙台市教育委員会2017）。

第1表 仙台東災害復旧関連区画整理事業 関連遺跡一覧

番号	遺跡名	ブロック名	対象範囲	文書番号	対応	備考
1	屋敷東遺跡	六郷2	範囲内	H26年5月28日付文第555号	確認調査・本発掘調査	
2	藤田新田遺跡	六郷1	隣接地	H26年5月28日付文第556号	試掘・確認調査	
		六郷2	隣接地	H26年5月28日付文第555号	試掘調査	
3	下飯田業師堂古墳	六郷2	範囲内	—	確認調査・本発掘調査	試掘調査により新規登録
4	下飯田遺跡	六郷2	隣接地	H26年5月28日付文第555号	試掘調査	
5	築道遺跡	六郷1	範囲内	H26年5月28日付文第556号	確認調査	
		六郷2	範囲内	H26年5月28日付文第555号	試掘調査	
		六郷3-1	範囲内	H26年11月14日付文第2126号	試掘・確認調査	
		六郷3-2	隣接地	H26年11月14日付文第2127号	試掘調査	
6	下荒井遺跡	六郷3-1	範囲内	H26年11月14日付文第2126号	確認調査	
7	二木館跡	七郷6	範囲内	H26年8月6日付文第1237号	工事立会	
8	高田B遺跡	七郷3-1	範囲外	—	調査不要	
9	高田A遺跡	七郷3-1	範囲外	—	調査不要	
10	今泉遺跡	七郷3-2	範囲外	—	調査不要	
11	田母神屋敷跡	六郷5	隣接地	H28年6月3日付文第672号	試掘調査	
12	高田B遺跡	六郷5	範囲内	H28年6月3日付文第672号	本発掘調査	
13	高田A遺跡	六郷5	範囲外	—	調査不要	
14	今泉遺跡	六郷5	隣接地	H28年6月3日付文第672号	試掘調査	
15	田母神屋敷跡	高砂2	隣接地	H29年2月8日付文第275号	工事立会	

六郷1ブロックにおいては、平成28年7月20日付、28北仙第306号で、東北農政局仙台東土地改良建設事業所長より「六郷1ブロック区画整理工事（その1）計画と埋蔵文化財のかかわりについて（協議）」が提出され（平成28年7月22日付、H28教生文第104-25号で進達）、これに基づいて平成28年8月3日に下飯田遺跡の確認調査を実施した。確認調査の結果、掘立柱建物跡が確認されたことから、東北農政局と本発掘調査のための協議を行い、本発掘調査を実施した。

六郷5ブロックにおいては水路工事箇所および隣接地の水路工事箇所および表土漉き取り工事箇所を対象に、平成28年度は高田B遺跡の試掘確認調査（試掘調査区1～7）および本発掘調査（本調査区1・2）を実施した。平成29年度は平成28年度の調査成果に基づき拡張された高田B遺跡範囲で、本発掘調査（本調査区3～9）を実施し、隣接地の耕作範囲を対象に確認調査（試掘調査区8）を実施した。

平成30年2月1日付28北仙第782号-8で申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の通知について」（平成30年2月6日付H29教生文第104-74号で進達、平成30年2月9日付文第2633号で回答）に基づき、今泉遺跡隣接地と二木館跡隣接地の調査を実施した。

六郷2ブロックおよび六郷5ブロックにおいて実施した試掘確認調査と本発掘調査については、工事内容と調査区を第2表に示した。

第2表 ブロック別発掘調査一覧

工事 ブロック名	対象 遺跡名	工事内容	トレンチ	調査日	調査区規模	調査面積	工事 ブロック名	対象 遺跡名	工事内容	トレンチ	調査日	調査区規模	調査面積				
六郷2	下飯田遺跡	水路	本調査区1	H28. 9. 7～26	BOX排水路工：掘 削長180m、掘削幅 3.2m、掘削深2.7m	25.2㎡	六郷5	高田B遺跡	水路	本調査区2	H28.12.3 ～H29. 3. 2	①整地工：195.5ha ②用水路工：掘削 幅1.3～1.5m、掘 削深0.8～1.0m、長 さ14km ③排水路工：掘削 幅3.1～4.3m、掘削 深1.0～2.3m、長さ 11.1km ④道路工：長さ 11.1km ⑤揚水木工：1か 所	266.0㎡				
			本調査区2			58.2㎡				2-1			36.5㎡				
			本調査区3			38.4㎡				2-2			44.1㎡				
六郷5	高田B遺跡	表土 漑き取り	試掘調査区1	H28.10.17 ～11.29	①整地工：195.5ha ②用水路工：掘削 幅1.3～1.5m、掘 削深0.8～1.0m、長 さ14km ③排水路工：掘削 幅3.1～4.3m、掘削 深1.0～2.3m、長さ 11.1km ④道路工：長さ 11.1km ⑤揚水木工：1か 所	130.8㎡				高田B遺跡	水路		2-3	H29. 8.21～ 9.28	①整地工：195.5ha ②用水路工：掘削 幅1.3～1.5m、掘 削深0.8～1.0m、長 さ14km ③排水路工：掘削 幅3.1～4.3m、掘削 深1.0～2.3m、長さ 11.1km ④道路工：長さ 11.1km ⑤揚水木工：1か 所	22.3㎡	
			1-1			27.5㎡							2-4			83.7㎡	
			1-2			25.3㎡							2-5			79.4㎡	
			1-3			26.2㎡							本調査区3			189.78㎡	
			1-4			26.1㎡							3-1			40.74㎡	
			1-5			25.7㎡							3-2			91.71㎡	
		水路	試掘調査区2	H29. 1.12 ～2.17		66.6㎡							3-3	57.33㎡			
			2-1			33.4㎡							本調査区4	217.75㎡			
			2-2			33.2㎡							4-1	17.19㎡			
			表土 漑き取り			試掘調査区3							H28.10.24 ～12.20	102.5㎡		4-2	50.31㎡
						3-1								25.5㎡		4-3	36.83㎡
						3-2								26.4㎡		4-4	36.98㎡
3-3	25.5㎡	4-5		32.69㎡													
3-4	25.1㎡	4-6	14.65㎡														
水路	試掘調査区4	H28.11.18 ～12.19	50.5㎡	4-7	14.39㎡												
	試掘調査区5		H29. 1.10 ～2.16	38.5㎡	4-8	14.71㎡											
	試掘調査区6			H28.11.17 ～12.21	50.5㎡	本調査区5	846.84㎡										
	6-1				24.8㎡	表土 漑き取り	201.5㎡										
6-2	25.7㎡	本調査区7			301.81㎡												
試掘調査区7	H28.11.17 ～12.21	28.6㎡	本調査区8		141.16㎡												
本調査区1		H29. 6.13～ 10. 5	266.0㎡	表土 漑き取り	108.22㎡												
1-1			43.7㎡	確認調査区8	260.83㎡												
1-2			47.3㎡	H29. 7.28～8. 10	1	0.8×10.0	8.0㎡										
1-3	50.9㎡		2		8.0㎡												
1-4	87.0㎡	3	8.0㎡														
1-5	23.3㎡	1	8.0㎡														
1-6	24.84㎡	2	8.4㎡														
六郷5	高田B遺跡	水路	本調査区1	H29. 1.16 ～2.26	①整地工：195.5ha ②用水路工：掘削 幅1.3～1.5m、掘 削深0.8～1.0m、長 さ14km ③排水路工：掘削 幅3.1～4.3m、掘削 深1.0～2.3m、長さ 11.1km ④道路工：長さ 11.1km ⑤揚水木工：1か 所	266.0㎡	六郷5	今泉遺跡 隣接地	水路	1	H30. 6. 4	0.8×10.0	8.0㎡				
			1-1			43.7㎡				2			8.0㎡				
六郷5	高田B遺跡	水路	本調査区1	H29. 1.16 ～2.26	①整地工：195.5ha ②用水路工：掘削 幅1.3～1.5m、掘 削深0.8～1.0m、長 さ14km ③排水路工：掘削 幅3.1～4.3m、掘削 深1.0～2.3m、長さ 11.1km ④道路工：長さ 11.1km ⑤揚水木工：1か 所	266.0㎡	六郷5	二木館跡 隣接地	水路	1	H30. 6. 7	0.8×10.5	8.0㎡				
			1-1			43.7㎡				2			8.4㎡				

第2節 調査要項

1. 六郷1ブロックにおける調査

調査番号 H28-46 (受託-26)
 遺跡名 下飯田遺跡(宮城県遺跡登録番号01434)
 調査地点 仙台市若林区下飯田地内
 調査期間 平成28年9月9日～平成28年9月26日(発掘調査)
 調査対象面積 区画整理工事(BOX排水路工：掘削長180m、掘削幅3.2m、掘削深2.7m)
 調査面積 121.8㎡(1区：25.2㎡、2区：58.2㎡、3区38.4㎡)
 調査原因 国営仙台東土地改良事業(区画整理) 六郷1ブロック区画整理工事(その1)
 調査主体 仙台市教育委員会
 調査担当 仙台市教育委員会生涯学習部文化財課調査調整係
 担当職員 主査 平間 亮輔 文化財教諭 及川 基

2. 六郷5ブロックにおける調査

(1) 平成28年度

遺跡名 高田B遺跡(宮城県遺跡登録番号01440)
 調査地点 仙台市若林区日辺地内
 調査期間 平成28年10月4日～平成29年3月2日(発掘調査)
 平成29年3月3日～平成29年3月8日(整理作業)
 調査対象面積 195.5ha
 調査面積 試掘確認調査 468㎡
 本発掘調査 532㎡

調査原因 圃場整備事業
 調査主体 仙台市教育委員会
 調査担当 仙台市教育委員会生涯学習部文化財課調査指導係
 担当職員 主査 佐藤 淳 主事 小泉博明
 調査体制 株式会社パスコ仙台支店・株式会社パスコ環境文化事業部
 主任調査員 秋本雅彦（現場代理人兼任）
 調査員 川又理枝 調査補助員 蔵野泰洋
 計測員 浅野好治 計測補助員 播間大輔

(2) 平成 29 年度

遺跡名 高田 B 遺跡
 調査地点 仙台市若林区日辺地内
 調査期間 平成 29 年 6 月 5 日～平成 30 年 1 月 31 日
 調査対象面積 195.5ha
 調査面積 確認調査 468 m² 本発掘調査 1,980 m²
 調査原因 圃場整備事業
 調査主体 仙台市教育委員会
 調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課調査指導係
 担当職員 主事 小泉博明 主事 高橋純平
 調査体制 株式会社パスコ仙台支店・株式会社パスコ環境文化コンサルタント事業部
 主任調査員 秋本雅彦（現場代理人兼任）
 調査員 川又理枝
 計測員 浅野好治 計測補助員 永瀬一雄

(3) 平成 30 年度

遺跡名 今泉遺跡隣接地（宮城県遺跡登録番号 01235）
 二木館跡隣接地（宮城県遺跡登録番号 01236）
 調査地点 仙台市若林区今泉、二木
 調査期間 平成 30 年 6 月 4 日～6 月 8 日
 工事概要 ①用水路工（管水路）：長さ：12.9km、掘削幅：1.5m、掘削深度：1.1m
 ②排水路工：長さ：16.5km、掘削幅：3.7～5.5m、掘削深度：1.7m
 調査面積 計 48.45 m²
 今泉遺跡隣接地：30 m²（1T：0.9×10 m、2T：1.0×10 m、3T：1.1×10 m）
 二木館跡隣接地：18.45 m²（1T：0.9×10 m、2T：0.9×10.5 m）
 調査原因 国営仙台東土地改良事業（区画整理）六郷 5 ブロック区画整理工事
 調査主体 仙台市教育委員会
 調査担当 仙台市教育委員会生涯学習部文化財課調査調整係
 担当職員 主事 三浦一樹 文化財教諭 栗和田祥郎

3. 報告書作製

整理期間 平成 30 年 5 月 28 日～平成 31 年 3 月 20 日
 整理担当 仙台市教育委員会生涯学習部文化財課調査調整係、調査指導係
 担当職員 主事 三浦一樹 主事 高橋純平 専門員 主濱光朗
 整理体制 株式会社パスコ・株式会社パスコ環境文化コンサルタント事業部
 主任調査員 川又理枝 調査員 植田 真 調査員 秋本雅彦
 計測員 播間大輔 計測員 金沢文治

第2章 地理的環境と歴史的環境

第1節 遺跡の立地と地理的環境

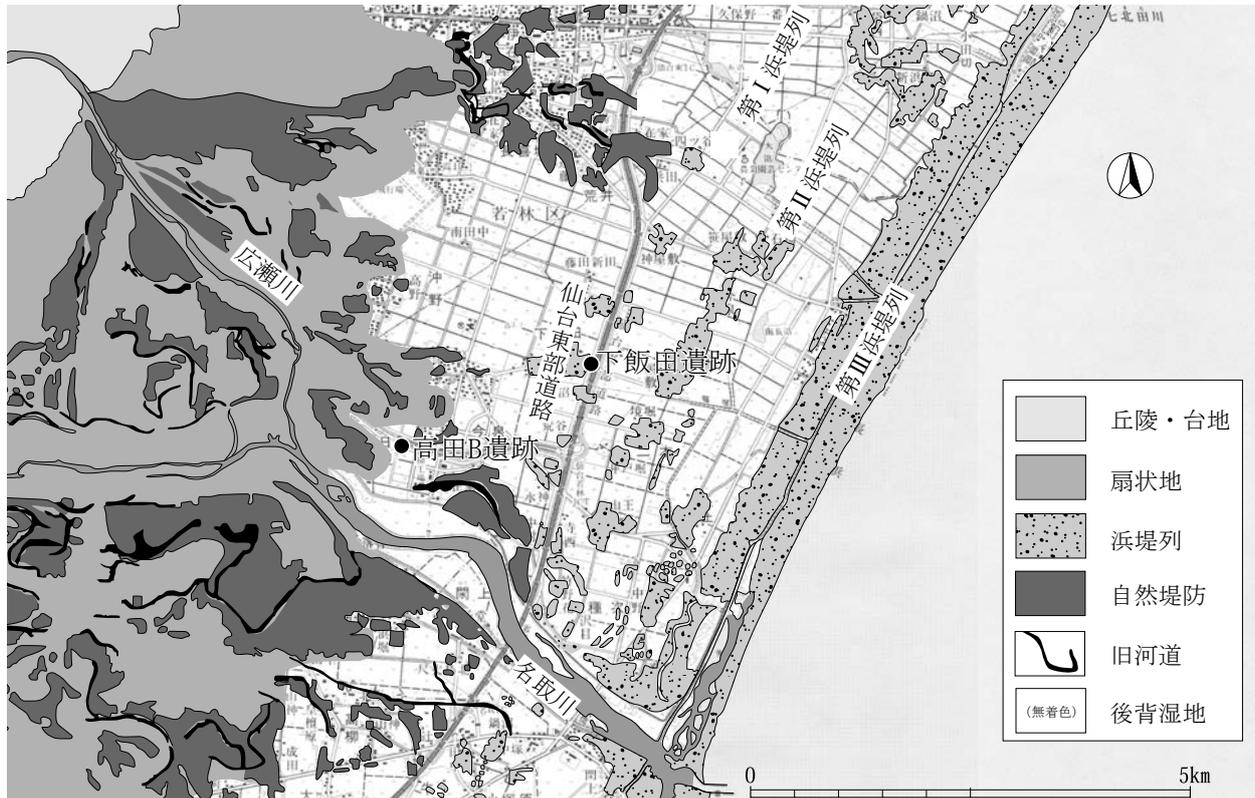
仙台平野の地形は、西から山地・丘陵地帯、段丘地帯、平野地帯の大きく三つに分かれる。山地・丘陵地帯は奥羽山脈より派生した標高300m～100m前後の山地とその周辺丘陵となっており、北から七北田川・広瀬川一名取川・阿武隈川の四本の河川が段丘地帯、平野地帯を横切って東流している。平野地帯の各所は流入する河川の規模に応じて地形的な特徴が異なっており、七北田川の影響下にある地域は仙台平野北部、広瀬川一名取川の影響下にある地域は仙台平野中部、阿武隈川の影響下にある地域は仙台平野南部と、それぞれ区分されている。

仙台平野北部は河川の供給する土砂量が比較的少なく、標高5m以下の低平な土地が広がり、完新世後期においても広い潟湖が残存する(松本・野中 2006)。また、仙台平野南部は阿武隈川に沿って内陸の角田・丸森方面へと平野が広がり、完新世前期の海面上昇期には奥深い内湾となっていたとされる(松本・吉田 2010)。遺跡が位置する仙台平野中部は、河川の運搬土砂量が比較的大きく、平野の西半分には砂礫層からなる扇状地が広がり自然堤防が発達する。また、沿岸部には過去の海岸線の位置を示す第Ⅰ、第Ⅱ、第Ⅲ浜堤列が南南西―北北東方向に伸びる。各浜堤は、第Ⅰ浜堤列が5000～4500年前、第Ⅱ浜堤列が2000～1700年前、第Ⅲ浜堤列は700年前～現在にかけて形成された地形である。

下飯田遺跡は現海岸線から約2.8km内陸の第Ⅰ浜堤列に立地し、標高約1.0mである。高田B遺跡は名取川・広瀬川の合流地点から約1.2km下流に位置し、第Ⅰ浜堤列の内陸1.5kmの後背湿地にあたる。



第1図 遺跡位置図



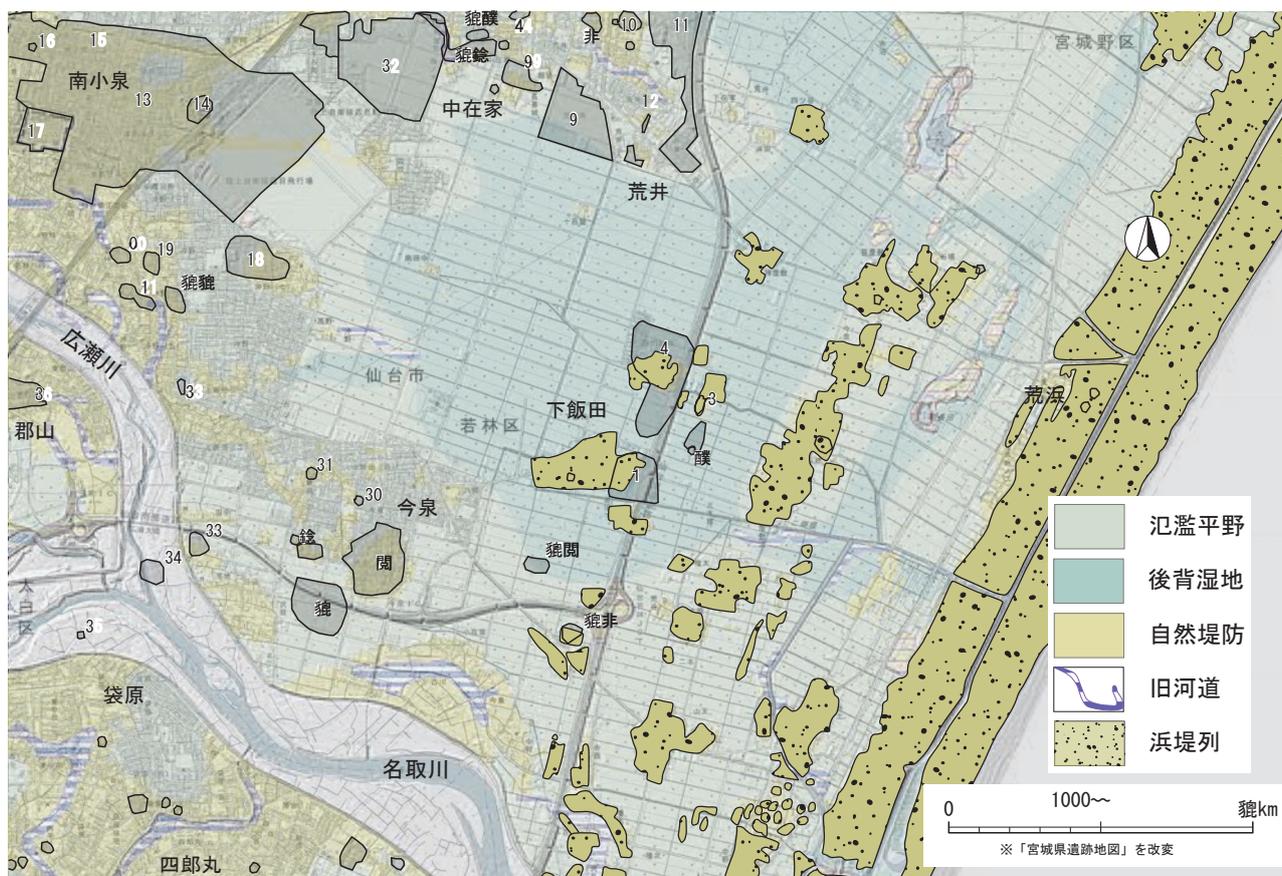
第2図 下飯田遺跡、高田B遺跡周辺の地形分類図(浜堤列は松本・吉田2010による)

第2節 歴史的環境

下飯田遺跡、高田B遺跡周辺の歴史的環境を時期毎に概観する。

1. 縄文時代

丘陵・段丘に近接する自然堤防上に立地する養種園遺跡では、包含層中から前期の繊維土器や中期の大木8b式をはじめ、後期から晩期の土器の出土も確認されている。また、高田B遺跡では縄文時代後期中葉（宝ヶ峯式期）の竪穴住居跡1軒をはじめ、後期後葉～晩期（金剛寺式期～大洞BC期ほか）の土器が出土しており、北東に近接する今泉遺跡でもこれと同時期の土器の出土が確認されている。こうした遺跡の遺構および出土遺物から、縄文時代後期中葉には名取川下流域の低地部まで人々の生活の場が広がっていたと考えられる。



No.	遺跡名	種別	時代
1	下飯田遺跡	集落・屋敷	古墳・奈良・平安・中世
貊	高田B遺跡	集落・水田・屋敷	縄文・弥生・古墳・平安・中世・近世
3	屋敷東遺跡	古墳群・包含地	古墳・奈良・平安
4	藤田新田遺跡	集落・古墳・水田	弥生・古墳・平安
醜	下飯田薬師堂古墳	円墳	古墳
銚	高田A遺跡	集落	弥生・古墳・平安
関	今泉遺跡	城館・集落・散布地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
非	荒井畑中遺跡	散布地	古墳・奈良・平安
9	荒井畑中東遺跡	包含地	弥生・古墳
10	荒井南遺跡	水田	弥生
11	宍形遺跡	水田	弥生・古墳・奈良・平安・中世
13	荒井広瀬遺跡	その他(河川跡)	弥生・古墳
13	瀧小泉遺跡	瀧敷・集落	瀧生・古墳・奈良・平安・中世・近世
14	瀧史跡 遠見塚古墳	瀧前方後円墳・散布地	瀧弥生・古墳
1	養種園遺跡	瀧集落・屋敷・散布地	縄文・古墳・平安・中世・近世
1	瀧塚古墳	瀧墳	瀧古墳
1	瀧若林城跡	瀧城館・古墳・集落	瀧古墳・平安・中世・近世
1	瀧野城跡	瀧城館	瀧中世

No.	遺跡名	種別	時代
19	瀧神棚遺跡	官衙・散布地	奈良・平安
0	砂押I遺跡	散布地	古墳・奈良・平安
1	砂押II遺跡	散布地	古墳・奈良・平安
1	瀧中欄西遺跡	散布地	弥生・古墳・奈良・平安
3	河原越遺跡	散布地	古墳・奈良・平安
4	高屋敷遺跡	集落	古墳・奈良・平安
4	瀧中在家遺跡	散布地	平安
瀧	瀧中在家南遺跡	瀧・水田・包含地	弥生・古墳・平安・中世・近世
瀧	瀧二道遺跡	散布地	奈良・平安
瀧	瀧二本館跡	城館	中世
9	瀧長喜城跡	城館	中世
30	梅塚古墳	円墳	古墳
31	上屋敷遺跡	散布地	古墳・奈良・平安
3	仙台東郊条里跡	瀧条里跡	瀧奈良・平安
33	日辺館跡	城館	中世
34	日辺遺跡	散布地	古墳
3	大塚山古墳	円墳	古墳
3	瀧北目城跡	城館・集落・水田	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世

第3図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図

2. 弥生時代

前期には南小泉遺跡・郡山遺跡・高田B遺跡などで土器の出土が見られるが、集落や水田の実態は不明である。中期になると富沢遺跡・高田B遺跡・杓形遺跡・荒井南遺跡などで大規模な水田跡が確認され、水田稲作を生業基盤とした集落の展開が認められるようになる。このうち、縄文時代から連続した遺物の出土が見られている高田B遺跡では、中期中葉に建物跡3棟、土器棺墓5基、水路を伴った水田跡および河川跡が検出され、河川跡から多量の遺物が出土している。出土した遺物には、土器・石器のほか農具・工具等木製品の成品・未成品を中心に建築部材なども見られ、当時の集落における生活の実態を窺わせる貴重な資料である。また、藤田新田遺跡では中期中葉の土器と共に石庖丁・石斧などが出土している。なお、杓形遺跡で中期中葉の水田跡が約2000年前の津波堆積物によって覆われていることが確認され、これをもたらした自然災害により廃絶したことが明らかとなっている。近年の調査では中在家南遺跡においても同時期の津波堆積物と推測される中粒砂が自然流路堆積層中より確認されており、当時の自然災害が人々の生活に与えた影響とその広がりについて新たな知見が加わりつつある。

中期中葉以降、仙台平野の中でもより標高の低い海岸部では遺跡数の減少が指摘されており、本遺跡の周辺でも後期になると遺構はほとんど確認されておらず遺物の出土も少なくなる。その一方で、山口遺跡や下ノ内遺跡、土手内遺跡など、より内陸側の自然堤防から丘陵部にかけて遺構や遺物が増加しており、人々の生活圏が内陸部へと移っていったことが考えられる。

3. 古墳時代

減少していた人々の活動痕跡は、古墳時代前期後半の仙台平野全域での古墳の築造と共に再び確認されるようになり、周辺の遺跡では遠見塚古墳や下飯田薬師堂古墳などが知られている。また高田B遺跡の河川跡中からは古墳時代前期・中期の木製品類や建築部材が出土しており、隣接する今泉遺跡でも前期・中期の土坑が検出され、土器群が一括して出土している。南小泉遺跡では中期に大規模な居住域が形成されており、後期前半まで継続する拠点的な集落の存在が考えられている。

浜堤上の遺跡では、藤田新田遺跡で古墳時代前期（4世紀）の竪穴住居跡、方形周溝墓をはじめとして中期（5世紀）の竪穴住居跡も数多く確認されている。同遺跡では7世紀代までの竪穴式住居跡が確認されており、古墳時代前・中期の中心的集落と考えられている。また、藤田新田遺跡の東に位置する屋敷東遺跡では2基の古墳が確認されており、集落に伴う墓域と考えられている（仙台市2017）。

4. 奈良時代

古墳時代後期から奈良時代にかけて、集落の中心は下飯田遺跡に移ると考えられ、7世紀後半から8世紀にかけての竪穴住居跡が複数確認されている。仙台平野においては、官衙の成立や律令体制の波及に伴う人や物の移動が活発化しており、下飯田遺跡他における集落の成立も、このような社会変化の中で理解する必要がある。なお、下飯田遺跡や下飯田東遺跡では、人・物の移動や交流を示唆する遺構、遺物が確認されている。

5. 平安時代

平安時代においては、藤田新田遺跡から10世紀前半代を中心とする掘立柱建物跡や水田跡が確認されている、また、その東側を流れる河川跡からは、これらの遺構と同時期の土師器（墨書土器を含む）、須恵器等が多量出土している。なお、屋敷東遺跡、下飯田東遺跡においても10世紀代の土師器は出土しているが、集落の存在は未確認である。

6. 中世・近世

中・近世においては、今泉遺跡で12世紀、下飯田遺跡で13～14世紀の屋敷跡が確認されている。また、近世の遺物は、今泉遺跡、藤田新田遺跡、下飯田遺跡等で出土している。高田B遺跡では13～14世紀の水田跡が確認されている。また、この地域一帯は、旧宮城郡と旧名取郡の境界地にあたり、近世初期に仙台藩の政策として新田開発が行われている。

第3章 調査の方法と経過

1. 六郷2ブロックにおける調査方法

六郷2ブロックの下飯田遺跡においては、確認調査で掘立柱建物跡が検出された地点から約15m南を南端とし、北側の道路までの南北約55mの範囲で調査区を設け、南から1区、2区、3区とした。調査面積は121.8㎡を測る。各調査区の設定は既設物等から位置を計測して設定し、平面図は1区及び2区を1:20で、3区を1:40で、断面図は全て1:20で手実測にて計測した。これらの計測作業は任意座標を用いて行った。

2. 六郷2ブロックにおける調査経過

1区・2区は現道と重複しているため9月7日に重機(BH0.25)でアスファルトを剥がし、9月9日に表土を除去した。精査は9月9日～16日にかけて実施した。3区は現水田であり、9月16日に重機で表土を除去し、9月21日に精査を実施した。9月26日に調査区を事業者に引き渡して調査を終了した。



第4図 六郷2ブロックにおける工事範囲と調査区位置図

3. 六郷5ブロックにおける調査経過

六郷5ブロックにおける平成28年度高田B遺跡第2次発掘調査の調査対象箇所は、高田B遺跡の周知の遺跡範囲に隣接する7区16か所の試掘調査区と、同遺跡範囲内を東西方向に横切る既設水路の下部を対象とした2か所の本調査区とに分かれ、調査面積は合計で1,000㎡を測る。各試掘調査区の規模は2.5m×10mを基本とし、調査の状況や現況に合わせて拡張・縮小を行った。

各調査区の設定は国家座標(2級復旧・復興補助基準点:4011C [X=-198704.259, Y=7600.127]、並びに2級仙台市道路基準点:QE61GS13 [X=-198796.455, Y=7741.179])を基にして設定を行った。計測は国家座標に基づいた既知点を利用し、測量作業に必要な基準点を随時新設して正確な位置を求めた。

試掘確認調査については現在の耕作土を重機で掘削した後、下層を人力により層ごとに掘り下げながら層中の遺構・遺物を確認した。一方、本調査区は既設水路の下部が調査対象であったため、コンクリート製の側溝および設置用のコンクリートベースの撤去工を行った後に、試掘調査と同様の方法で調査を実施する形をとった。撤去工に伴って

生じたコンクリート片等の産業廃棄物は周辺の耕作土と混ざらないよう慎重に選り分け、現地表面に敷いたブルーシート上にとりまとめて仮置きした。

各調査区の周囲には土層観察と排水を兼ねた側溝を掘り、断面の土層堆積状況を観察・写真撮影を行った。断面図はトータルステーションとデジタルカメラを用いた写真実測を行い、平面図はトータルステーションを使用して取得した計測データをCADソフトを用いて作図編集を行った。いずれの場合も、作図対象を現地で観察可能な状態で、略測図との照合と修正を行うよう努めた。遺構確認面や遺物の集中出土箇所では平面の計測・写真撮影を追加した。出土遺物は出土年月日順に番号を付し、出土位置情報をトータルステーションで記録して取り上げを行った。

平成29年度高田B遺跡第2次発掘調査の調査対象箇所は、平成28度の調査結果を受けて、高田B遺跡の周知の遺跡範囲内に設定された8か所の本調査区(1-6区・3~9区)を対象とし、調査面積は当初1,737㎡を予定していた。調査の進行と圃場整備事業計画上の要請に伴い、試掘調査区8区、本調査区6・7区間の拡張、本調査区1-6区拡張の3か所の調査が追加された。また当初計画されていた工事掘削範囲が縮小され、最終的な調査面積は2,240.79㎡となった。

各調査区の設定は国家座標(2級仙台市道路基準点:QE61GS13[X=-198796.455,Y=7741.179]、並びに3級仙台市道路基準点:QE623001[X=-198746.334,Y=7889.523])を基にして設定を行った。調査区は、①既設水路の下部及び周辺部を調査対象とするもの(調査区3・4区)、②現況道路下部及び周辺部を調査対象とするもの(本調査区5・8区)、③昨年度の試掘調査結果を受けて設定されたもの(本調査区6・7・9・11・12区)、④現況水田の中に若干高く残された現況畑地範囲内の確認調査(確認調査区8区)の4種に区分される。

①、②については、前年度と同様にコンクリート製の側溝及び設置用のコンクリートベースの撤去工を行うか、アスファルトの除去・搬出および路盤材の撤去工を行った後に、基本層X層上面が確認されるまで人力で掘下げながら各層中の遺構・遺物を確認していくという方法で進めた。③については、前年度埋め戻しを行った試掘調査区を再び露呈させた後、基本層X層上面までの掘下げを行った。④の確認調査区10区の確認調査は、現在の耕作土及びその下位の整地層を重機で掘削後、人力で粗精査と精査を行い遺構を検出し、検出状況を記録した。いずれの場合も、調査掘削排土や撤去工に伴って生じたコンクリート片などの産業廃棄物は、周辺の耕作土と混ざらないように慎重に選り分け、現耕作土表面に敷いたブルーシート上に取りまとめて仮置きした。

各調査区の周囲には土層観察と排水を兼ねた側溝を掘り、断面の土層堆積状況を観察し、写真撮影を行った。断面図・平面図は昨年と同様の手法で作図を行った。遺物取り上げ作業については昨年と同様の手法で1点ずつ取り上げを行うか、調査範囲を網羅する形で設定したグリッド番号を付して取り上げを行う方法を取り、出土位置の記録に努めた。

4. 六郷5ブロックにおける調査経過

(1) 平成28年度

平成28年度高田B遺跡第2次発掘調査は、試掘調査区16箇所、本調査区11箇所の調査を平成28年10月4日から平成29年3月8日までの149日間実施した。

平成28年10月4日に事務所棟の設置や調査準備を開始し、調査予定箇所の水田刈取り状況に応じて同13日より調査区の設定と周辺既設杭の確認作業、基準杭の設定作業を行った。

10月17日から表土掘削のため重機を搬入し、堆積状況を確認しながら本格的な調査を開始した。調査は試掘調査区1より始め、1-1~5の計5箇所の表土掘削後、同24日より試掘調査区3の3-1~4の計4箇所の表土掘削を行った。試掘調査区1では、基本層V層(中世)以降に使用されていたと考えられる溝跡1条が、東西方向に延びている様子が1-1~5で確認された。また試掘調査区3では、基本層VI~VIII層(古墳~古代)の水田耕作に伴う畦畔跡・溝跡のほか、基本層IX層(弥生時代)前後に周辺を流れていたと見られる自然流路跡が、3-1~4で確認された。

11月17日、試掘調査区4・6・7の表土掘削を開始し、終了した調査区から人力で遺構確認作業を行った。試掘調査区4および試掘調査区7では、遺跡範囲の東側で基本層X層の高まりが確認された。また試掘調査区6では、基本層VI~VIII層(古墳時代~古代)の水田耕作に伴う畦畔跡の可能性が考えられる高まりや溝跡のほか、基本層X層上面に弥生土器を多く含む遺物包含層を確認した。また調査区壁断面観察からは、南側に下り傾斜する地形的な変換点を確認した。

11月24日より調査が終了した試掘調査区1区の現状復旧作業を開始し、同29日にはこれを完全に終了した。同30日から開始した既設水路の撤去は、既設水路の幅が狭い本調査区2側から着手した。12月7日には本調査区2の既設水路の撤去と重機掘削が終了し、人力での遺構確認へ移行した。本調査区2は、農業機械の水田への出入口を残すため5分割し、西から本2-1～2-5と呼称した。12月22日、調査を終了していた試掘調査区3・4・7の現状復旧作業を終了し年内の作業を終えた。

平成29年1月10日、日辺排水路内の試掘調査区2・5区の重機掘削を開始し、表土掘削を終了した調査区から随時、人力での遺構確認作業へと移行した。仙台南部道路の北側に設けられた試掘調査区5では基本層IX層（弥生）前後の自然流路跡北岸に相当すると考えられる南側への落ち込みを確認した。また試掘調査区2では、基本層VIII～IX層（古墳時代～弥生）の水田耕作に伴う溝跡と耕作土が、日辺排水路底面下に部分的に残存する状況を確認した。

1月16日、本調査区1の既設水路撤去工を再開した。コンクリートベースの切断作業を含む撤去工は同20日に終了し、人力での遺構確認作業へと移行した。東西方向約150mの調査範囲内に設定した調査区は農業機械の水田への出入口を残すため6分割し、西から本1-1～1-6と呼称した。本調査区1・2区の調査では、東西方向約350mの範囲内にはほぼ連続して設けられた計11か所の本調査区（本1-1～1-6、本2-1～2-5）では、基本層V層～IX層において、水田耕作に伴う畦畔跡・溝跡のほか、複数の自然流路跡とその河岸部分と推測される落ち込みを確認した。また、過去に実施された高田B遺跡第1次調査で確認された河川跡の南側延長部分と考えられる自然流路跡を確認した。

2月16日、調査が終了した試掘調査区2・5区の現状復旧作業を開始し、調査終了区を随時埋め戻した。3月2日、本調査区2-1の壁断面の計測作業の終了をもって今年度予定していた全ての調査を終了し、現状復旧と撤収作業を開始した。同6日までには全ての出土遺物類を整理作業場所へと搬出し、現地調査事務所の撤収・解体作業と並行して出土遺物・計測図面類・記録写真類の整理作業を実施した。3月7日、現地調査事務所の解体・搬出作業と周辺の清掃作業を行い、現地調査のすべての作業を終了した。

（2）平成29年度

現地調査は平成29年6月5日から平成30年1月31日までの150日間実施した。平成29年6月8日に事務所棟の設置や調査準備を開始し、文化財課の指示に応じて同12日より着手が許可された調査区の設定と周辺既設杭の確認作業、基準杭の設定作業を行った。

6月13日、文化財課担当者立会いの下、重機による表土掘削を開始した。周辺水田への給排水設備の機能維持の関係から、調査は本調査区9と本調査区4より始める事となった。同14日には本調査区4のコンクリート製側溝の除去作業を開始し、同19日に4-1～8の計8か所の調査区の側溝除去作業を終了した。同20日、本調査区9を当初調査範囲より南側へ拡張し、重機掘削を終了した。

本調査区4では、昨年度の調査において確認された基本層I～X層と同様の堆積層が確認され、第1次調査において検出された溝跡（SD2-5・SD30）や自然流路跡の北側延長部分と考えられる遺構（SR06）が確認された。また本調査区9および本調査区9南側拡張部では、基本層V・VI層（古代以降）の水田耕作に伴う畦畔状の高まりがそれぞれ1条検出されたほか、基本層VII層上面を確認面とする溝跡2条（SD30～32）、津波堆積物である砂を層中に多く含む基本層IX層に覆われた土坑1基（SK01）、基本層IX層の落ち込み内に遺物がやや多く出土する範囲（SX01）などが確認された。

7月28日、確認調査区8に設けた4か所の調査範囲（8-1～4）の位置出しを開始した。同31日より重機による表土掘削を行い、掘削の終了した調査区から随時人力で遺構確認作業を行った。8-2では標高約3.0m前後で確認される黒色土層上面での遺構確認作業を行い、調査範囲の北端部と南端部で、東西方向に延びる溝跡を2条（SD06・07）を確認したほか、複数の土坑・ピット・小溝状遺構を検出し、これらの平面位置の記録作業を行った。また3か所の試掘坑を設け黒色土層を部分的に掘り下げた所、多量の弥生土器・石器が出土し、遺存状況が良好な遺物包含層が広範囲に広がっていることが確認された。

8月21日、本調査区3の重機掘削を開始し、同24日から人力での調査区粗整形と遺構確認作業を行った。本調査区3は総じてコンクリート側溝設置による攪乱が顕著であり、他の調査区に比べて堆積層の遺存状況が不良だが、第1次調査において検出された溝跡・水路跡の北側延長部分の可能性のある溝跡（SD11・12）や自然流路跡（SR12）等が検出された。

9月6日から、本調査区6・7の調査準備として調査区周辺の環境整備に着手し、同12日には重機による表土掘削を開始した。昨年度調査を行った試掘調査区3-1～3-4の再掘削を含め、重機掘削は同21日に全て終了し、以後は人力による調査区整形と遺構確認作業へ移行した。

10月2日、事務所等の南側、現日辺排水路とその東西に跨って設定された本調査区5の準備作業を開始した。これに伴い、道路の一部通行止めとアスファルト撤去を実施し、その後に重機掘削を行う事となった。作業の都合上本調査区5は、日辺排水路を境界とした本調査区5西側と本調査区5東側、日辺排水路を東西方向に横断する農道を境界とした本調査区5北側の3つの調査区に細分して随時調査を進めて行く事となった。同5日、文化財課からの指示により、本調査区6・7の間を追加調査区として重機掘削を行った。同19日には本調査区5西側の重機による掘削を終え、以降は本調査区5西側・6・7の調査を状況に応じて行った。本調査区6・7では、自然流路跡(SR10・11)の最下底部に弥生時代の津波堆積層と推測される砂層が確認された。また、弥生時代の水田畦畔の痕跡と考えられる高まりのほか、津波堆積物を含んだ堆積層に遺構上面が覆われた土坑(SK07)などが検出された。

11月13日、本調査区5西側の遺構検出作業を開始し、北側に向かい落ち込んでいく弥生時代の地形面を確認した。調査区の南半部では南西から北東に直線的に伸びる複数の溝跡(SD11～15・21)が検出され、北半部では弥生土器・石器を多量に含んだ層厚10～20cmの遺物包含層を確認した。

12月11日、自然流路跡(SR10)の河床面までの掘下げと、基本層X層上面までの掘下げ作業を行い、本調査区6の調査を終了した。同14日には調査区5西側の調査を終了した。同15日には調査区5北側・調査区8のアスファルト撤去工と表土掘削、調査区5東側の表土掘削を再開し、併せて昨年度試掘調査区1-6の再掘削と、1-6東側部分の拡張調査を行った。同26日には本調査区8の重機掘削を終了し、人力での調査区整形と遺構確認作業へ移行した。

平成30年1月4日、本調査区8の調査を本格的に開始した。本調査区8では近世頃まで利用されていたと考えられる自然流路跡(SR13)のほか数条の溝跡などが確認された。同10日には本調査区5東側の調査を開始し、本調査区5西側で検出されていた溝跡(SD11～15・21)の東側延長部分の調査を中心に作業を行った。同12日、調査区5北側の調査を終了した。本調査区5北側では北西隅で自然流路(SR12)の南東岸立ち上がりを確認している。同19日には本調査区8の調査を終了した。本調査区5東側の調査は同25日に終了し、平成29年度の全ての現地調査を終了した。同26日から31日にかけて現地調査事務所の撤収・解体作業を行い、すべての作業を終了した。

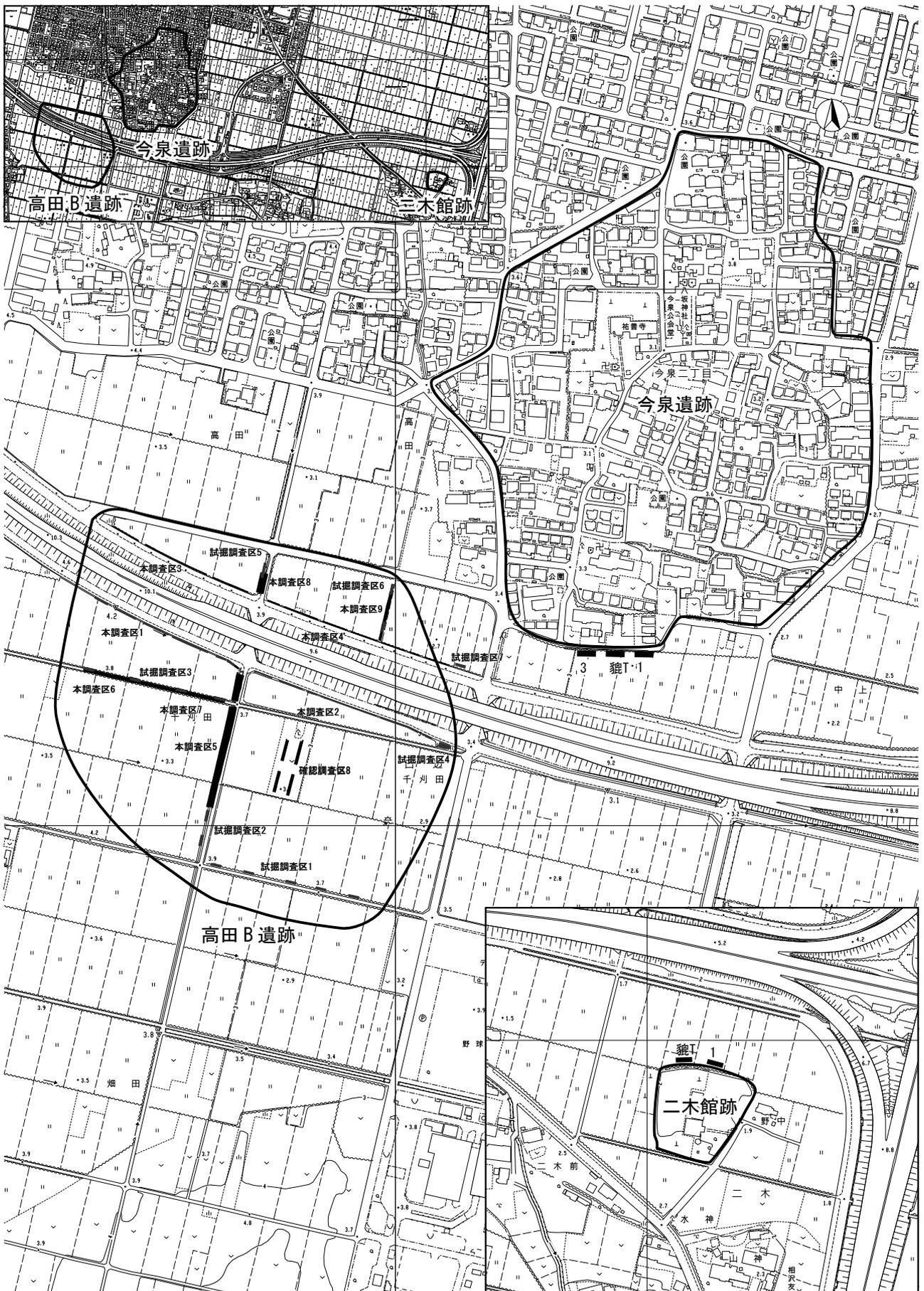
(3) 平成30年度

平成30年度の調査では、今泉遺跡隣接地で3箇所、二木館跡隣接地で2箇所の合計5箇所の調査区を設定した。

今泉遺跡隣接地では東から順に1～3T、二木館跡隣接地も東から1・2Tとした。調査は平成30年6月4日に今泉遺跡隣接地、7日に二木館跡隣接地に着手した。

今泉遺跡隣接地では重機を用いて基本層を除去し、V層上面で遺構確認作業を行った。その結果、遺構・遺物は発見されなかったため、平成30年6月5日に調査を終了した。

二木館跡隣接地でも重機を用いて基本層を除去し、1TではII層中で灰白色火山灰が部分的に堆積している状況が確認された。1・2Tともに、浜堤構成砂と考えられるIII層上面で遺構確認作業を行ったところ、2Tにおいて溝跡1条を検出した。その後、遺構精査を行い、土師器の底部片が1点出土した。本ブロックにおける発掘調査は平成30年6月8日に終了した。



第5図 六郷5ブロックにおける工事範囲と調査区位置図

第4章 下飯田遺跡

第1節 基本層序

1区及び2区では大別2層を、3区では大別2層及び細別3層の基本層を確認した。

【1区・2区】

盛土層 層厚 50～60cm

I層 10YR3/1 黒褐色 砂質シルト。層厚約25cm。

II層 5Y3/1 オリーブ黒色 細砂。上面が遺構の掘り込み面。

【3区】

I層 10YR3/2 黒褐色 シルト質粘土。層厚約20cm。(現水田耕作土)

II a層 10YR3/3 暗褐色 細砂。層厚約20cm

II b層 10YR4/3 にぶい黄褐色 細砂。

第2節 発見遺構と出土遺物

1. 1区(第6・7図、第3表)

【SR 1 河川跡】

盛土層直下(GL-50cm)で河川堆積土を確認した。調査区西側の側溝幅を広げ、確認面から約70cm掘り下げたが、底面は確認できなかった。堆積土は上層が泥炭質粘土層や泥炭層、下層が細砂層を主とし、南側に向かって緩やかに傾斜している。なお、上層で十和田aと推定される火山灰層と、その下層に泥炭質粘土を挟んで津波堆積物と推定される細砂層を確認している。堆積状況の詳細については第4図と第4表に記した。

遺物は上層からロクロ土師器片などが少量出土した。

2. 2区(第6・8図・第4表)

基本層II層上面で、掘立柱建物跡2棟を確認した。

【SB 1 掘立柱建物跡】

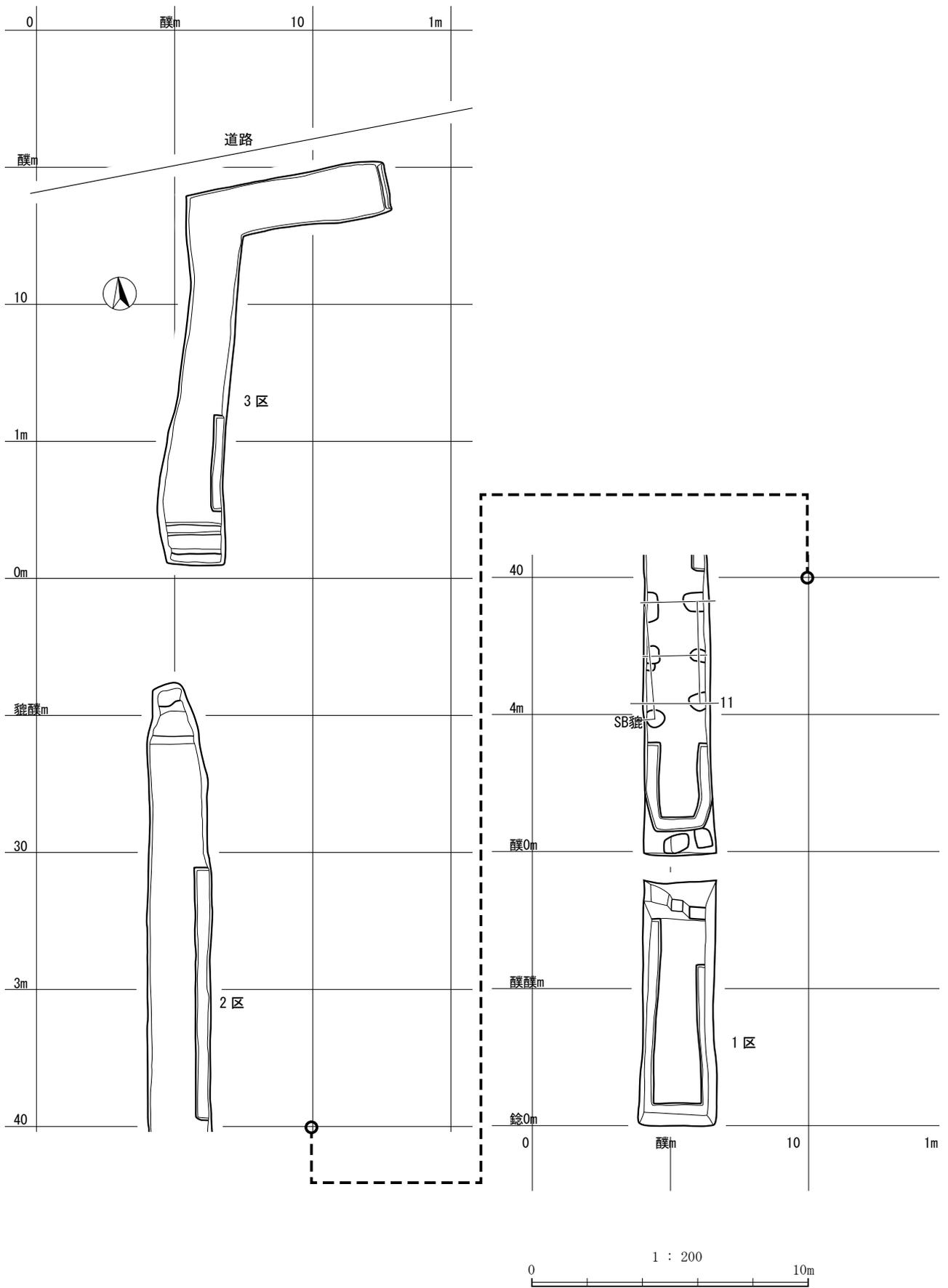
梁行2間の東西棟と推定されるが、部分的な検出のため詳細は不明である。SB2を切っている。柱穴掘り方はP1からP5まで確認したが、一辺70～100cmの方形あるいは直径45～60cmの不整円形で、深さは15～30cmである。堆積土は黒褐色～オリーブ黒色の細砂あるいは砂質シルトである。柱痕跡は確認できなかった。遺物は非ロクロ土師器片が数点出土した。

【SB 2 掘立柱建物跡】

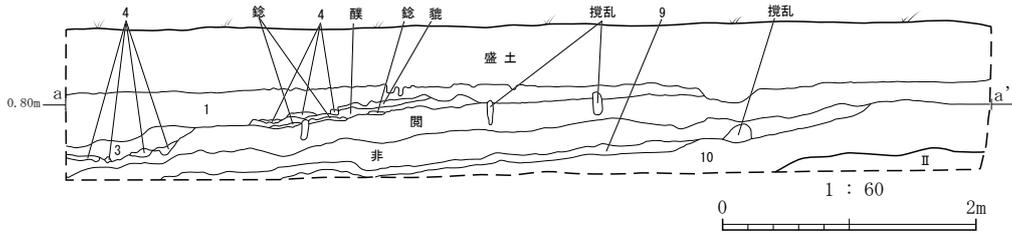
柱穴を2基確認したのみであるので詳細は不明である。SB1に切られている。柱穴掘り方は直径50～60cmの楕円形で、深さは15～30cmである。堆積土は黒褐色の細砂である。柱痕跡は確認できなかった。遺物は非ロクロ土師器片数点が出土した。

3. 3区

遺構・遺物は確認できなかった。



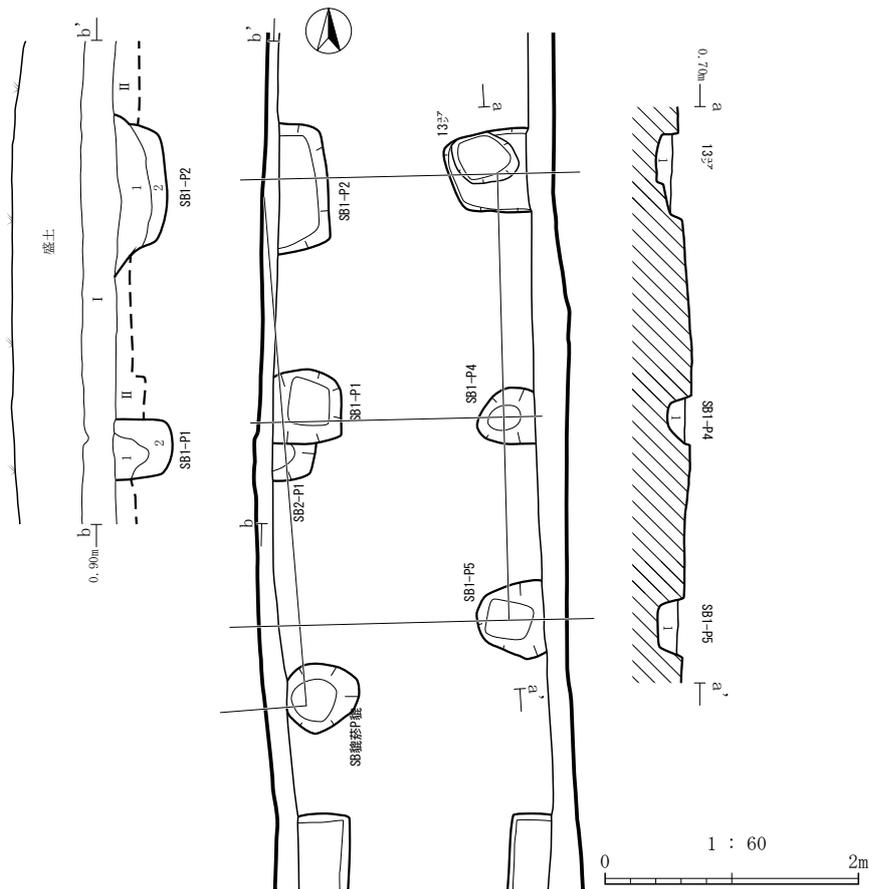
第 6 図 調査区全体図 (S=1/200)



第3表 1区西壁土層注記

断面	遺構名	層位	土色	土性	備考
1区西壁	基本層	I	10YR3/1 黒褐	砂質シルト	
		II	5Y5.1 オリーブ黒	細砂	
	SR 1	1	10YR2/1 黒褐	泥炭質粘土	
		2	10YR2/2 黒褐	泥炭質粘土	
		3	10YR1.7/1 黒	泥炭	
		4	10YR6/3 にぶい黄橙	火山灰	(灰白色火山灰 - 十和田 a)
		5	10YR3/1 黒褐	泥炭質粘土	
		6	10YR5/2 灰黄褐	細砂 (津波堆積物?)	
		7	10YR2/2 黒褐	泥炭	砂粒を多く含む。
		8	5Y3/1 オリーブ黒	細砂	植物依存体を多く含む。
9	2.5Y2/1 黒	泥炭	砂粒を多く含む。		
10	2.5Y2/1 黒	細砂	植物依存体を少量含む。		

第7図 1区西壁断面図 (S=1/60)



第4表 2区西壁土層注記表

断面	遺構名	層位	土色	土性	備考
2区西壁	基本層	I	10YR3/1 黒褐	砂質シルト	
		II	5Y3/1 オリーブ黒	細砂	
	SB 1-P 1	1	10YR3/2 黒褐	細砂	
		2	10YR5/4 にぶい黄褐	細砂	10YR2/2 粘土質シルトブロック (Φ 20 ~ 50 mm) を多量含む。
	SB 1-P 2	1	10YR3/2 黒褐	粘土質シルト	10YR5/4 細砂を層状に含む。
		2	10YR2/2 黒褐	粘土質シルト	砂粒を多量に含む。

第8図 2区SB 1・SB 2平面図・断面図 (S=1/60)

第5章 高田B遺跡

第1節 基本層序

高田B遺跡第2次発掘調査で確認された基本層は、約200haに及ぶ調査対象面積のほぼ全域で概ね共通するもので、I～X層を確認した。さらに、①I・II層：近代・現代の水田耕作土層、②III～IX層：近世～弥生時代の堆積土で水田耕作土層およびその母材層、③X層：基盤層の三つに大別される。この内、基盤層（X層）の堆積時期についてはその堆積の速度と層厚、確認される範囲の広さ等から、縄文時代以前に仙台平野の低平部に広く堆積したものと考えられている。¹ 基盤層の上位に堆積している基本層の土質や土性・色調の違いは、その成因や周辺環境の変化によって生じているものと考えられているが、そこに見られる特徴から本遺跡を含む周辺部は氾濫平野～川間低地・後背湿地として地形的に分類されている。

一方こうした基本層とは異なり、場所によって限定的に観察される堆積土がある。突発的な増水等に起因して生じたと考えられる自然流路や洪水に伴う堆積物は、基本層間に貫入する形で存在しており、比較的その堆積時期を限定しやすいため、調査の際に鍵層として取扱うことで調査範囲内に点在して設けられた調査区間の土層対比の一助となる。こうした、比較的堆積時期が限定できる堆積土（地質学的な時間間隔からすると「突発的な出来事」によって堆積したと考えられる堆積土≡地学で言う「イベント堆積物」）については、調査区全域では確認されないことから、基本層とは別にa・bのアルファベットを付して基本層とは区別して取り扱う。なお、基本層IX層中にみられる中流砂については「弥生時代中期中頃に到来した津波堆積物に由来する海成砂」の可能性が指摘されている。本来であれば層中に混入したイベント堆積物として認識するほうが当時の遺跡周辺の環境復元に繋がるものと考えられるが、今次調査ではその指摘に留める。各層の特徴については以下のとおりである。

註1 東北学院大学松本教授の指摘による

1. 近代・現代の水田耕作層

- | | | |
|-----|------------------------|---|
| I層 | 2.5Y5/2 暗灰黄色
シルト質粘土 | 層厚は約15～20cm。現代の水田耕作層 |
| II層 | 2.5Y5/1 黄灰色
粘土質シルト | 層厚は約10～30cm。現代の畦畔直下などでは比較的厚く確認され、場所によりI層の耕作により削平されている。本調査区3・4区周辺では下層との層理面で著しい不整合が確認される箇所も見受けられ、耕地整理の際に持ち込まれた土壌の可能性が考えられる。 |

2. 近世～弥生時代の水田耕作層ほか

- | | | |
|------|--------------------------------------|---|
| III層 | 10YR5/2～2.5Y5/2
暗灰色～褐灰色
粘土質シルト | 層厚は10～15cm。I層の直下で部分的に確認した、近世～現代以前の水田耕作土と考えられる層。標高の高い部分では現代の水田耕作の際に削平を受けたと考えられ、削平されていることが多い。 |
| IV層 | 2.5Y4/1～2.5Y5/1
褐灰色
粘土質シルト | 層厚は5～10cm。酸化鉄を層状に含み、層の中位～下位にかけてマンガン粒が多く集積している。上層の耕作により断片化していることが多い。 |
| V層 | 10YR4/1～10YR5/1
褐灰色
粘土質シルト | 層厚は10～15cm。砂を微量含み、酸化鉄が斑紋状に少量集積する。層の下面ではVI層を巻き込んでいる。 |

VI層	10YR3/1 ~ 2.5Y2/1 黒褐色 粘土質シルト	層厚は5 ~ 10cm。有機物をやや多く含み、黒味が強い。部分的に灰白色シルトを小ブロック状に含む。層の下面は顕著に起伏することが多く、水田耕作層である可能性が高いと考えられる。
VII層	10YR3/2 ~ 10YR5/1 褐灰色 粘土質シルト	層厚は10 ~ 20cmと場所により異なり、上部から下部にかけて漸移的に色調が暗みを帯びる。2層に細分が可能な場合がある。
VIII層	10YR2/1 ~ 10YR3/2 黒色 ~ 黒褐色 粘土質シルト	層厚は10 ~ 15cm。砂を少量含み、酸化鉄が斑紋状に少量集積する。層の下面には顕著な凹凸が見られ、深いところではX層中にまで及んでいる。
IX層	10YR4/1 ~ 10YR4/2 褐灰色 ~ 灰黄褐色 粘土 ~ シルト質粘土	層厚は10 ~ 15cm。砂を層中にやや多量に含み、酸化鉄が斑紋状で層全体に集積する。場所により層の上面にφ 0.5 mm以下の中流砂を薄層状に含むが、層の下部に全く砂を含まない部分も確認されるなど、層相に差が大きい。「a: 砂が強い上層部」と「b: 砂が少ない下層部」に細分した調査区がある。 本来は「水田母材層」、「水田耕作土層」、「津波堆積物(泥質)」、「津波堆積物(砂質)」に細分されるべきものであると考えられるが、弥生時代中期頃の堆積土として一括して把握したものである。

3. 基盤層

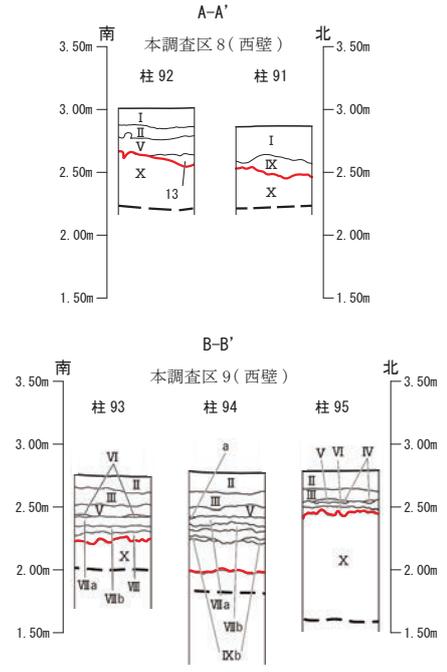
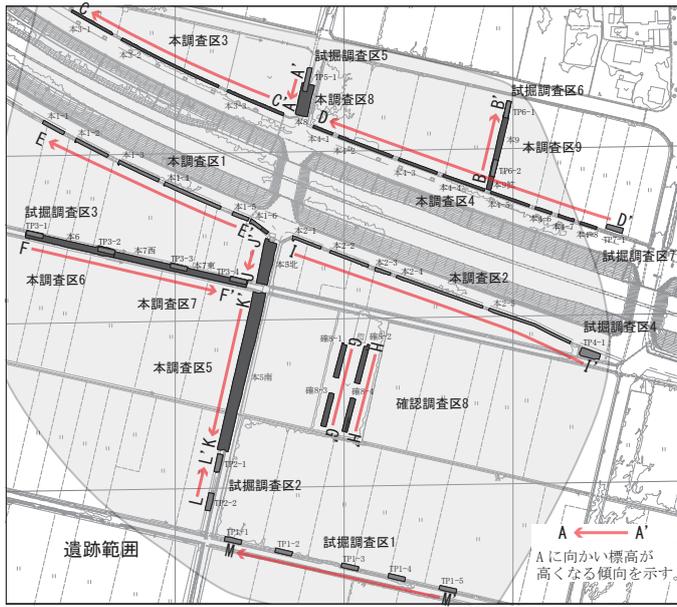
X層	2.5Y5/1 ~ 10YR5/2 黄灰色 ~ 灰黄褐色 粘土質シルト ~ 砂質シルト	酸化鉄が層全体に斑紋状でやや多く集積する。下部に向かい層相が漸移的に変化し、砂質化する場所も見られる。周辺に広範囲に堆積していると考えられる自然堆積層で、縄文時代の大規模な洪水堆積層と考えられている。最終的な遺構確認面とした。
----	---	---

4. その他の堆積層

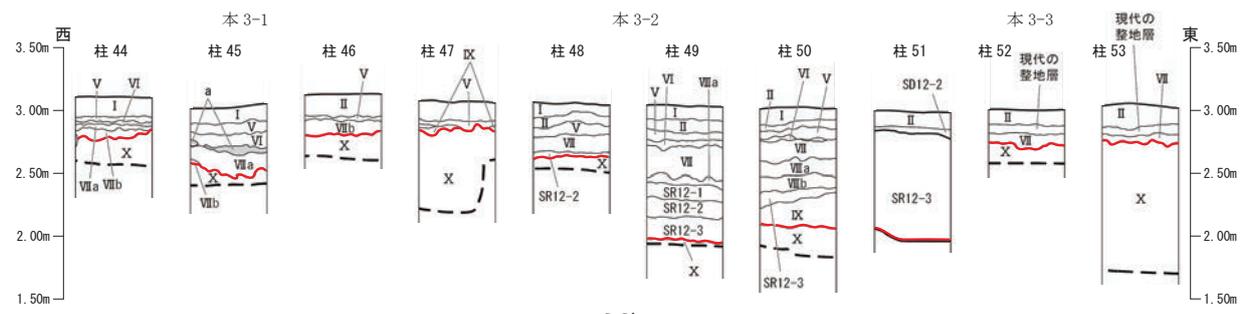
a層	2.5Y8/1 ~ 7/1 灰白色 シルト ~ 粘土質シルト	VI層とVII層間に確認される。層厚は5 ~ 10cm。残りの悪い箇所では断片化し、小ブロック状にVI層中に混在する。 西暦915(延喜15)年に降下した十和田a火山灰(To-a)が、再堆積した層と考えられ、自然流路堆積層中や遺構堆積土など、当時の地表面よりも標高が低かったと推測される部分では比較的遺存状態が良好な傾向がある。
b層	2.5Y6/1 ~ 5Y6/2 黄灰色 ~ 灰オリーブ白 砂質から粘土質シルト	VII層とVIII層間に確認される。基本層と比してあまり土壌化が進んでおらず、周辺の堆積土に比べ極めて短時間に堆積した様子が伺え、洪水堆積層の可能性が高いと考えられる。層厚は場所により大きく異なり約0.5 ~ 1.0m。酸化鉄を斑紋状に含み、全体的な色調が10YR7/6黄橙色を呈する場合もある。 本調査区5西壁では、先行する自然流路によって周囲より落ち窪んだ部分に堆積したためか、粒径1mm前後の粗粒砂を層状に含んでいる部分も確認された。

5. 自然流路跡

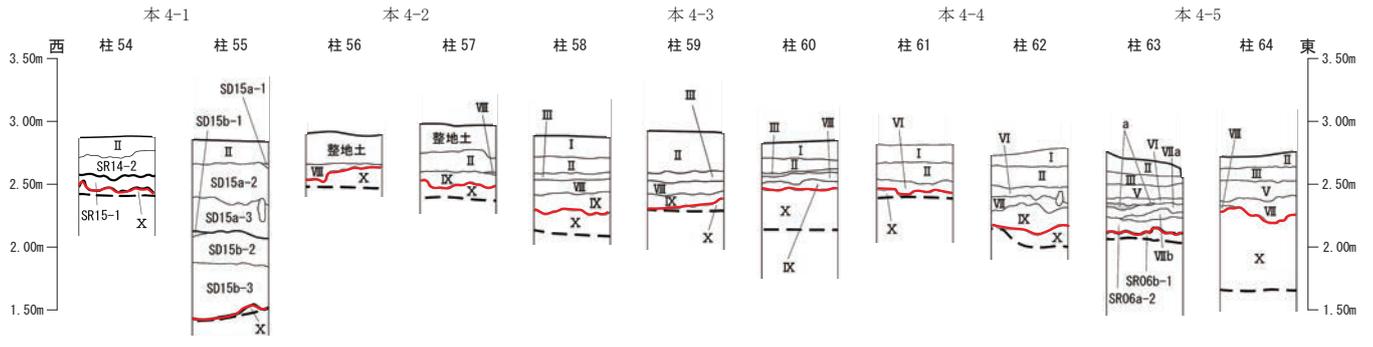
基本層との重複関係を確認した堆積土のまとまりを自然流路跡に由来する堆積土として区分した。自然流路跡は確認されたまとまりごとにSR01・SR02…と区分しながら調査を進め、今回の調査ではSR13まで確認した。これらについては、各調査区のまとまりごとに検出遺構と出土遺物の節の冒頭で記載する。



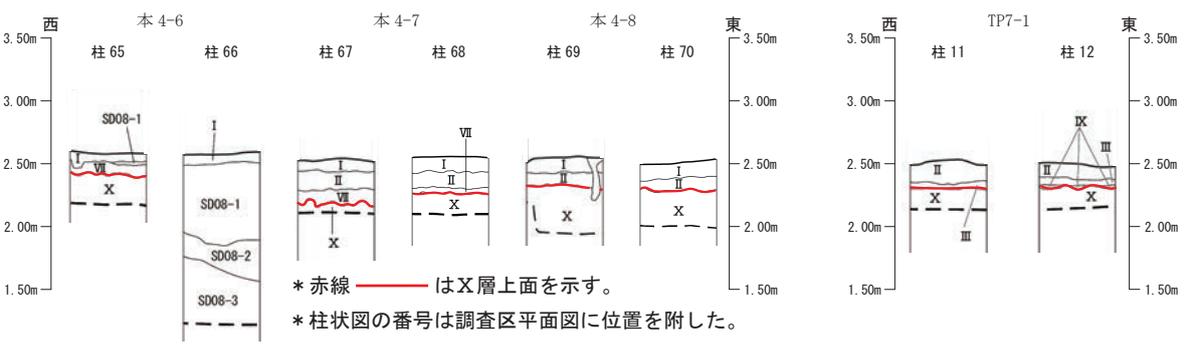
C-C' 本調査区3(北壁)



D-D' 本調査区4・試掘調査区7(北壁)



D-D' 本調査区4・試掘調査区7(北壁)

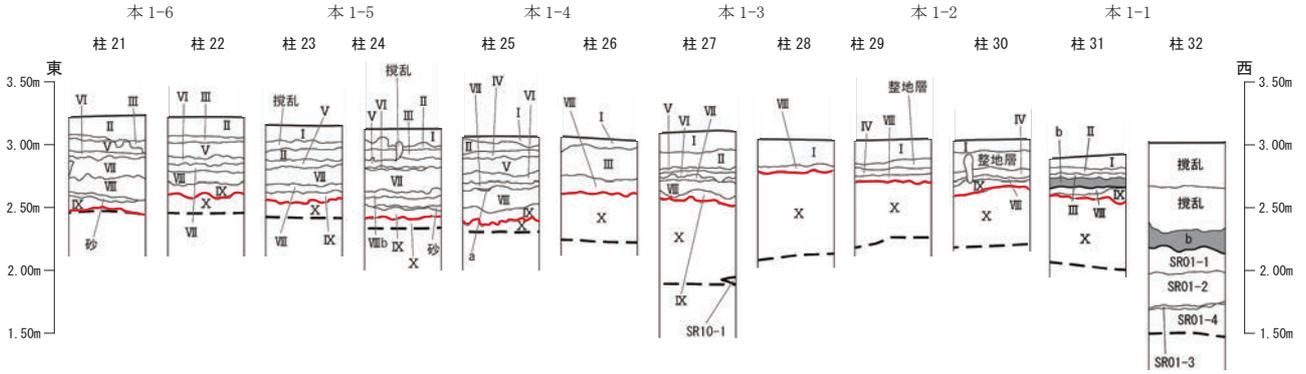


* 赤線 — はX層上面を示す。
* 柱状図の番号は調査区平面図に位置を附した。

第9図 基本土層柱状図 (S=1/60)

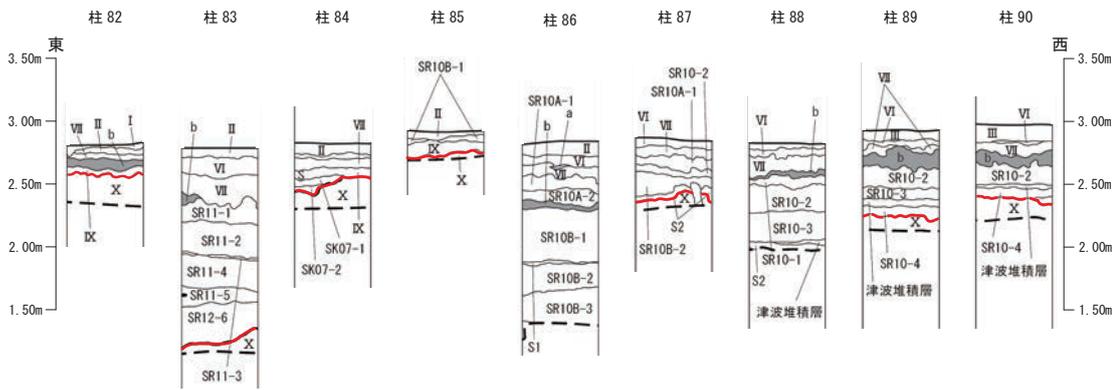
E-E'

本調査区1(南壁)



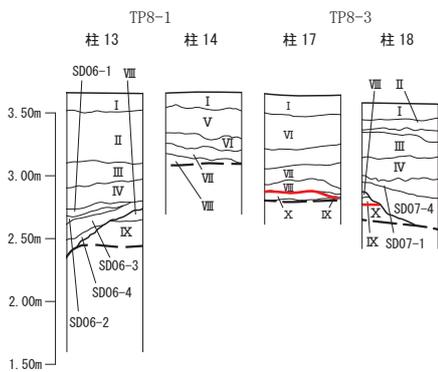
F-F'

本調査区6・7(南壁)



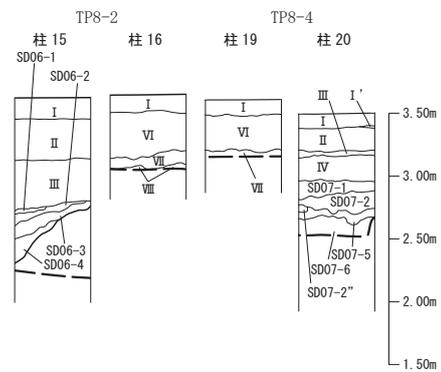
G-G'

確認調査区8(東壁)



H-H'

確認調査区8(東壁)



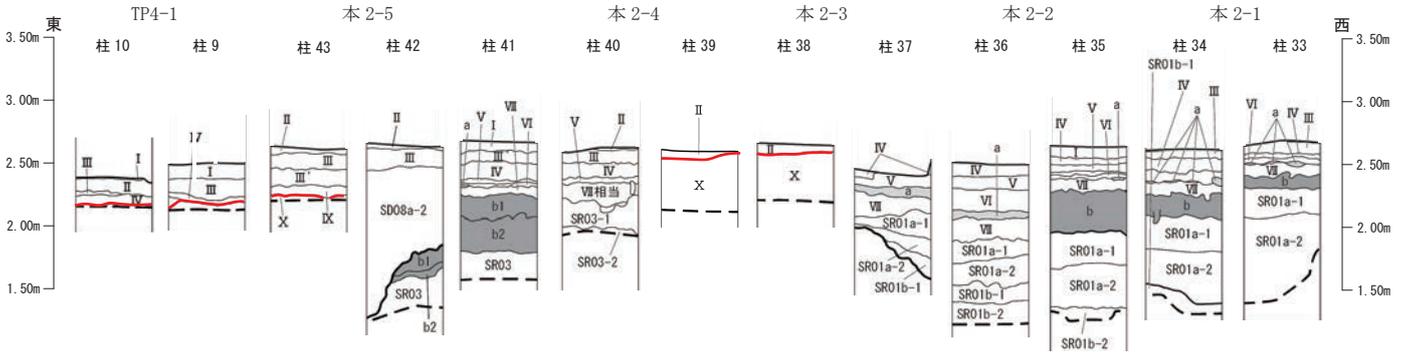
* 赤線 — はX層上面を示す。

* 柱状図の番号は調査区平面図に位置を附した。

第10図 基本土層柱状図 (S=1/60)

I-I'

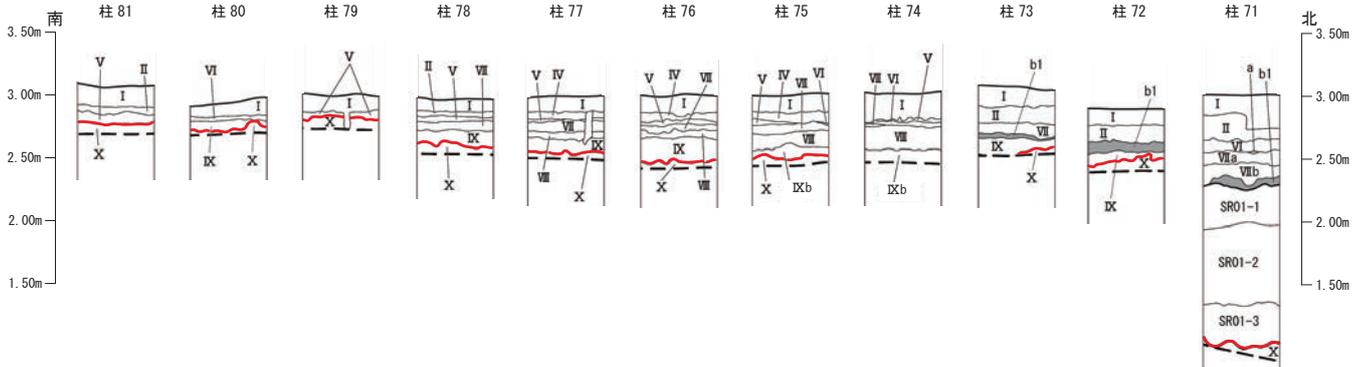
本調査区 2 (南壁)



K-K'

本調査区 5 (西壁)

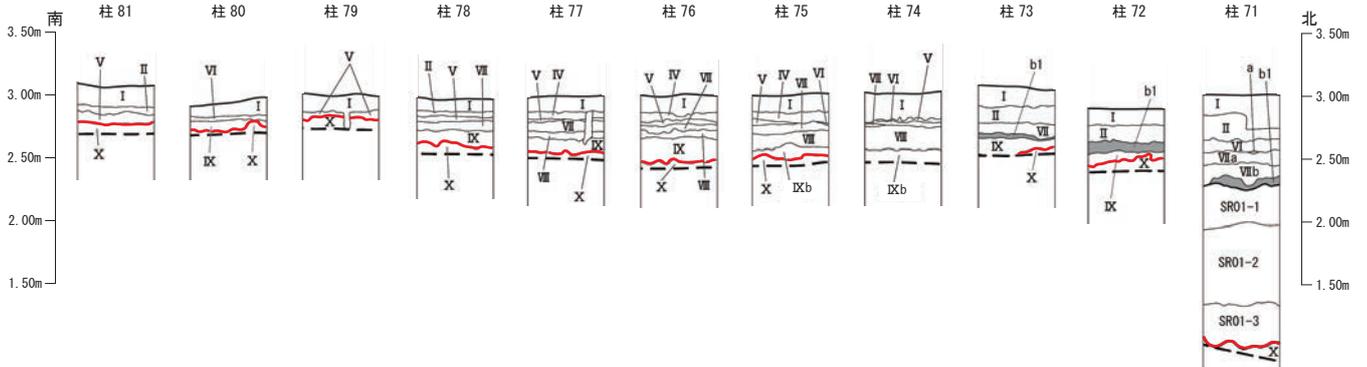
本 5 中央・南



J-J'

本調査区 5 (西壁)

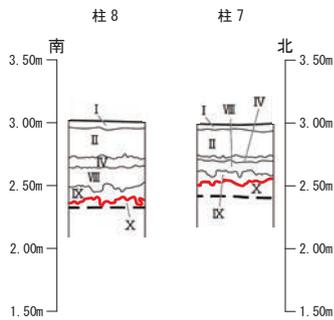
本 5 北



L-L'

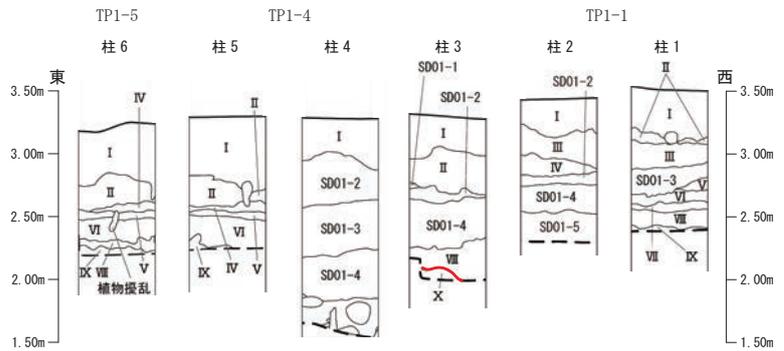
試掘調査区 2 (西壁)

TP2-2



M-M'

試掘調査区 1 (南壁)



* 赤線 — はX層上面を示す。

* 柱状図の番号は調査区平面図に位置を附した。

第 11 図 基本土層柱状図 (S=1/60)

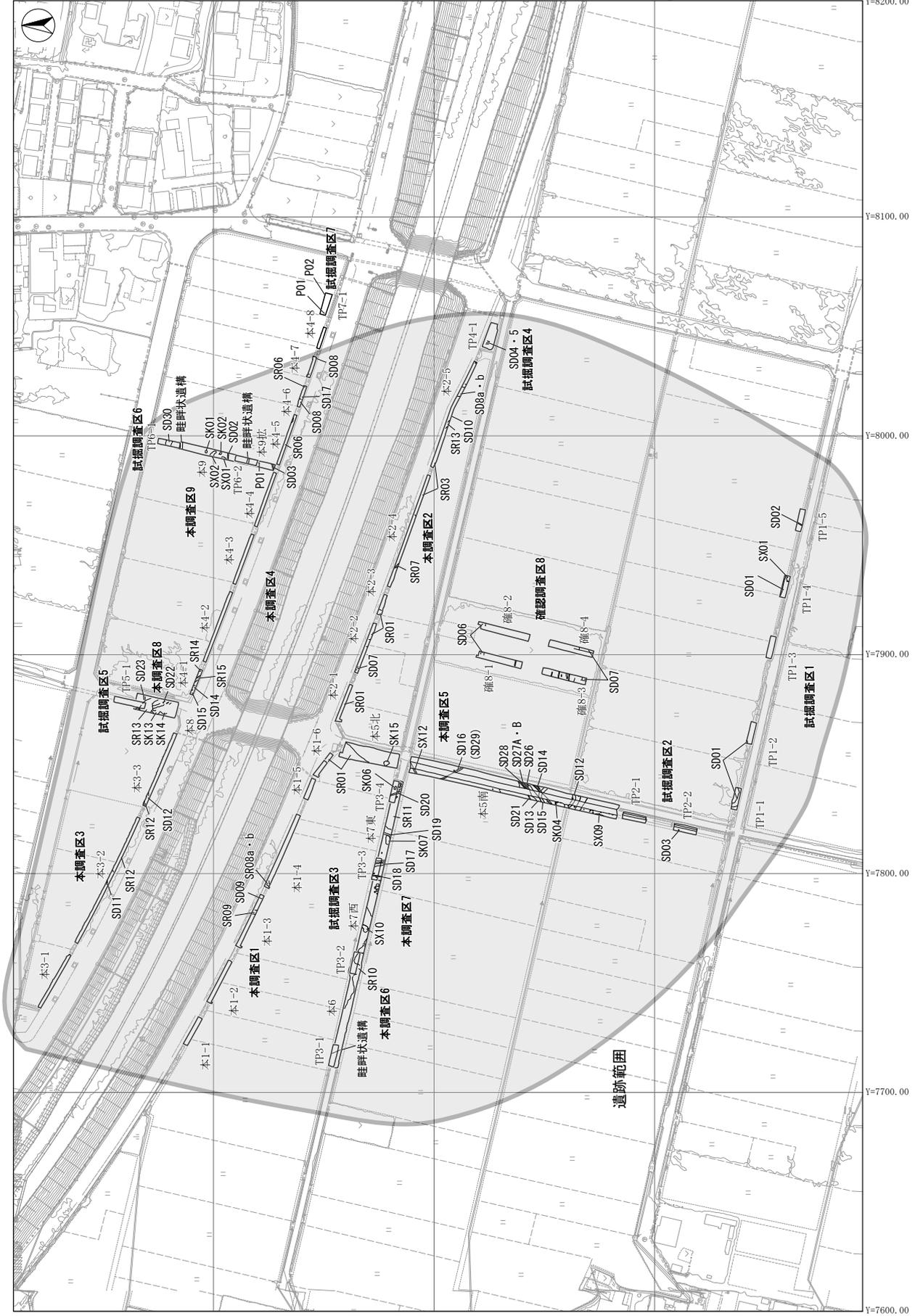
X=198700.00

X=198800.00

X=198900.00

X=199000.00

X=199100.00



第12図 高田B遺跡調査区全体図(1:3000)

第2節 試掘確認調査における確認遺構と出土遺物

高田B遺跡第2次発掘調査は、平成28年度から平成29年度にかけて試掘確認調査と本発掘調査が実施された。平成28年度の調査は、高田B遺跡の周知の遺跡範囲の広がりの有無を確認するため、隣接する7区16か所の試掘調査と、同遺跡範囲内を東西方向に横切る既設用水路の下部を対象とした2区11か所の本発掘調査を行った。設定された調査区の幅が狭いため、平面的に確認できた遺構の数は多くはないが、断面観察で水田耕作土と考えられる堆積土や流路跡、溝状遺構などを確認し、その範囲は現在登録されている遺跡範囲の外縁部にも大きく広がっていることが明らかとなった。この結果を受けて、平成29年度の調査対象は拡張された遺跡範囲内に設けられた10区19か所の本調査区と、遺跡範囲内の中央南東寄りの畑地に設けられた1区4か所の確認調査を行った。本発掘調査では、第1次調査で確認された弥生時代に遡ると考えられる自然流路跡の延長や、複数の遺構を確認した。第5表は試掘調査で確認した堆積土と遺構を一覧にしたものである。仙台南部道路の北側では、平成28年度に試掘調査区5・6・7の調査を行い、平成29年度は本調査区3・4・8・9の調査を行った。一方仙台南部道路の南側では平成28年度に本調査区1・2の調査と試掘調査区1・2・3の調査を、平成29年度には本調査区5・6・7、および確認調査区8の調査を行った。以下では平成28年度に行われた試掘確認調査の成果について記載するが、試掘確認調査の結果、本発掘調査が行われることになった調査区については第3節の本発掘調査の成果に含めて記載を行う。試掘調査区3は本調査区6・7に、試掘調査区5は本調査区8に、試掘調査区6は本調査区9にそれぞれまとめて報告を行う。

第5表 試掘調査区確認土層等一覧表

試掘確認 調査区No.	調査年度	確認された層										備考		
		I	II	III	IV	V	VI	灰白	VII	VII b	VIII		IX	X
試1-1	平成28年度	○	○	○	○	○	○		○		○	○	○	SD01
試1-2	平成28年度	○	○	○	○	○	○				○	○	○	SD01
試1-3	平成28年度	○	○	○	○	○	○		○		○	○	○	
試1-4	平成28年度	○	○								○	○	○	SD01・SX01
試1-5	平成28年度	○	○			○	○				○	○	○	SD02
試2-1	平成28年度	○	○		○						○	○	○	
試2-2	平成28年度	○	○		○						○	○	○	SD03
試4	平成28年度	○	○	○	○								○	SD04・05
試7	平成28年度		○	○								○	○	P01・02
確8-1	平成29年度	○	○	○	○	○	○		○		○	○	○	SD06
確8-2	平成29年度	○	○	○	○	○	○		○		○	○	○	SD06
確8-3	平成29年度	○	○	○	○	○	○		○		○	○	○	SD07
確8-4	平成29年度	○	○	○	○	○	○		○				○	SD07

1. 試掘調査区1（第13～21図、第6～8表）

試掘調査区1は、平成28年の試掘調査時には高田B遺跡範囲外であり、試掘調査対象範囲の東南端に設けた試掘調査区である。ほぼ東西方向に1-1～5の5カ所の試掘調査区（以下TP）を設けた。各試掘調査区の上部約60～70cmは基本層I・II層が厚く堆積する。土層断面の観察から、地形が東に向かいわずかに傾斜していたことが伺える。

TP1-1・1-2・1-4では、調査範囲内を東西方向に蛇行しながら延びる溝跡（SD01）1条を確認し、TP1-4では溝跡SD01内でSD01と関連する可能性がある礫敷遺構（SX01）1基を確認した。また東端の試掘調査区TP1-5では南北方向に延びる溝跡（SD02）1条を確認した。TP1-3では遺構を確認していない。

水田耕作土と考えられる堆積土を3層（基本層VI層：古代～中世、基本層VIII層：古墳時代～古代、基本層IX層：弥生時代）を確認した。

【SD01溝跡】（第14～16・18～21図、第6～8表）

基本層V層を確認面とし、基本層II～IV層によって覆われていた溝跡である。TP1-1の西端北側より調査区内に進入し、大きく屈曲して東側へ延びる。TP1-2の北西隅をわずかにかすめ、TP1-4ではほぼ調査区に沿って溝跡の北側立ち上がりを確認したが、TP1-5では確認していない（第11図）。また溝の底部で礫を敷いた範囲を確認した。堆積土からは陶磁器・漆器・木製品などの遺物出土し、自然流路を活用した近世の溝跡と考えられる。

TP1-1では、調査区の北西から南東方向で確認し、北側及び東側の調査区外へ延びる。確認面は標高2.6mで、方向は調査区西端がN-2°-E、中央から東端部まではN-83°-Wである。確認長は9.00～9.80mで、幅は西端の屈

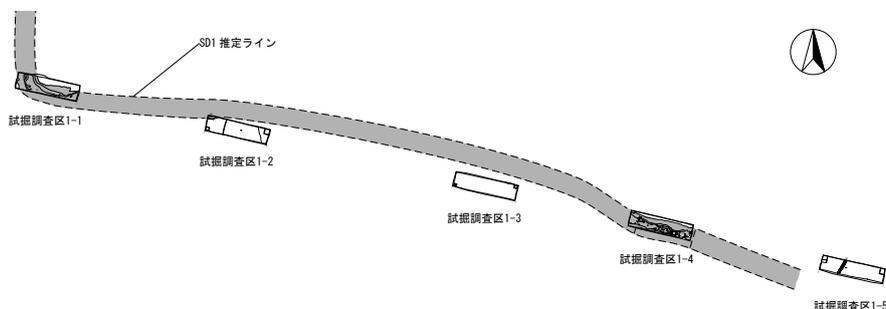
曲部で3.40m、断面形は概ね浅い皿形を呈し、確認面からの深さは0.14mである。弥生土器の小片や石器などが少量出土した。

TP 1-2では、調査区の北西隅で確認した。確認面は標高2.5mで、確認範囲が狭いため方向は不明だが、西側はTP 1-1から続くものと考えられる。調査区の東側に延びると考えられるがTP 1-3では確認されていない。確認長1.6mで、断面形は判然としないが、調査区内では緩く傾斜する形状を呈し、確認面からの深さは0.25mである。遺物は出土していない。

TP 1-4では調査区を東西に横断し、東側及び西側の調査区外へ延びる。確認面は標高2.4mで、方向はN-70° -Wである。確認長は10.0m、幅2.0～2.3mで、断面形は概ねU字形を呈し、確認面からの深さは0.7mである（第15図）。下駄・漆器椀・板材・部材などの木製品のほか、陶器・磁器の小片、弥生土器の碎片、摩耗が著しく詳細が不明な土器片などが出土している。このうち陶器2点を第18図に、木製品10点を第19・20図に図示した。



第13図 試掘調査区1位置図(1:8000)



第14図 試掘調査区1_SD1 確認範囲(1/1200)

【SX01 性格不明遺構】（第16・21図、第6・8表）

TP 1-4で確認したSD01溝跡底面で確認した礫敷きの遺構である。調査区の南東隅で確認され、遺構の南側と東側は調査区外へ延びる。礫を確認したSD01溝跡底面の標高は1.8m前後である。確認長3.5m、幅1.2mほどの範囲に、拳大～人頭大の礫を深い箇所でも3段程度、300点ほどを配しているが、積み方に規格や規則性はない。礫敷き範囲からは残存状況が悪いものの、計10本前後の杭列が遺構の短軸方向に3列確認された。掘り方までの深さは0.7mである。摩耗した土器片少量、木片が出土している。このうち木製品4点を第19図に図示した。

【SD02 溝跡】（第17図、第6表）

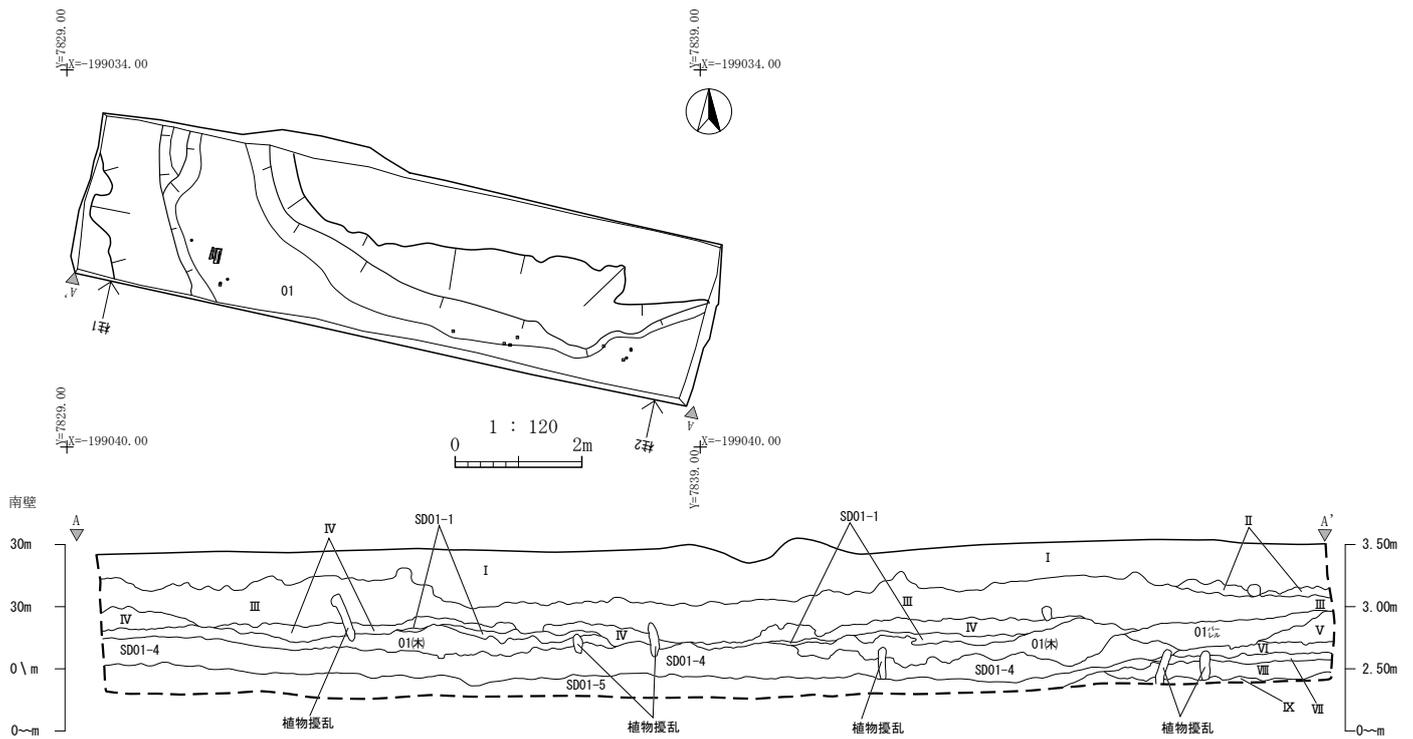
基本層VI層を確認面とし、基本層V層によって覆われていた溝跡である。TP1-5の西寄り確認された南北方向の溝で、南側及び北側とも調査区外へ直線的に延びる。確認面は標高2.5mで、方向はN-30° -Eである。確認長は2.4m、幅0.4～0.6mで、断面形は浅いU字形を呈し、確認面からの深さは最大で0.4mである。遺構底面には工具痕を確認した。遺物は出土していない。

試掘調査区1出土の陶器

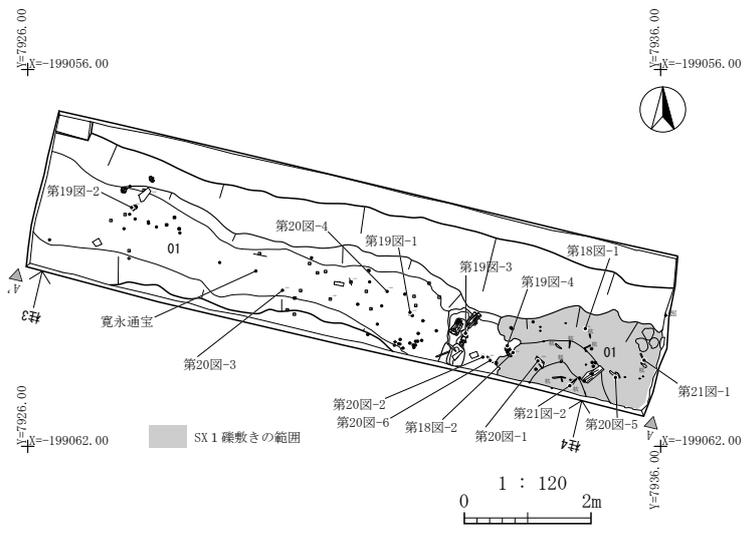
第18図はSD01で出土した陶器である。1は小甕形のミニチュア陶器で玉縁の口縁を持つ。2は播鉢で、櫛目は9本一組で間隔をあけて施される。

試掘調査区1出土の木製品

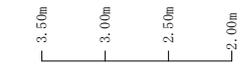
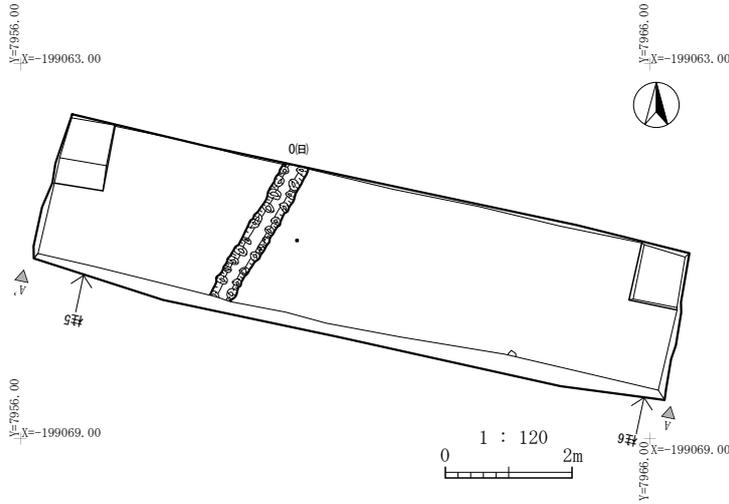
第19図はSD01で出土した漆器の椀と連歯式の下駄である。1・2は漆器椀の高台部の破片で、椀体部と高台の大半を欠損しており、器高や口径は不明である。1は下地に黒漆を施した後、赤漆を塗布していたものと考えられる。3・4の下駄はともに樹芯側を上部に設定しており、鼻緒の孔は上部に対してほぼ垂直に、横緒の孔は上部から歯部にかけてやや斜めに設けられている。



第 15 図 試掘調査区 1-1 V 層上面平面図 (1/120)・断面図 (1:60)



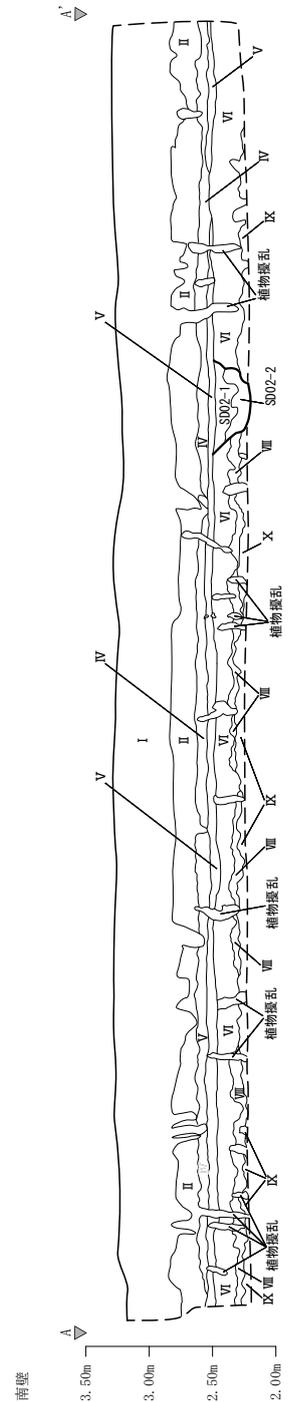
第 16 図 試掘調査区 1-4 V 層上面平面図 (1/120)・断面図 (1:60)

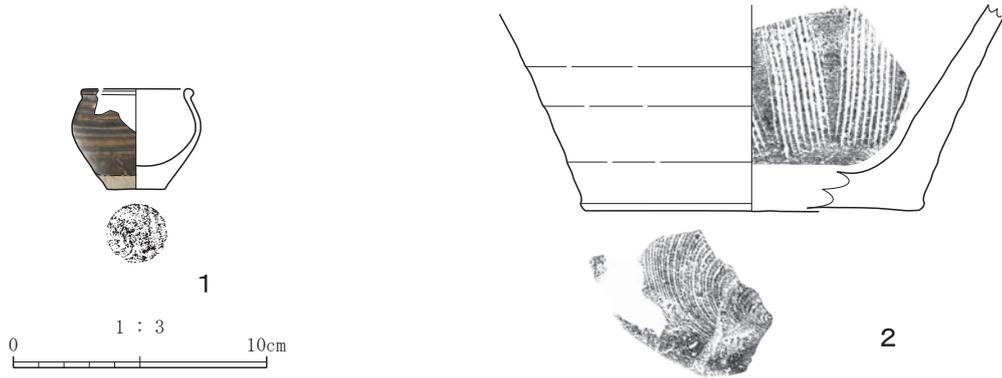


第6表 試掘調査区1区土層注記表

遺構名	層位	土色	土性	備考
試掘調査区1 共通	I	2.5Y5/2	暗灰黄色 シルト質粘土	上位は大畦畔(農道盛土)。2.5Y2/1(黒色)粘土質シルトをブロック状に多量含む。砂をやや多く含む。
	II	2.5Y5/1	黄灰色 粘土質シルト	砂をやや多く含む。層上部に酸化鉄が層状に集積。酸化鉄斑紋状、層全体に集積。マンガン粒状に多量集積。
	III	2.5Y5/2	暗灰黄色 粘土質シルト	酸化鉄斑紋状、層全体に集積。部分的に層状に集積する。
	IV	2.5Y4/1	黄灰色 シルト質粘土	砂を微量含む。酸化鉄層状、マンガン粒状、層中位から下位に多く集積。
	V	2.5Y3/2	黒褐色 粘土質シルト	砂を微量含む。酸化鉄斑紋状、層全体に少量集積。
	VI	2.5Y2/1	黒褐色 粘土質シルト	灰白色シルトの薄層をわずかに含む。酸化鉄斑紋状、層全体に少量集積。
	VII	2.5Y3/2	黒褐色 シルト質粘土	砂を微量含む。酸化鉄層状に集積。
	VIII	10YR3/1	黒褐色 粘土質シルト	砂を少量含む。酸化鉄斑紋状、層全体に少量集積。
	IX	2.5Y4/2	暗灰黄色 粘土質シルト	砂をやや多量含む。酸化鉄斑紋状、層全体に集積。
	X	2.5Y4/3	オリーブ褐色 粘土質シルト	酸化鉄斑紋状、層全体に集積。
SD01	1	2.5Y5/3	黄褐色 粘土質シルト	層上部に酸化鉄が層状に集積。マンガン粒状。
	2	5Y6/1	灰色 シルト質粘土	5Y3/1(オリーブ黒)粘土質シルトが部分的に層状に堆積。酸化鉄斑紋状に層全体に集積
	3	2.5Y5/2	灰オリーブ色 粘土質シルト	2層に類似するがよりシルト質が強い。酸化鉄斑紋状、層全体に集積。
	4	5Y4/1	灰色 シルト質粘土	砂を多く含む。酸化鉄斑紋状に層全体に集積。
	5	5Y4/1	灰色 シルト質粘土	砂を多く含む。酸化鉄斑紋状に層全体に集積。
SD02	1	10YR3/1	黒褐色 粘土質シルト	10YR4/2(灰黄褐色)粘土質シルトをブロック状に、灰白色シルトを大ブロック状に多く含む。
	2	10YR3/2	黒褐色 粘土	灰白色シルトを部分的に層状に含む。
SX01	1	5Y4/1	灰色 粘土	砂を多く含む。酸化鉄斑紋状に層全体に集積。

第17図 試掘調査区1-5 VI層上面平面図(1/120)・断面図(1:60)

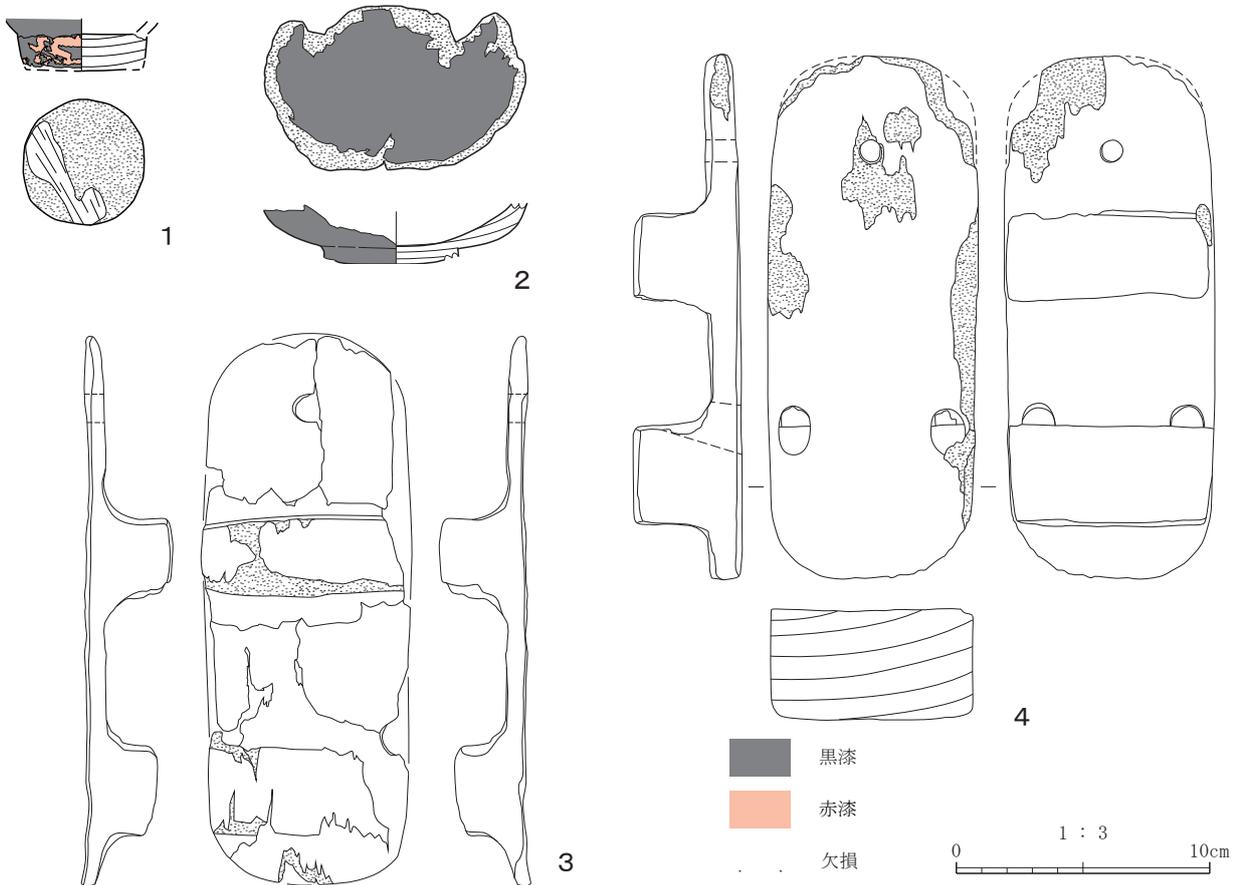




第7表 試掘調査区1 SD01 溝跡出土遺物 陶器観察表

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	種別	器種	部位	口径	底径	器高	成形調整 / 装飾	胎土・質 / 製作	備考
18-1	39-8	I001	TP1-4 SD01	陶器	ミニチュア ア(甕形)	口縁～底 部	4.1	2.2	4.0	ロクロ・回転糸 切底 / 鉄釉	淡黄灰 / 大堀相 馬	
18-2	39-9	I002	TP1-4 SD01	陶器	擂鉢	胴部～底 部	-	13.5	8.2	ロクロ・回転糸 切底 / 鉄釉	赤褐 / 不明在地	楡目9本 / 1.5mm幅

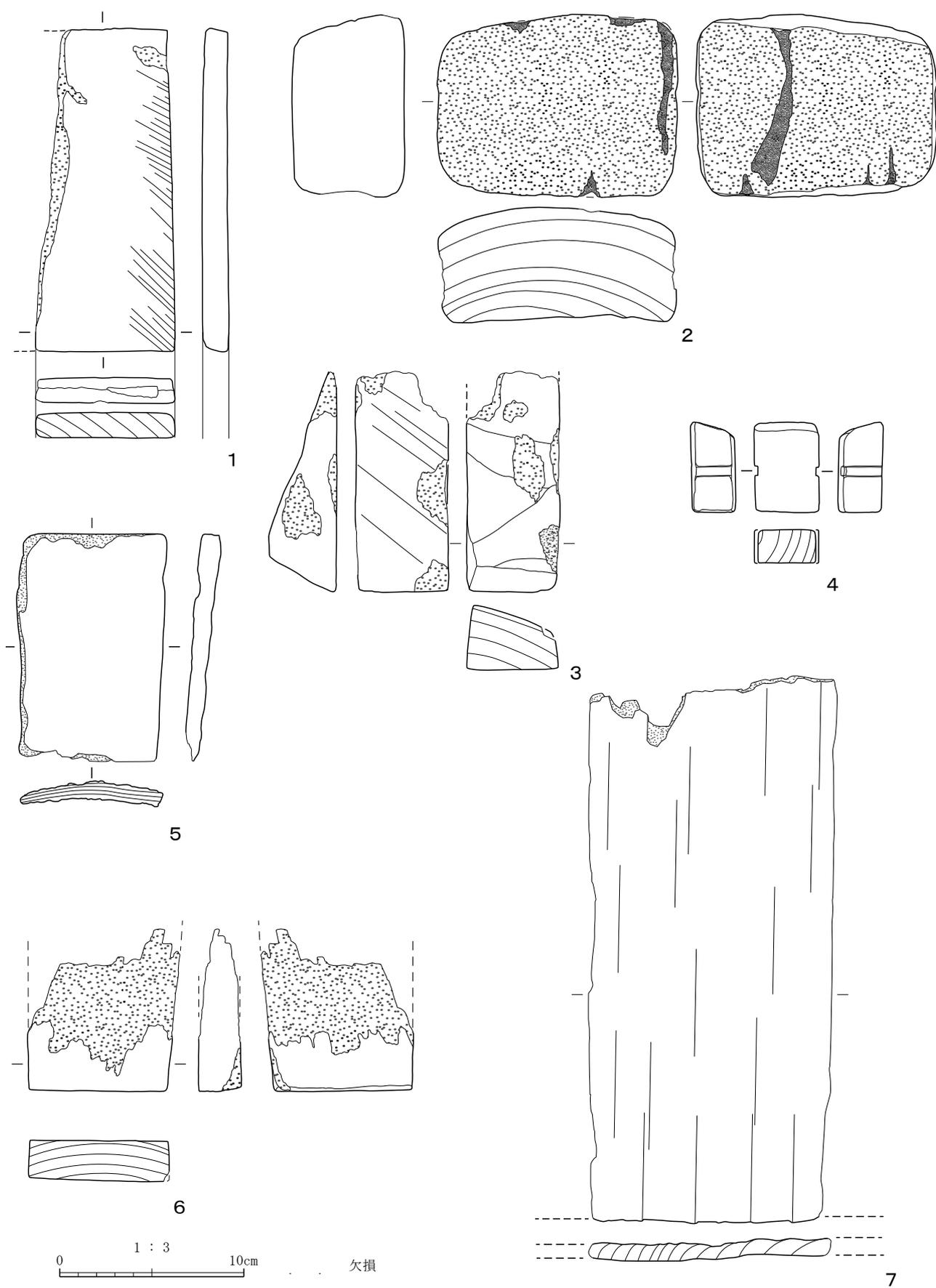
第18図 試掘調査区1 SD01 溝跡出土遺物 陶器



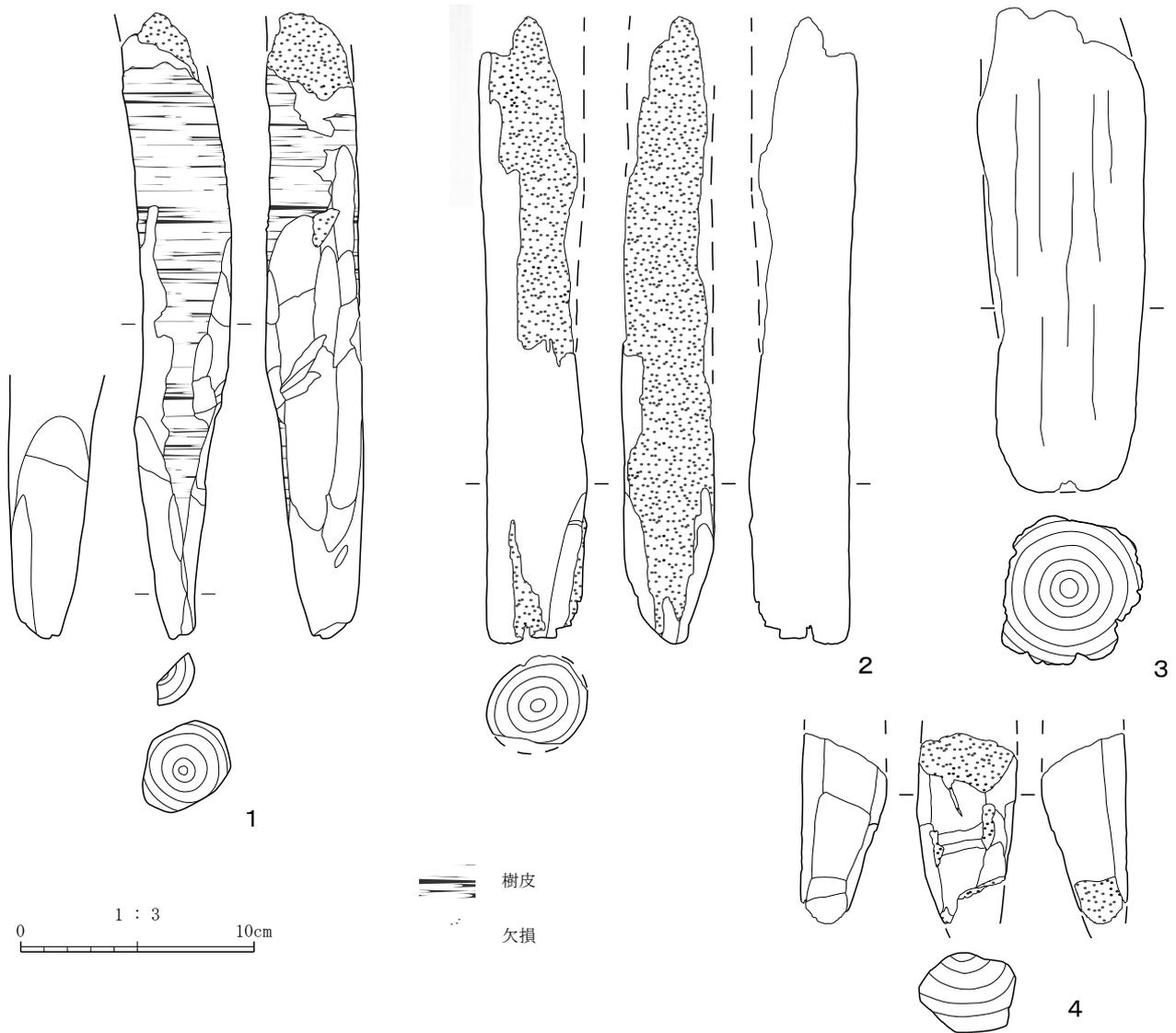
第19図 試掘調査区1 SD01 溝跡出土遺物 木製品(1)

第20図はSD01で出土した木製品である。1・2・6・7は板材で、桶や箱など組物の部材の可能性も考えられるが、残存状況が不良のため明確ではない。1の表面には鋸で引いた際に生じるような平行した加工痕跡が複数条観察される。5は不明部材片である。比較的樹皮側に近い偏分割材を素材とし、残存長に対してやや厚めに成形されている。左右両側縁と表面の3面には幅0.7cm深さ0.2cmの溝状の加工痕が横位に観察される。

第21図はSX01で出土した杭である。1～4はいずれも芯持丸木材を素材とした先端加工材で、出土状況から杭として利用されていたと考えられる。いずれも劣化が著しく上半部は欠損しており全長は不明である。



第20図 試掘調査区1 SD01 溝跡出土遺物 木製品 (2)



第8表 試掘調査区1 SD1 溝跡・SX1 性格不明遺構出土遺物 木製品

図番号	写真番号	登録番号	種別	樹種	木取	遺構・出土層	全長	最大幅	最大厚	備考
19-1	52-1	L004	漆器椀高台部	ブナ属	横木取	TP1-4 SD01	口径 -	底径 (5.0)	高さ (1.6)	
19-2	53-1	L018	漆器椀高台部	ブナ属	横木取	TP1-4 SD01 z	口径 -	底径 (5.3)	高さ (2.1)	
19-3	52-2	L005	下駄	オニグルミ	分割材(偏半割)	TP1-4 SD01	20.8	8.3	4.4	
19-4	52-3	L006	下駄	モミ属	分割材(偏半割)	TP1-4 SD01	21.8	7.8	3.5	
20-1	52-4	L007	板材	マツ属複雑管束亜族	柾目材	TP1-4 SD01	17.7	(7.5)	1.4	
20-2	52-5	L008	部材片	ハンノキ属	板目厚板	TP1-4 SD01	9.9	13.0	6.0	
20-3	52-6	L009	板材	マツ属複雑管束亜族	板目材	TP1-4 SD01	12.2)	(7.9)	1.5	
20-4	52-7	L010	部材片	スギ	偏分割材	TP1-4 SD01	(12.1)	5.0	3.6	
20-5	52-8	L011	部材片	針葉樹	分割材	TP1-4 SD01	4.9	3.5	1.8	
20-6	52-9	L012	板材	マツ属複雑管束亜族	板目材	TP1-4 SD01	(8.9)	7.8	2.3	
20-7	52-10	L013	板材	針葉樹	柾目材	TP1-4 SD01	(29.9)	(13.2)	1.2	
21-1	53-4	L014	杭	クリ	芯持丸木	TP1-4 SX01	(27.0)	3.7	3.9	
21-2	53-5	L015	杭	コシアブラ	芯持丸木	TP1-4 SX01	(27.1)	4.2	3.7	
21-3	53-6	L016	杭(端部加工片)	コシアブラ	芯持丸木	TP1-4 SX01	(20.9)	7.0	6.4	
21-4	53-7	L017	杭(端部加工片)	コナラ属クヌギ節	芯持丸木	TP1-4 SX01	(8.2)	4.1	3.4	

第21図 59 試掘調査区1 SD01・SX01 性格不明遺構出土遺物 木製品

2. 試掘調査区 2 (第 22・23 図、第 9 表)

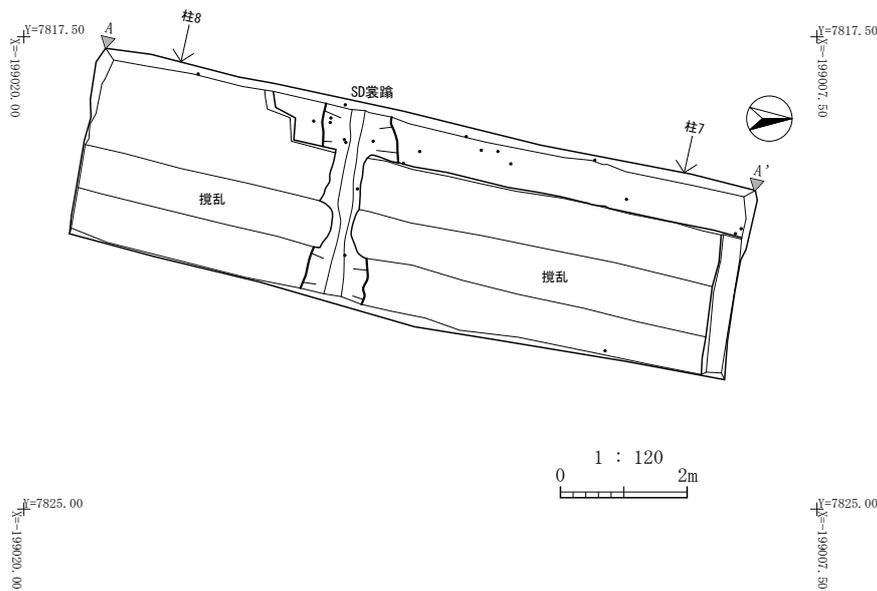
平成 28 年の試掘調査時点では高田 B 遺跡の範囲外であり、調査対象範囲の南端に位置する試掘調査区である。日辺排水路内部にほぼ南北方向に TP 2-1・2-2 の 2 か所の試掘調査区を設けた。調査区内東側の大部は日辺排水路開削の際に大きく削平されている。土層断面の観察から、地形は南に向かいわずかに傾斜していたと考えられる。開削時の排水路上面の標高は 3.0m、底面の標高は約 2.5m である。調査範囲は全体的に自然堆積層である基本層 X 層上面前後まで削平されているため遺構の残存状況は悪い。試掘調査区 2-2 では基本層 VIII 層で東西方向に延びる SD03 溝跡 1 条と、水田耕作土と考えられる堆積土を 3 層 (基本層 IV 層: 中世～近世、基本層 VIII 層: 古墳～古代、基本層 IX 層: 弥生時代) 確認した。



第 22 図 試掘調査区 2 位置図 (1:8000)

【SD03 溝跡】 (第 23 図・第 9 表)

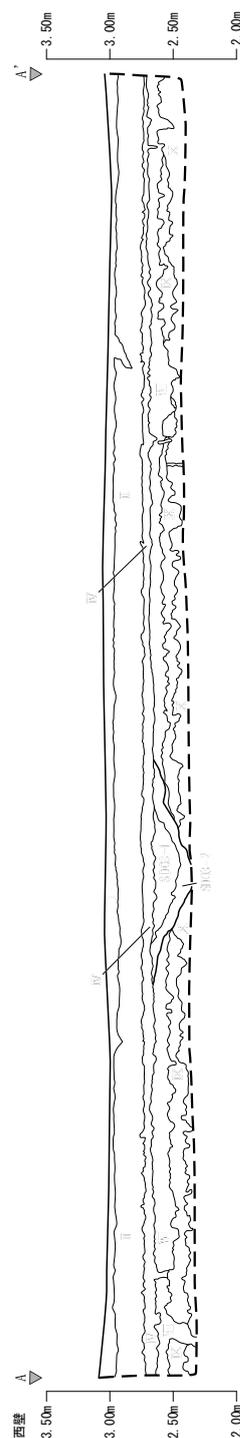
TP 2-2 の基本層 VIII 層上面で確認した。確認面の標高は約 2.6 から 2.7m で、方向は N-84°-W である。確認長は 2.8m で、幅は約 1.0m、深さは最大約 50cm である。調査区を東西に横断し、確認範囲の中央部は現代の排水路によって上端部が大きく削平されている。遺構の上端は、水田耕作土と考えられる基本層 IV 層の耕作により削平されている。調査区外西側と東側にほぼ直線的に延びると考えられ、溝の方向から後述する本調査区 5 区南側で確認した SD11～15 溝跡と関連する遺構である可能性も考えられる。堆積土は 2 層で、調査区西壁断面では基本層 IV 層の直下である様子を確認した。遺物は弥生土器の小破片が少量出土した。



第 9 表 試掘調査区 2 土層注記表

遺構名	層位	土色	土性	備考
試掘調査区 2 共通	I	2.5Y5/2 暗灰黄色	シルト質粘土	上位は大畦畔(農道盛土)。2.5Y2/1(黒色)粘土質シルトをブロック状に多量含む。砂をやや多く含む。
	II	2.5Y5/1 黄灰色	粘土質シルト	砂をやや多く含む。層上部に酸化鉄が層状に集積。酸化鉄斑紋状、層全体に集積。マンガン粒状に多量集積。
	IV	2.5Y4/1 黄灰色	シルト質粘土	砂を微量含む。酸化鉄層状、マンガン粒状、層中位から下位に多く集積。
	VIII	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	砂を少量含む。酸化鉄斑紋状、層全体に少量集積。
	IX	2.5Y4/2 暗灰黄色	粘土質シルト	砂をやや多量含む。酸化鉄斑紋状、層全体に集積。
	X	2.5Y4/3 オリーブ褐色	粘土質シルト	酸化鉄斑紋状、層全体に集積。
SD03	1	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	10YR4/2(灰黄褐色)粘土質シルトをブロック状に少量含む。マンガン粒状、層全体に多く集積。
	2	10YR3/2 黒褐色	粘土	10YR4/2(灰黄褐色)粘土質シルトをブロック状に多く含む。マンガン粒状、層全体に多く集積。

第 23 図 試掘調査区 2-2 VIII 層上面平面図 (1/120)・断面図 (1/60)



3. 試掘調査区 4 (第 24・25 図、第 10 表)

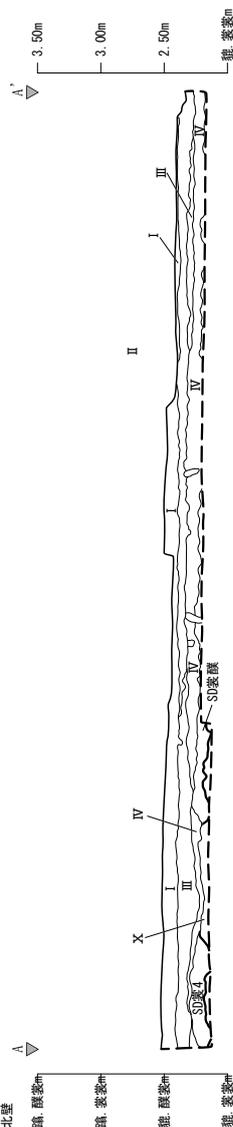
平成 28 年の試掘調査時点では高田 B 遺跡の範囲外であり、調査対象範囲の東端に設定した試掘調査区である。仙台南部道路の南側側道に沿って設けられ、調査区周辺の現地表面の標高は約 3.0m で周辺とほぼ同様となっているが、約 0.5m の碎石層によって整地されており碎石層の下部に標高約 2.50m 前後の高さで現代の水田耕作土である基本層 I 層を確認した。この基本層 I 層の上面標高は、試掘調査区 4 以西に比べると約 0.25m 程低くなっている。土層断面の観察からは、現代の水田耕作土である基本層 I・II 層下面の標高が約 2.35m 前後で、下位は基本層 III・IV 層が部分的に確認されるものの大半は基本層 X 層であることを確認した。一方、本試掘調査区の西に位置する本調査区 2-5 における基本層 X 層の上面標高は 2.4m 前後である。第 1 次調査では SR01 自然流路跡が確認される X 層上面の標高は約 2.0m 前後である。また同調査区で自然流路は流路方向をやや北東方向へ変えており、本試掘調査区では確認されていない。このことから本試掘調査区は東流する自然流路の南岸の若干標高の高い部であったものと考えられる。試掘調査区 4 では、X 層上面で南北方向に延びる溝跡 2 条 (SD04・05 溝跡) を確認したが、遺構の帰属時期は不明である。



第 24 図 試掘調査区 4 位置図 (1:8000)

【SD04・05 溝跡】(第 25 図・第 10 表)

基本層 X 層上面で確認した。確認幅約 0.6～0.8m、確認面からの深さは約 0.1～0.2m である。調査区を南北に横断する形で確認され、調査区外北側と南側にほぼ直線的に延びる。二本の溝跡は概ね並行して確認されており、堆積土の状況から畦畔の両脇が溝状に落ち窪んだ可能性が考えられるが、周辺では現代の水田区画造成に伴う削平が顕著なため、この施設が帰属する水田耕作土層は特定できなかった。このため遺構の正確な時期は不明である。遺物は弥生土器の小破片が少量が出土した。



第 10 表 試掘調査区 4 土層注記表

遺構名	層位	土色	土性	備考	
試掘調査区 4 共通	I	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質粘土	2.5Y2/1(黒色)粘土質シルトをブロック状に多量含む。砂をやや多く含む。
	II	2.5Y5/1	黄灰色	粘土質シルト	砂をやや多く含む。層上部に酸化鉄が層状に集積。酸化鉄斑紋状、層全体に集積。マンガン粒状に多量集積。
	III	2.5Y5/2	暗黄灰色	シルト質粘土	2.5Y5/4(黄褐色)シルト質粘土のブロックを多く含む。
	IV	2.5Y4/1	黄灰色	シルト質粘土	砂を微量含む。酸化鉄層状、マンガン粒状、層中位から下位に多く集積。
	X	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト	酸化鉄斑紋状、層全体に集積。
SD04	1	10YR4/1	褐灰色	シルト質粘土	10YR4/2(灰黄褐色)粘土質シルトをブロック状に少量含む。マンガン粒状、層全体に多く集積。
SD05	2	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR3/2(黒褐色)粘土質シルトを小ブロック状に多く含む。マンガン粒状、層全体に多く集積。

第 25 図 試掘調査区 4 X 層上面平面図 (1/120)・断面図 (1/60)

4. 試掘調査区 7 (第 26・27 図、第 11 表)

平成 28 年の試掘調査時点では高田 B 遺跡の範囲外であり、調査対象範囲の東端に設定した試掘調査区である。仙台南部道路の北側側道に沿って設けられた調査区で、調査区周辺の現地表面の標高は、約 2.50m 前後である。

土層断面の観察から、現代の水田耕作土である基本層 II・III 層の下部は基本層 IX 層がごく断片的に残され、ほかの部分は X 層上面を確認した。

本試掘調査区では、基本層 X 層上面でピットを 2 基確認した。

【P01】

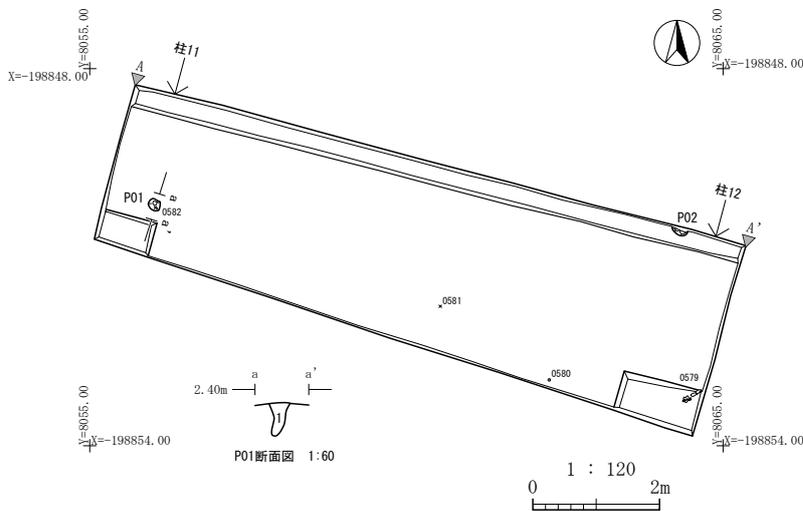
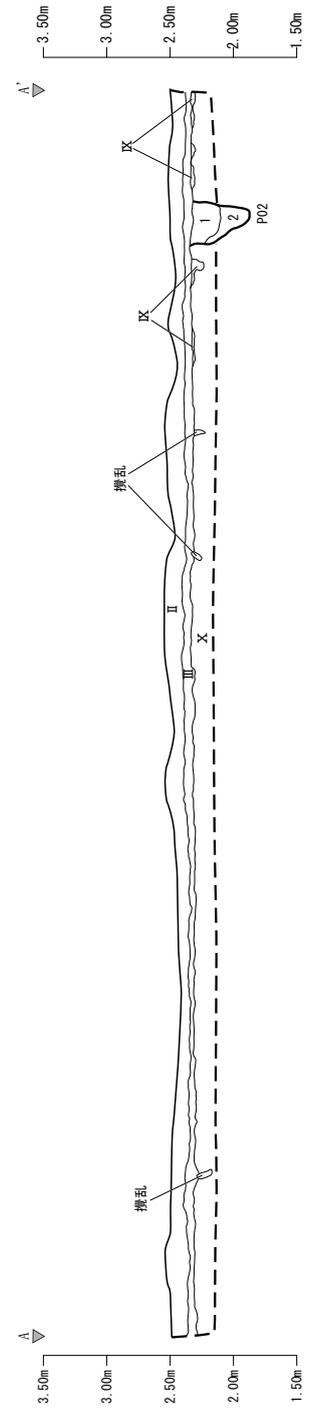
平面形は長軸 0.2m、短軸 0.8m の不整楕円形を呈し、深さは 0.25m である。基本層 III 層直下の基本層 X 層上面で確認された。堆積土は単層で層中にわずかに中粒砂を含んでいることから、津波堆積層の到来後の時期の遺構と考えられるが、正確な時期は不明である。遺物は弥生土器の破片が少量出土した。

【P02】

調査区北壁断面で確認されたため平面形は不明であるが、長軸 0.26m、深さは 0.27m である。基本層 III 層直下の基本層 X 層上面で確認された。堆積土は 2 層からなり、層中にわずかに中粒砂を含んでいることから、津波堆積層の到来後の時期の遺構と考えられるが、正確な時期は不明である。遺物は弥生土器の破片が少量出土した。



第 26 図 試掘調査区 7 位置図 (1:8000)



第 11 表 試掘調査区 4 土層注記表

遺構名	層位	土色	土性	備考
試掘調査区 7 共通	II	10YR5/1	褐灰色 シルト質粘土	砂をやや多く含む。マンガン粒状に集積。
	III	10YR4/1	褐灰色 シルト質粘土	酸化鉄層状、マンガン粒状に集積。
	IX	2.5Y4/2	暗灰黄色 粘土質シルト	砂をやや多く含む。酸化鉄斑紋状、層全体に集積。
	X	2.5Y4/3	オリーブ褐色 粘土質シルト	酸化鉄斑紋状、層全体に集積。
P01	1	10YR4/1	褐灰色 粘土質シルト	10YR5/2(灰黄褐色) 粘土質シルトをブロック状に多く含む。
P02	1	10YR4/1	褐灰色 粘土質シルト	砂を微量含む。10YR5/2(灰黄褐色) 粘土質シルトをブロック状に多く含む。
	2	10YR4/2	灰黄褐色 粘土質シルト	砂を微量含む。10YR5/2(灰黄褐色) 粘土質シルトをブロック状に含む。

第 27 図 試掘調査区 7 X 層上面平面図 (1/120)・断面図 (1/60)・P01 断面図 (1/60)

5. 確認調査区 8 (第 28 ~ 34 図、第 12 ~ 14 表)

遺跡範囲の南東部寄り、本調査区 5 東側に位置する水田区画の中に一区画畑地が存在している。この畑地は過去の航空写真などから、周囲が水田となる以前の旧地形を留めている可能性が考えられたため、状況確認のための調査を行った。

現地表面の標高は約 3.7m ~ 3.8m と周辺よりも高く、現在の耕作土の下部には遺構が比較的良好に残されている状況が推測された。確認調査区 8-1 ~ 4 は旧地形の高まりを確認できるよう、標高の最も高い位置に 4 つの確認調査区の中心を置き、南北に向かいやや傾斜する状況を確認できるよう設定した。

試掘調査の結果、層序・土性ともに基本層 VI 層に類似し、土壌化が比較的進んだ黒褐色土層が確認され、上面で複数の遺構を確認した。この黒褐色土層を VI 層に準じるものとし、断面で基本層序の確認を行った。平面の VI 層の残存範囲は、確認調査区 8-1・2 の北側約 3.0m と確認調査区 8 区-3・4 の南側約 2.0 ~ 4.0m を除いた約 40m の範囲で確認した。また VI 層が残存する範囲の北端と南端で VI 層より新しい遺構である SD06・07 溝跡を確認した。

確認調査区 8-3 では両溝跡の埋土中から複数の弥生土器破片が出土したため、試掘坑 (南から順に 1 ~ 3) を設け、VI 層を掘り下げて下層の確認を行った。その結果、約 0.2m の層厚で確認された VI 層の下部に 5cm 程度の層厚で灰黄褐色粘土質シルトとその下部から石器や弥生土器の破片などの遺物が出土する黒褐色土を 0.2m 程度の層厚で確認した。弥生時代に帰属する遺物包含層であると考えられたため、この層を VIII 層として試掘坑内の遺物取り上げを行った。試掘坑の調査をすべて終了したのち確認調査区を埋戻し全工程を終了した。

【SD06 溝跡】

確認調査区 8-1・2 の両試掘調査区で確認され、標高約 2.7m を確認面とする最大幅約 1.5m の溝跡である。

【SD07 溝跡】

確認調査区 8-3・4 の両試掘調査区で確認され、標高約 3.0m を確認面とする最大幅約 3.0 ~ 5.0m の溝跡である。

【その他の確認遺構】

確認調査区 8-1 : ピット 19 穴、土坑 8 基、小溝状遺構 1 条

確認調査区 8-2 : ピット 21 穴、小溝状遺構 1 条

確認調査区 8-3 : 小溝状遺構 5 条

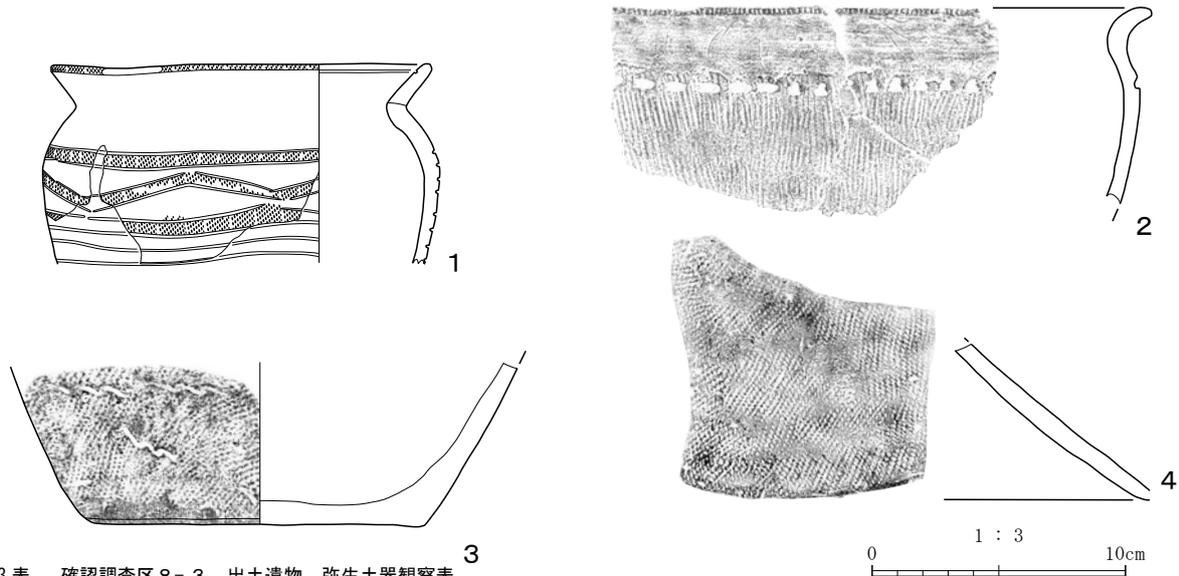
確認調査区 8-4 : ピット 7 穴、土坑 2 基、焼土集中範囲 1 か所



第 28 図 確認調査区 8 位置図 (1:8000)

第 12 表 確認調査区 8 土層注記表

遺構名	層位	土色	土性	備考	
試掘調査区 8 共通	I	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質粘土	上位は大畦畔 (農道盛土)。2.5Y2/1 (黒色) 粘土質シルトをブロック状に多量含む。砂をやや多く含む。
	II	2.5Y5/1	黄灰色	粘土質シルト	砂をやや多く含む。層上部に酸化鉄が層状に集積。酸化鉄斑紋状、層全体に集積。マンガン粒状に多量集積。
	III	2.5Y5/2	暗灰黄色	粘土質シルト	酸化鉄斑紋状、層全体に集積。部分的に層状に集積する。
	IV	2.5Y4/1	黄灰色	シルト質粘土	砂を微量含む。酸化鉄層状、マンガン粒状、層中位から下位に多く集積。
	V	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	砂を微量含む。酸化鉄斑紋状、層全体に少量集積。
	VI	2.5Y2/1	黒褐色	粘土質シルト	灰白色シルトの薄層をわずかに含む。酸化鉄斑紋状、層全体に少量集積。
	VII	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	砂を微量含む。酸化鉄層状に集積。
	VIII	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	砂を少量含む。酸化鉄斑紋状、層全体に少量集積。
	IX	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	砂をやや多量含む。酸化鉄斑紋状、層全体に集積。
	X	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト	酸化鉄斑紋状、層全体に集積。
SD06	1	2.5Y5/2	灰オリーブ色	シルト	層上部に酸化鉄が層状に集積。
	2	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	5Y3/1 (オリーブ黒) 粘土質シルトをブロック状に多量含む。
	3	10YR5/1	褐灰色	粘土質シルト	10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルトをブロック状に多量含む。
	4	10YR4/1	褐灰色	シルト質粘土	10YR6/1 褐灰粘土を含む。
SD07	1	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	10YR4/2 (灰黄褐色) 粘土質シルトをブロック状に、灰白色シルトを大ブロック状に多く含む。
	2	10YR3/2	黒褐色	粘土	灰白色シルトを部分的に層状に含む。
	3	10YR5/1	褐灰色	粘土質シルト	10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルトをブロック状に多量含む。
	4	10YR4/1	褐灰色	シルト質粘土	10YR6/1 褐灰粘土を含む。



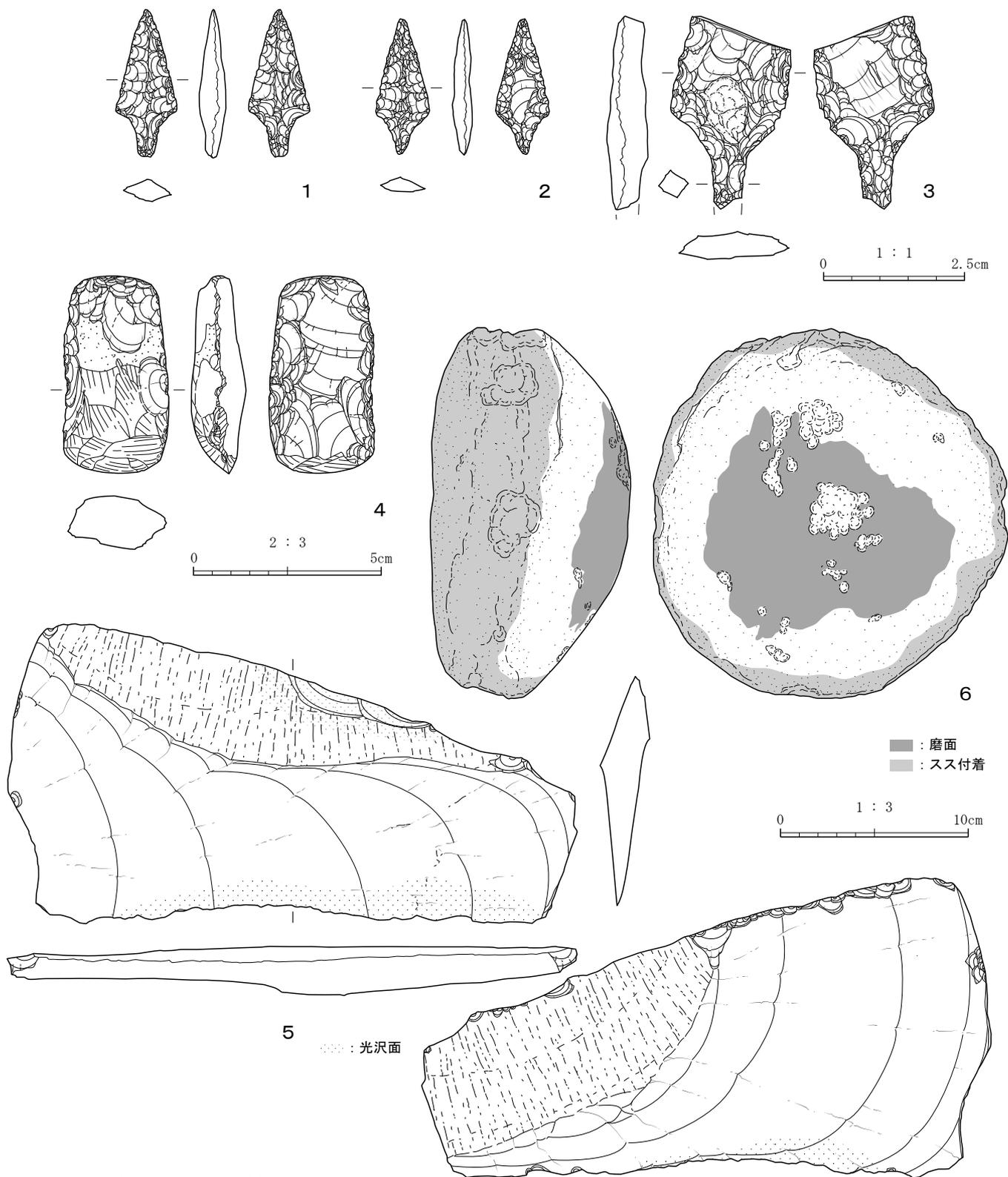
第13表 確認調査区8-3 出土遺物 弥生土器観察表

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	種別	器種	部位	口径	底径	器高	地文/施文	外面調整/内面調整	備考
32-1	22-1	B001	TP8-3 トレンチ3	弥生土器	鉢	口縁~胴部	15.0	-	(7.9)	L3R(口唇・胴部)/層波文・磨消縄文	ミガキ/ミガキ	口縁内面に沈線1条。胎土に骨針を含む。
32-2	22-2	B002	TP8-3 トレンチ2	弥生土器	甕	口縁~胴部	-	-	(7.8)	植物茎回転文(口唇・胴部)/胴部上端に刺突文	頸部ヨコナデ/ケズリ後ミガキか。頸部下位にユビオサエの痕	刺突文は2種類の突き方で施される。
32-3	22-3	B003	TP8-3 トレンチ2	弥生土器	甕	胴部~底部	-	13.1	(6.4)	L3R・結節文(2)/-	ケズリ/内面摩擦顕著のため不明	底部に網代痕が残る。
32-4	22-4	B004	TP8-3 トレンチ2	弥生土器	蓋	体部~端部	-	-	2.1	L3R/-	全面縄文のため不明/ミガキ	

第32図 確認調査区8-3 出土遺物 弥生土器

第32図は確認調査区8-3で出土した弥生土器である。遺物包含層を確認するために設定したトレンチ内のⅧ層から出土した遺物である。1は鉢である。口縁~胴部上半が残存する。残存する胴部は底部方向からやや内湾しながら直線的に立ち上がり、最大径付近で大きく内湾したところで頸部を作り、くの字に直線的に外反して口縁部となる。口縁部内面に沈線が1本巡るが、沈線後にミガキが施され、やや不明瞭である。胴部最大径付近を上端に、層波文の文様帯を描く。並行する沈線で文様を描き、沈線間に縄文を充填し、周囲にはみ出た縄文をミガキで消している。口唇端部にも縄文が施文される。器壁の内外全面はミガキで調整され、平滑に仕上げられる。2は甕の口縁部から胴部上半の破片である。口縁はやや強く外湾し、口縁部と胴部との境にナデ調整が残る。最大径付近に刺突による列点文が施される。列点文は胴部の植物茎回転文の後に施され、左横から右横に刺突するものと、工具を立てて上方向から刺突するものがある。内面は横方向のミガキで調整される。3は甕の底部~胴部の破片である。胴部の外面には縄文が施文され、一部にZ字の結節が観察される。底部外面には網代痕が残る。内面は磨滅と剥離で詳細が不明である。4は蓋の体部である。口縁部の端部からわずかに外湾しながら直線的に立ち上がる。外面には全面に縄文が施文され、縄の太細の調子から直前段が3条のL3Rであることがわかる。内面は非常に丁寧なミガキが施されている。

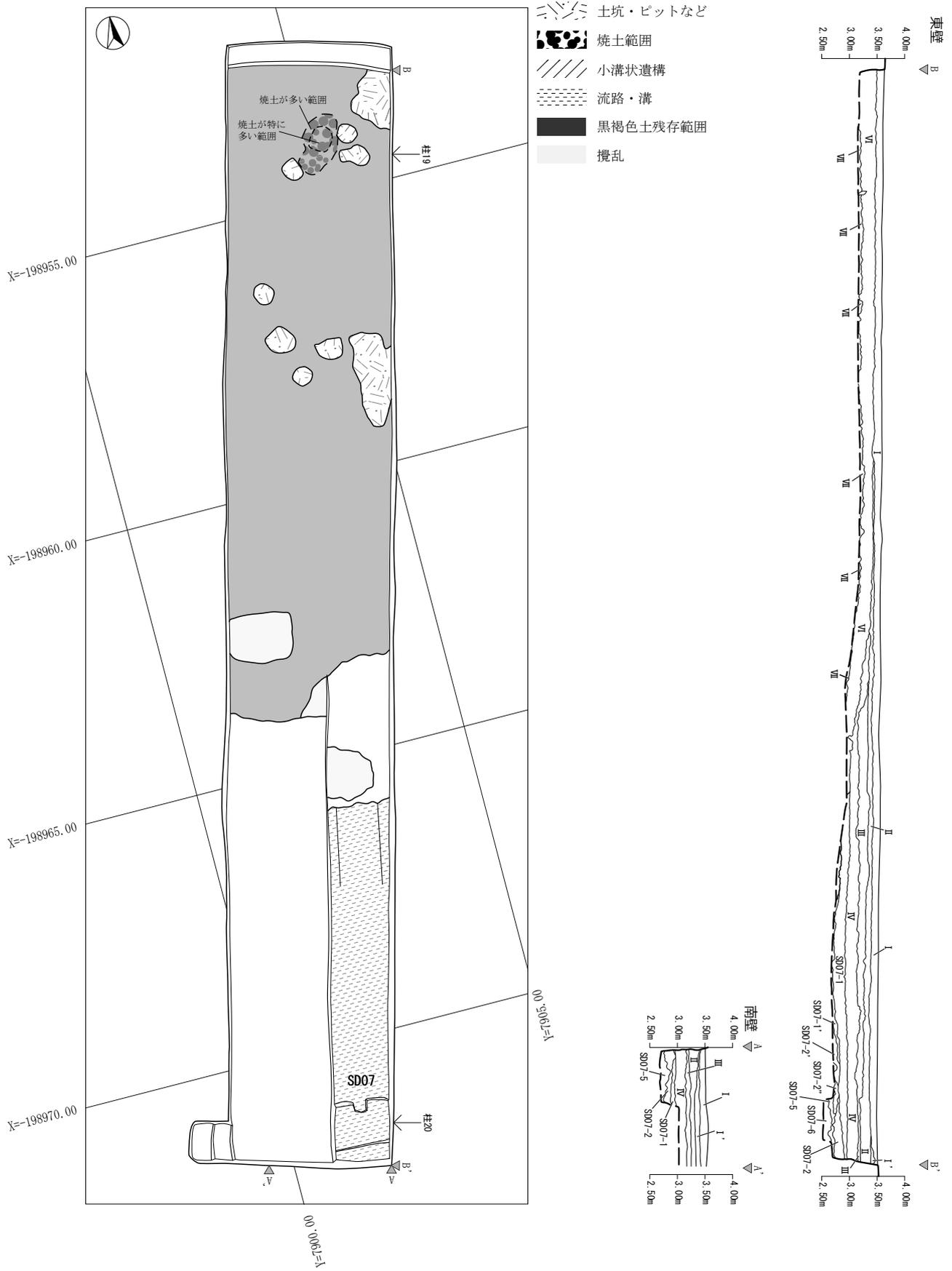
第33図は確認調査区8-3で出土した石器である。1は有形式の石鏃で、流紋岩を石材としている。先端部から逆刺部までの両側縁は直線的で、逆刺部から基部への形状はやや緩やかに内湾している。横断面形は概ね左右相称で器体中軸上に稜を持つ菱形状を呈している。2は結晶片岩を石材とした石鏃で、逆刺部から基部にかけての形状が緩やかに内湾しており平面形は概ね菱形状を呈する。裏面中央部には素材剥片の主要剥離面を大きく残している。3は黒曜石を石材とした石錐で先端部と把握部を欠損する。表面の中央部には球顆状のクリストバライトが観察され、それを残す形で全体形状の調整をおこなったものと考えられる。先端部横断面形は角のしっかりとした菱形状を呈する。4は完形の扁平片刃石斧で、珪質凝灰岩を石材としている。平面形は概ね長形状を呈するが、右側縁はわずかに外湾する。表裏面には成形時の剥離痕が大きく残り、表面の中央には素材の元礫面が部分的に残されている。5は板状節理を有する凝灰岩質安山岩を石材とした大型板状石器である。右側縁と左側縁は折取りによって形状を整え、刃縁と考えられる上下縁辺部には使用に伴う刃毀れと考えられる微細な剥離痕と、部分的な半光沢面が観察される。表面上半部と裏面左上半部には節理面が残る。6は磨痕と敲打痕が複合して観察される石皿類で、花崗岩を石材としている。裏面全体と周縁部、表面の一部に被熱を受けており、特に周縁部分は被熱によるハジケも確認される。横断面は中央が緩やかに盛り上がった山型を呈しており、その頂部を中心に弱い磨面と敲打痕が観察される。



第 14 表 確認調査区 8-3 出土遺物 石器観察表

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	器種	石材 / 素材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	
33- 1	40- 1	K001	TP3-2 VIII層	打製石器	石鏃	流紋岩	2.7	1.1	0.5	0.8	有茎式
33- 2	40- 2	K002	TP3-2 VIII層	打製石器	石鏃	結晶片岩	2.4	0.9	0.4	0.6	裏面に素材剥片の剥離面を残す
33- 3	40- 3	K003	TP3-2 VIII層	打製石器	石鏃	黒曜石	(3.5)	(2.1)	0.7	(4.2)	つまみ部と機能部尖端を欠損する
33- 4	40- 4	K024	TP3-2 VIII層	磨製石斧	扁平片刃	珪質凝灰岩	5.3	2.8	1.5	27.7	裏面には成形時の剥離痕が大きく残る
33- 5	40- 5	K004	TP3-2 VIII層	打製石器	大型板状石器	凝灰岩質安山岩	16.2	30.3	2.7	999.5	縁辺の一部に半光沢面が観察される
33- 6	40- 6	K025	TP3-2 VIII層	石皿類	台石	花崗岩	19.9	18.9	10.7	5200	裏面と周縁部にスス状の炭化物付着

第 33 図 確認調査区 8- 3 出土遺物 石器



第34図 確認調査区8-4 VI層上面平面図(1/100)・断面図(1/100)

第3節 本発掘調査における確認遺構と出土遺物

第15表 本調査区一覧表

試掘確認調査区No.	調査年度	確認された層																	備考	
		I	II	III	IV	V	VI	灰白	VII	VII b	洪水	VIII	IX	X	XI	S0	S1	S2		津波
本1-1	平成27年度	○	○		○		○		○			○	○	○						
本1-2	平成27年度	○	○	○			○	○	○			○	○	○						
本1-3	平成27年度	○	○		○	○	○	○	○			○	○	○						SR06、SD09
本1-4	平成27年度	○	○			○	○	○	○			○	○	○						SD08a・b
本1-5	平成27年度	○			○							○	○	○						
本1-6	平成27・28年度	○	○	○			○	○	○			○	○	○						SR01
本2-1	平成27年度	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○						SR01
本2-2	平成27年度	○			○	○	○	○	○			○	○	○						SR01・07
本2-3	平成27年度		○	○		○	○	○	○			○		○						SR01
本2-4	平成27年度	○	○	○	○									○						SR03・07
本2-5	平成27年度	○	○	○	○	○	○		○			○	○	○						SD08a・b・10、SR03・13
本3-1	平成28年度	○	○			○	○	○	○					○						
本3-2	平成28年度	○	○			○	○	○	○			○	○	○						SD11、SR12
本3-3	平成28年度		○						○					○						SD12、SR12
本4-1	平成28年度	○	○											○						SD14・15、SR14・15
本4-2	平成28年度	○	○	○								○								SR04・05
本4-3	平成28年度	○	○	○								○	○	○						
本4-4	平成28年度	○	○				○	○	○					○						
本4-5	平成28年度		○			○	○	○	○			○		○						SR06
本4-6	平成28年度	○	○						○					○						SD08・17
本4-7	平成28年度	○	○						○					○						SD08
本4-8	平成28年度	○	○											○						
本5北	平成28年度	○				○	○	○	○			○	○	○						SK15、SR01
本5南	平成28年度	○	○				○	○	○	○	○	○		○						SD12・13・14・15・16(29)・21・26・27A・B・28、SK04、SX09・12
本6	平成28年度		○				○	○	○			○		○						SR10
本7東	平成28年度	○	○			○			○			○	○	○		○	○			SD17・18・19・20、SK07、SR11
本7西	平成28年度	○				○			○			○	○	○						SD18、SX10
本8	平成28年度	○	○	○										○						SD22・23、SK13・14、SR13
本9	平成28年度		○	○			○	○	○			○		○						SK01・02、SX01・02、P02
本9北	平成28年度		○	○	○		○		○					○						P01

1. 本調査区1

高田B遺跡の周知の遺跡範囲の南縁部西側に接し、仙台南部道路の南側側道に沿って東西方向に敷設されている用水路の日辺排水路西側を、本調査区1とした。現水田への乗入口を残す形で、西側から本調査区1-1～1-6の6か所に分割した調査区を設定した。調査区内に敷設されていた用水路基礎の掘方底面は標高約2.20m前後に達し、基本層IX層の上面前後まで大きく掘削されていたことから、遺構の平面的な残存状況は悪かったが、東西延長約150mに及ぶ調査範囲の各土層断面の観察から、過去の高田B遺跡調査成果を補う様々な情報を得られた。

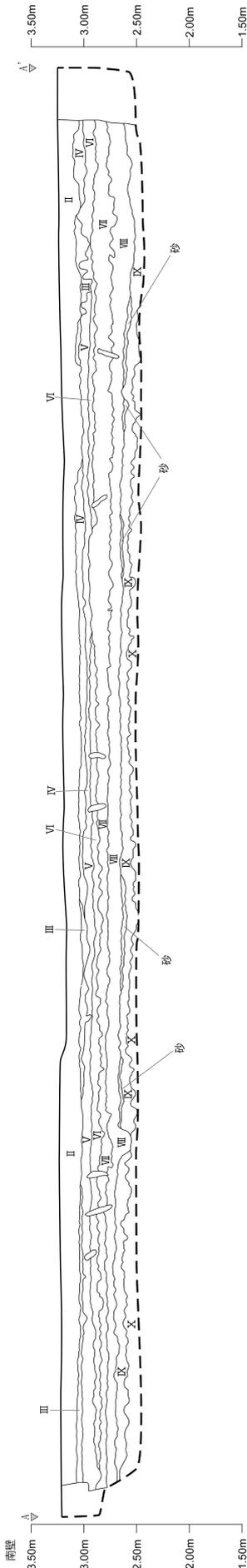


第35図 本調査区1位置図 (1:8000)

本調査区1では、水田耕作土と考えられる堆積土を5層(基本層V層:中世～近世、基本層VI層:古代～中世、基本層VII層・VIII層:古墳～古代、基本層IX層:弥生時代)確認したほか、調査範囲内を南北方向に横断する溝跡1条(SD09:本調査区1-3で確認)、自然流路跡4本(SR06=12:本調査区1-6、SR09:本調査区1-3、SR10・11:本調査区1-4)を確認した。この内SR06然流路跡を確認した本調査区1-6については、流路の概要や洪水堆積層の位置づけも含めて本調査区5の項でまとめて記載する。

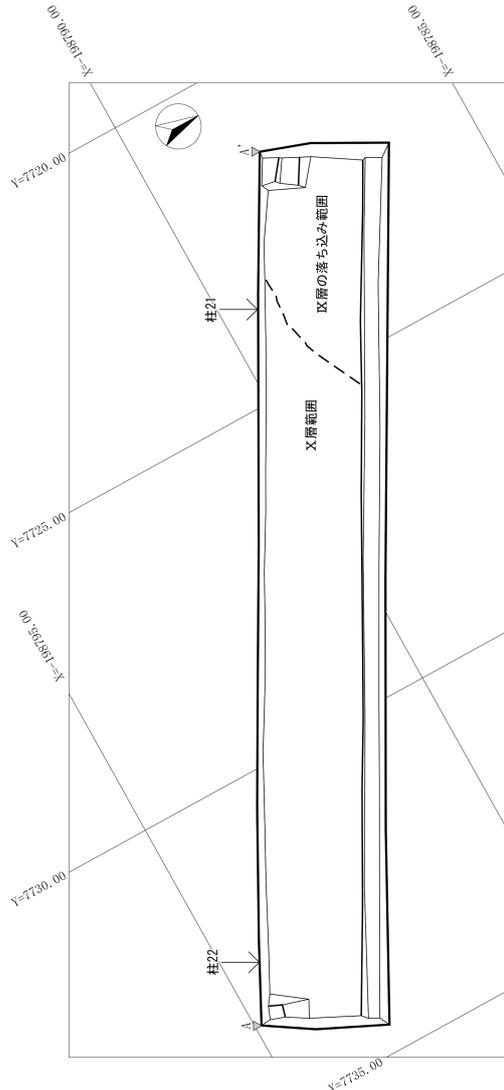
本調査区1-1(第36図、第16表)

本調査区1-1では、敷設された用水路の撤去によりX層までが削平された。平面確認で確認した遺構はないが、断面観察では基本層II層以下X層までを確認した。近世以前の水田耕作層と考えられる層はV層からIX層までが概ね残されている状況を確認した。IX層の上面には砂の薄層が観察された。X層上面の標高は2.40m前後で調査区の東側ではおおむね平坦だが、調査区西端ではIX層が落ち込んでいる。この落ち込みについては水田段差等の耕作域の境界の可能性はある。遺物は出土していない。



第16表 本調査区1-1 基本土層注記表

遺構名	層位	土色	土性	備考
本調査区1 共通	I	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質粘土 現代の耕作土、盛土
	II	10YR5/1	褐灰色	シルト質粘土 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。砂をやや多く含む。マンガン集積。
	III	10YR4/1	褐灰色	シルト質粘土 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトをブロック状にやや多く含む。酸化鉄層状、マンガン粒状に集積。
	IV	2.5Y5/2	黄灰色	シルト質粘土 10YR5/2(褐灰色)粘土質シルトをブロック状に含む。マンガン粒状に集積。
	V	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトをブロック状に含む。マンガン粒状に集積。
	VI	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。層下位に灰白色シルトを小ブロック状または粒状に含む箇所がある。
	VII	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。VI層との境に灰白色シルトをブロック状にやや多量、または層状に含む箇所がある。
	VIII	10YR3/1	黒褐色	シルト質粘土 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトをブロック状に含む。マンガン粒状に集積。
	IX	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト 全体的に砂をやや多く含む、層中に砂の薄層お挟む箇所がある。酸化鉄斑紋状、層全体に集積。
	X	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト 酸化鉄斑紋状、層全体に集積。



第36図 本調査区1-1 X層上面平面図(1/120)・断面図(1/60)

本調査区1-2(第37図、第17表)

本調査区1-2では、敷設された用水路の撤去によりX層まで削平された。平面確認で確認した遺構はないが、断面観察では基本層II層以下X層までを確認した。水田耕作層の確認については本調査区1-1と概ね同じ状況であるが、IX層の上面に残る砂層は本調査区1-2のほうが広範囲に確認される個所が多い。またX層上面の標高は西側の本調査区1-1よりやや低く、ほぼ2.50m前後で平坦である。VIII層中から弥生土器の小破片が1点出土している。

本調査区1-3(第38図、第17表)

本調査区1-3では、敷設された用水路の撤去によりX層まで削平された。平面確認でSD09とSR09を確認した。断面観察では基本層II層以下X層までを確認し、水田耕作層の確認についてはV層以下IX層まで確認した。X層上面は西側の調査範囲よりやや高い傾向があり、2.60m前後をピークとする起伏を東西2か所に確認できる。このうち調査区の東側で確認したSR09の影響と考えられるが、調査区の西側ではIX層が緩やかに落ち込む。VIII層中から弥生土器の小破片が20点ほど出土している。

【SD09 溝跡】

本調査区1-3の基本層X層上面で確認した。断面で確認される遺構最上面の標高は約2.75mで確認幅約1.2m、確認面からの最大深度は約0.4mである。調査区を南北に横断する形で確認されており、調査区外の北側と南側にほぼ直線的に延びるが、攪乱により確認規模が狭いため判然としない。確認された堆積土は単層で、遺物は出土していない。

基本層VIII層より新しく基本層III・IV層に覆われているため、少なくとも近世にまで遡る遺構と考えられるが、遺構本来の掘方上端の大半は現代の水田耕作土層である基本層II層によって削平されていると見られるため、帰属時期は不明である。

【SR09 自然流路跡】

本調査区1-3の基本層X層上面で確認した。確認面の標高は約2.4～2.5mで確認幅最大約3.5m、確認面からの深さは最大で0.7mである。調査区を南北に横断する形で確認され、調査区外北側と南側にほぼ直線的に延びる。堆積土は2層で、1層に含まれる灰オリーブ色のシルトの供給源は基本層X層と考えられ、流路の肩の部を構成している土が混入したと考えられる。下部の2層と比べると上方への細粒化が認められ、流速が穏やかになっていたと考えられる。流路堆積土の最上部に基本層IX層の水田耕作の影響が及んでおり、層上面には顕著な起伏が認められ、弥生時代の水田跡が成立する以前から流れていた自然流路の可能性も考えられるが、平面的な確認が限定的で、高田B遺跡第1次調査で対応する遺構がみとめられないことから詳細は不明である。1・2層から弥生土器の破片が少量出土した。

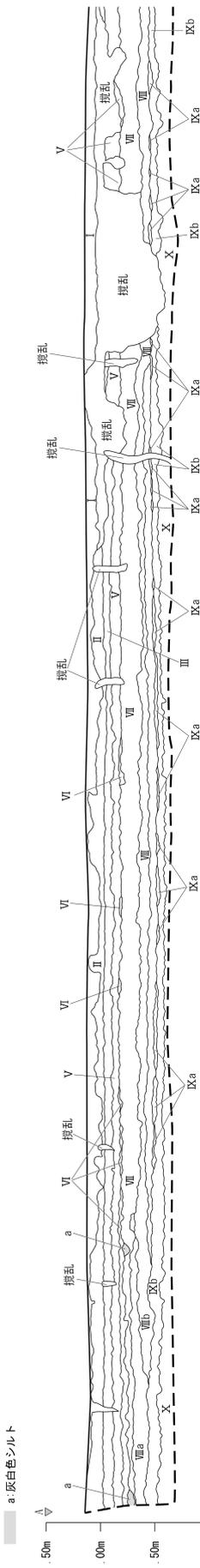
本調査区1-4(第39・41図・第18・20表)

本調査区1-4では、敷設された用水路の撤去によりX層まで削平された。平面確認で調査区西端でSR08AとSR08Bを確認した。断面観察では基本層II層以下X層までを確認したが、これらのすべての層が確認されるのはSR08を確認した西端のみである。調査区西端で2.50mほどであるX層上面は調査区の東側に向かい2.70mほどの高さに達する。このため、VI層とVII層については調査区東側ではほとんど確認されていない。これに対しVIII層は調査区全体で概ね2.75m前後で確認できた。IX層もほぼ調査区全域で確認されたが、調査区東側で段差を確認しそれより東側はVIII層の耕作により削平されていると考えられる。概ね調査区の東側では現耕作土のII層下部に部分的にV層が残存し、下位にVIII層とIX層が確認される。VIII層中から弥生土器の破片が多く出土した。また摩耗が著しく詳細が分からない土器の小破片も多く出土した。ほか石器が5点ほど出土している。

【SR08A・08B 自然流路跡】

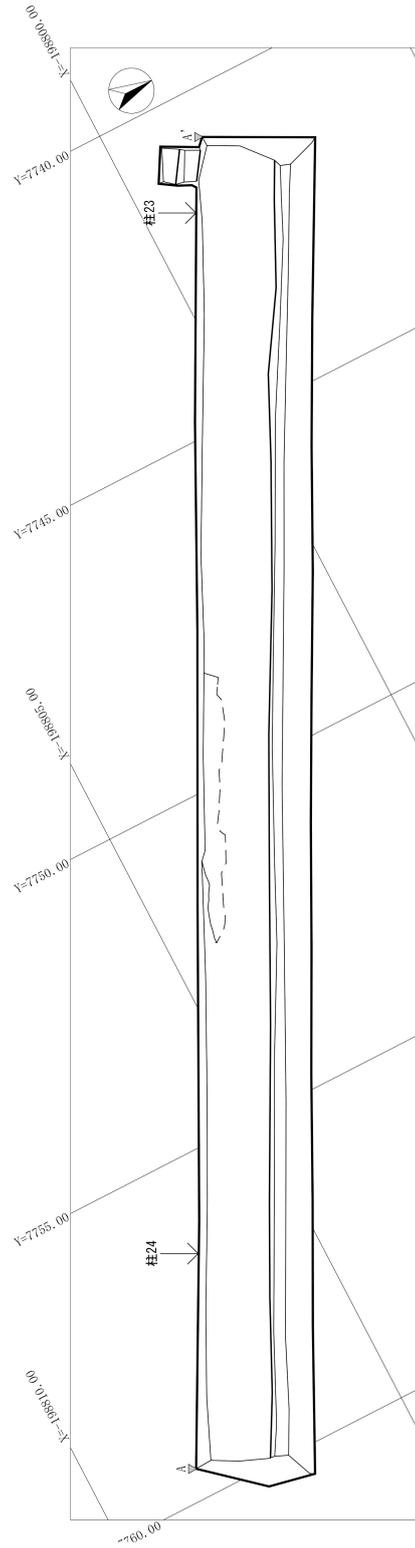
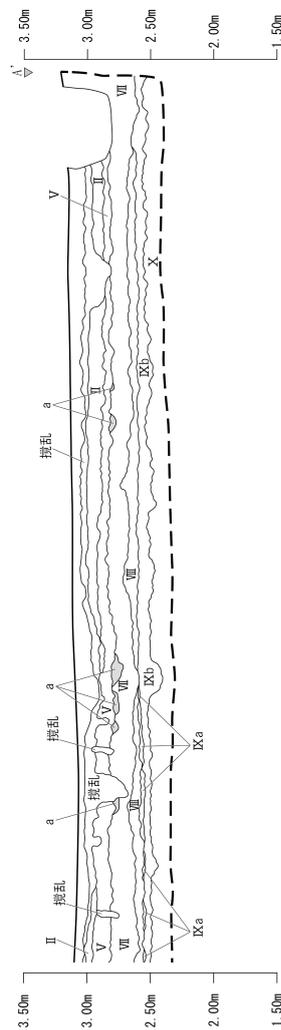
本調査区1-4の基本層X層上面で確認した。確認面の標高は約2.4～2.5mで確認幅は約1.0m、確認面からの深さは最大で0.8mである。調査区の西端をかすめるような形で、調査区外北東方向から南西方向に向かってやや挟り込むような形で確認されている。確認された堆積土は3層で、南壁断面の観察で重複関係が認められたことから、上位をSR08A、下位の2層をSR08Bとしてそれぞれ区分した。

3.50m
3.00m
2.50m
2.00m
1.50m

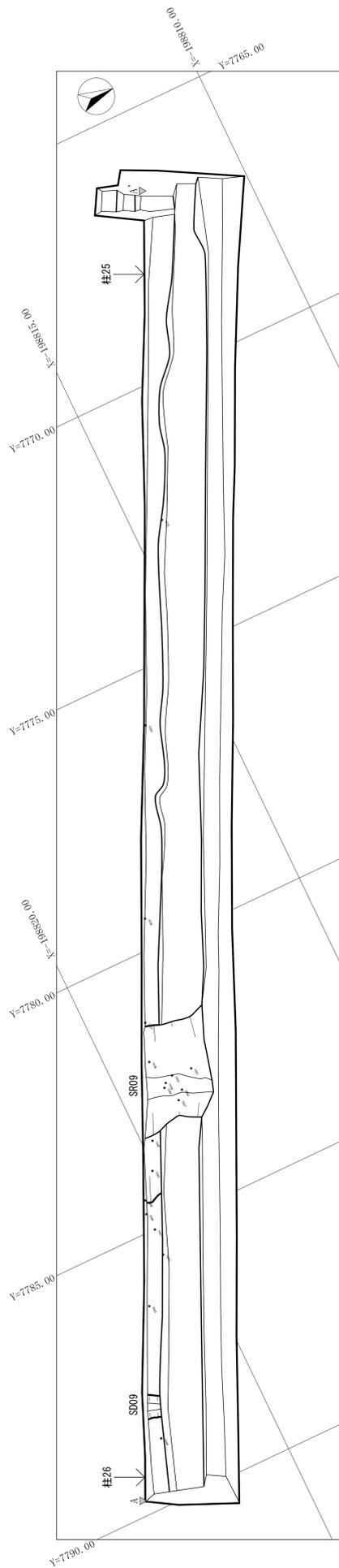
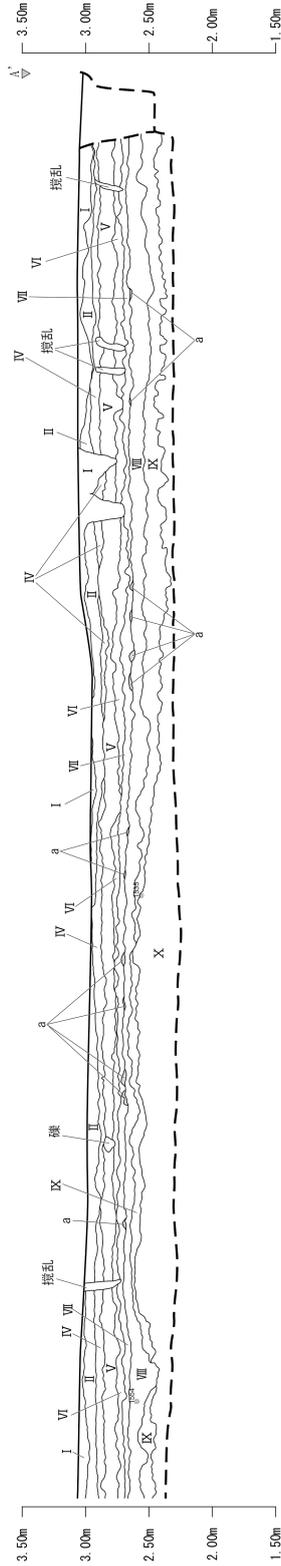
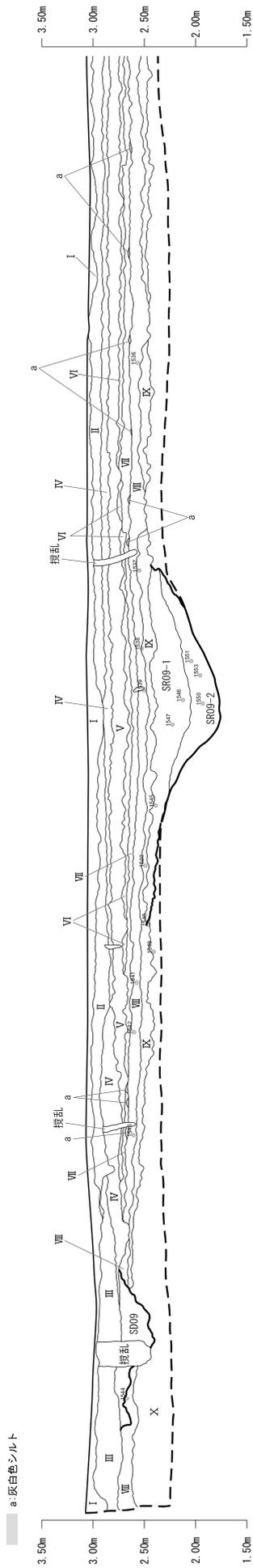


第17表 本調査区1-2・3 基本土層注記表

遺構名	層位	土色	土性	備考
基本層は第16表に同じ				
SR09	1	2.5Y2/1 (黒色)	シルト	5Y6/2 (灰オリーブ色) のシルトを互層状に含む。
	2	2.5Y5/1 (黄灰色)	砂質シルト	層下部に5Y6/2 (灰オリーブ色) のシルト質砂を5cm前後のブロック状にやや乱れた形で含む。部分的にφ1mm前後の砂を多量に含む。
SD09	1	10YR4/2 (灰黄褐)	粘土質シルト	10YR4.1 (褐灰) シルト質粘土を含む。

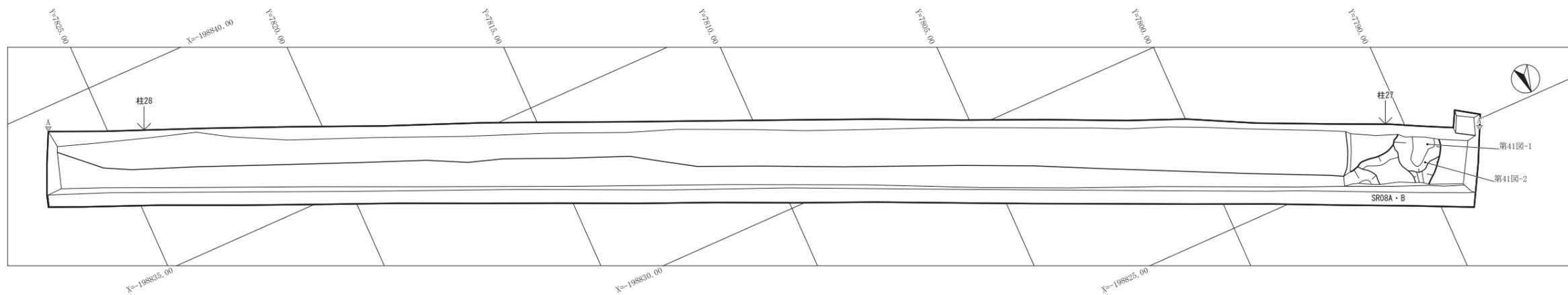
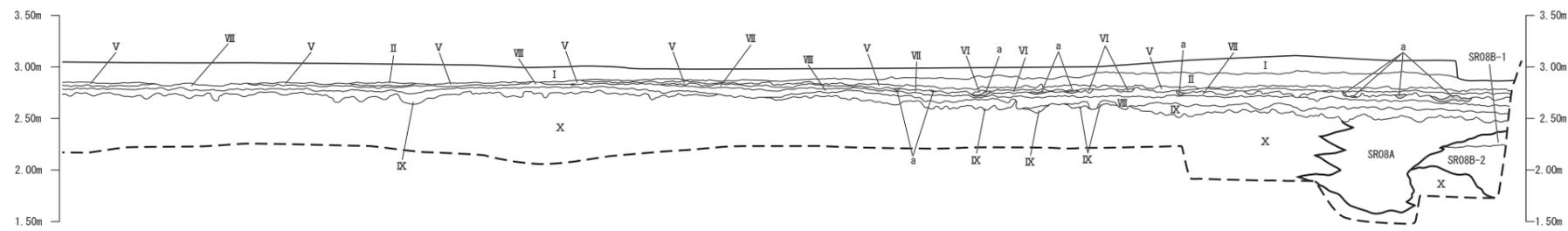
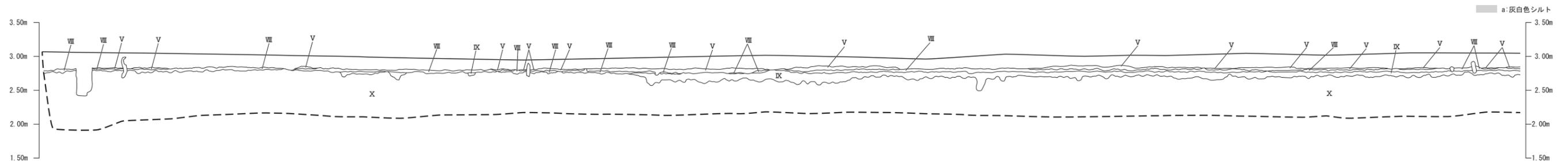


第37図 本調査区1-2 X層上面平面図(1/120)・断面図(1/60)



第 38 図 本調査区 1-3 X層上面平面図 (1/120)・断面図 (1/60)

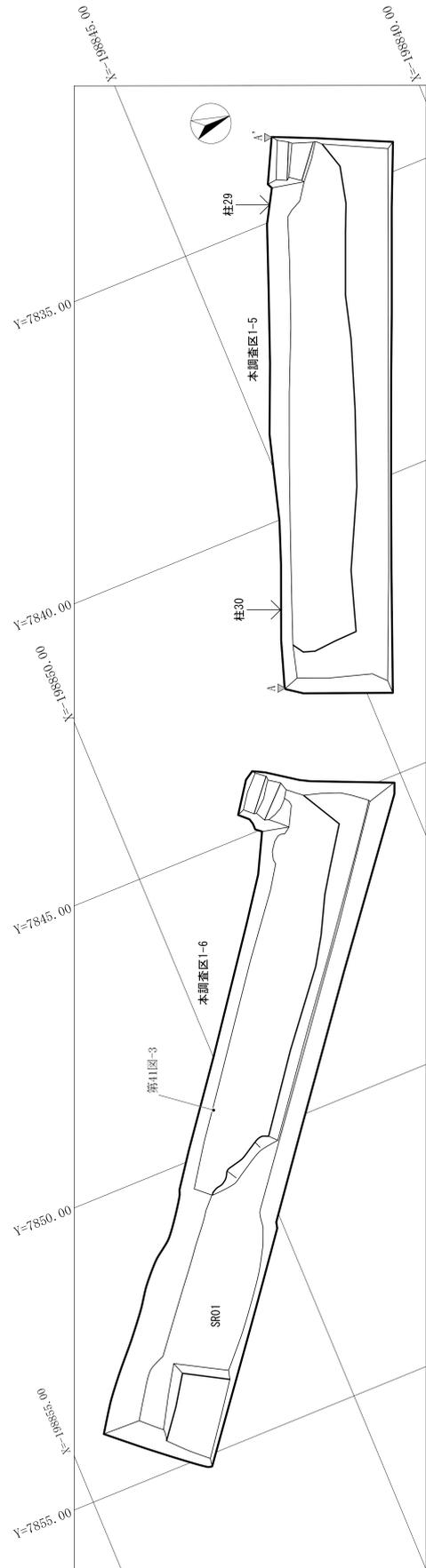
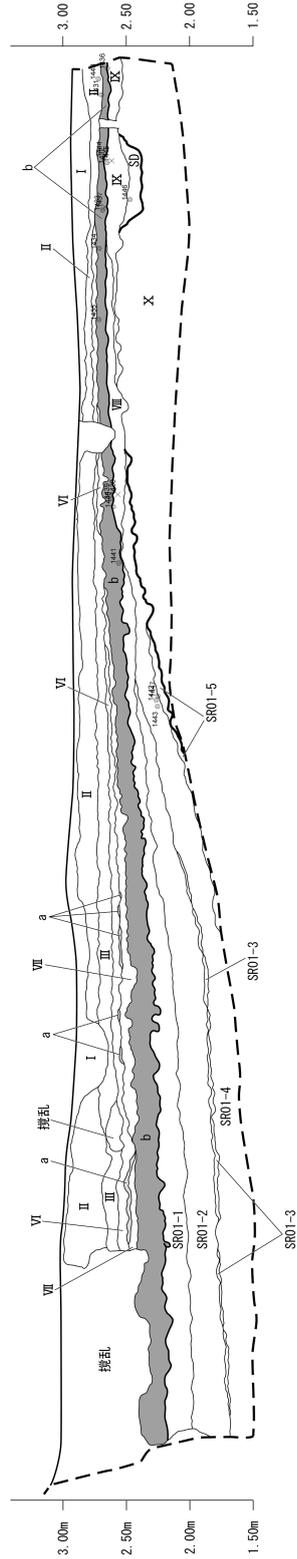
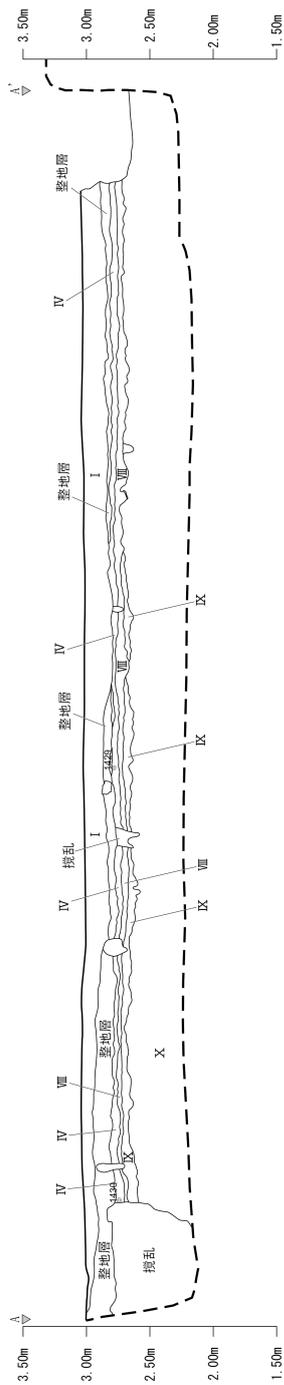
南壁



第18表 本調査区1- 基本土層注記表

遺構名	層位	土色	土性	備考
基本層は第16表に同じ				
SR08A	1	2.5Y5/1 (灰黄色)	シルト	上層部では2.5Y7/2 (灰黄色) のシルトへと漸移的に変化する。酸化鉄が斑紋状に集積。SR11の堆積層。
SR08B	1	2.5Y7/1 (灰白色)	シルト	酸化鉄の集積多量。
	2	2.5Y5/1 (黄灰色)	砂質シルト	2.5Y7/2 (灰黄色) シルトを1cm前後のブロック状にやや多く含む。

第39図 本調査区1-4 平面図 (1/120)・断面図 (1/60) (1)



第19表 本調査区1-5-6 基本土層注記表

遺構名	層位	土色	土性	備考
基本層は第16表に同じ				
SR09	1	2.5Y2/1 (黒色)	シルト	5Y6/2 (灰オリーブ色) のシルトを互層状に含む。
	2	2.5Y5/1 (黄灰色)	砂質シルト	層下部に5Y6/2 (灰オリーブ色) のシルト質砂を5cm前後のブロック状にやや乱れた形を含む。局部的に1mm前後の砂を多量に含む。

第40図 本調査区1-5-6 X層上面平面図 (1/120)・断面図 (1/60)

【SR08A 自然流路跡】

SR08A-1層は、粘性が高く粒子の細かいシルトを基調とし、上層部では2.5Y7/2(灰黄色)のシルトへと漸移的に変化する。植物擾乱の影響と見られる酸化鉄の集積が斑紋状にみられ、確認範囲の東側では指交状態の立ち上がり部を形成している。層の中央から下位にかけて比較的大きめの弥生土器破片が出土した。このうち2点を図示した(第40図)。

第40図-1・2は甕口縁部から胴部にかけての破片である。頸部が括れ、口縁は平縁で外反する。両破片ともに内面、外面ともに摩耗が著しいが、第40図-1は外面頸部にヨコナデ調整がみられ、内面は横位のミガキが部的に残る。頸部と胴部上端の境に破線に近い列点文が施され、胴部に施された地文範囲と区画される。第40図-2は、内外面ともに表面が著しく摩耗している。

【SR08B 自然流路跡】

SR08B-1層はやや粘性の高いシルトを基調とし、植物擾乱の影響と見られる酸化鉄の集積が顕著にみられる。SR08B-2層はやや粘性の高い砂質シルトを基調とし、層下部では2.5Y7/2(灰黄色)のシルトを1cm前後の細かいブロック状に混在する。上層へ向けて5Y6/2(灰オリーブ色)のシルトへと漸移的に変化する。

出土遺物や堆積土に大きな差異が認められないことから、本来的には一つの自然流路跡と判断し、立ち上がり部に見られる堆積の乱れの一つと解釈した方が良いかと考えられる。また、流路堆積土1層の上部には基本層IX層の水田耕作の影響が及んでおり、層上面には顕著な起伏が認められる。こうした状況と堆積土の対比から、前述のSR09自然流路跡と同一の流路である可能性も考えられるが、詳細は不明である。

本調査区1-5(第40図・第19表)

本調査区1-5では、敷設された用水路の撤去によりX層までが削平された。平面確認で確認した遺構はないが、断面観察では基本層II層以下X層までを確認した。水田耕作層の確認についてはVIII層とIX層を確認した。V層からVII層は確認されなかった。また調査範囲の西端では、VIII層の耕作によってIX層が削平されていると考えられる。X層上面は西側で2.70m、東側では2.60mほどで東に向かい緩く傾斜する。遺物は出土していない。

本調査区1-6(第40・41図・第19・20表)

本調査区1-6では、敷設された用水路の撤去によりX層までが削平された。平面確認で確認した遺構はないが、断面観察では基本層II層以下X層までを確認した。水田耕作層の確認についてはVIII層とIX層を確認した。V層からVII層については確認されなかった。また調査範囲の西端では、VIII層の耕作によってIX層が削平されていると考えられる。X層上面は西側で2.70m、東側では2.60mほどで東に向かい緩く傾斜する。

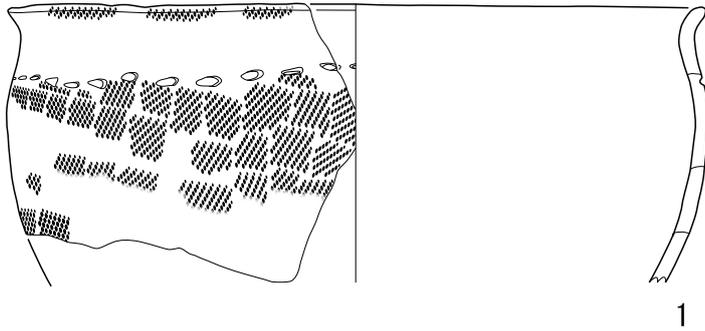
【SR01 自然流路跡】

本調査区1-6の基本層X層上面で確認した。SR01は第1次調査で確認されたSR1の南側の一部に相当すると考えられる。また平成29年度に行われた第2次調査の本調査区5で確認されたSR01も同一の遺構と考えられるため、遺構の詳細については本調査区5で扱う。平成28年度の調査範囲から弥生土器1点が出土しており、これを図化した。

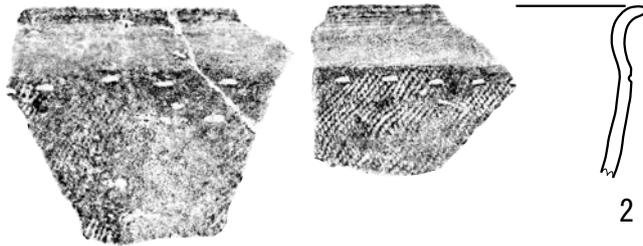
本調査区1出土の弥生土器

第41図は本調査区1で出土した弥生土器である。1・2は本調査区1-4 IX層出土の甕の口縁部から胴部上半の破片である。口縁は外反し、口縁部と胴部との境にナデ調整が残る。口唇端部にも縄文が施文され、胴部上端に刺突による列点文が施される。内面は横方向のミガキで調整される。2の口縁はやや強く外反し、口縁部と胴部との境にナデ調整が残る。口唇端部にも縄文が施文され、胴部上端に刺突による列点文が施される。3は本調査区1-6のSR07で出土した甕の口縁破片である。口縁は平縁で、やや内湾気味に立ち上がる。外面頸部の括れにはミガキの痕跡が残り、口縁帯と胴上部に層波文が施される。層波文内の縄文は地文を磨消している。内面には口縁下位に沈線が2条巡る。調整は摩耗が著しく不明である。

本 1-4 区層



1

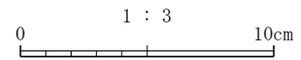


2

本 1-6 SR7



3



第 20 表 本調査区 1-4・6 出土遺物 弥生土器観察表

図版 番号	写真 番号	登録 番号	遺構・層位	種別	器種	部位	口径	底径	器高	地文/ 施文	外面調整/ 内面調整	備考
41- 1	22- 5	B005	本 1-4・IX層	弥生土器	鉢	口縁～胴部	27.5	-	(11.1)	L3R(口唇・胴部)/ 頸部下位に刺突文	頸部ナデ/ミガキ	
41- 2	22- 6	B006	本 1-4・IX層	弥生土器	甕	口縁～胴部	-	-	(6.8)	L3R(口唇・胴部)/ 頸部下位に刺突文	頸部ナデ/内面摩耗顕著のため不明	
41- 3	22- 7	B007	本 1-6 SR07	弥生土器	甕	胴部～底部	-	-	(6.4)	地文の詳細不明/ 層波文・磨消縄文	ミガキ/内面摩耗顕著ため不明	口縁下位に沈線 2 条

第 41 図 本調査区 1-4・6 出土遺物 弥生土器

2. 本調査区 2

高田 B 遺跡の周知の遺跡範囲の南縁部東側に接し、仙台南部道路の南側側道に沿って東西方向に敷設されている用水路の日辺排水路の東側を、本調査区 2 としてした。本調査区 1 と同様に現水田への乗入口を残す形で調査区を設定したため、西側から 2-1 ～ 5 の 5 か所に分割されている。調査区内に敷設されていた用水路躯体は、本調査区 1 よりも小規模であったため、堆積土の平面的な残存状況は比較的に良好であったが、用水路の基礎底面は標高約 2.20 ～ 2.30m まで達しており、基本層 VII 層の上半部まで掘削されていた。



第 42 図 本調査区 2 位置図 (1:8000)

調査は東西 200m を超える調査範囲の各土層断面の観察が主体となった。安全上、平面観察で遺構を確認しながらも掘り下げを行えなかった調査区もあるが、第 1 次調査で確認された遺構や自然流路跡の南側延長部分の確認や、流路内の堆積状況の確認などを行った。

本調査区 2 では、水田耕作土と考えられる堆積土を 5 層（基本層 V 層：中世～近世、基本層 VI 層：古代～中世、基本層 VII 層・VIII 層：古墳～古代、基本層 IX 層：弥生時代）確認したほか、平面・断面の観察から調査範囲内を南北方向に横断する溝跡 2 条（SD07：本調査区 2-2、SD10：本調査区 2-5）、本調査区 2 の調査範囲の西側を蛇行しながら東西方向に流れていたと推測される自然流路跡 1 本（SR01：本調査区 2-1～3）、調査範囲内で大きく蛇行する様子を確認した自然流路跡 1 本（SR07：本調査区 2-4）、本調査区 2 調査範囲の東側で東西方向に流れていたと推測される自然流路跡 1 本（SR03：本調査区 2-4・5 で確認）を確認した。これらの自然流路のうち SR01 と SR03 は第 1 次調査で検出された SR01 の延長と考えられる。

本調査区 2-1 (第 43 図、第 21 表)

本調査区 2-1 では、用水路により標高約 2.0m までが削平されていた。平面で検出した遺構はなく、断面で基本層 I・II・IV・V・VI・VII 層が確認され、VII 層の直下には b 層（洪水堆積層）が広がりを見せる。b 層確認面の標高は約 2.5m ～ 2.3m 前後で東側へとやや下り、層厚は約 0.2m 前後である。b 層以下には第 1 次調査で確認された SR01 自然流路跡の上流側延長部分と考えられる自然流路跡 = SR01 の堆積土が厚く堆積している。SR01 の確認面の標高は約 2.3m ～ 2.1m で、標高約 1.3m まで掘下げたが、全て SR01 の堆積土であった。遺物は土器・石器が少量出土している。

【SR01 自然流路跡】

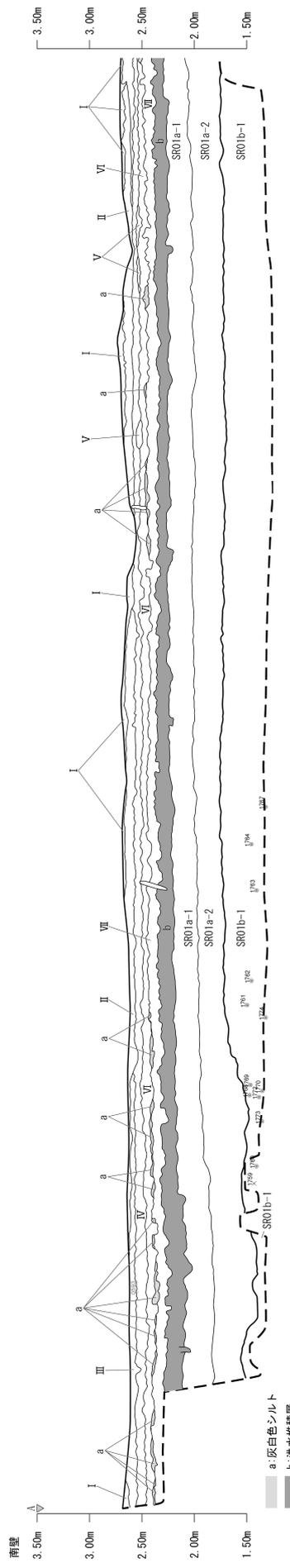
SR01 の堆積土は、大別 2 層、細別 3 層に分けられる。SR01a-1・SR01a-2 層は粒子の細かいシルトの堆積土で、水流の影響をあまり受けていないと考えられる。SR01b-1 層は白色の砂質シルト～黒色有機物シルトのラミナ層を形成しており、水流の影響下で堆積ものと考えられる。SR01a-2 層と SR01b-1 層の層理面は、このラミナ層の堆積方向と不整合の部分あることから、堆積時期に若干の時間差がある可能性も考えられる。

本調査区 2-2 (第 44・45・49 図、第 22・26 表)

本調査区 2-2 では、用水路により標高約 1.9m までが削平されていた。平面で SD07 と SR01 を検出した。断面では基本層 I～VII 層と X 層を、また VII 層以下に b 層（洪水堆積層）と複数の SR01 堆積土を確認した。隣接する本調査区 2-1 では確認されなかった基本層 X 層が確認されたのは、調査区が SR01 自然流路跡が蛇行し、流路岸にほど近い部分であったためと考えられる。X 層上面を確認した標高は最も高い部分（流路が南流から北流へと大きく蛇行しているインコーナー部分）で約 2.1m、調査区の東西両端で約 1.2 ～ 1.3m である。遺物は少量の土器・石器が出土しており、おもに SR01 の堆積土中からややまとまって出土している。なお本調査区の基本層 VII 層下面は、b 層（洪水堆積層）及び SR01a-1 層との間で顕著に起伏する様子が観察される。このため、調査区の東側では b 層（洪水堆積層）は断片的に残る。

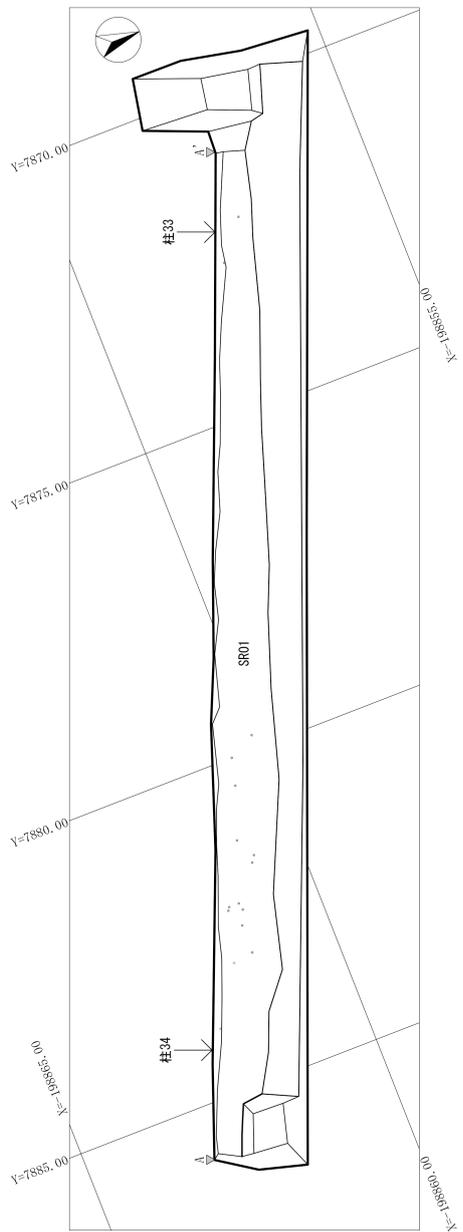
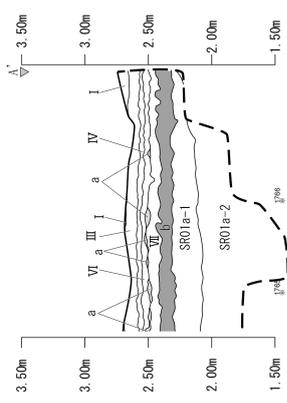
【SD07 溝跡】

本調査区 2-2 の b 層（洪水堆積層）上面で検出した。確認面の標高は約 2.3 ～ 2.4m で検出幅は約 2.0m、深さは約 0.5m

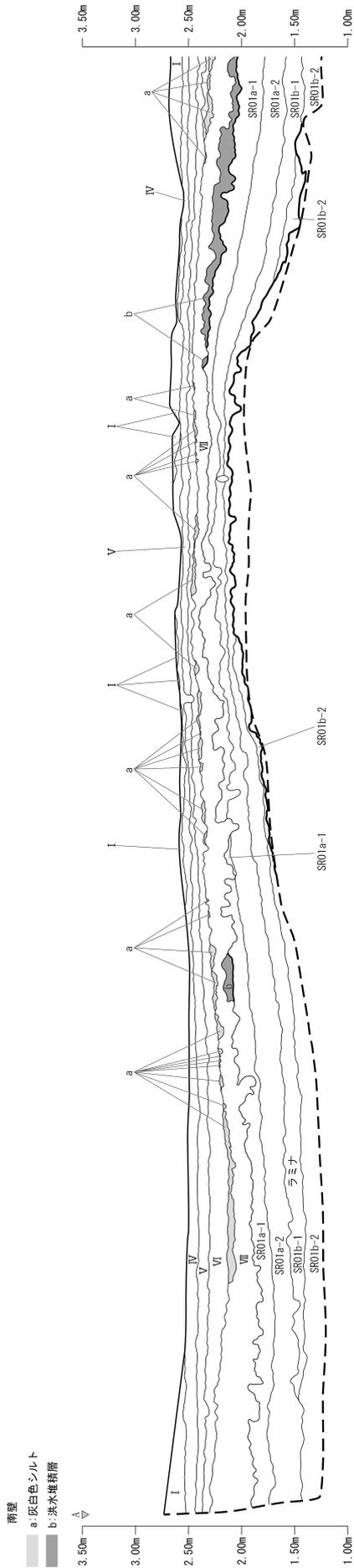


第 21 表 本調査区 2-1 基本土層注記表

遺構名	層位	土色	土性	備考
SR01a	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄斑紋状、層全体に集積
	2	10YR3/1 黒褐色	シルト質粘土	層下に 10YR5/2 (灰黄褐色) 粘土の薄層を挟む。酸化鉄斑紋状、層全体に集積
SR01b	1	10YR2/1 黒	粘土	層層位は 2.5Y5/2 (暗灰黄色) 粘土、2.5Y2/1 (黒) 粘土とのラミナ状。酸化鉄斑紋状、層全体に集積。
本調査区 2 共通	I	2.5Y5/2 暗灰黄色	シルト質粘土	現代の耕作土、盛土
	II	10YR5/1 褐灰色	シルト質粘土	2.5Y4/1 (黄灰色) 粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。砂をやや多く含む。マンガン集積。
	III	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	2.5Y4/1 (黄灰色) 粘土質シルトをブロック状にやや多く含む。酸化鉄層状、マンガン粒状に集積。
	IV	2.5Y5/2 黄灰色	シルト質粘土	10YR5/2 (褐灰色) 粘土質シルトをブロック状に含む。マンガン粒状に集積。
	V	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	2.5Y4/1 (黄灰色) 粘土質シルトをブロック状に含む。マンガン粒状に集積。
	VI	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	2.5Y4/1 (黄灰色) 粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。層下に灰白色シルトを小ブロック状または粒状に含む箇所がある。
	a	2.5Y8/1 灰白色	シルト	灰白色シルト層。
	VII	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	2.5Y4/1 (黄灰色) 粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。VI層との境に灰白色シルトをブロック状にやや多量、または層状に含む箇所がある。
	b	5Y6/4 オリーブ黄	粘土質シルト	洪水堆積層。下に砂を多く含む。
	VIII	10YR3/1 黒褐色	シルト質粘土	2.5Y4/1 (黄灰色) 粘土質シルトをブロック状に含む。マンガン粒状に集積。
IX	2.5Y4/2 暗灰黄色	粘土質シルト	全体的に砂をやや多く含む、層中に砂の薄層を挟む箇所がある。酸化鉄斑紋状、層全体に集積。	
X	2.5Y4/3 オリーブ褐色	粘土質シルト	酸化鉄斑紋状、層全体に集積。	

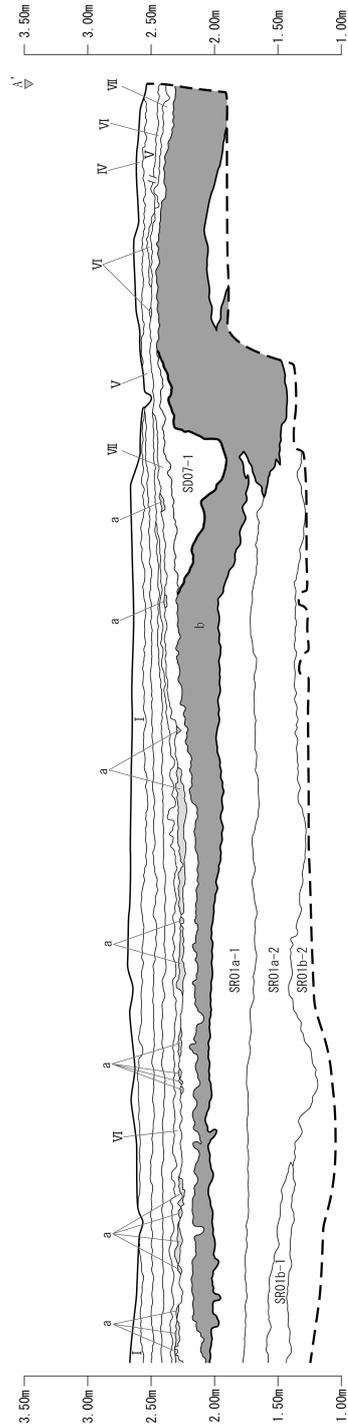


第 43 図 本調査区 2-1 X層上面平面図 (1/120)・断面図 (1/60)

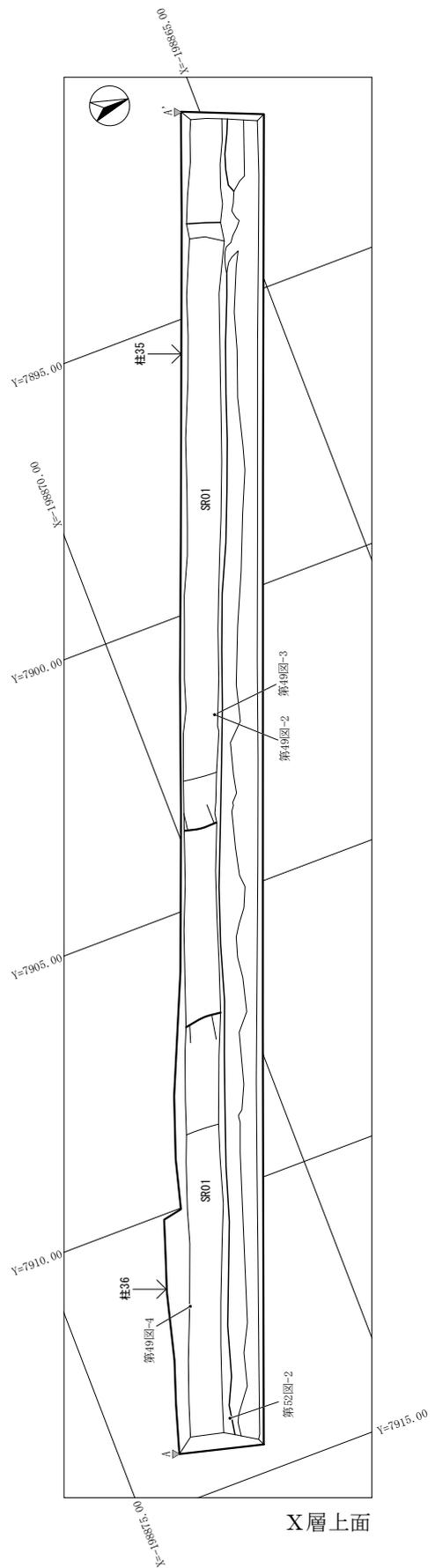
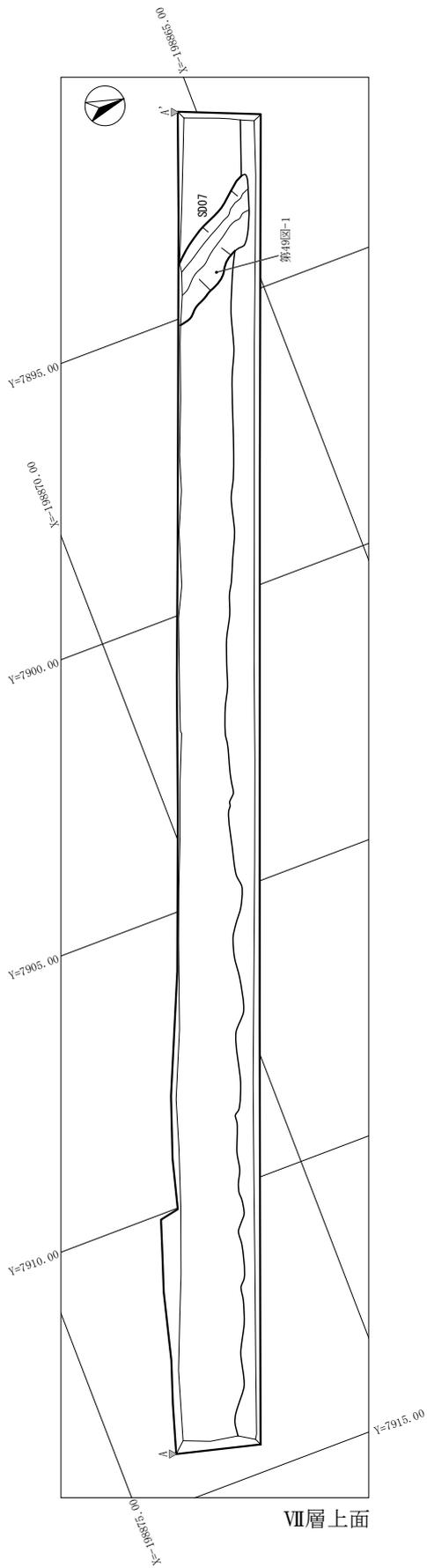


第 22 表 本調査区 2-2 土層注記表

遺構名	層位	土色	土性	備考
基本層は第 21 表に同じ				
SD07	1	10YR6/1 褐灰色	シルト	5Y7/1(灰白色)のシルト質砂をブロック状に含む。酸化鉄斑紋状。
SR01a	1	第 21 表に同じ		
	2			
SR01b	1	第 21 表に同じ		
	2			



第 44 図 本調査区 2-2 断面図 (1/60)



第45図 本調査区2-2 VII・X層上面平面図 (1/120)

である。断面形は歪んだ逆台形状で、中央部分は更に低く窪む。調査区を南北方向からやや斜めに横断する形で検出され、調査区外の北側に南側に延びる。本遺構は基本層Ⅶ層の下位で、b層（洪水堆積層）を掘り込んでいることが断面観察で判明しているため、遺構の時期がかなり限定される可能性が高い。確認された堆積土は単層で、溝跡の東肩付近から第49図-1に図示した非クロコ土師器の坏が(C001)が1点出土している。

【SR01 自然流路跡】

SR01の堆積土は、大別2層、細別4層に分けられる。SR01a-1・SR01a-2層は粒子の細かいシルトの堆積土で、本調査区2-1で確認された層に対応すると考えられる。SR01b-1層は白色の砂質シルト～黒色有機物シルトのラミナ層で、本調査区2-1で確認された層に対応する。SR01b-2層は上位の3層と共通しているが、層中に基本層Ⅹ層に由来すると考えられる灰色砂質シルトブロックを部分的に混在し、SR01b-1層より著しく乱れている。

本調査区2-3（第46・50・53図、第23・27・30表）

本調査区2-3では、用水路により標高約1.9mまで削平されていた。平面では、調査区の中央部で北流するSR01の東側立ち上がりを確認した。断面で、基本層ではⅠ～Ⅶ層とⅩ層、またⅦ層以下にSR01堆積土を3層確認した。本調査区2-2で確認されたb層（洪水堆積層）が本調査区で確認されなかったのは、SR01の東岸に近く堆積土そのものの層厚が薄かったためと、基本層Ⅶ層によって削平されているための二つの可能性が考えられる。

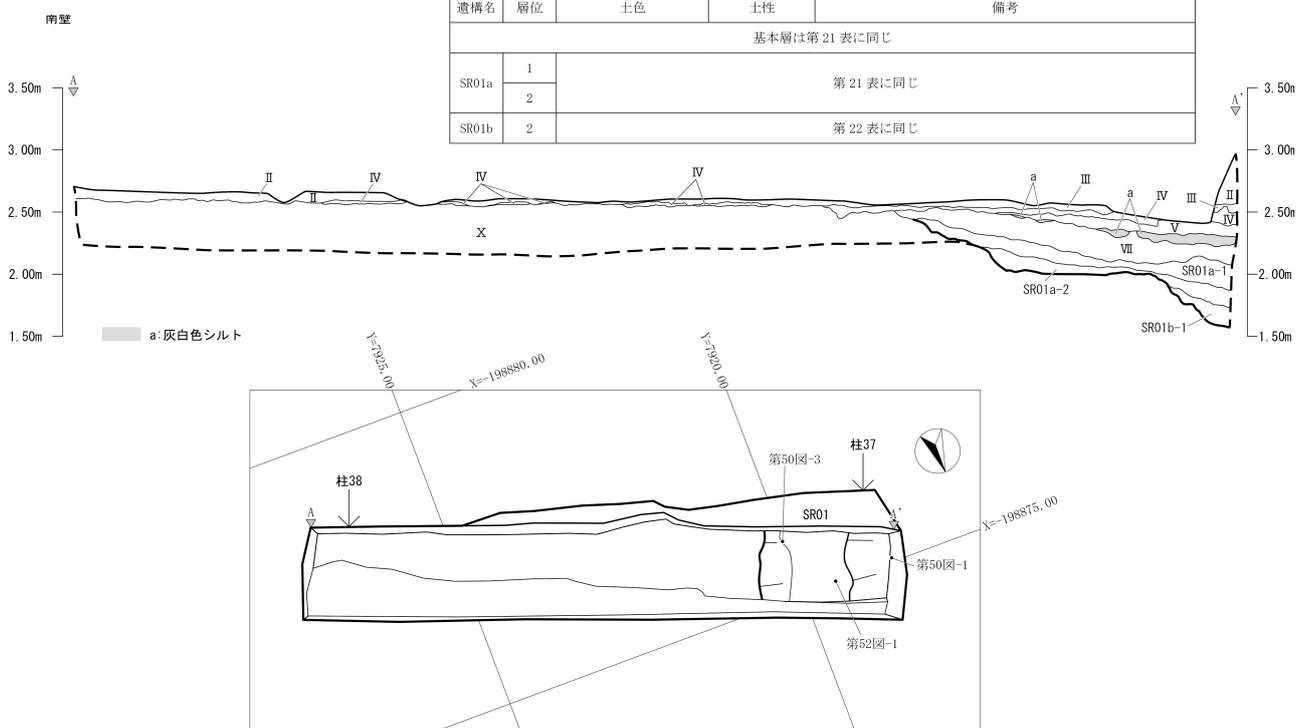
Ⅹ層上面の標高は最も高い部分で約2.6m、最も低い調査区西端部で約1.6mである。標高の高い部分は酸化して黄褐色味が強いが、標高の低い部分はグライ化して暗灰色味が強くなる傾向がある。両者の違いは漸移的で、明瞭に細分はできない。遺物はSR01の堆積土中から出土しており、第50・52図に図示した。

【SR01 自然流路跡】

SR01の堆積土は、大別2層、細別3層に分けられる。このうちSR01a-1・SR01a-2層は本調査区2-1と2-2で確認された層と同一のものと考えられる。SR01b-2層は黒褐色のシルトを基調とする層で、互層状の堆積は認められず、本調査区2-2で確認されたSR01b-2層に対応すると考えられる。

第23表 本調査区2-3 基本土層注記表

遺構名	層位	土色	土性	備考
基本層は第21表に同じ				
SR01a	1			第21表に同じ
	2			
SR01b	2			第22表に同じ



第46図 本調査区2-3 X層上面平面図(1/120)・断面図(1/60)

本調査区 2-4 (第 47・50 図、第 24・27 表)

本調査区 2-4 では、用水路により標高約 1.9m までが削平されていた。平面では、SR03 と SR07 の時期の異なる 2 条の自然流路跡を検出した。断面では基本層 I～V 層と VII・X 層を、また III 層下位に堆積する SR07 の堆積土と、VII 層下位に堆積する SR03 の堆積土を確認した。また、用水路設置時に削平され、既に消失していた遺構を 2 基 (SX: 基本層 II 層以前～III 層以降・SD: 基本層 III 層以前～SR03 以降) 確認した。調査区内の約 3/4 の範囲を 2 条の自然流路跡が占めているため、基本層 X 層上面の確認標高は大きく異なっている。自然流路の削平をほとんど受けていない調査区西端部では標高約 2.5m、SR07 の河床面付近では約 1.5m 以下、調査区中央部東寄りでは約 2.3m、調査区東端付近は約 2.0m 前後と、最大で約 1.0m 以上の開きがある。調査区西端付近が本来の基本層 X 層の堆積状況に最も近いと考えられるが、この付近でも III～IX 層は削平され、基本層 II 層の下位が基本層 X 層となっている。

断面観察から調査区周辺の地形変遷は、下記のように考えられる。

- ① 調査区東半部に SR03 が流れていた時期には流路の南岸に相当する微高地状の高まりが存在する。
- ② SR03 は基本層 VII 層の堆積前には埋没し、その埋没後、基本層 VII～IV 層が堆積したと考えられるが、調査区の断面では VI 層と a 層 (灰白色火山灰層) は確認できない。
- ③ SR03 埋没後西岸をかすめるような形で SR07 が流れる。SR07 は基本層 IV 層の堆積後に流れており、流路は調査区西半部で大きく蛇行する。SR03 の南岸の高まりは SR07 の東岸として残る。
- ④ SR07 は基本層 III 層の上面、標高は約 2.6m 前後で、基本層 III 層の堆積により埋没する。ほぼ平坦な地形となる。

【SR03 自然流路跡】

SR03 の堆積土は 4 層に分けられる。本自然流路は検出された位置から考えると、第 1 次調査で検出された SR01 の南側立ち上がり部の一部であると考えられる。基本層 X 層を河床面とし、北側に向かって傾斜する。調査区東側の河床面付近で多くの遺物が出土した。ほとんどが弥生土器の破片で、これらのうち 3 点を第 49 図に図示した。

【SR07 自然流路跡】

SR07 の堆積土は 6 層に分けられる。深さは標高約 1.5m まで掘り下げたが、河床部はこれ以下の標高まで達すると考えられる。流路の堆積土は基本層 X 層を削り込み、最上部は基本層 III 層の下位で確認された。堆積土の層厚は厚いが層中の出土遺物は非常に少ない。

本調査区 2-5 (第 48・50・52 図、第 25・27・28・32 表)

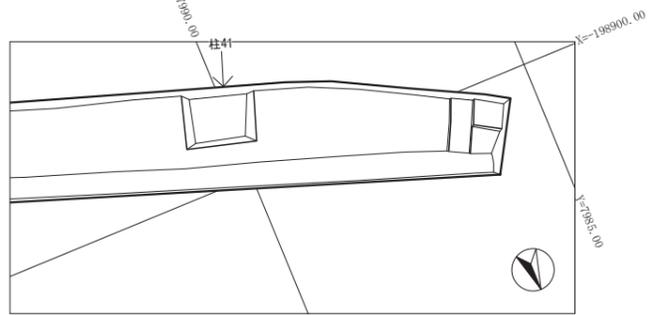
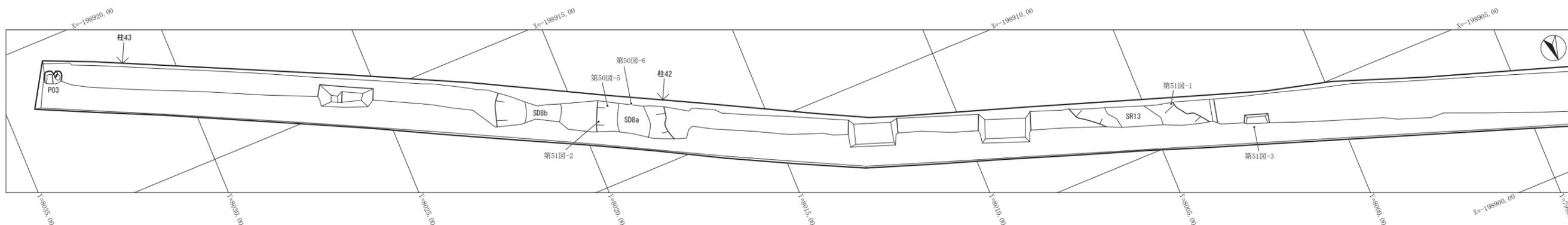
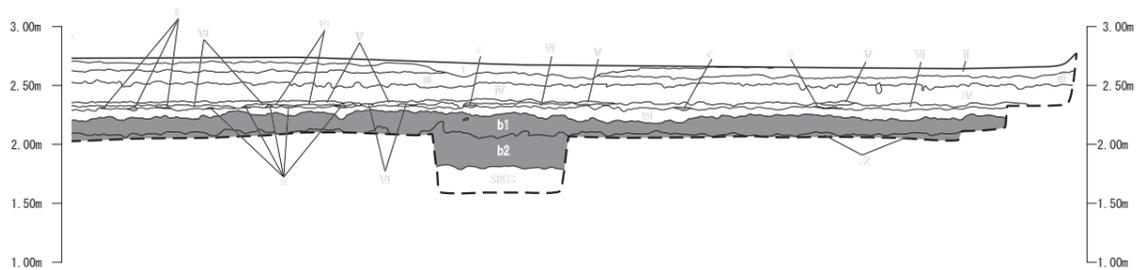
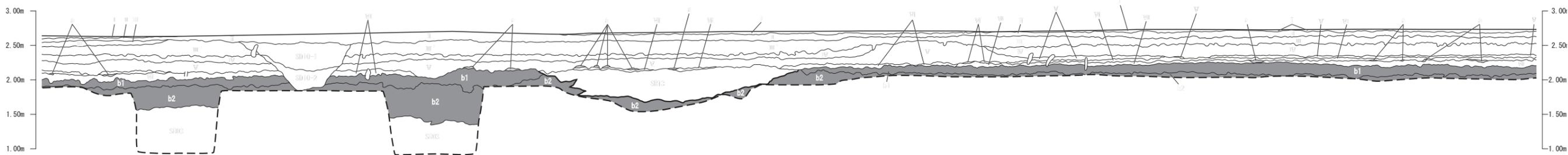
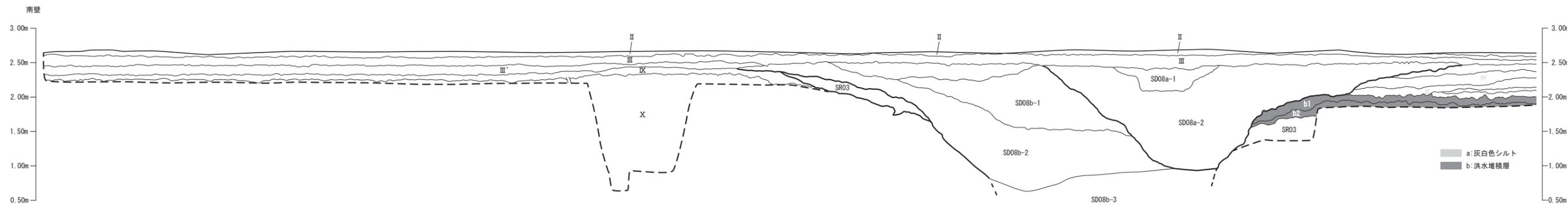
本調査区 2-5 では、用水路により標高約 2.0m までが削平されていた。平面では、調査区の東側で IX 層を確認面とし南北方向に横断する溝跡 (SD08) と調査区中央部で III' 層を確認面とする溝跡 (SD10)、同じく調査区の中央部付近で b 層を確認面とする自然流路跡 (SR13) を確認した。断面で確認できた堆積土は基本層 I～VII 層に加え、第 1 次調査の SR01 の延長部分と考えられる自然流路跡をほぼ調査区全体にわたって確認した。基本層 III 層は調査区東側では III a 層と、土質はほぼ同じだがやや掘削深度の深い III b 層に細分される。また基本層 VII 層と流路堆積物との間には、b 層 (洪水堆積層) と考えられる堆積物が約 0.4～0.8m の厚さで堆積する。確認された b 層はやや褐色味が強くシルト質の b1 層と砂質の強い b2 層に細分される。調査終了時点の調査区最深部の標高は約 0.6～0.7m で、現地表面高から約 2.0m まで掘り下げた。

【IV 層水田跡畦畔】

断面で調査区中央部分のやや西寄りに基本層 V 層が畦畔状に高まった箇所を確認した。断面で確認した上端幅は約 1.2m 下端幅は約 2.9m で比高差は約 0.3m である。用水路の影響により標高約 2.0m より上部の堆積土がほぼ削平されたため、平面で確認はできなかった。基本層 V 層上面の確認標高は約 2.6m と他の箇所より 0.2m 程高くなっており、高まりの東西には下面が起伏する基本層 IV 層の堆積が確認される。高まりの東側部分では、基本層 IV 層の耕作により基本層 V 層が巻き上げられ断片化している様子も観察されるため、IV 層水田跡の耕作に関連して基本層 V 層が疑似畦畔状に残されたものである可能性も考えられる。

【SR13 自然流路跡】

調査区のほぼ中央部分に調査区を南北方向に貫く方向で確認された自然流路跡で、上端幅約 3.8m、下端幅約 1.4m、層厚約 0.4m である。b 層 (洪水堆積層) を河床面とする。堆積土は 1 層で、やや粘性の高いシルトであり水流の



第25表 本調査区2-5 基本土層注記表

遺構名	層位	土色	土性	備考
基本層は第21表に同じ				
SD10	1	2.5Y2/1 (黒色)	シルト	5Y6/2 (灰オリーブ色) のシルトを互層状に含む。
	2	2.5Y5/1 (黄灰色)	砂質シルト	層下部に 5Y6/2 (灰オリーブ色) のシルト質砂をブロック状にやや乱れた形で含む。部分的にφ1mmの砂を多量に含む。
SD08a	1	10YR5/1 (褐灰色)	シルト	10YR5/3 (にぶい黄褐色) の粘土質シルトをブロック状に含む。
	2	10YR4/2 (灰黄褐色)	粘土質シルト	10YR5/3 (にぶい黄褐色) の粘土質シルトを多量含む。酸化鉄斑紋状。
SD08b	1	10YR3/1 (黒褐色)	粘土質シルト	10YR4/2 (灰黄褐色) 粘土質シルトを含む。酸化鉄斑紋状。
	2	10YR4/2 (灰黄褐色)	シルト質粘土	10YR5/2 (灰黄褐色) 粘土質シルトをブロック状に多量含む。酸化鉄斑紋状。

第48図 本調査区2-5 平面図 (1/120)・断面図 (1/60) (折込)

強弱変化の影響を受けずに堆積したものと考えられる。遺物は弥生土器の小破片がわずかに出土した。

【SD08a・b 溝跡】

調査区の東側、基本層Ⅲ層の下位で確認された。上端幅約 10.5m、下端幅約 3.5m、深さ約 1.9m の大型の溝跡で、断面形は逆台形状を呈する。確認できた堆積土は大別 2 層細別 6 層で、掘り直しを伴った溝跡 2 条が重複していると考えられる。溝跡の立ち上がりを構成する堆積土中には基本層Ⅳ層が混入し、平面における確認が限られており詳細は不明である。平面的な位置と遺構の規模から、第 1 次調査で確認されている SD30 溝跡の南側延長部分である可能性が高いと考えられる。

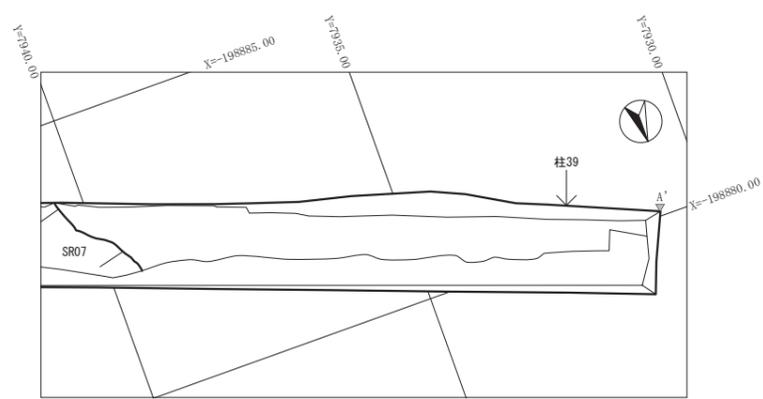
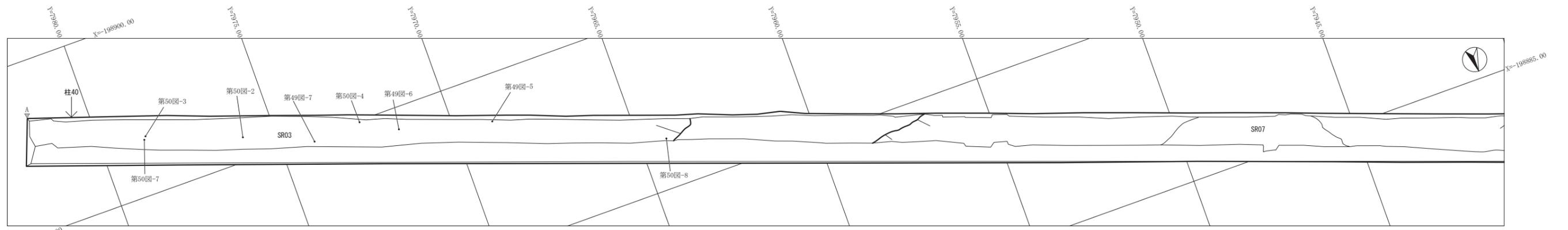
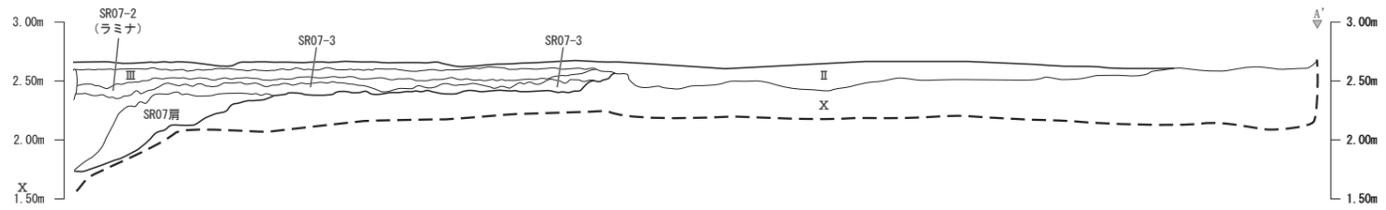
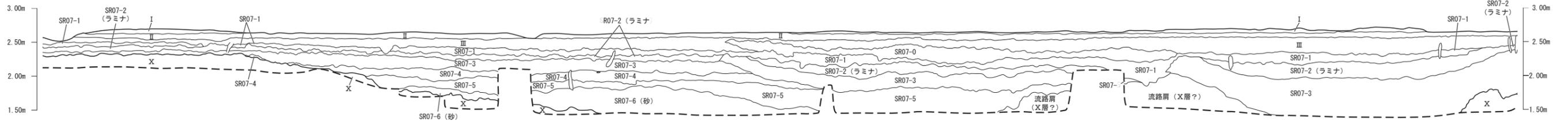
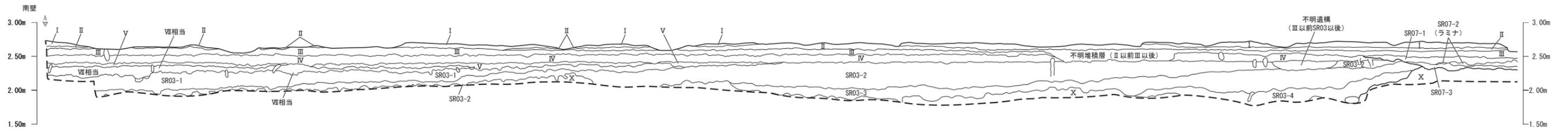
堆積土中からは土器・石器が出土しており、このうち石器を第 51 図に図示した。

【SD10 溝跡】

断面で SD08 の西側、基本層Ⅱ層の下位で確認した。Ⅲ層より新しい。用水路で大半が削平されており、平面で確認はできなかったが、北側及び南側の調査区外に直線的に延びると考えられる。断面で確認した確認面の標高は約 2.5m で、上端幅は約 1.2m、下端幅は約 0.4m で深さは最大で約 0.7m である。断面形は逆台形状を呈し、堆積土は 2 層である。遺物は出土していない。

【SR03 自然流路跡】

高田 B 遺跡第 1 次調査で確認された SR01 自然流路跡は、本調査区 2-5 に流路最深部の南側延長部分が存在する可能性が高いと考えられる。本調査区 2-5 の調査における掘下げ底面の標高は、約 0.6～0.7m に留まったが、過去の調査で確認された SR01 河床面の標高は深い所では約 -1.0m にまで達しており、その最深部である SR01-13 層が弥生時代の堆積土とされている。このため本調査区 2-5 の範囲で確認することができた SR03 の堆積土は、標高で比較した場合には第 1 次調査 SR01-8・9 層に相当すると考えられ、流路跡の上層の調査にとどまったため遺物の出土数は第 1 次調査に比べて非常に少なく、弥生土器の破片や石器が出土した。

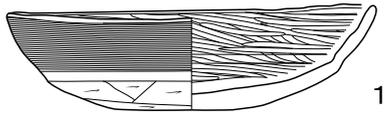


第47図 本調査区2-4 平面図(1/120)・断面図(1/60)(折込)

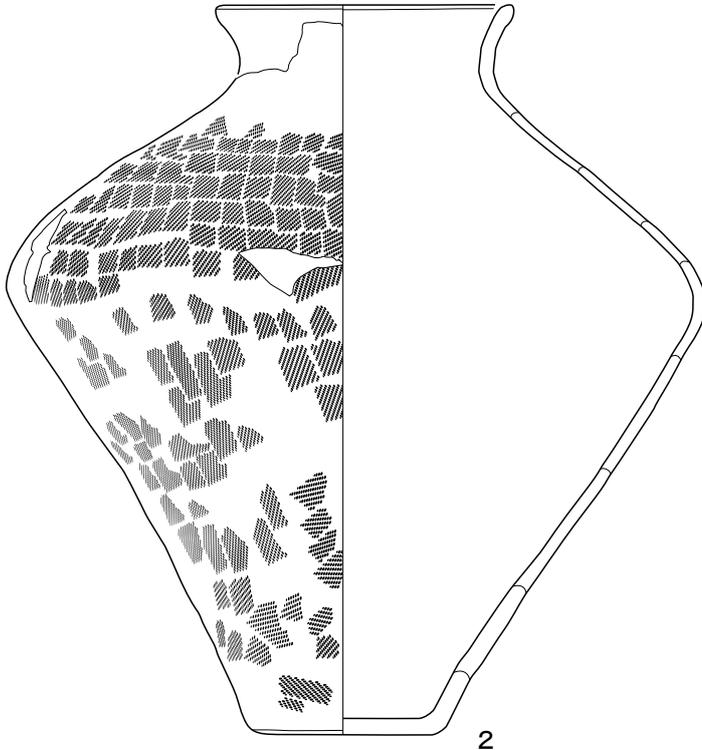
第24表 本調査区2-4 基本土層注記表

遺構名	層位	土色	土性	備考
SR03	1	10YR3/3(暗褐色)	シルト	層の上面は基本層VII層相当の耕作に伴い著しく起伏している。
	2	10YR4/3(にぶい黄褐色)	シルト	植物擾乱の影響により酸化鉄を斑紋状多く含む。
	3	10YR4/4(褐色)	砂質シルト～シルト	層の上半に酸化鉄斑紋状顕著。
	4	2.5Y5/4(黄褐色)	砂～砂質シルト	層の下半に基本層X層をブロック状にやや乱れた形で含む。
SR07	1	2.5Y6/4(黄灰色)	シルト	2.5Y6/4(にぶい黄色)のシルトを部分的に下層から巻き上げる。
	2	2.5Y6/1(黄灰色)	シルト	2.5Y6/4(にぶい黄色)のシルトとやや乱れたラミナ状を呈する。酸化鉄斑紋状。層下部では色調が暗くなる。
	3	2.5Y3/1(黒褐色)	シルト～粘土質シルト	層下半で基本層X層のブロックを部分的に含む。
	4	2.5Y3/1(黒褐色)	シルト～砂質シルト	Φ1cmの風化礫を少量含む。
	5	2.5Y4/1(黄灰色)	シルト～粘土質シルト	層下半でSR07-6層をブロック状に含む。
	6	2.5Y5/2(暗黄灰色)	砂	2.5Y3/1(黒褐色)の粘土質シルトを含む。

本2-2

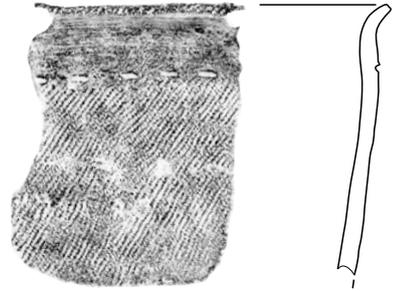


1

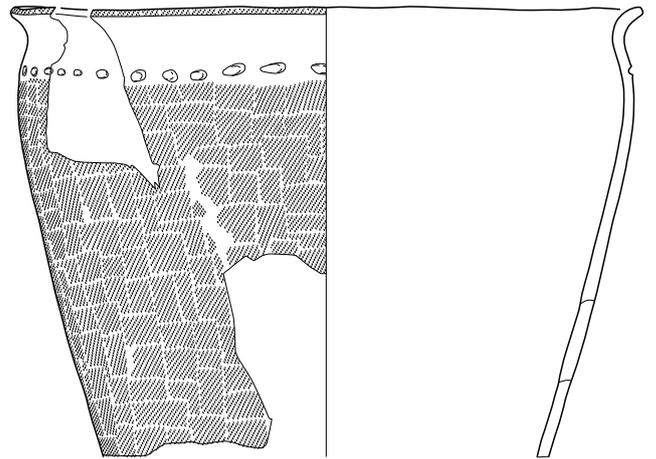


2

0 1 : 3 10cm

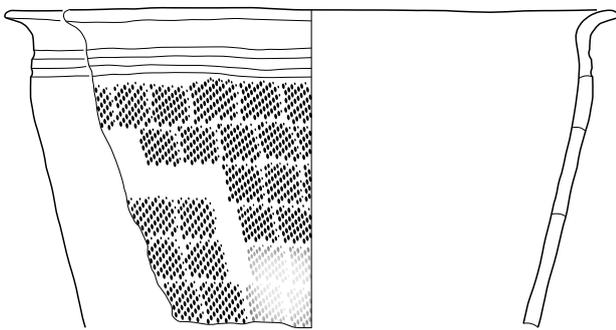


3

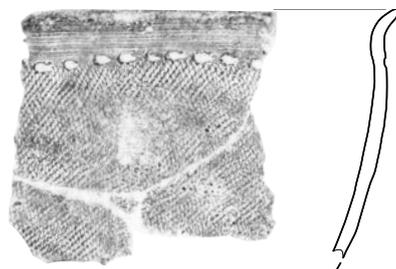


4

本2-4

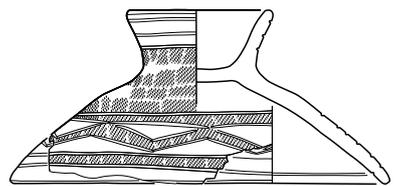


5



6

0 1 : 3 10cm



7

第49図 本調査区2-2・4出土遺物 弥生土器

第 26 表 本調査区 2- 2・4 出土遺物観察表 弥生土器

図版番号	写真番号	登録番号	遺構 / 層位	種別	器種	部位	口径	底径	器高	地文 / 施文	外面調整 / 内面調整	備考
49- 1	39- 1	C001	本 2-2/ SD07	非ロクロ 土師器	坏	ほぼ完形	14.4	4.8	4.2	-	口縁から体部ヨコナ デ・底部ヘラケズリ / 横位ミガキ・黒色処理	体部下端に段
49- 2	23- 1	B008	本 2-2/ SR01 河床	弥生土器	壺	口縁～底 部	11.7	7.0	32.0	L4R(肩部から胴部下 端) / 摩耗	ミガキ、胴部下端ケズ リ / ミガキ	内外面にスス・コゲ付着
49- 3	22- 8	B009	本 2-2/ SR01 河床	弥生土器	甕	口縁～胴 部	-	-	10.7	L3R(口唇・胴部) / 頸部下位に刺突文	頸部ナデ / ミガキ	外面にスス付着
49- 4	23- 2	B010	本 2-2/ SR01 河床	弥生土器	甕	口縁～底 部	-	-	17.9	L3R(口唇・胴部) / 頸部下位に刺突文	頸部ナデ / 内部摩耗顕 著。一部にミガキが残 る。	外面にスス付着
49- 5	24- 2	B013	本 2-4/ SR03	弥生土器	甕	口縁～胴 部	(24.2)	-	12.6	L3R(胴部) / 太沈線 2 条	摩耗 / 摩耗	
49- 6	24- 1	B012	本 2-4/ SR03/ 砂 1 層	弥生土器	蓋	口縁～底 部	-	-	9.7	L3R(胴部) / 列点文	ナデ / 摩耗	
49- 7	23- 3	B011	本 2-4/ SR03/ 黒 2 層	弥生土器	甕	ほぼ完形	(つま み)5.8	15.0	7.0	L4R(つまみ部～体部) / 沈線、層波文・磨消縄 文、内面に沈線 1 条	ナデ・ミガキ / ミガキ	

本調査区 2 出土の弥生土器

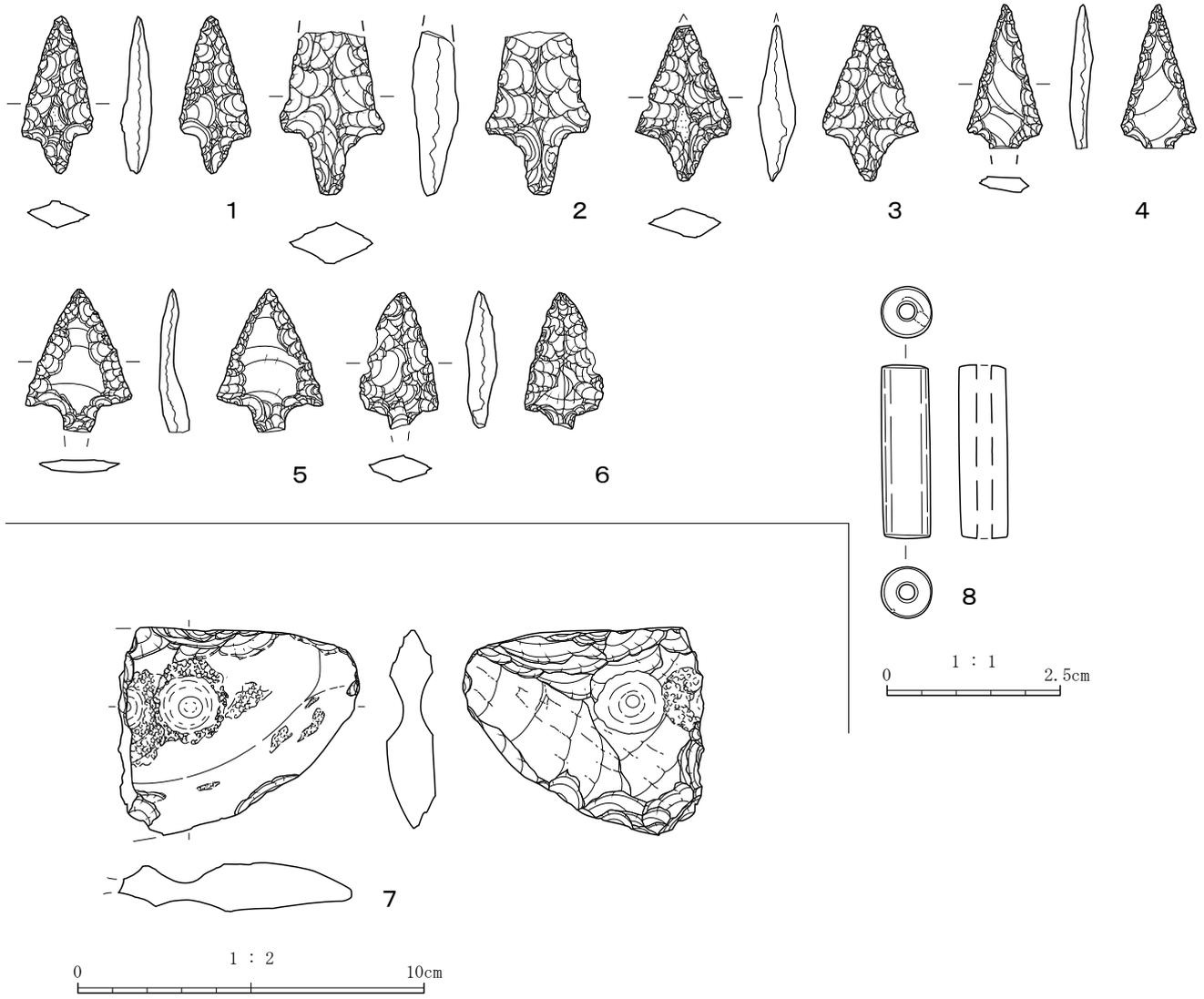
第 49 図 1～4 は本調査区 2- 2 から出土した土師器と弥生土器である。1 は SD07 から出土した丸底の土師器坏で、内面は黒色処理される。体部と底部の境に段を持ち、底部はケズリ調整される。内面はミガキが施される。2～4 は SR01 の河床面で出土した弥生土器である。2 は壺で、口縁の一部を欠くが概ね全体の形状が把握できる。底部から胴部の張り出しに向かい直線的に立ち上がる。胴部はくの字形に強く屈曲し、口縁はやや外反する。外面は胴部から頸部下位まで地文を施したのち、底部から 2 cm 程の立ち上がり部をケズリ調整し、ヘラ状の工具痕が明瞭に残る。口縁から頸部はミガキ調整される。内面は、胴部は縦方向及び斜め方向にケズリ調整され、口縁付近はミガキ調整される。底部に木葉痕が残る。3 は甕口縁から胴部の破片である。口縁は短く外反する。口縁部と体部との境はナデ調整がされ、胴部の地文との境に刺突による列点文が施される。内面は全面にやや粗い横位のミガキ調整がされる。4 は甕口縁から胴部である。口縁は外反し、胴部上位にややふくらみを持つ。口縁部と胴部との境にナデ調整される。外面には地文の前に縦位のハケメ調整が施される。胴部の地文との境に刺突による列点文が施される。内面は口縁から胴部にかけて横位にミガキ調整されるが、残存部のほとんどが摩耗している。

第 49 図 5～7 は本調査区 2- 4 の SR03 から出土した弥生土器である。5 は甕の口縁から胴部である。口縁は強く外反し、胴部の張り出しからやや直線的に下位に向けて窄む。内外面ともに著しく摩耗しており明瞭な調整の痕跡は残っていないが、外面には積み上げ痕が残る。体部の地文との境に太さ 3 mm 前後の浅い 2 条の並行沈線が施される。6 は甕の口縁から胴部の破片である。口縁は短く外反する。口縁部と胴部との境にナデ調整がされているが、内外面ともに摩耗が著しく明瞭な調整の痕跡は残っていない。胴部の地文との境に刺突による列点文が施される。7 は蓋である。つまみ部は高さ 2.3 cm でほぼ直線的に外反して立ち上がり、体部は若干丸みを帯びる。地文はつまみ部上半と口縁端部を除きほぼ全面に施されている。つまみ部には 3 条の沈線を施し、括れから体部にかけての地文範囲を区画している。体部下半には磨消縄文と層波文が施される。つまみ内部の調整は摩耗により判然としない。体部内面は粗いミガキで調整され、口縁内部に沈線が 1 条巡る。

本調査区 2 出土の石器

第 50～52 図は本調査区 2 で出土した石器である。本調査区 2 では総計 60 点の石器が出土し、そのうち 14 点を図示した。調査範囲内では広範囲に自然流路の堆積土が広がっていたため、出土遺物の多くは流路岸での作業の為に、あるいは堆積物と共に流れ込んだ可能性が考えられる。出土遺物の器種組成は、比較的小形の打製石器やその素材剥片が全体のおよそ 2/3 を占めており、石皿類や敲打具類が残りのおよそ 1/3 となっている。石材組成で顕著に見られるのは流紋岩で、全体の約 1/3 強に達している。本石材は石鏃や剥片類との関係性を強く読み取ることが出来、また剥片類には自然面が観察されるものが多い。

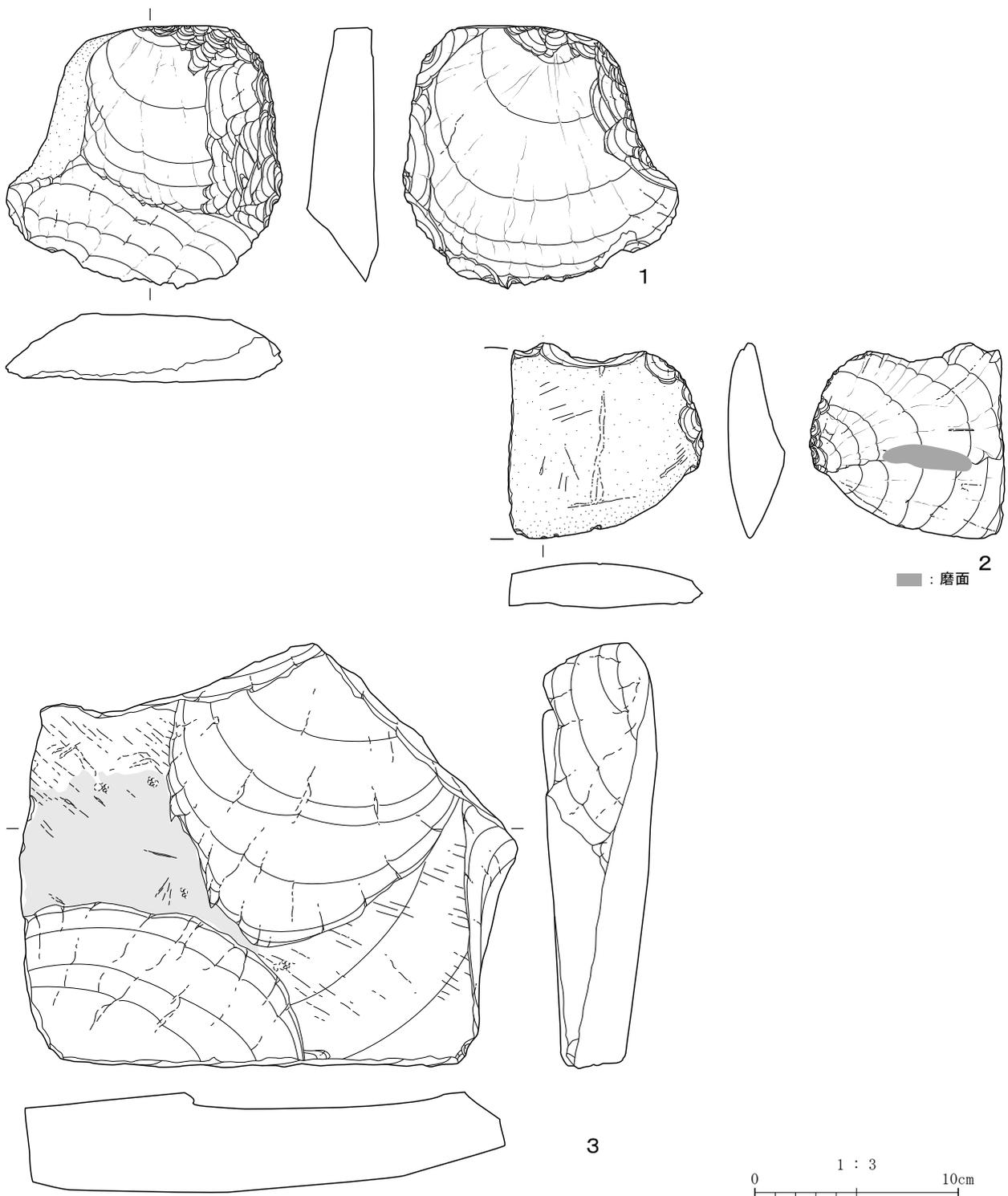
第50図1～6は石鏃である。いずれも比較的小形の有茎石鏃でカエシ部分の発達はあまり顕著ではない。1～3・6は横断面形が菱形を呈する形に整えられており、細部加工も器体中央部分まで深く入り込んでいる。1・3の表面の一部には自然面が一部残されている。2は上半部を欠損しているが、推測される形状は他の5点とはやや異った形態であったと考えられる。4～6は横断面形が薄手の板状を呈するもので、いずれも茎部を欠損している。それぞれ表裏両面に素材剥片の剥離面が大きく残されており、細部加工は周縁部分に限定されている。7は石砲丁の未完成品



第27表 本調査区2 出土遺物観察表 (3)

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	器種	石材 / 素材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
50- 1	40- 7	K005	本 2-3/ IX 層上面	打製石器 石鏃	流紋岩	2.3	1.05	0.45	0.7	表面の中央部に原礫面が一部残る
50- 2	40- 8	K006	本 2-4/ SR03	打製石器 石鏃	流紋岩	(2.4)	1.5	0.7	(1.5)	上半部欠損。
50- 3	40- 9	K007	本 2-4/ SR03	打製石器 石鏃	鉄石英	(2.5)	1.4	0.5	(0.9)	先端部欠損。表面の中央部に原礫面が一部残る。
50-4	40-10	K008	本 2-4/ SR03	打製石器 石鏃	頁岩	(2.1)	1.1	0.35	0.5	茎部欠損。表裏面に素材剥片の剥離面を残す。
50-5	40-11	K009	本 2-5/	打製石器 石鏃	凝灰岩	(2.1)	1.6	0.45	(0.5)	茎部欠損。表裏面に素材剥片の剥離面を残す。
50-6	40-12	K010	本 2-5/ SD10	打製石器 石鏃	黒曜石	(2.0)	1.15	0.45	(0.7)	茎部、左側縁の一部を欠損。
50- 7	40-13	K011	本 2-4/ SR03	打製石器 石砲丁	片岩類	(7.0)	(6.0)	1.4	(75.5)	穿孔塗上の未完成品。敲打成形痕残る。
50- 8	40-14	K012	本 2-4/ SR03	石製品 管玉		2.5	0.7	0.7	2.3	内径 2.5 mm の孔が貫通する。

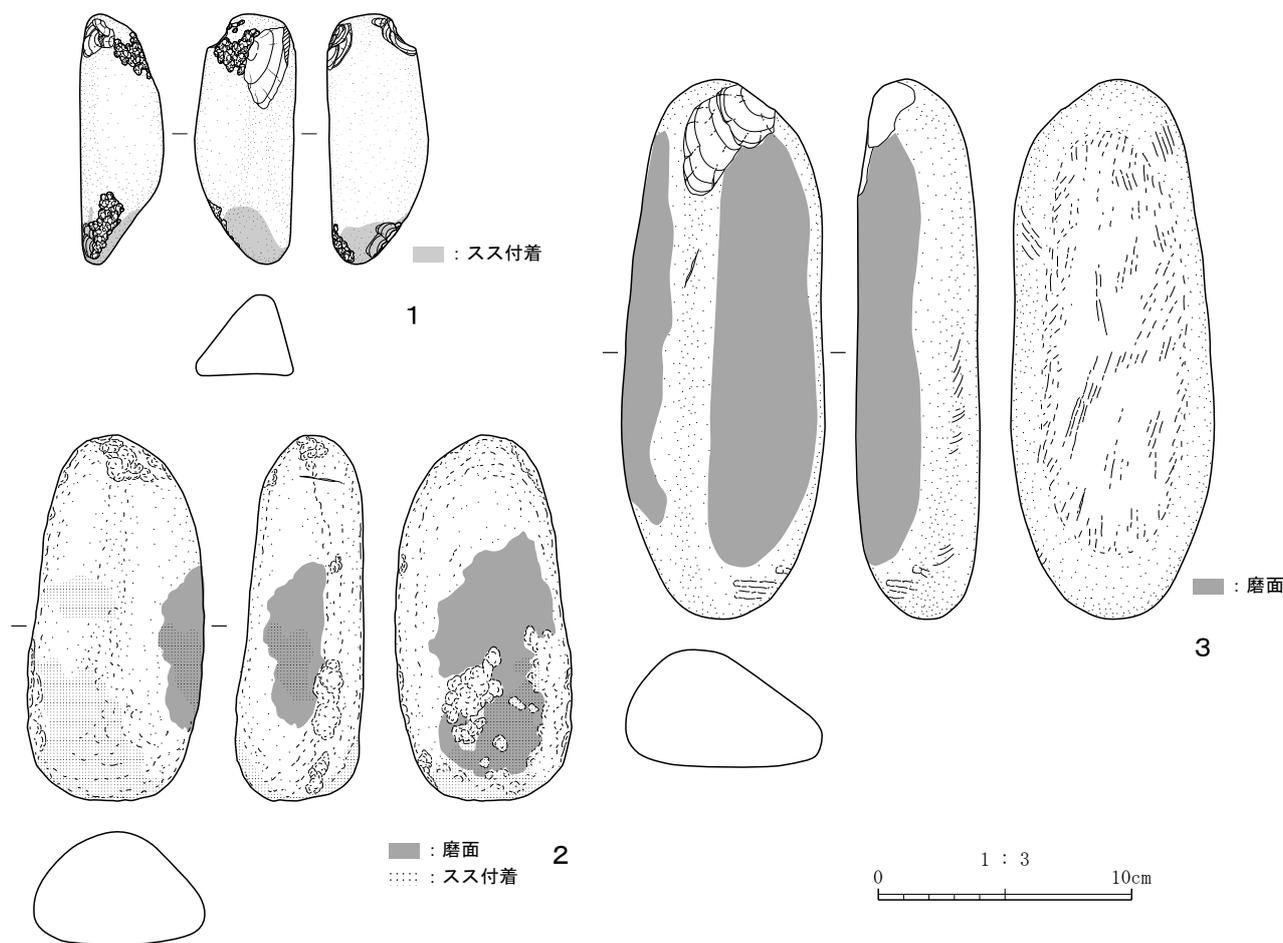
第50図 本調査区2 出土遺物 石器・石製品 (打製石器・石製品)



第 28 表 本調査区 2 出土遺物観察表 石器 (大型板状石器)

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	器種	石材 / 素材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
51- 1	41- 1	K013	本 2-5/ SR13	打製石器	凝灰岩質 安山岩	13. 2	13. 6	3. 6	736. 5	縁辺の一部に二次加工痕有り
51- 2	41- 2	K014	本 2-5/ SD08a	打製石器	凝灰岩質 安山岩	9. 7	9. 8	2. 35	281. 5	礫面の一部に磨面あり
51- 3	41- 3	K015	本 2-5/ VII 層	打製石器	凝灰岩質 安山岩	21. 3	24. 7	5. 8	3600	表面に顕著な磨面を有する。石皿転用か?

第 51 図 本調査区 2 出土遺物 石器 (大型板状石器)



第29表 本調査区2 出土遺物観察表 石器（敲打具類）

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	器種	石材 / 素材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	
52-1	41-4	K016	本 2-3/ VII層	敲打具類	ハンマー	砂岩	10.0	3.3	4.0	155.1	石器製作に使用するハンマーか
52-2	41-5	K017	本 2-2/ IX層	敲打具類	磨・敲	珪質 凝灰岩	14.5	7.1	5.1	661.5	
52-3	41-6	K018	本 2-3/ IV層	敲打具類	砥石	安山岩	21.5	8.1	8.1	1233.0	平坦で限定的な使用面が観察される

第52図 本調査区2 出土遺物 石器（敲打具類）

破片である。紐孔はいずれも貫通していないが表裏面にそれぞれ2箇所みられ、回転による穿孔も開始されている。紐孔の穿孔途上に敲打による窪み部形成を行った際に折損したと考えられ、折損後にも形状を整えるためか折損面に二次加工を施している。表面には敲打成形の痕跡が部分的に残る程度にまで全体が研磨されているが、裏面には研磨の痕跡はなく、成形に伴う敲打痕もほとんどみられない。8はSR03河床面で出土した管玉である。周辺からは第49図に図示した弥生土器も出土したが、他にまとまった遺物の出土もなかったため、埋納されたような遺物ではなく河床部に落ち込んだものと考えられる。全体的に滑らかに研磨され、2.5mmの孔が貫通している。

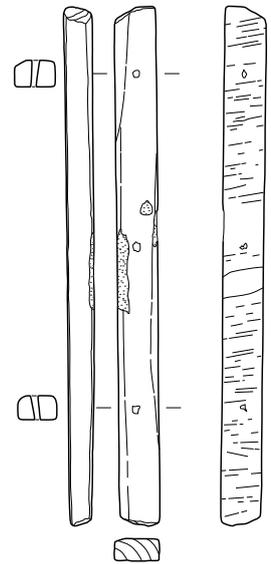
第51図1～3は大形板状石器に多用される、板状節理の傾向が強い凝灰岩質安山岩を石材とする剥片類で、大形板状石器の破片を転用したものや他の器種から大形板状石器へ転用する事を意図したと考えられるものが認められる。1は表面の左側に自然面が部分的に残存しており、表面側から裏面側に向け形状を整えるためとみられる二次加工を連続的に施している。また右側縁には裏面から表面側に向けて比較的細かい二次加工が施されており、全体として角がやや丸みを帯びた方形の平面形に整えられている。2は表面に自然面がそのまま残り、一部に磨痕と見られる顕著な磨滅面が部分的にみられる。裏面はバルブのあまり発達しない平面的な剥離面となっており、敲磨具として

第30表 本調査区2 石器組成表

	定形石器			小計	剥片類								小計	石皿類		小計	敲打具類				小計	総計
	石鏃	石庖丁	管玉		RF	UF	碎片	残核	石庖丁素材	大型板状石器	調整剥片	剥片		石皿	台石		ハンマー	敲	複合	磨・敲		
流紋岩	3			3	1		4	2			1	10	18					1			1	22
鉄石英	1			1																		1
玉髓							1						1									1
黒曜石	1			1			1						1									2
珪質頁岩						1							1									1
頁岩	1			1							1	1										2
硬質泥岩											1	1										1
珪質凝灰岩																				1	1	1
凝灰岩	1			1						1		1		1	1	2					3	6
凝灰岩質安山岩											8	8								1	1	9
安山岩													1	1			6	1	1		8	9
石英斑岩																		1			1	1
砂岩																		1			1	1
片岩類		1		1					1			1										2
(空白)			1	1																		1
総計	7	1	1	9	1	1	6	2	1	8	2	12	33	1	1	2	2	10	1	3	16	60

の使用の途上に、節理割れに近い偶発的な剥離によって生じた剥片を素材としていると考えられる。右側縁には剥離面側からの二次加工が施されており、全体形状がだまかに整えられている。3の表面には剥離面に先行する顕著な磨面と部分的な敲打痕が観察される。石皿類として使用されていたものが欠損したため、再利用を企図して二次加工を施したものと考えられる。転用後の器種は不明である。

第52図1～3はいずれも基本層中より出土した敲打具類である。1は横断面形がやや丸みを帯びた三角形状を呈しており、両端部に加えて三角形の稜上を中心に敲打痕と敲打に伴って生じたと考えられる剥離面がみられる。敲打の使用部位の選択傾向から対象物との接触面を小さくするという意図を読み取ることが出来、石器製作に用いられたハンマーであったと考えられる。2はやや軟質の石材を素材としており、特に下端部を中心に弱い敲打痕が観察される。また中央部分には比較的発達した磨面とそれより新しい敲打痕とが観察され、下半部にはスス状の黒色物が付着している。3は横断面形が角が丸くなった二等辺三角形状を呈しており、使用痕は稜上ではなく稜と稜を繋ぐ平坦面上に磨面が観察されるものである。磨面がやや限定的で平坦である事、遺物が大きく重量もある事などから、比較的硬度のある対象物を研ぐための置き砥石として使用されていた可能性が考えられる。



本調査区2 出土の石器

第53図は本調査区2-5のSD08aで出土した木製品である。部材の破片で、表面の角は面取りされてやや丸みを帯びた稜線を持つ。横断面は上が丸みを帯びた長方形状で、裏面はノコギリ引きの痕跡と思われる平行線状の加工痕が残る。器体中央部を中心としてほぼ等間隔に3ヶ所くぎ穴が確認される。加工の状況からノコギリ引きの面を何かに打ち付けて用いられた飾り状の部材と考えられるが詳細は不明である。

第31表 本調査区2 出土遺物観察表(木製品)

図番号	写真番号	登録番号	種別	樹種	木取	遺構・出土層	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	備考
53-1	53-8	L018	部材	ヒノキ	分割材	本2-5 SR	21.1	1.7	1.0	

第53図 本調査区2 出土遺物(木製品)

3. 本調査区 3

遺跡範囲の北西側にあたり、日辺排水路西側における高田 B 遺跡第 1 次調査の北側に位置する。ほぼ東西方向に本調査区 3-1～3の3カ所の調査区を設けた。周辺に比べ若干標高の高い部分であったと考えられ、基本層 X 層の確認される標高は約 2.7～2.8m 前後である。現地表面の標高は約 3.0～3.1m であり、現在の水田耕作による削平を免れた堆積土が部分的に残存している状況であった。

本調査区 3-2 の中央部付近から 3-3 の西部にかけての約 40m の範囲内に、最深部の標高約 1.9～2.0m に達する自然流路跡を 1 条 (SR12: 本調査区 3-2・本調査区 3-3 で確認) と、調査範囲内をほぼ南北方向に横断する溝跡を 2 条 (SD11: 本調査区 3-2、SD12: 本調査区 3-3 で確認) を確認した。

調査範囲の南側の第 1 次調査では該当する自然流路は確認されておらず、今次調査の調査範囲内でも自然流路跡は広範囲にわたり平面では確認はできなかった。本調査区 3-2 の東西では上位の水田耕作層の標高に段差がある。これは調査範囲東側で確認された自然流路跡の影響と考えられる。



第 54 図 本調査区 3 位置図 (1:8000)

本調査区 3-1 (第 55 図・第 32 表)

本調査区 3-1 では、用水路により西側で標高約 2.5～2.6m まで削平された。平面で確認した遺構はなく、断面では、調査区の中央部で基本層 IX 層及び VII 層の落ち込みを確認している。この範囲では VI 層と VII 層の間で灰白色シルト (a 層) を確認したが、ほかの範囲では確認していない。

本調査区 3-2 (第 56 図・第 32 表)

本調査区 3-2 では、用水路により西側で標高約 2.6m まで削平された。平面では、調査区中央付近で SD11 溝跡を、中央から調査区東端にかけて SR12 自然流路跡を確認した。断面では、調査区の西半で X 層の標高が 2.8m ほどで残存し、基本層は V 層が全体に確認される。V 層下面の起伏は著しく中央部では標高約 2.6～2.7m まで及ぶ。このため V 層に削平されずに残った VI 層、IX 層が部分的に残存する状況である。中央部より東側では基本層 IX 層を削り込む SD11 と、SR12 を確認したが、SR12 範囲では基本層 V 層以下、灰白色シルトの小ブロックを少量混入する VI 層と下位の VII 層を確認した。SR12 は本調査区内で東肩が確認されていない。東側の本調査区 3-3 で確認された自然流路跡に、堆積範囲の広がりや堆積物に類似性がみられることから、連続する流路であった可能性が高いと考えられる。

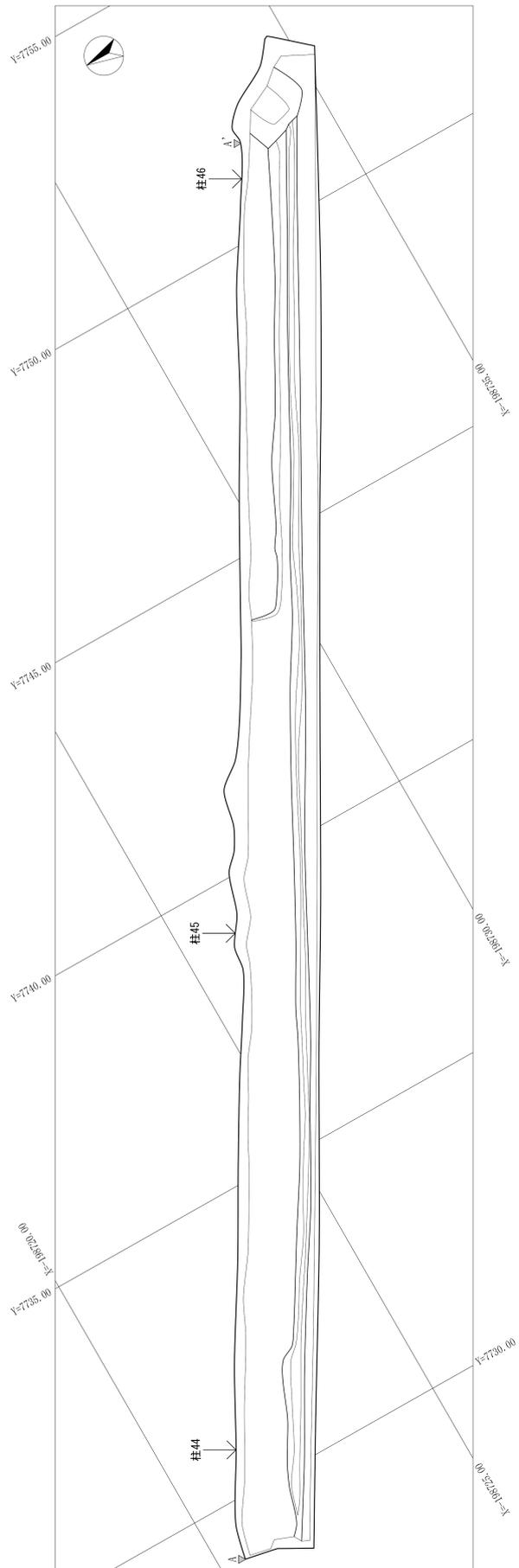
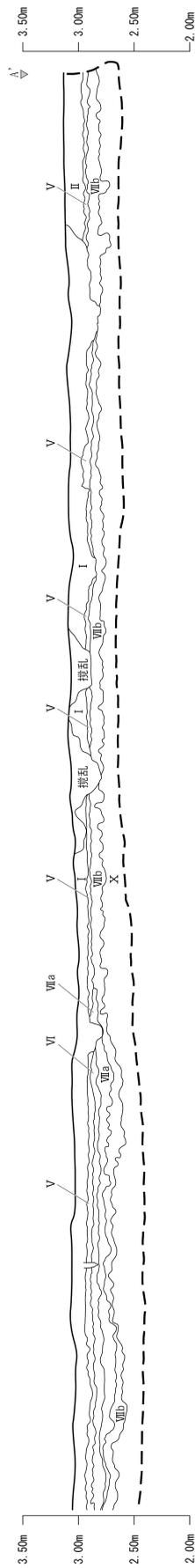
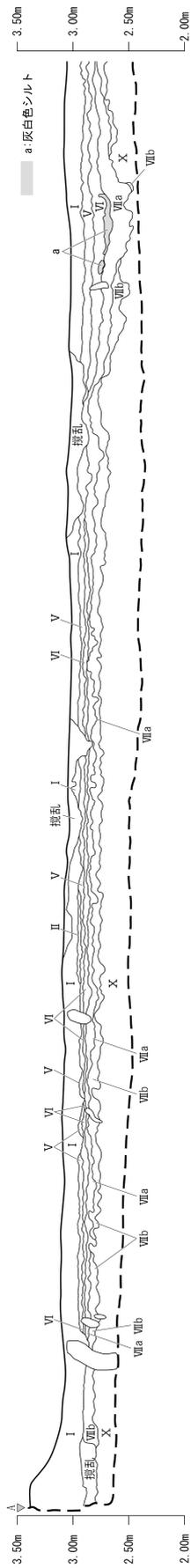
【SD11 溝跡】

標高 2.6m で確認した。残存する幅は 0.4m～0.5m ほどで、深さは 0.1m ある。確認長は 1.5m ほどで調査範囲を東から西に斜行する。堆積土は単層で、IX 層に類似し砂を多量に含む。

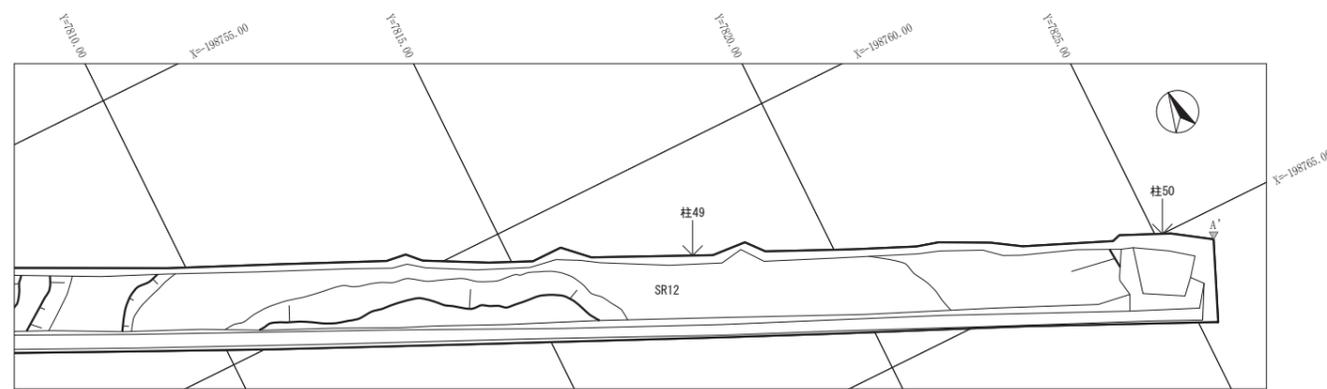
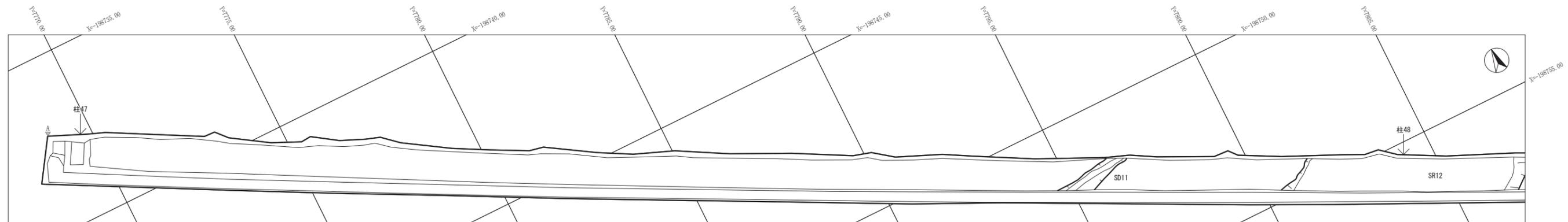
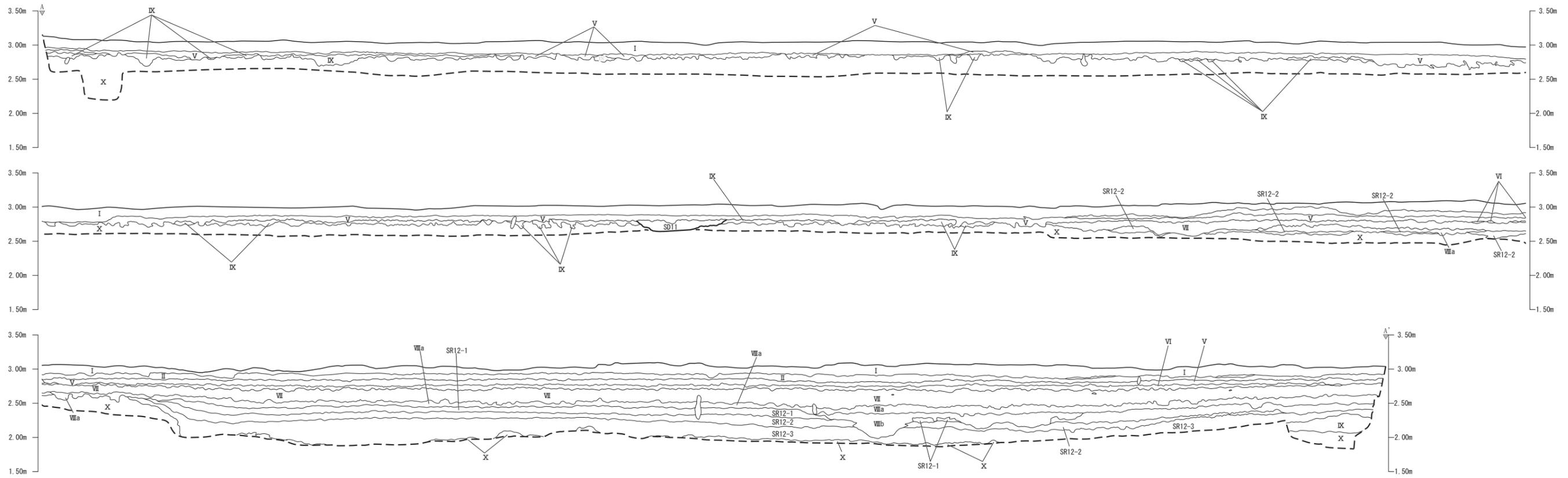
【SR12 自然流路跡】

本調査区 3-2 の中央部から東半部にかけて、基本層 X 層を削り込んで流れる堆積物のまとまりを確認した。最深部の標高は約 1.9m で概ね 1.0m の層厚で確認されたこの堆積土は、調査範囲外の南側から調査区内へ入り込み、調査区内で湾曲し再び調査範囲外南側へと延びている状況が確認されている (SR12 自然流路跡)。また本調査区 3-3 の西端約 6m の範囲では、調査範囲外南側から調査区内へ入り込み、調査範囲外北側へと延びていると見られる堆積物のまとまりを確認した。こちらの最深部の標高も約 2.0m で概ね 1m 弱の層厚であった。堆積土は 3 層を確認した。SR12-1 層の上面は VIII 層相当と考えられ、耕作により層下面が著しく起伏する (VIII a 層)。また耕作土の下位には、SR12-1 層のラミナ状堆積を一部攪乱する層が確認され、流路跡など水田に伴う工作物の可能性があるが、平面では確認はできなかった (VIII b 層)。SR12-1・2 層はラミナ状堆積であるが、SR12-1 層はシルト質粘土を主体とし、SR12-2 層は砂を主体とする。

本調査区 3-3 では、調査区西端の断面で上位に SD12 溝跡と考えられるグライ化した堆積土 2 層の下位に SR12-3 層とほぼ同質の堆積土を確認し、これを SR12 の範囲とした。両調査区の SR12 から弥生土器の小破片がやや多く出土した。



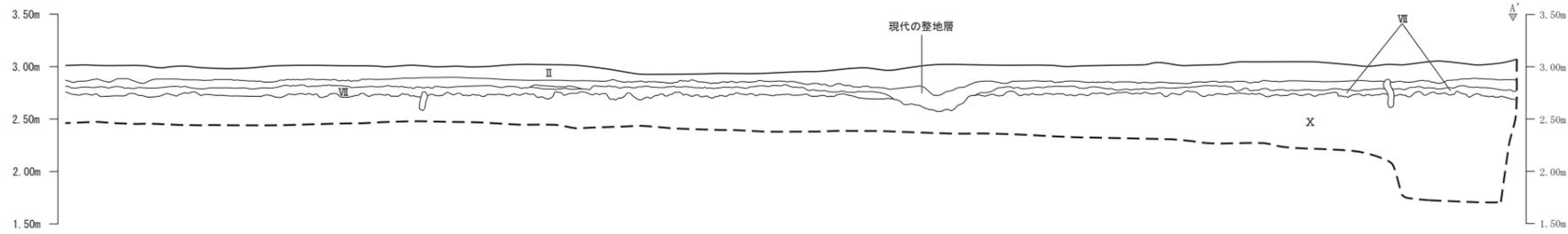
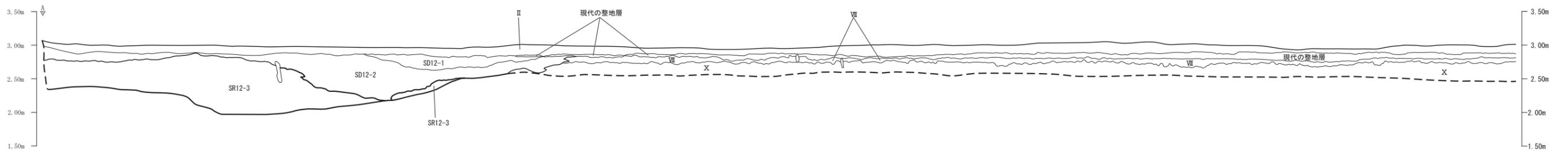
第55図 本調査区3-1 X層上面平面図(1/120)・断面図(1/60)



第56図 本調査区3-2 平面図(1/120)・断面図(1/60)

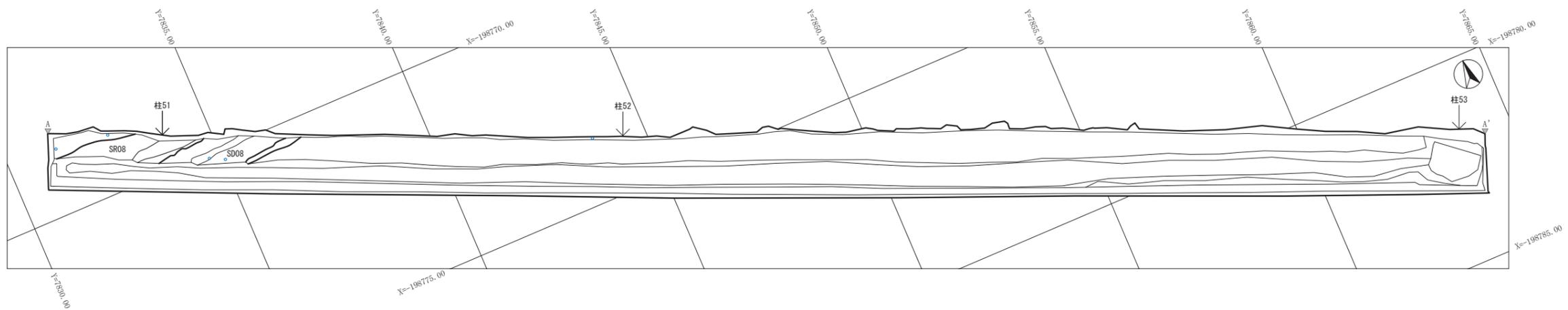
第32表 本調査区3-1・2 基本土層注記表

遺構名	層位	土色	土性	備考
本調査区3 共通	I	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質粘土 現代の耕作土、盛土
	II	10YR5/1	褐灰色	シルト質粘土 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。砂をやや多く含む。マンガン集積。
	V	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトをブロック状に含む。マンガン粒状に集積。
	VI	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。層下に灰白色シルトを小ブロック状または粒状に含む箇所がある。
	a	2.5Y8/1	灰白色	シルト 灰白色シルト層。
	VII a	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。VI層との境に灰白色シルトをブロック状にやや多量、または層状に含む箇所がある。
	VII b	5Y6/4	オリーブ黄	粘土質シルト 洪水堆積層。下に砂を多く含む。
	IX	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト 全体的に砂をやや多く含む。層中に砂の薄層お挟む箇所がある。酸化鉄斑紋状、層全体に集積。
	X	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト 酸化鉄斑紋状、層全体に集積。
	SD11	1	10YR4/2	灰黄褐色
SD12	1	10YR2/1	黒	粘土 層位は2.5Y5/2(暗灰黄色)粘土、2.5Y2/1(黒)粘土とのラミナ状。酸化鉄斑紋状、層全体に集積。
	2	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト 全体的に砂をやや多く含む。層中に砂の薄層お挟む箇所がある。酸化鉄斑紋状、層全体に集積。
	3	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。



第33表 本調査区3-3 基本土層注記表

遺構名	層位	土色	土性	備考
本調査区3 共通	I	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質粘土 現代の耕作土、盛土
	II	10YR5/1	褐灰色	シルト質粘土 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。砂をやや多く含む。マンガン集積。
	V	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトをブロック状に含む。マンガン粒状に集積。
	VI	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。層下に灰白色シルトを小ブロック状または粒状に含む箇所がある。
	a	2.5Y8/1	灰白色	シルト 灰白色シルト層。
	VII a	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。VI層との境に灰白色シルトをブロック状にやや多量、または層状に含む箇所がある。
	VII b	5Y6/4	オリーブ黄	粘土質シルト 洪水堆積層。下位に砂を多く含む。
	IX	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト 全体的に砂をやや多く含む、層中に砂の薄層お挟む箇所がある。酸化鉄斑紋状、層全体に集積。
	X	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト 酸化鉄斑紋状、層全体に集積。
	SD11	1	10YR4/2	灰黄褐色
SD12	1	10YR2/1	黒	粘土 層層位は2.5Y5/2(暗灰黄色)粘土、2.5Y2/1(黒)粘土とのラミナ状。酸化鉄斑紋状、層全体に集積。
	2	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト 全体的に砂をやや多く含む、層中に砂の薄層お挟む箇所がある。酸化鉄斑紋状、層全体に集積。
	3	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。



第57図 本調査区3-3 平面図(1/120)・断面図(1/60)

本調査区 3-3 (第 57 図・第 33 表)

本調査区 3-3 では、用水路により西側で標高約 2.5 ～ 2.6m までが削平された。平面では、調査区西端で SR12 自然流路跡を確認した。断面では、自然流路の影響を受ける調査区西端以外では、X 層の標高は 2.7m ほどである。基本層Ⅷ層以下は層の上位層の耕作に伴う影響で削平されⅧ層下で X 層が確認される。

SR12 自然流路跡

本調査区 3-2 で確認した SR12 と同一の自然流路跡と考えられる。SR12-3 層のみを確認した。

SD12 溝跡

SR12 自然流路跡の上層部分と基本層 X 層を削り込み、確認幅約 2.0m、確認面からの最大深度は約 0.7m である。SR12 自然流路跡の東肩に相当する部分を踏襲するような形で確認されたため、自然流路の埋没後にその窪み部分を利用して作られた溝跡と考えられる。堆積土中の出土遺物が少ないため時期は不明だが、断面では基本層Ⅷ層の堆積以降の溝跡と考えられる。

4. 本調査区 4

本調査区 4 は、周知の遺跡範囲の北東側にあたり、日辺堀の東側に位置する。東西方向に 180m ほどの範囲に、本調査区 4-1～8 の 8 カ所の調査区を設けた。本調査区 3 で基本層 X 層の確認される標高は約 2.7～2.8m だが、本調査区 4 では西側で標高 2.5～2.6m、東側で標高 2.3m と全体的に東に向け傾斜する。本調査区 4 では、溝跡 4 条と自然流路跡 3 条を確認した。



第 58 図 本調査区 4 位置図 (1:8000)

本調査区 4-1 (第 59 図、第 34 表)

本調査区 4-1 では、用水路により西側で標高約 2.5m まで削平されていた。平面では X 層上面で、調査区西端と中央で重複関係にある自然流路跡 (SR14・SR15) を確認した。また調査区東側では溝跡を 2 条 (SD14・SR15) 確認した。これらの遺構の新旧関係については、断面でも確認されており、本調査区 4-1 に流路状の遺構が集まり、そのもととなっているのは自然流路の痕跡であることがうかがわれる。しかし、当該調査区では基本層 III 層以下 IX 層までが確認されておらず、堆積状況から遺構の帰属年代は明瞭にわからず、遺物も出土していない。基本層 VI 層に含まれる灰白色シルトや、VII 層以下 IX 層に含まれる砂等も明瞭に確認される範囲がな無いため、概ねこれらの遺構は近世以降の流路跡と考えられる。なお、本調査区 8 で確認された自然流路跡や溝跡などは主軸方位から、おおむね本調査区 4-1 を通ると考えられ、これらの遺構との関連があると思われる。堆積土の状況から同一遺構と考えられる遺構については、本調査区 8 でまとめて記載する。

【SD14 溝跡】

標高 2.2m の X 層上面で検出した。確認幅は 1.8m ほどで、断面では 2.5m 以上の幅を確認している。確認面からの深さは 0.5m で、断面で確認できる深さは 0.86m である。確認長は 2.0m ほどで調査区を西から東に斜行する。堆積土は 4 層を確認したが、いずれの層もグライ化している。遺物は最下層から石皿、石核、剥片類などの石器が 9 点出土している。

【SD15 溝跡】

標高 2.1m の X 層上面で SD15b 溝跡を確認した。断面で、新段階 (SD15a)・旧段階 (SD15b) および SD14 との重複関係を確認した。確認面における SD15b の残存幅は 2.7m ほどで、確認面からの深さは 0.6m である。確認長は 2.0m ほどで調査範囲を西から東に斜行する。堆積土は 3 層を確認したが、遺物は出土していない。SD15a は SD15 埋没後の堆積土で SD15a-1～3 層を確認したが、SD15a-3 層は下位の SD15b-1・2 層と極めて類似する。また SD15a-1・2 層は SD14 の堆積土と類似しており、これらの遺構が埋没した過程にはあまり時期差がないものと考えられる。遺物は出土していない。

【SR14・SR15 自然流路跡】

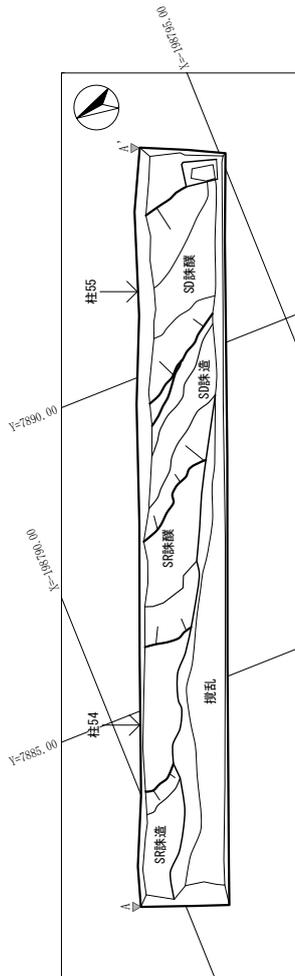
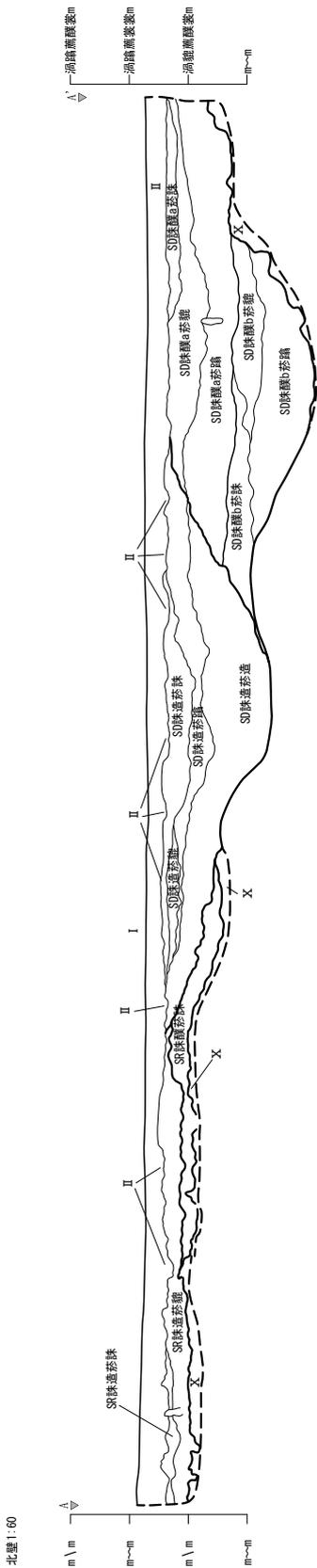
標高 2.5m の X 層上面で確認した。確認できた幅は東西で 1.6m で長さ 0.8m ほど、最深部の標高は約 2.4m である。調査区外の北西側から調査区内へ入り南側へ延びる状況を確認したが、方向の詳細は不明である。堆積土は 2 層確認した。SR15 は SD14 の西肩で確認した自然流路跡で、SR14 との重複関係は断面により SR14 より古いことを確認した。確認幅は東西で 3.0m、長さ 1.0m ほど、最深部の標高は約 2.2m である。調査範囲外南側へと延びているが、確認範囲が限られており方向の詳細については不明である。堆積土は 1 層で粘土質シルトである。

本調査区 4-2 (第 60 図、第 35 表)

本調査区 4-2 では、用水路により西側で標高約 2.4～2.5m まで削平された。調査範囲の現況は水田として使用されておらず、整地土が 0.3m 程度の厚さに敷きならされている。確認面は X 層中だが平面で確認された遺構は無い。断面では、調査区西側では整地土の下位に VIII 層を確認した。この範囲の X 層上面は標高 2.6m で一定であり、部分的に VIII 層の落ち込みが確認される。調査区中央付近では II 層下面が概ね 2.6～2.7m で平坦な面となっているが、II 層下位に III 層、VIII 層、IX 層が確認される。X 層上面はやや大きな起伏を繰り返しながら西に向かい傾斜し、東端の標高では 2.2m ほどである。

第34表 本調査区4-1 土層注記表

遺構名	層位	土色	土性	備考
本調査区4共通	I	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質粘土 現代の耕作土、盛土
	II	10YR5/1	褐灰色	シルト質粘土 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。砂をやや多く含む。マンガン集積。
SD14	1	2.5Y4/1	黄灰色	粘土質シルト 酸化鉄斑紋状に集積。
	2	2.5Y6/1	黄灰色	粘土質シルト 灰白色シルトをブロック状に含む。
	3	2.5Y5/2	暗灰黄色	粘土質シルト 酸化鉄斑紋状に集積。灰白色シルトをブロック状に含む。
	4	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂質シルト 酸化鉄斑紋状に集積。灰白色シルトをブロック状に含む。層下位に砂をラミナ状に含む。
SD15a	1	2.5Y6/3	にぶい黄色	粘土質シルト 酸化鉄が層全体に斑紋状に多く集積。
	2	2.5Y6/1	黄灰色	粘土質シルト 酸化鉄が層全体に斑紋状に多く集積。
	3	7.5Y5/1	灰	シルト質粘土 7.5Y6/2 灰オリブの粘土をブロック状に含む。
SD15b	1	7.5Y5/1	灰	粘土 7.5Y6/2 灰オリブの粘土を層下部に大ブロック状に含む。
	2	7.5Y5/1	灰	粘土 7.5Y6/2 灰オリブの粘土を層下部にやや多く含む。中粒砂を層全体にやや多く含む。層下部に酸化鉄が多く集積。
	3	10Y3/1	オリブ黒	粘土 10Y5/1 灰色のシルトを粒状に含む。中粒砂を層全体にやや多く含む。グライ化したφ1mmほどの粗粒砂がブロック状または層状に部分的に混入する。
SR14	1	10YR4/1	褐灰色	シルト質粘土 10YR4/3 にぶい黄褐色の粘土質シルトを小ブロック状に含む。
	2	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土 10YR2/1 黒粘土質シルトをブロック状に含む。酸化鉄斑紋状に層全体に集積。
SR15	1	10YR4/1	褐灰色	シルト質粘土 10YR4/3 にぶい黄褐色の粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。酸化鉄斑紋状に層全体に集積。



第59図 本調査区4-1 X層上面平面図(1/120)・断面図(1/60)

本調査区4-3(第61・66図、第35・38表)

本調査区4-3では、用水路により西側で標高約2.4～2.5mまでが削平された。確認面はX層中で平面で確認された遺構は無い。断面では、本調査区4-2東端で標高2.3mであるX層上面が、本調査区4-3西端で同程度の標高であることを確認した。X層は東側に向かい徐々に標高が高くなり、東端では2.5m程度である。一方、水田耕作土は旧耕作土II層の下位にIII・VIII・IX層が確認される。III層の下面はおおむね2.5m程度で平坦であるが、下位のVIII層とIX層は層厚にばらつきがあり、ことにX層の標高が低い西端では、IX層の層厚が厚い傾向にある。

本調査区4-4(第62図、第35表)

本調査区4-4では、用水路により西側で標高約2.4～2.5mまでが削平された。確認面はX層上面で平面で確認された遺構は無い。断面ではII層下面が西側で標高2.4m、東側で標高2.5mでやや東側に傾斜する。X層上面は調査区の西端では標高2.5m程度で、調査区の東側に向かい徐々に標高が低くなり東端では標高2.2m程度である。II層の下位には調査区西側ではVI層が残存し、西側ではVI層以下にa層(灰白色シルト層)を挟んでVII層、IX層が残存する。IX層中から弥生土器の破片が出土した。

本調査区4-5(第63・65図、第36～39表)

本調査区4-5では、用水路により西側で標高約2.4～2.5mまでが削平された。VII層上面で第1次調査で確認されたSR2に相当すると考えられるSR06自然流路跡の落ち込み範囲を確認した。断面では西から徐々に傾斜するX層上面が調査区西端で標高2.2m、自然流路跡の河床面では標高1.0m、東側では標高2.3mほどで確認された。

【SR06自然流路跡】

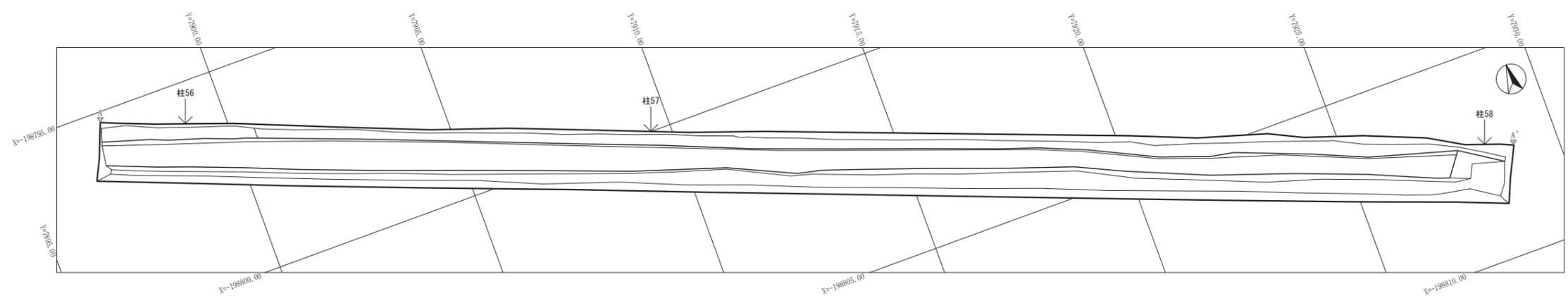
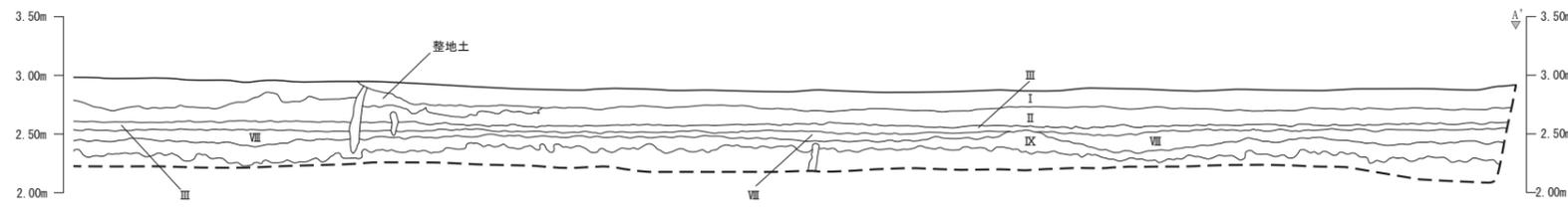
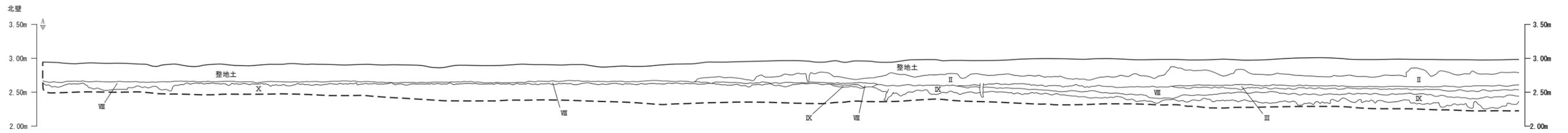
SR06自然流路跡はX層を大きく削り込みながら、南西及び北東の調査区外に延びる。平面の確認では、標高2.3mのVIIa層上面でV層の落ち込みやa層(灰白色シルト)範囲を確認した。この面での検出最大幅は約14.0mに及ぶ。自然流路跡の落ち込み範囲にはVII層の厚い堆積が確認され、VIIa・VIIb層に細分される。VI層との間には灰白色シルトを厚さ10cm程度の層状に確認される。標高2.0mで自然流路跡の堆積土を確認したが、流路幅は約9.0mほどでVIIb層下位には河川内の堆積土を7層確認した。これらの堆積土は流路の方向により2時期に細分され、上位の自然流路跡をSR06aとし下位の自然流路跡をSR06bとした。SR06a-1層は層厚3cm程度のシルト質粘土で、下位にSR06a-2層がラミナ状に堆積する。このラミナ状堆積の下位にはSR06b-1層の砂が層厚3～5cmで堆積している。この砂層の下位にはSR06b-2層の砂を疎らに含む粘土が5～10cm厚で堆積し、さらに河床面直上にはSR06b-3層の砂を多く含む粘土が層厚10～15cmで堆積する。この層からは弓状木製品や石器をはじめ、弥生土器のやや大型の破片が出土している。また東側立ち上がり部分にも弥生土器の破片が集中して出土した。河床面の標高は1.0mほどである。両流路跡ともに東肩を確認したが、調査区西側では基本層IX層の下面が起伏する範囲にやや多く弥生土器の破片がまとまって出土しており、土質はSR06b-2層と類似することから、SR06b自然流路跡の一部と考えられる。隣接する本調査区4-7の西端でも類似する堆積土中に遺物が集中する状況を確認しており、SR06自然流路跡は蛇行しながら本調査区4-6・7をかすめるものと考えられる。

本調査区4-6(第64・66図、第36・38表)

本調査区4-6では、用水路により西側で標高約2.4～2.5mまでが削平された。平面では、X層上面ではSR06a自然流路跡の蛇行範囲が当該調査区の西側をかすめる範囲で弥生土器の破片がまとまって出土したほか、第1次調査の「SD30」と同一遺構と考えられる規模が大きい溝跡を確認した。この溝跡は本調査区2-5で確認されているSD08と同一遺構と考えられる。断面では、X層上面はこれらの流路跡や溝跡に削平され、西端では2.3mであったが、東端では遺構下面を完掘していないため不明である。

【SR06自然流路跡】

X層上面で確認した。確認された幅は調査区東端の1㎡の範囲内である。確認した深さは0.15cm程度である。SR06自然流路跡の蛇行範囲と考えられ、弥生土器の小破片がまとまって出土した。

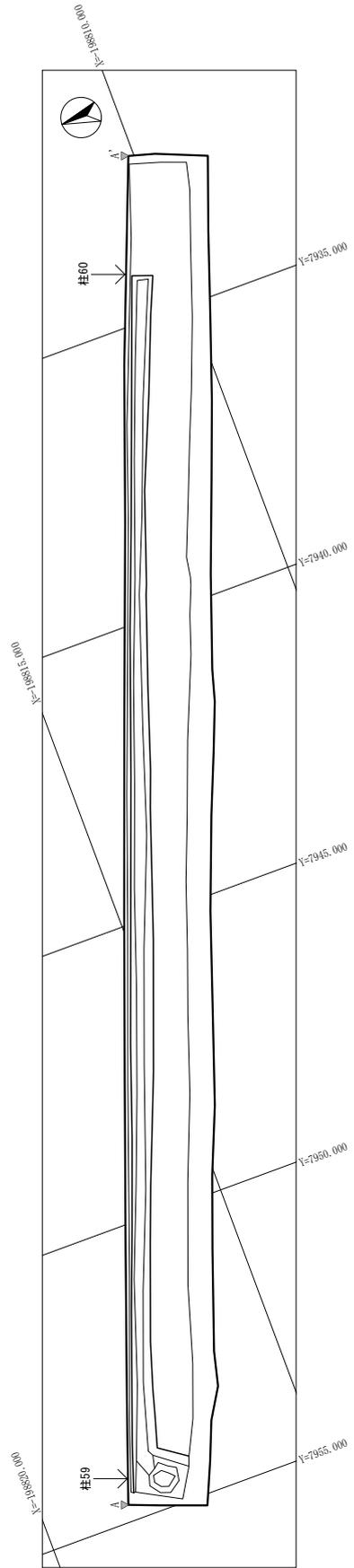
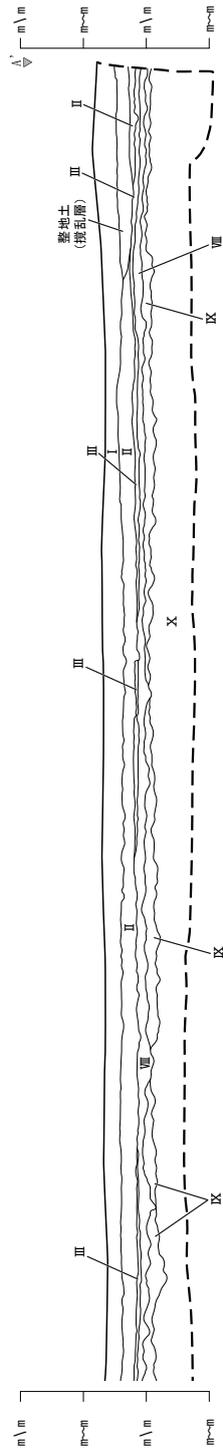
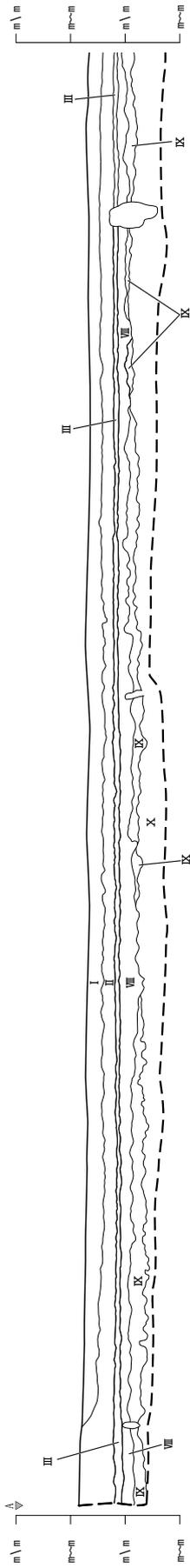


第 35 表 本調査区 4-2~4 土層注記表

遺構名	層位	土色	土性	備考
本調査区 4 共通	I	2.5Y5/2 暗灰黄色	シルト質粘土	現代の耕作土、盛土
	II	10YR5/1 褐灰色	シルト質粘土	2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。砂をやや多く含む。マンガン集積。
	III	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトをブロック状にやや多く含む。酸化鉄層状、マンガン粒状に集積。
	V	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトをブロック状に含む。マンガン粒状に集積。
	VI	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。層下位に灰白色シルトを小ブロック状または粒状に含む箇所がある。
	VII	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。VI層との境に灰白色シルトをブロック状にやや多量、または層状に含む箇所がある。
	VIII	10YR3/1 黒褐色	シルト質粘土	2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトをブロック状に含む。マンガン粒状に集積。
	IX	2.5Y4/2 暗灰黄色	粘土質シルト	全体的に砂をやや多く含む、層中に砂の薄層お挟む箇所がある。酸化鉄斑紋状、層全体に集積。
	X	2.5Y6/2 灰黄色	粘土質シルト	酸化鉄斑紋状、層全体に集積。層上面にマンガンが多く集積。本 4-2 ではややグライ化する。

第 60 図 本調査区 4-2 平面図 (1/120)・断面図 (1/60)

断壁 1:60



第61図 本調査区4-3 X層上面平面図(1/120)・断面図(1/60)

【SD08 溝跡】

調査区の中央よりやや西側で西肩部が確認され、東側に隣接する本調査区4-7西端で東肩部が部分的に確認された。基本層X層を大きく削り込み基本層II層に相当する堆積物で覆われている。検出面の標高は約2.5mで、両調査区にまたがる検出幅は推定で約10～12mに達すると考えられる。堆積土は本調査区内で4層を確認したが、調査区幅は1.5mと狭く東壁から湧水と崩落があったため、標高1.0m以下の砂質が強い下層の掘り下げは行っていない。

検出位置と遺構の規模から第1次調査のSD30の北側延長部分に相当する可能性が高いと考えられるが、今次調査ではこのうち14～16層に相当すると考えられる黒色から黒色粘土とされる層の確認にとどまった。また、今次調査の本調査区2-5で確認したSD08は、断面の状況から掘り直しを確認したが、本調査区4-6・7で確認した範囲では掘り直した時期の断面を検出した。遺物は出土していない。

【SD17 溝跡】

調査区の中央よりやや西側のSD08内で確認した。上端幅は1.0mほど、下端の幅は0.5m、深さ0.5mで、南側及び北側の調査区外へ直線的に延びる。断面形状は逆台形で、堆積土は1層を確認した。遺物は出土していない。

本調査区4-7(第64図、第36表)

本調査区4-7では、用水路により西側で標高約2.4mまでが削平された。平面は、X層中でSD08溝跡の東肩部分を確認した。断面では、X層上面はSD08溝跡の影響で2.1mである。東側に向かいやや標高が高くなり、東端では標高2.3mである。

【SD08 溝跡】

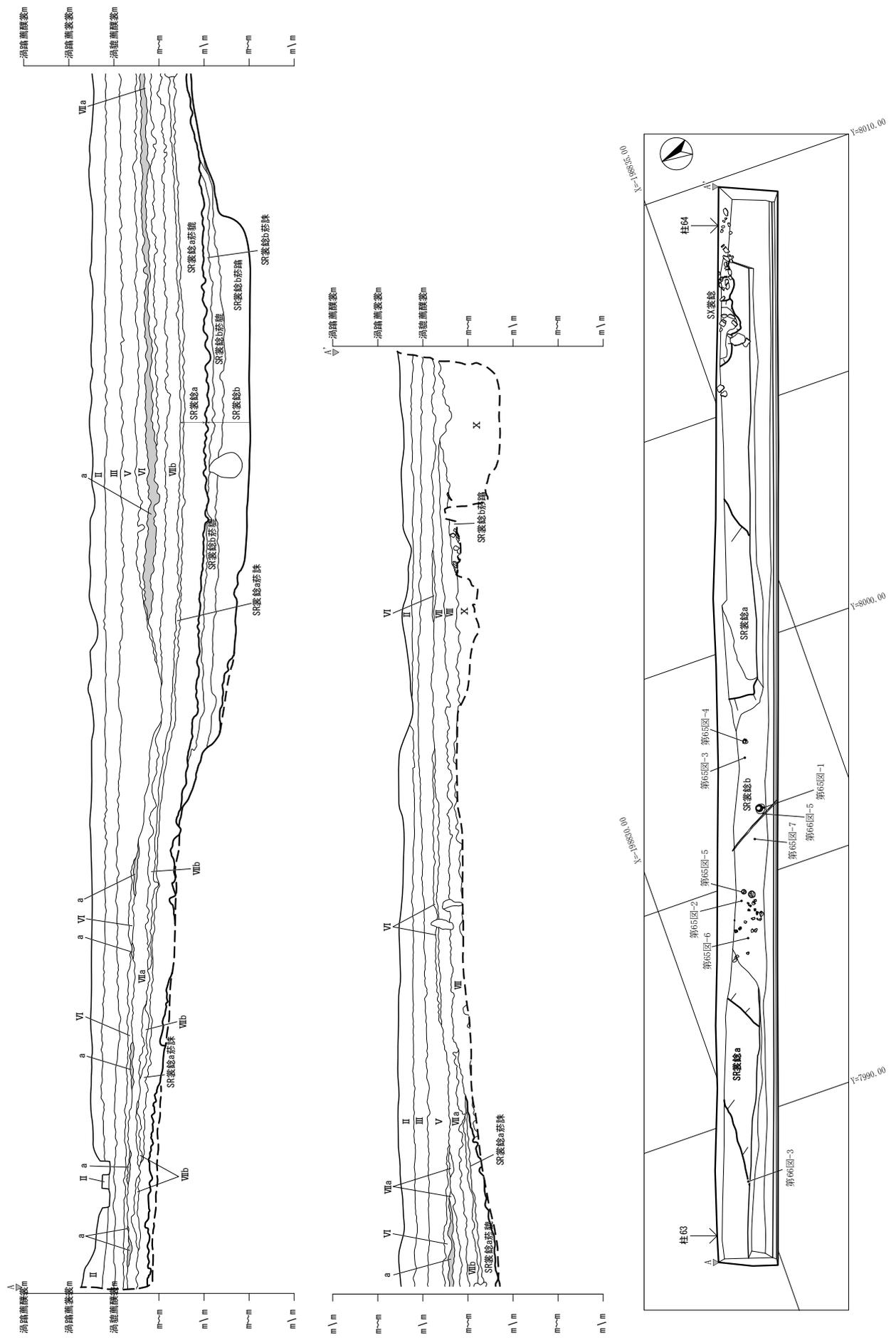
本調査区4-6で確認した溝跡の東肩に当たると考えられる。調査区西端の1㎡ほどで確認した。確認範囲での深さは0.5mほどで堆積土は2層を確認したが、本調査区4-6で既述したように、遺構の最下面は確認できなかった。遺物は出土していない。

本調査区4-8(第64図、第36表)

本調査区4-8では、用水路により西側で標高約2.4mまでが削平された。平面で確認された遺構は無い。断面では、X層上面は西端、東端ともに2.3mで平坦である。II層の下位にX層が確認され、近世より古い層は確認されていない。

第36表 本調査区4-5～8 土層注記表

遺構名	層位	土色	土性	備考	
本調査区4共通	I	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質粘土	現代の耕作土、盛土
	II	10YR5/1	褐灰色	シルト質粘土	2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。砂をやや多く含む。マンガン集積。
	III	10YR4/1	褐灰色	シルト質粘土	2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトをブロック状にやや多く含む。酸化鉄層状、マンガン粒状に集積。
	V	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトをブロック状に含む。マンガン粒状に集積。
	VI	10YR3/2～5Y3/2	黒褐色～オリーブ黒	シルト質粘土	2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。層下位に灰白色シルトを小ブロック状または粒状に含む箇所がある。
	VII	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。VI層との境に灰白色シルトをブロック状にやや多量、または層状に含む箇所がある。
	VII a	2.5Y4/1	黄灰色	粘土質シルト	砂を多く含む。酸化鉄が斑紋状に層全体に集積
	VII b	2.5Y3/1	黒褐色	シルト質粘土	砂を含む。酸化鉄が斑紋状に層全体に集積
	VIII	10YR3/1	黒褐色	シルト質粘土	2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトをブロック状に含む。マンガン粒状に集積。
	IX	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	全体的に砂をやや多く含む。層中に砂の薄層お挟む箇所がある。酸化鉄斑紋状、層全体に集積。
X	2.5Y6/2	灰黄色	粘土質シルト	酸化鉄斑紋状、層全体に集積。層上面にマンガンが多く集積。本4-2ではややグライ化する。	
SR06a	1	2.5Y3/1	黒褐色	シルト質粘土	2.5Y7/1 灰白シルト質粘土を少量含む。
	2	2.5Y4/1	黄褐色	シルト質粘土	2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。中粒砂～細粒砂を層下位にやや多く含む。
SR06b	1	5Y4/1	灰色	砂	中粒砂～細粒砂を主体とする層。
	2	5Y4/1	灰色	シルト質粘土	中粒砂を主体とし、7.5Y3/2 オリーブ黒色粘土の薄層を部分的に含む。
	3	7.5YR3/1	黒褐	シルト質粘土	中粒砂をきわめて多く含む。弥生土器、石器、木製品などの遺物を含む。
SD08	1	2.5Y4/1	黄灰色	粘土質シルト	2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。
	2	2.5Y4/1	黄灰色	粘土質シルト	2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルトとの互層状堆積。人為的に埋め戻されたと考えられる。
	3	2.5Y4/1	黄灰色	シルト質粘土	2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルトを小ブロック状に層下部にやや多く含む。
	4	5Y4/1	灰色	シルト質粘土	2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルトを小ブロック状に層下部に少量含む。
SD17		2.5Y5/1	黄灰色	粘土質シルト	層上部には2.5Y6/3 に近い黄色の粘土質シルトを20cmほどのブロック状に含む。層全体に酸化鉄斑紋状。層下部にマンガンがやや多く集積する。



第 63 図 本調査区 4 - 5 VII層上面平面図 (1/120)・断面図 (1/60)

本調査区4出土の弥生土器

第65図の1～7は本調査区4-5で確認したSR06自然流路跡の河床面で出土した弥生土器である。1は頸部がやや直立し、口縁に向けてやや外反して立ち上がる。内外面ともに概ね横方向のミガキで調整される。頸部下位に4条の並行沈線が巡る。2は壺の胴部破片である。外面は黒色処理され、内外面ともに横方向のミガキ調整で仕上げられている。外面は肩部に5条の並行沈線により4区画に区分し、1区画おきに植物茎回転文が充填される。3は小型の鉢である。口縁から胴部の1/2程度と底部の全体が残存する。胴部はやや膨らみを持つが、頸部に括れ等は持たない。外面はケズリ調整の後前面に植物茎回転文が施される。内面上半部は横方向のやや粗いミガキ調整が確認できるが、下半部は表面が剥離している。4は小型の鉢である。口縁と胴部を一部欠損するが、概ね完形である。頸部に括れを持ち、口縁はやや外向きに立ち上がる。口縁は浅い波状口縁で、14単位ほどであったと考えられる。外面は黒色処理され、ケズリ調整のちミガキ調整される様子が肩部から胴部にかけては良好に残存する。口縁帯と胴部上位に層波文が施される。層波文の中の縄文は磨消縄文である。内面は口縁の下位に1条の沈線が巡り、波状の突起に縦位の短い沈線が単位ごとに施されている。胴下部はケズリ調整、上部はミガキ調整される。5は甕口縁から胴部の破片である。6は蓋の天井部から体部の破片である。天井部天端が若干上に立ち上がる形状を持ち、天井部に木葉痕が残る。外体部はミガキ調整され、内部はケズリ調整される。7は蓋の天井部から体部の破片である。天井部は天端が上に立ち上がり横に少し飛び出す形状を持つが、端部の欠損が著しい。天井面はおおむね平坦で木葉痕が消されている。外面はケズリ調整され、一部に植物茎回転文が残る。内面はケズリ調整され、天井部と体部の境は調整痕がくぼみとして一周する。

本調査区4出土の石器

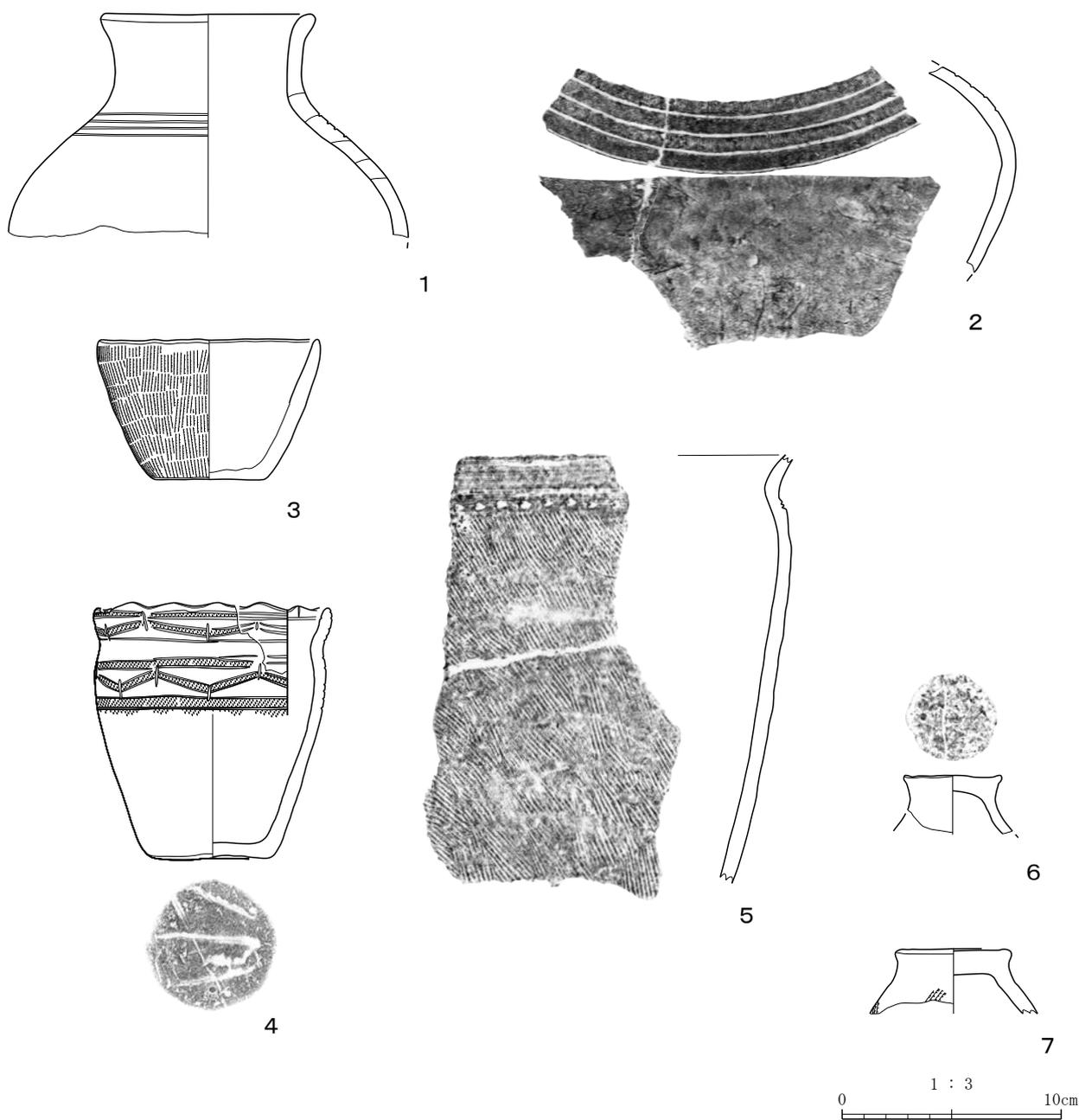
調査区4区では総計72点の石器が出土した。器種・石材的な内訳としては流紋岩を素材とした小型打製石器類が全体の半数以上を占めており、特に成品よりもそれらの素材剥片の方が主体的である。こうした傾向は本調査区1～3と比較的類似しており、自然流路周辺での石器製作・石器使用の在り方と関係している可能性も考えられる。出土した石器のうち4点を第66図に図示した。

1は石錐である。明瞭なつまみ部の作り出しは成されていないが、先端機能部にかけて断面形が概ね四角形状を呈するように二次加工が施されている。表裏両面には素材剥片の剥離面を大きく残す。2は右下端縁を中心に微細な剥離痕とこれに伴うツブレの痕跡が観察されることから、剥片素材の敲打具と考えられる。やや身厚の剥片の縁辺部を主な機能部とした、ハンマーあるいはストーンリタッチャーのような機能が想定される。3は石庖丁の破損品である。紐孔部から右側縁端にかけて約1/2程度の破片と考えられ、先行して施されたと考えられる敲打成形の痕跡がほとんど確認できないほど入念に研磨されている。4は大型板状石器に多用される板状節理を有する安山岩の破片を用いた二次加工痕を有する剥片である。比較的薄手の破片を素材とし周縁部の表裏面側より、形状成形を目的としたと考えられる二次加工を連続的に施して全体を整えている。

本調査区4出土の木製品

第66図-5は芯持ちの丸木材を素材とした、何らかの柄の可能性が考えられる弓状の木製品である。類例が第一次調査(第1分冊P82、第4分冊P62)で出土しており、施されている加工にも共通性が見られる。

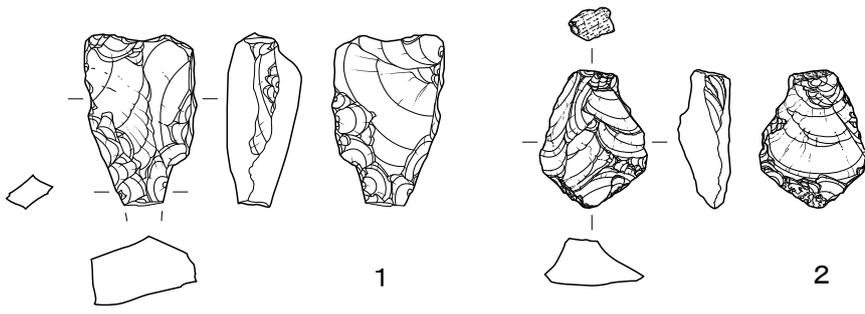
上端部側にやや外湾する曲面状の平坦面を1面形成し、その対向する面から両側面にかけて削り出しによる段を2段形成している。段の最上部には狭い帯状の平坦面が巡っており、段の縦断面形は上底のやや狭い台形状となる。段が形成された部分から先端部に向かい徐々に細くなるように加工されており、先端部には半球状の突起が作り出されている。平坦面が形成された部位から先端部にかけては、平坦面側に湾曲している。下端部側はやや劣化が進んでおり明瞭な加工痕は観察しにくい。端部には求芯状の切断加工が施されている。枝払いなどの加工痕は観察されなかった。樹種同定を行った結果、試料の採取箇所の劣化の影響により針葉樹までしか同定不能であったが、枝振などから見る肉眼観察ではイヌガヤと推察される。



第 37 表 本調査区 4 出土遺物観察表 弥生土器

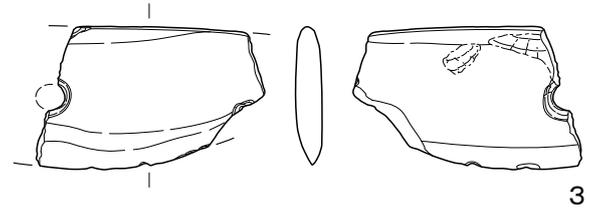
図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	種別	器種	部位	口径	底径	器高	地文 / 施文	外面調整 / 内面調整	備考
65- 1	25- 1	B014	本 4-5/ SR06 下層	弥生土器	壺	口縁～胴部	9.2	-	9.7	-/ 沈線 4 条	ミガキ / ミガキ	
65- 2	24- 3	B015	本 4-5/ SR06 下層	弥生土器	壺	胴部	-	-	9.5	-/ 沈線 5 条・植物茎回転文充填	ミガキ / ミガキ	外面は黒色処理。
65- 3	24- 4	B016	本 4-5/ SR06 下層	弥生土器	鉢	口縁～底部 1/2	10.0	5.0	6.5	植物茎回転文 / -	ナデ / ミガキ	底部に木葉痕
65- 4	25- 2	B017	本 4-5/ SR06 下層	弥生土器	甕	口縁～底部	10.1	5.2	11.8	縄文 (LR 詳細不明) / 層波文	縄文→沈線→ミガキ / 沈線→ミガキ	小突起あり 表面コゲ?
65- 5	24- 5	B018	本 4-5/ SR06 下層	弥生土器	甕	口縁～胴部	-	-	19.7	植物茎回転文・刺突	ナデ→植物茎回転文・刺突 / ミガキ	口縁端部が欠損する。
65- 6	24- 6	B019	本 4-5/ SR06 下層	弥生土器	蓋	つまみ部～体部	4.5	-	2.6m	無文 / 底面木葉痕	ミガキ / ナデ	
65- 7	24- 7	B020	本 4-5/ SR06 下層	弥生土器	蓋	つまみ部～体部	5.4	-	3.0	植物茎回転文 / 底面木葉痕	ナデ→植物茎回転文 / ナデ	

第 65 図 本調査区 4 出土遺物 弥生土器

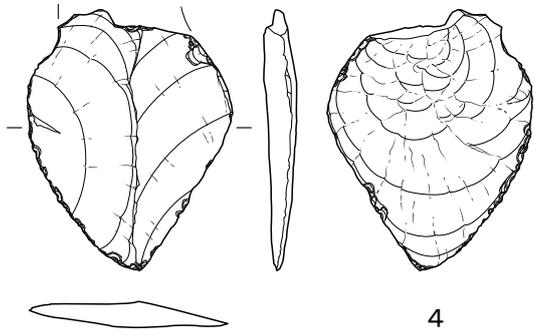


0 1 : 1 2.5cm

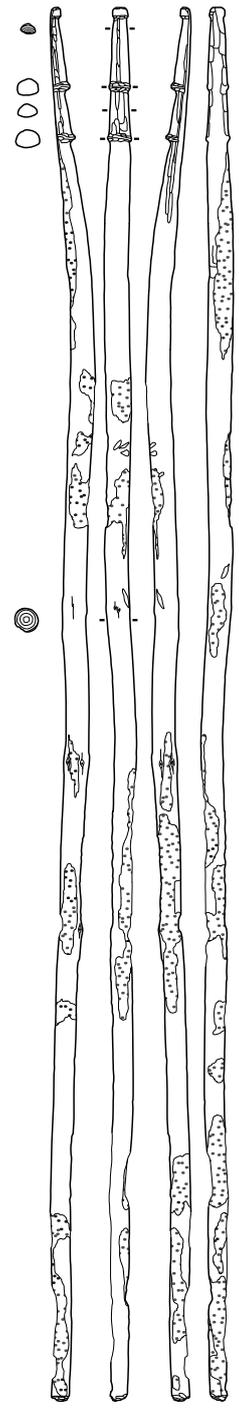
0 1 : 3 10cm



0 1 : 2 10cm



0 1 : 3 10cm



0 1 : 9 20cm

5

第 38 表 本調査区 4 出土遺物観察表 石器

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	器種	石材 / 素材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	
66- 1	42-1	K019	本 4-6/ SR02	打製石器	石錐	凝灰岩	(2.3)	1.5	1.0	(2.5)	尖端部欠損。
66- 2	42-2	K022	本 4-6/ SR04	敲磨具類	敲	流紋岩	5.5	4.2	2.1	41.6	剥片素材。縁辺に微細な潰れ有。
66- 3	42-3	K020	本 4-5/ SR06	石砲丁	成品破片	凝灰岩	3.8	(6.0)	0.7	(24.7)	紐孔 1ヶ所あり。
66- 4	42-4	K021	本 4-3	大型 板状石器	破片	凝灰岩質 安山岩	10.3	8.0	1.3	(78.6)	周縁部に微細な二次加工。折損後に転用か。

第 39 表 本調査区 4 出土遺物観察表 木製品

図番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	樹種	木取	遺構 / 出土層	全長	最大幅	最大径	備考
66- 5	53-9	L019	本 4-5/ SR06	針葉樹	芯持丸木	SR06b/4 層	166.4	5.4	3.7	上端部に 2 段を削り出す。

第 66 図 本調査区 4 出土遺物 石器・木製品

5. 本調査区5（第67図）

本調査区5は遺跡範囲の中央南側に位置し、現在の日辺排水路の東西に跨って設定した調査区である。周知の遺跡範囲内をほぼ南北約130mに渡って調査を実施した。調査区の中央部は日辺排水路により削平されている。

本調査区5は、基本層X層の検出上面標高の違いから以下の3つのまとまりに大別した。

①本調査区5北部：基本層X層の上面標高は約2.5mから約1.3mまで急速に落ち窪んでおり、直上の堆積層は主に基本層IX層とSR01自然流路跡の流路堆積物である。SR01自然流路跡へと落ち込んでいく南岸部にあたり、特に流路肩部ではまとまった遺物の出土が見られる。

②本調査区5中央：基本層X層の上面標高は約2.5mで、直上の堆積層は主に基本層IX層。

③との境界は比高差約0.2mの段差を成し、そこから約70m北側まで平坦な地形面が続く。水田耕作土層と考えられる堆積層のほか、弥生時代の津波堆積物と考えられる粗粒砂～中粒砂を層中に多く混在する層が確認され、層中には非常に多くの遺物を含んでいる。

③本調査区5区南部：基本層X層の上面標高は約2.7～2.8mで、直上の堆積層は主に基本層VII層。微高地状を呈しており、溝跡やピットなど多くの遺構が確認される。

以下ではこの3つのエリアごとに検出遺構と出土遺物を概観する。

(1) 本調査区5北部（第68～70・72・73図、第40～42表）

日辺排水路開削に伴う攪乱によって調査範囲の中央部分が標高約2.6mまで削平されている。平面では、IX a層を確認面とし調査区の北西部分から北東方向へかけて調査区を斜めに横断する自然流路跡（SR01）と調査区南半部で基本層X層を確認面とする方形の土坑（SK15）を確認した。断面観察において確認できた堆積層は基本層I～II・VI～VII・IX a～X層で、これに加えてVI～VII層間にa層：灰白色火山灰層とVII～IX a層間にb層：洪水堆積層、SR01自然流路跡の流路堆積物が確認されている。また、本調査区で確認されたb層：洪水堆積層はやや酸化して褐色味の強い色調のシルトを基調とするb1層と鉄分を多く沈着し赤褐色身の強い粗粒砂を基調とするb2層の上下2層に細分される。本調査区5北部のIX a層は、砂を多く含んでおり、調査区南西側では、層中から弥生土器の破片が多く出土したほか、石器では石庖丁の未成品が出土している。弥生土器の甕破片2点（第68図-5・6）と石庖丁未成品（第70図-1）を図示した。

【SD18 溝跡】

西壁の断面観察で確認した溝跡である。遺構底面が確認面より高いため、平面では確認できなかった。断面ではVII層より新しくa層（灰白色シルト）に覆われている。断面形は逆台形で上端幅は0.9m、下端幅は0.4m、深さは0.2～0.3mである。

【SK15 土坑跡】

X層を確認面とし、標高2.4mで確認した。東半部を日辺排水路により削平される。長軸2.3m、短軸1.9mの長方形で、確認面からの深さは0.3m程度である。堆積土は5層を確認し、1・2層に弥生時代の津波堆積物と考えられる粗粒砂を混入する。堆積土3層以下には粗粒砂を全く含んでいなかった。2層下面から3・4層にかけて弥生土器の破片が30点ほど出土している。2層下面から出土した2点を第68図に図示した。

【SR01 自然流路跡】

X層上面で確認した。第1次調査のSR1の南側延長部分で、上流部分に相当する。調査区の北西部分で確認された流路肩部は、やや蛇行しながら東へと流れる自然流路跡の南側立ち上がりに相当すると考えられる。北側立ち上がりに相当する部分は本調査区1～6において確認され、推測される流路幅は約10mを超える。確認面の標高は約2.7mで、調査区内で確認した最深部までの比高差は約1.7mである。流路の最深部は本調査区の北西側に位置すると考えられ、流路堆積土の厚さはこれ以上あったと考えられる。調査終了時点の最深部の標高は約1.0mで、河床面は全体的にグライ化が進んだ基本層X層であった。堆積土は10層を確認した。現耕作土・旧耕作土のI・II層の直下にはVI層が堆積する。流路が深い部分ではa層とした灰白色シルト層が残存し、VII層はVII a・VII bの2層に細分される。VII b層下位には洪水堆積層であるb1・b2層が0.6～0.7mほど堆積する。この洪水堆積層はSR01流路内だけでなく、

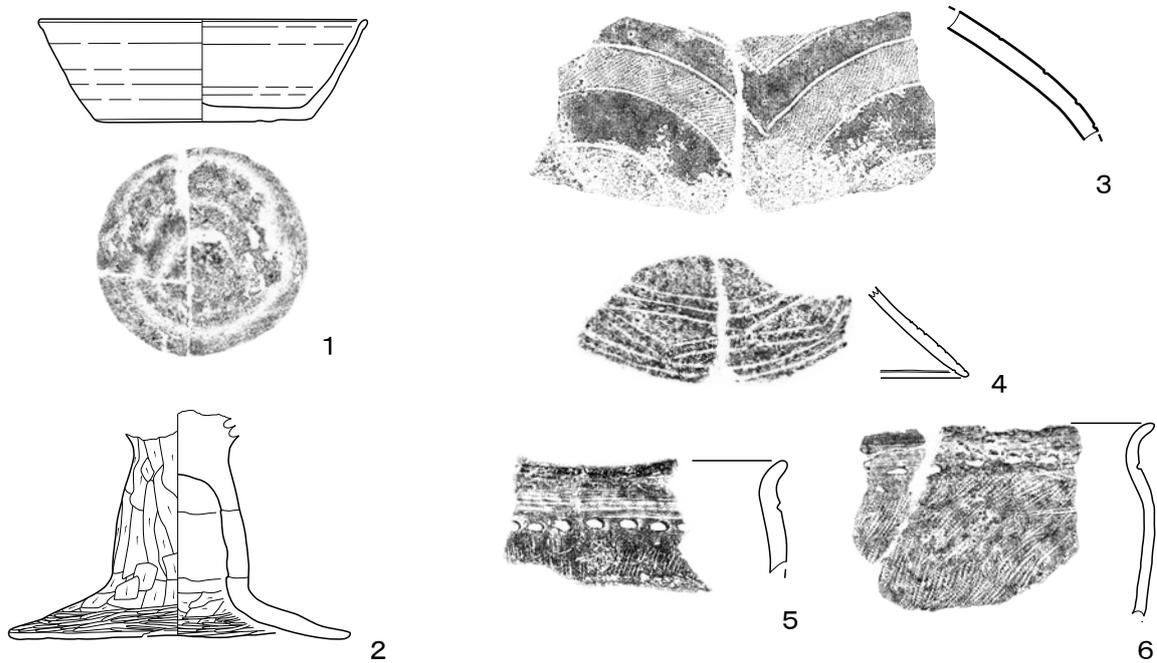


第67図 本調査区5位置図
(1:8000)

流路を越えてV区北側西壁全面と、5区南側の基本層Ⅱ層以下で確認された。また本調査区7で検出された自然流路内や、本調査区2において堆積物の特徴が類似する層が自然流路内で確認されており、広範囲に分布していると考えられる。洪水堆積層の直上では須恵器坏が出土した(第68図-1)。河川内の堆積土は3層を確認し、SR01-1~3層とした。SR01-1層では、洪水堆積層b2層が流路を削り込む様子が確認されている。SR01-3層上面では第68図-2に示した古墳時代の高坏脚部が出土した。この層の最下面は流路の南肩にあたり、北西に向けた傾斜面で弥生土器の破片がやや多く出土した。これらの出土遺物は第68図に図示した。石器は敲打具類、石皿類の小破片が出土した。

本調査区5北部出土の弥生土器

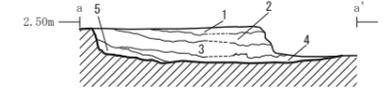
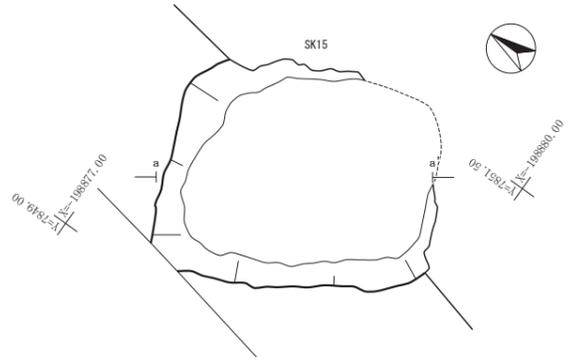
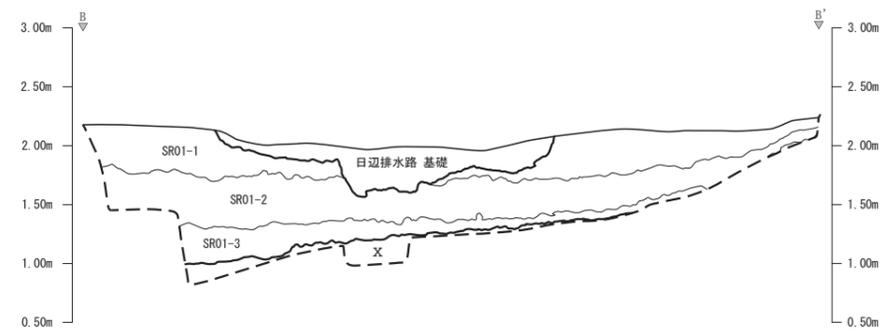
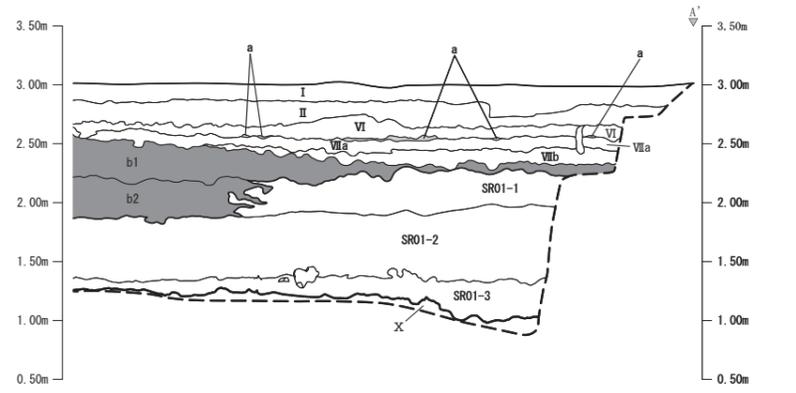
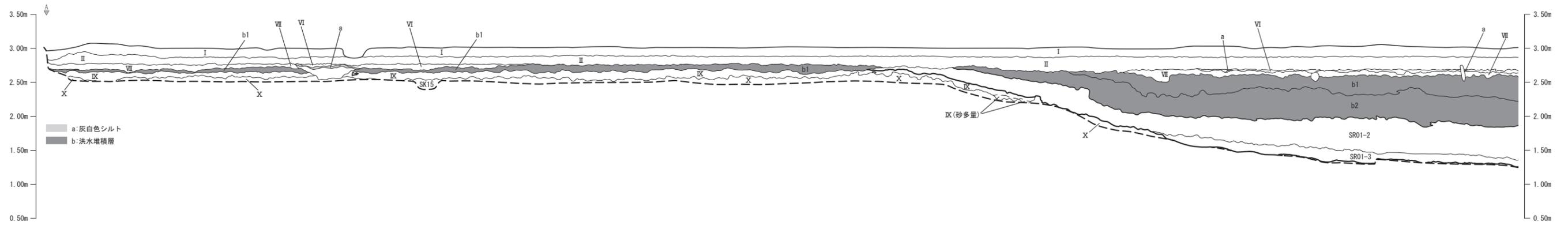
第68図は本調査区5北部で出土した土器である。1は須恵器坏である。口縁端部は玉縁状で底部は回転ヘラ削りである。2は高坏の脚部である。外面と内面の底部はケズリ調整の後ミガキ調整される。内部は中空で積上げ痕が残る。3は壺の胴部破片である。内外面ともにミガキ調整され、沈線で施文された区画に縄文を充填している。4は蓋の体部から端部破片である。全体的に摩耗が著しく調整は不明である。5・6は甕の口縁から胴部の破片である。5の内面はミガキ調整される。6の内面は摩耗が著しいが、ケズリ調整の工具痕が残る。



第40表 本調査区5北部 出土遺物 弥生土器観察表

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	種別	器種	部位	口径	底径	器高	地文 / 施文	外面調整 / 内面調整	備考
68-1	39-5	E001	本5北 / SR01/b層直上	須恵器	坏	口縁~底部	13.0	8.2	4.1	-/-	ロクロ成形	底部回転ヘラケズリ
68-2	39-1	C002	本5北 / SR01/上層	非ロクロ土師器	高坏	脚部	-	13.2	(9.0)	-/-	ヘラケズリ / ヘラケズリ	骨針微量
68-3	24-8	B021	本5北 / SK15/Dブロック/2層下面	弥生土器	壺	胴部	-	-	(4.7)	L3R/縄文充填	沈線→縄文→ミガキ / ナデ	
68-4	29-5	B022	本5北 / SK15/Dブロック/2層下面	弥生土器	蓋	体部~端部	-	-	(3.6)	LR(詳細不明)/波状文・縄文充填	ミガキ / ナデ	口縁端部に沈線一条。骨針微量 表一部に赤色塗彩
68-5	29-1	B023	本5北 / IX層	弥生土器	甕	口縁~胴部	-	-	(4.5)	植物茎回転文 / 列点文	ナデ / ミガキ	口唇部にも植物茎回転文 胎土に骨針含む
68-6	29-2	B024	本5北西 / IX層上部	弥生土器	甕	口縁~胴部	-	-	(7.7)	L3R/列点文	ナデ / ケズリ	骨針微量

第68図 本調査区5北部 出土遺物 弥生土器

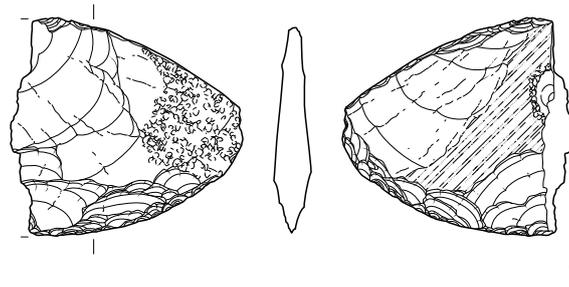


第41表 本調査区5 土層注記表

遺構名	層位	土色	土性	備考
本調査区5 共通	I	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質粘土 現代の耕作土、盛土
	II	10YR5/1	褐灰色	シルト質粘土 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。砂をやや多く含む。マンガン集積。
	V	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトをブロック状に含む。マンガン粒状に集積。
	VI	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトを小ブロック状に少量、層下位に灰白色シルトを小ブロック状に含む。
	a	2.5Y8/1	灰白色	シルト 灰白色シルト層。
	VII	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。
	b1	7.5Y5/1	褐灰色	粘土質シルト 洪水堆積層。層下位に砂をやや多く含む。酸化鉄集積。
	b2	5Y6/4	オリーブ黄	砂質シルト 洪水堆積層。下砂を多く含む。酸化鉄層状に集積
	VIII	10YR3/1	黒褐色	シルト質粘土 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトをブロック状に含む。マンガン粒状に集積。
	IX a	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土 粗粒砂~中粒砂を層中に多く混在する。層中に砂の薄層を挟む箇所がある。酸化鉄斑紋状、層全体に集積。
	IX b	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土 IX a層より砂の割合が少ない。
	X	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト 酸化鉄斑紋状、層全体に集積。
SD18	1	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。砂を多く含む。酸化鉄斑紋状。
SK15	1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトをブロック状に含む。
	2	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト 上面は砂に覆われる。炭化物をやや多く含む。
	3	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト 炭化物を多量含む。土器破片をやや多く含む。
	4	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト 炭化物をやや多量に含む。
	5	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土 10YR3/1黒褐色シルトを少量含む。炭化物少量含む。
SD13	1	10YR4/1	褐灰	シルト質粘土
	2	10YR5/1	褐灰	シルト質粘土 砂をやや多く含む。酸化鉄・マンガン斑紋状。
	3	10YR5/2	灰黄褐色	シルト 酸化鉄・マンガン斑紋状。
SD14	1	10YR4/1	褐灰	シルト質粘土
	2	10YR5/1	褐灰	シルト質粘土 砂をやや多く含む。酸化鉄・マンガン斑紋状。
SD15	1	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土 砂をやや多く含む。酸化鉄・マンガン斑紋状。
	1	10YR4/1	褐灰	シルト質粘土 砂をやや多く含む。
SD11	2	10YR5/1	褐灰	シルト質粘土 砂をやや多く含む。酸化鉄・マンガン斑紋状。
	3	10YR5/2	灰黄褐色	シルト 酸化鉄・マンガン斑紋状。
	1	2.5Y3/1	黒褐色	シルト質粘土 10YR5/2(灰黄褐色)粘土質シルトを少量含む。
SK04	1	2.5Y3/1	黒褐色	シルト質粘土 10YR5/2(灰黄褐色)粘土質シルトを少量含む。
SX09	1	10YR4/1	褐灰色	シルト質粘土 砂をやや多く含む。酸化鉄・マンガン斑紋状。
	2	2.5Y3/1	黒褐色	粘土 10YR5/2(灰黄褐色)粘土質シルトを含む。
SD16	1	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土 砂をやや多く含む。酸化鉄・マンガン斑紋状。
SD11	1	2.5Y3/1	黒褐色	シルト質粘土 10YR5/2(灰黄褐色)粘土質シルトを少量含む。
	2	10YR5/1	褐灰	シルト質粘土 砂をやや多く含む。酸化鉄・マンガン斑紋状。
SR01	1	10YR7/1	灰白色	シルト質粘土 層の下位に7.5Y5/1(灰色)の粘土を多く含む。
	2	5G3/1	暗緑灰色	粘土 層の上位は緑黒色を呈す。10YR5/2(灰黄褐色)シルトをブロック状に層の上位に含む。層上面で古墳時代の遺物が出土する。
	3	5G3/1	暗緑灰色	粘土 10YR5/2(灰黄褐色)シルトをブロック状に多く含む。
	4	5G4/1	暗緑灰色	粘土 砂をやや多く含む。
	5	7.5GY4/1	暗緑灰色	シルト 5G6/1(緑灰色)の砂質シルトをやや多く含む。弥生土器が出土する。



第69図 本調査区5北 平面図(1/120)・断面図・SK15個別遺構図(1/60)



1

0 1 : 2 10cm

第42表 本調査区5北 出土遺物 石器観察表

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	器種	石材 / 素材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
70- 1	42- 5	K023	IX層	石庖丁 未成品	片岩類	(5.8)	(6.1)	1.0	(36.1)	紐孔部周辺で折損。

第70図 本調査区5北部 出土遺物 石器

本調査区5北出土の石器

第70図は本調査区5の基本層IX層から出土した石器である。石庖丁未成品で、折損部裏面側に紐孔を穿孔するための痕跡が加工途上の状態で観察される。器体の約1/2弱が残存しており、背部と刃部は比較的細かい剥離加工によって全体形状が整えられている。背部が側縁近くで湾曲しており、杏仁形の形態を目指していたと推測されるが、研磨成形には移行していないため穿孔の段階で破損した可能性が考えられる。

(2) 本調査区5区中央部（第71・74図、第43・44・46表）

本調査区5中央部は、西側に本調査区7が位置するあたりから南に70mほどの範囲で、遺物が特に多く出土した範囲である。確認された基本層は旧水田跡II層の直下に概ね層厚5cmでVI層・VII層が堆積する。VII層下位にはVIII層が層厚15cmで堆積する。IX a層は5～10cmの厚さで砂を多く含み、a・b層に細分できる範囲が確認される。この範囲のIX a層は砂を多量に含み、本調査区6・7の自然流路内でS2層とした津波堆積土と考えられる層と同程度の砂を含んでいる。VIII・IX層は遺物包含層で、日辺排水路の西側では特にIX a層の中から多く出土している。

この範囲の北端では、畦畔状の高まりを平面及び断面で確認した。これは周辺のIX a層が耕作されているものと考えられる。この畦畔状の高まりから南に5mあたりから遺物の出土が増加し、日辺掘排水路西側ではX = 198915.00～198925.00周辺まで弥生土器の破片と石器が多く出土した。

本調査区5中央部のX層上面の標高は北端では2.5mほどで、遺物の出土が見られなくなるX=-198945.00付近から南に向かい緩やかに標高が上がりはじめる。これより南側ではIX層の層厚が10cm以上とVIII層より厚く堆積し、X層上面の標高は2.4mと北側より若干下がる範囲もあるが、X=-198970.00付近で標高2.7～2.8mに達する。調査区南端の95m付近までは標高2.7mほどで概ね平坦である。この範囲で出土した弥生土器の一部を第74図に図示した。

【SX12 畦畔状遺構】

X層上面で確認し、確認面の標高は2.5mである。検出長は2.64mで、幅0.612m、深さ0.09mを確認した。日辺排水路東側では確認できなかった。弥生土器の破片が少量出土した。IX a層より古いことを断面観察により確認した。

【SD16(SD29) 溝跡】

X層上面で確認し、確認面の標高は2.7mである。検出長は日辺排水路を挟んで東西10.8m、幅0.7m、深さ0.2mを確認した。断面形は皿型である。VIII層で覆われておりIX a層より新しい。堆積層は2層を確認し、いずれもやや砂の多い粘土質シルトである。遺物は弥生土器の破片が2点出土したがいずれも破片である。

③本調査区5南部（第71・74～76図、第45～52表）

本調査区5南部では、遺物の出土が見られなくなる50m付近からX層上面が南に向かい標高が上がり、X=-198970.00付近で標高2.7～2.8mに達する。調査区南端では標高2.7mほどで概ね平坦である。この範囲ではX層上面で調査区外の南西及び北東に延びる溝が複数確認された。溝跡の時期は複数にわたると考えられるが、同じ方向を持つものが多く、確認位置も集中している。そのほか、土坑1基と性格不明遺構1基。ピットを24基確認した。

【SD11 溝跡】

X層上面で確認し、確認面の標高は2.7mである。検出長は日辺排水路を挟んで東西5.4m、幅2.4mを確認し東側及び西側は直線的に調査区外へ延びる。深さは0.3～0.4mで、断面形は逆台形である。堆積土は4層を確認した。

1層と3層から弥生土器の破片が多く出土しており、このうち1点を第75図に図示した。

【SD12 溝跡】

X層上面で確認し、確認面の標高は2.7mである。検出長は日辺排水路を挟んで東西5.4m、日辺排水路の東側で幅1.4m、深さ0.3～0.4mを確認した。断面形は逆台形である。日辺排水路の西側では確認できなかった。遺構の東側及び西側は日辺排水路を境に東西でやや湾曲し調査区外へ延びる。調査区西壁断面ではIX層より新しい。堆積土は2層を確認し、1層から土師器の坏1点、脚部1点のほか、土師器破片が出土している。このうち2点を第75図に図示した。

【SD13 溝跡】

X層上面で確認し、確認面の標高は2.7mである。SD15と重複関係にあり、SD15より新しい。検出長は9.84mで、幅1.848m、深さ0.288mである。断面形は皿型である。基本層V層より新しく、堆積土は3層を確認した。1層は基本層II層に混入する灰黄色シルト質粘土のブロックを多量に含む。遺構の底面でSD26を確認した。溝の最下層である3層と土性に大きな差はないが範囲が異なるため別遺構として取り扱った。遺物は出土していない。

【SD26 溝跡】

検出長9.2mで、幅0.4m、深さ0.1mである。ほぼSD13に沿う方向に確認したが、日辺排水路の東壁際ではSD26範囲のみが確認されている。堆積土は1層を確認し、SD13-3層とほぼ同質であることを確認した。遺物は出土していない。

【SD14 溝跡】

X層上面で確認し、確認面の標高は2.7mである。検出長は日辺排水路を挟んで東西5.5m、幅0.7m、深さ0.3～0.4mである。断面形は逆台形である。日辺排水路の西側では遺構の北側は攪乱により確認できなかった。遺構の東側及び西側は日辺排水路を境に東西でやや湾曲し調査区外へ延びる。調査区西壁断面の観察ではIX層より新しいと考えられる。堆積土はIX層を主体とする1層を確認した。日辺排水路の東側ではSD14の両側に沿って浅い落ち込み状の遺構を断片的に検出しており、耕作に伴う溝や畦畔状遺構に付随する遺構の可能性が考えられる。石器剥片が出土した。

【SD15 溝跡】

X層上面で確認し、確認面の標高は2.7mである。SD13と重複関係にあり、SD13より古い。日辺排水路を挟んで屈曲すると考えられ、日辺排水路西側の検出長は21.8mで、幅1.2m、深さ0.21mである。日辺排水路東側の検出長は24.8mで、幅1.4m、深さ0.2mである。

断面形はやや不整形な台形である。VI層で覆われており、堆積土は1層を確認した。弥生土器の壺2個体ほか破片がやや多く出土したほか、石器が7点出土している。このうち弥生土器3点と石器1点を第76図に図示した。

【SK04 土坑跡】

X層上面で確認し、確認面の標高は2.7mである。長軸0.6m、短軸0.3mの長楕円形で、深さは0.3mである。堆積土は1層で、弥生土器の破片がやや多く出土している。

【SD27 溝跡】

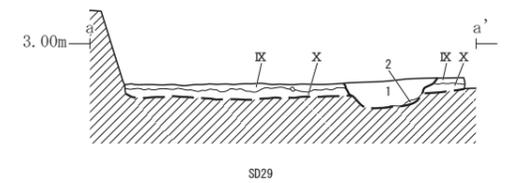
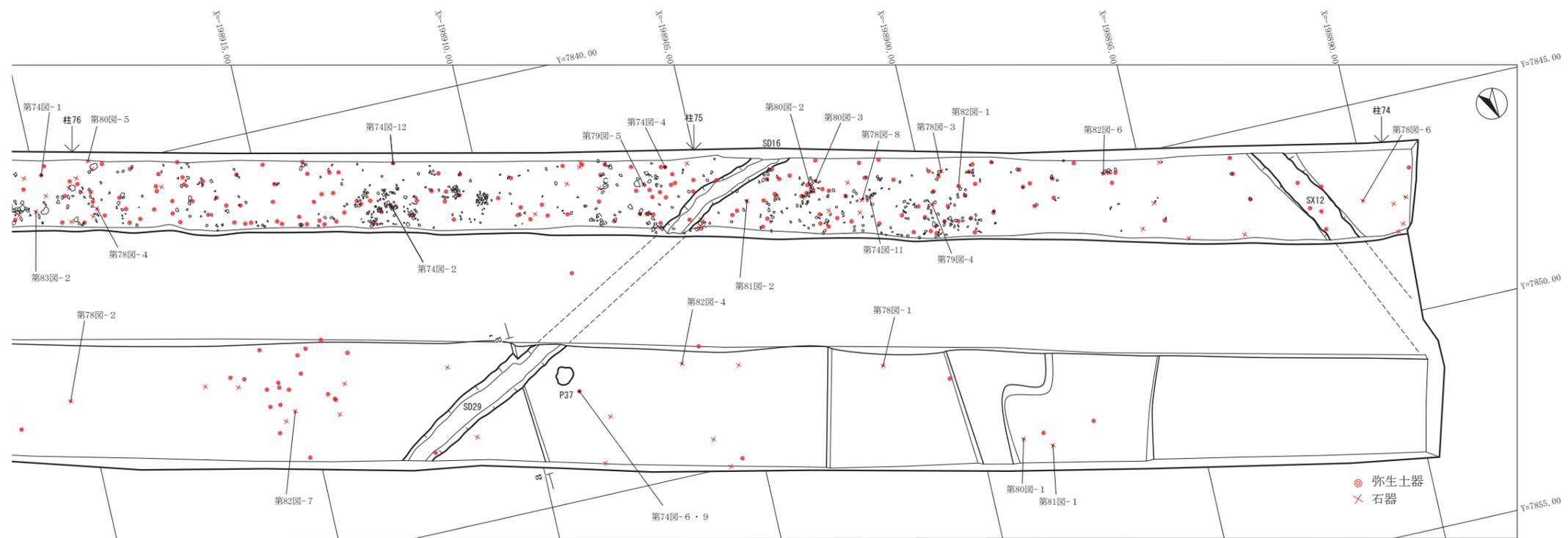
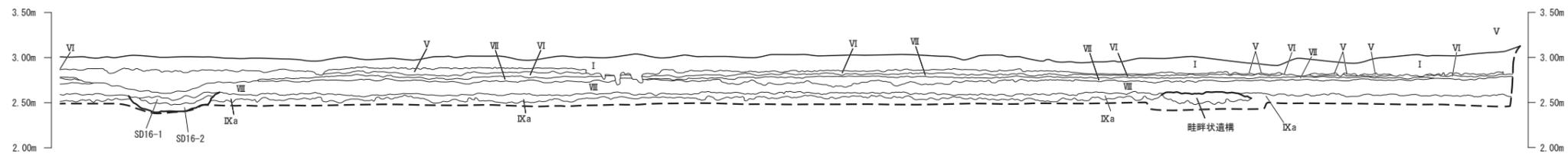
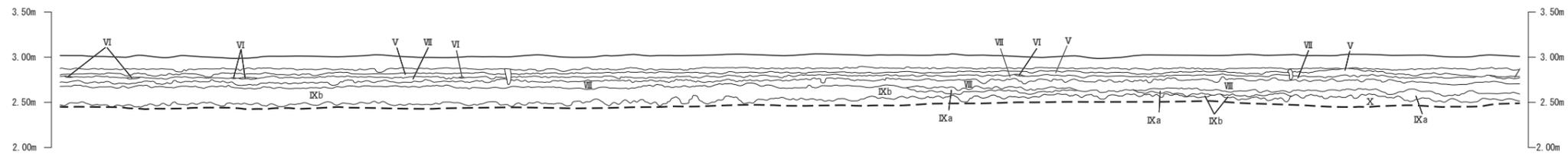
X層上面で確認し、確認面の標高は2.7mである。SD28と重複関係にあり、SD28より古い。日辺排水路の東側で、検出長4.2m、幅1.0m、深さ0.1mである。堆積土は1層で遺物は出土していない。

【SD28 溝跡】

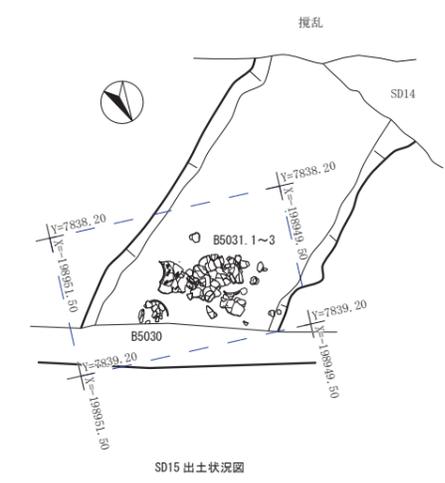
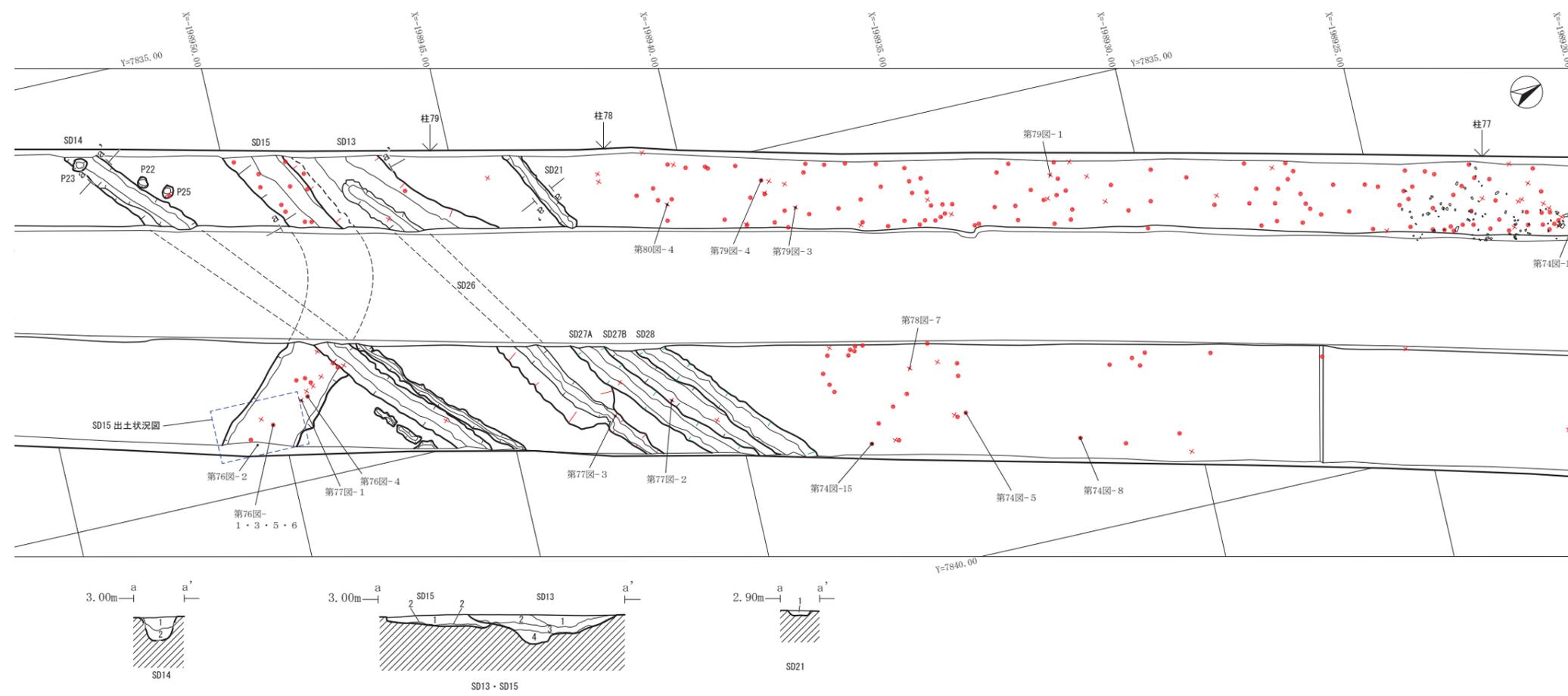
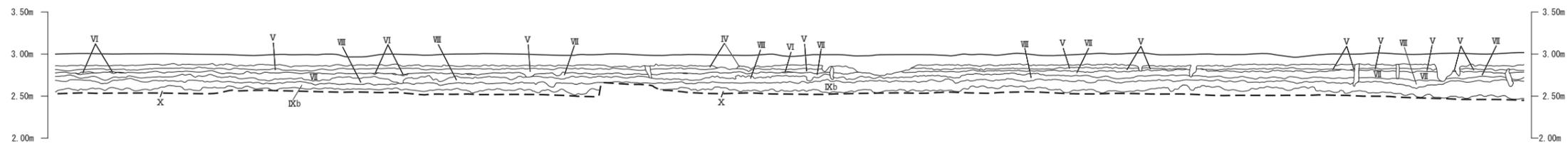
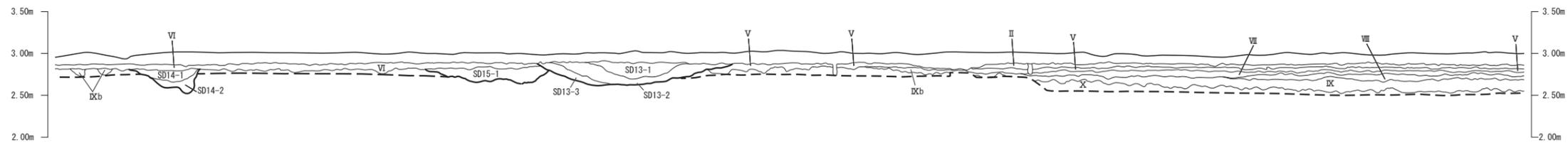
X層上面で確認し、確認面の標高は2.7mである。日辺排水路の東側で、検出長4.2m、幅0.6m、深さ0.1mである。堆積土は1層でグライ化が著しい。遺物は出土していない。

【SX09 性格不明遺構】

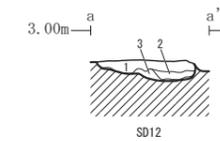
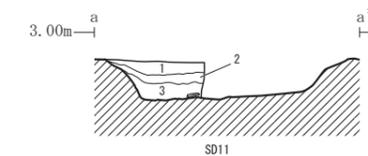
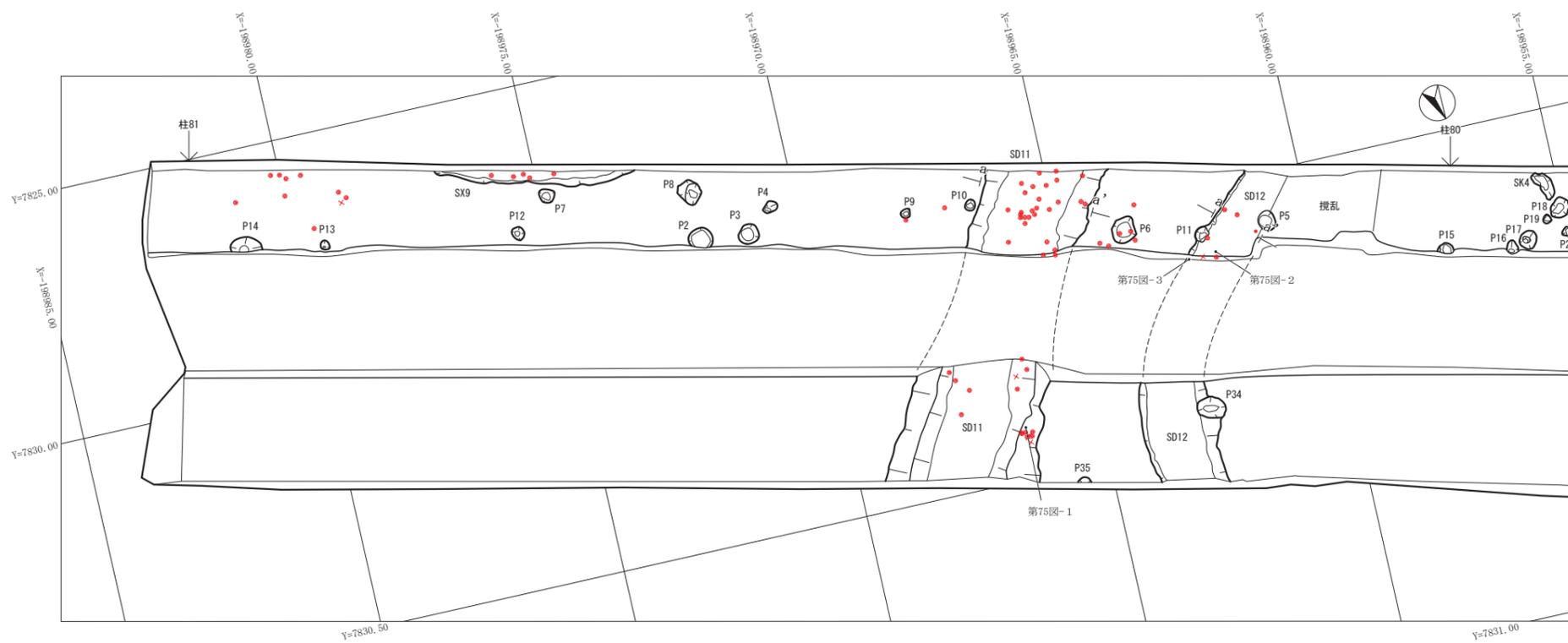
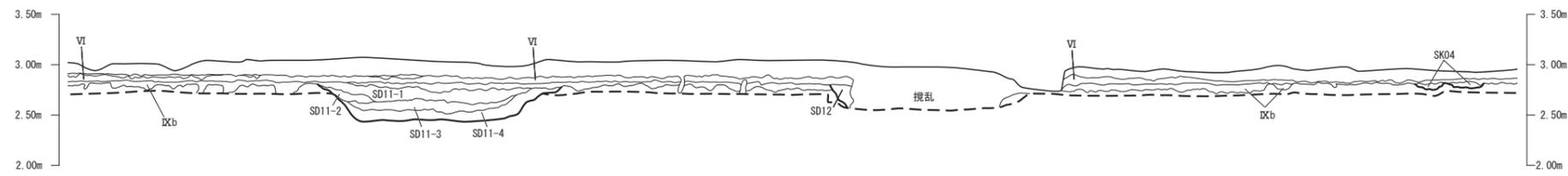
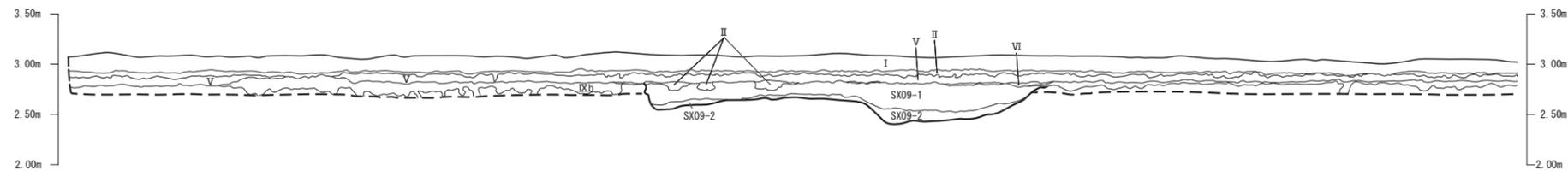
X層上面で確認し、確認面の標高は2.7mである。長軸3.8m、短軸0.3mで遺構の西側は調査区外へ延びる。深さは0.4mで、断面形はU字型である。堆積土は2層を確認し、上面に多量の砂が塊状に混入する部分がある。2層から弥生土器の破片がやや多く出土している。検出範囲が壁際で、全体の形状に不明な点が多いため、性格不明遺構とした、やや大型の土坑と考えられる。



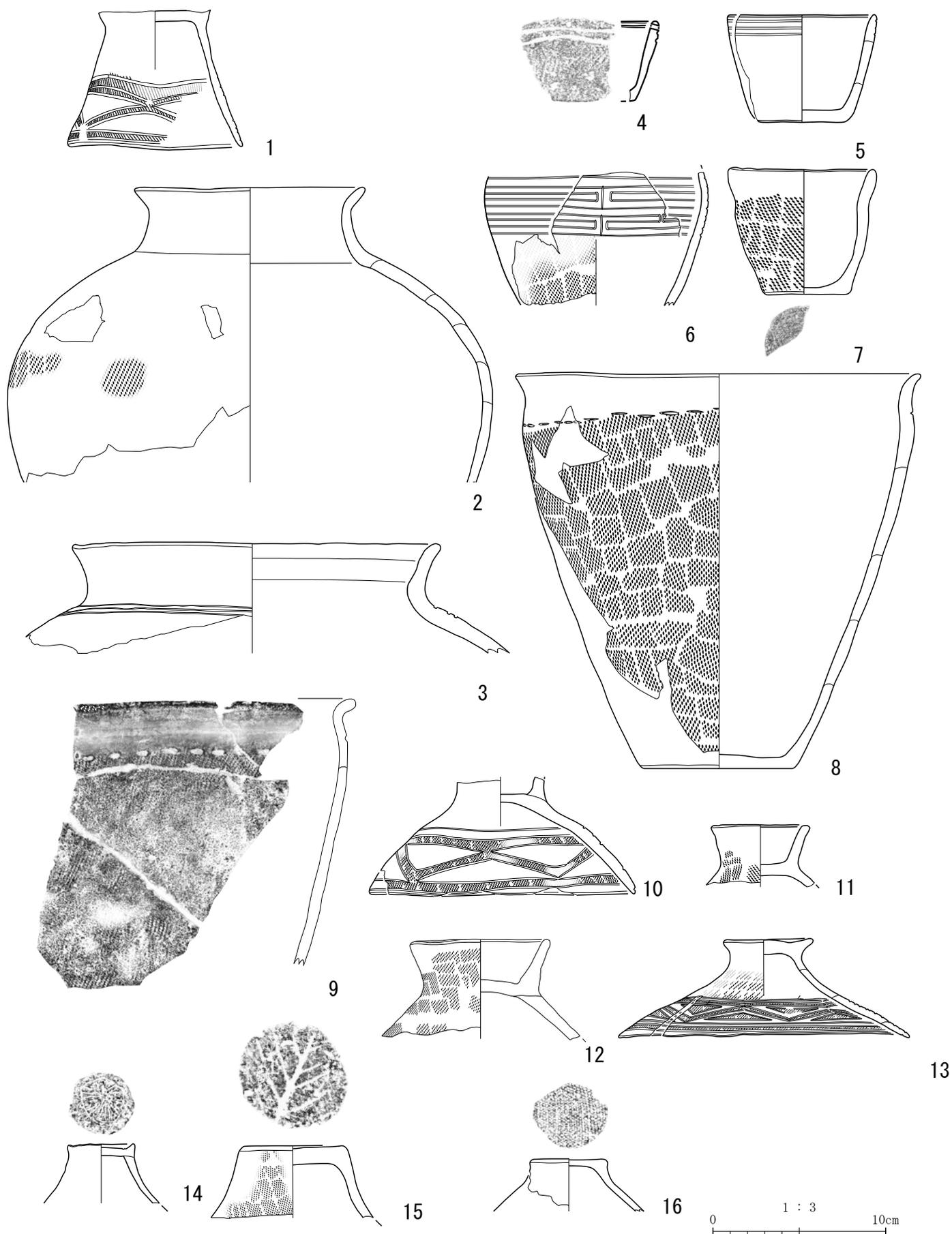
第71図 本調査区5中央部 平面図 (1/120)・断面図 (1/60)



第72図 本調査区5中央部・南部 平面図 (1/120)・断面図 (1/60)

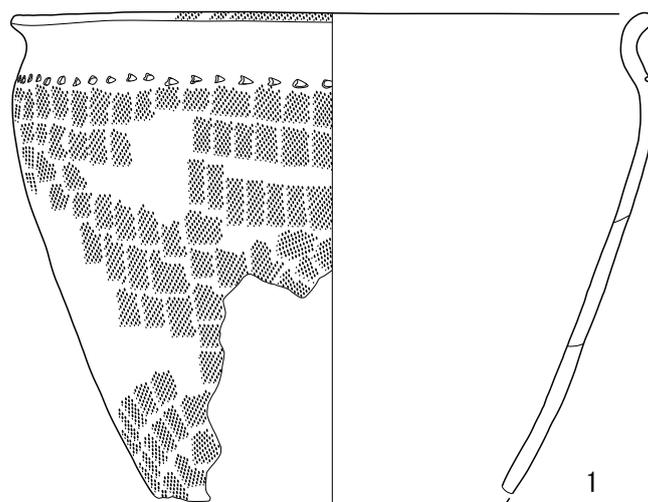


第73図 本調査区5南部 平面図 (1/120)・断面図 (1/60)

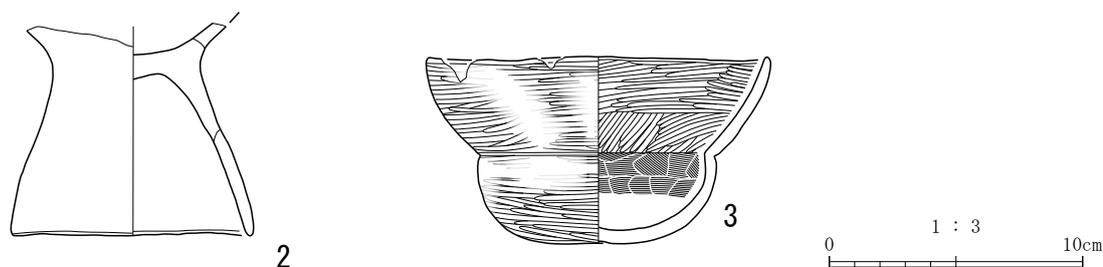


第 74 图 第本調査区 5 中央部・南部 出土土器 (1)

SD11 1層



SD12 1層

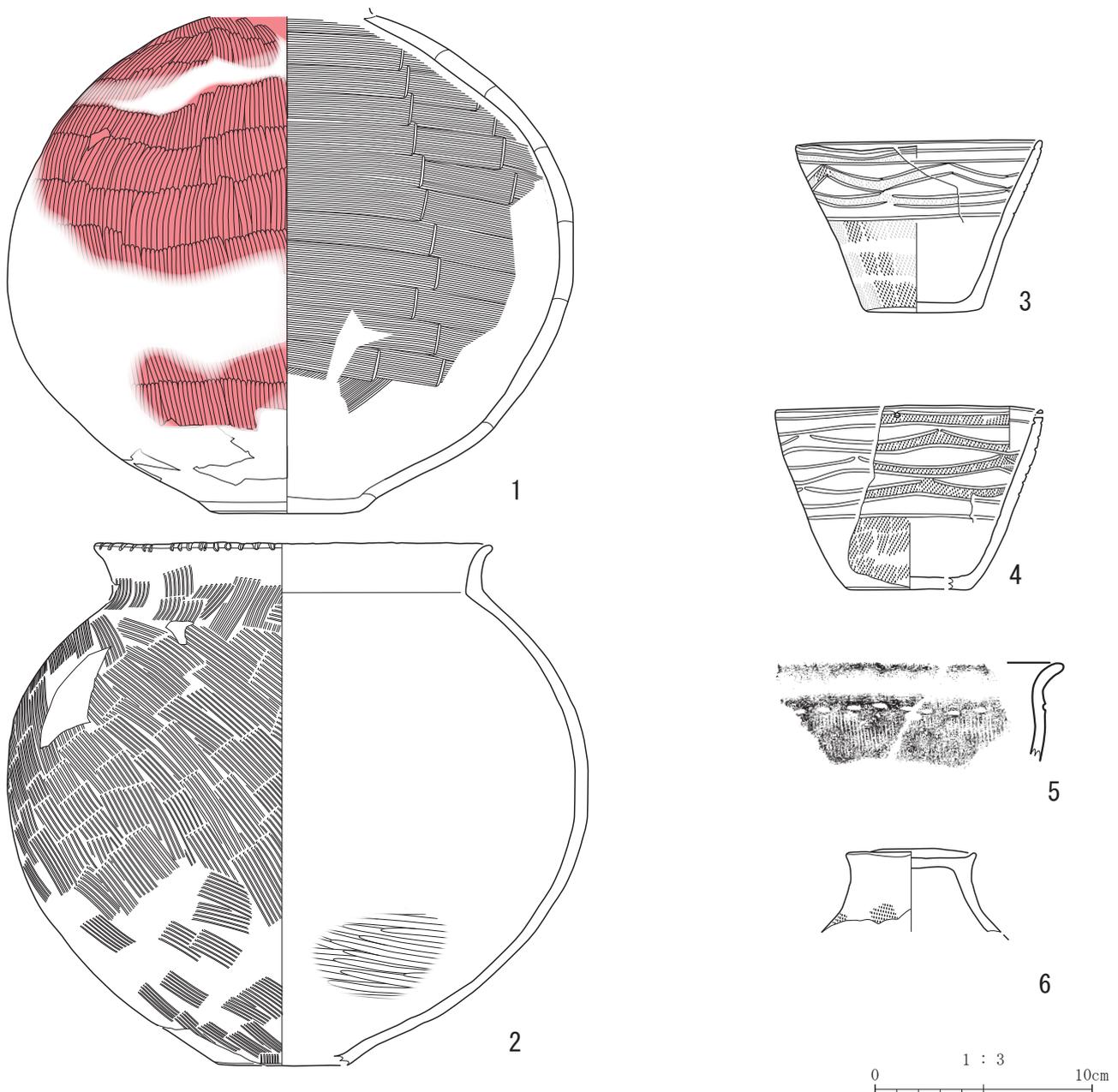


第75図 本調査区5中央部・南部 出土土器(2)

本調査区5中央部・南部出土の弥生土器

第74図は本調査区5中央部の遺物集中範囲から出土した弥生土器である。1は高坏脚部である。裾に層波文が施され、植物茎回転文が充填される。摩耗が著しい。2は壺の口縁部から胴部である。頸部はやや内側に傾き、口縁は外反する。内外面とも剥離し調整は確認できない。胴部にごく一部縄文が残る。3は壺である。口縁～胴上部が残存する。頸部は胴部から短く大きく外反して立ち上がり、やや外湾しながら口縁部となる。外面の頸部直下には3条の沈線が巡る。口縁部内面には帯状に窪みが巡り、一見緩やかな有段口縁にも見える。内外面ともにミガキ調整しており、平滑に仕上げている。4は小型鉢破片である。口縁下位に穿孔が施される。5は小形鉢である。口縁～底部が残存し全形を把握できる。胴部は底部からわずかに内湾しながらほぼ直線的に立ち上がる。外面口縁部直下に2条の沈線が施され、底部外面に木葉痕が残る。内外面はミガキ調整の痕がうかがえるが、外面の磨滅が激しく、不明瞭である。6は甕である。頸部の括れ以下～胴部上半が残存し、口縁部・底部を欠損している。頸部から胴部最大径まで内湾しながら開き、底部に向かってやや直線的に窄む。胴部に横位の文様帯を区画し、沈線で四角文を2段に描いている。文様帯の下部には縄文が施文されるが、四角文内の縄文が充填されたか磨消されたかは、摩耗が激しく不明である。胴部内面は平滑に仕上げられているが、調整の詳細は摩耗のため不明である。7は鉢である。口縁～底部が残存し全形を把握できる。胴部は底部からやや内湾しながら開く形状をもち、口縁部はやや屈曲し直線的に外反する。胴部外面は全面に縄文が施文される。口縁部外面と内面全面はナデで調整される。底部に布目痕が残る。8は甕である。口縁から底部が残存し全形を把握できる。口縁は外反し、頸部がナデ調整され、胴部の地文との境に刺突による列点文が施される。列点文は両端が切れ長の細長い特徴的なものである。胴部の縄文は1条が他より深い圧痕となっており、直前段が3条のLRであることが容易に判別できる。内面には全面にやや粗い横位のミガキ調整が残る。底部外面には木葉痕が残る。9は甕である。口縁から胴部まで残存する。口縁はやや強く外反し、口唇部に向かって短く開く頸

部にナデ調整が残り、胴部の地文との境に刺突による列点文が施される。列点文は胴部の縄文施文の後に施され、左横から右横に刺突されている。内外面の一部は摩滅が激しいが、内面全面はミガキ調整される。10は蓋である。天井部の天端が立ち上がりつまみ部分を作るが、つまみ部上端が欠損しており、欠損部分が研磨されていることから、高坏の脚が切断されて転用された可能性も考えられる。体部は内面の底が小さくやや窪み、わずかに内湾しながら大きく開いて外反する。胴部外面の下半には層波文が描かれ、線間に縄文が施文されている。沈線と縄文の切り合いから縄文が施文されたあとに層波文が描かれ、不要部分をミガキで磨り消したものと考えられる。内面の調整については摩滅により不明である。11～16は蓋である。11・12はつまみを有する蓋である。13は天井端部を横につまみ出しており、体部は直線的に開く。外面はミガキ調整が一部確認されるが、内外面ともに摩耗が著しい。三角に区画された施文範囲は縄文が磨消される。14は天井端部を上につまみ上げた形状を持つ。天井部に円に囲まれた放射状の沈線が施される。15は天井部に木葉痕が残り、端部は平坦である。16は蓋である。天井部の側縁がわずかに張り出す。天井部から直線的に外反する。内外面にケズリとナデ、一部にミガキ調整も見られる。天井部外面に布目痕が残る。第75図はSD11及びSD12で出土した弥生土器と土師器である。1は弥生土器甕の口縁から胴部である。頸部はナデ



第76図 本調査区5南部SD15 出土土器

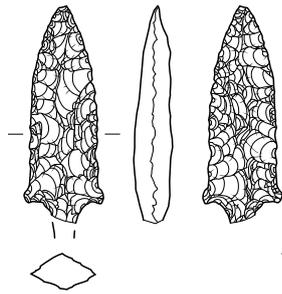
後ミガキ調整され、口縁端部に縄文を施す。内面は横方向にケズリ調整され、口縁付近はミガキ調整される。2はSD12で出土した弥生土器脚部である。体部はやや湾曲するがあまり大きく開かない。内外面ともにヘラナデ調整される。3は土師器坏である。体部に稜を持ち、口縁にかけてやや内湾しながら立ち上がる。底部は丸底で中心が少し凹む。

第76図はSD15から出土した土師器と弥生土器である。1・2は土師器である。1は壺である。口縁～頸部を欠損する。胴部中央が最も張り出し、外面は赤彩され縦位のミガキ調整される。内面はケズリ調整される。2は甕である。底部を欠損する。胴部上位が最も張り出し、外面は全面ハケメ調整され、口唇部には刻みが入る。内面はケズリ調整される。3～6は弥生土器である。3・4は小型鉢である。3は底部から口縁にかけて直線的に開く形状を持ち、4

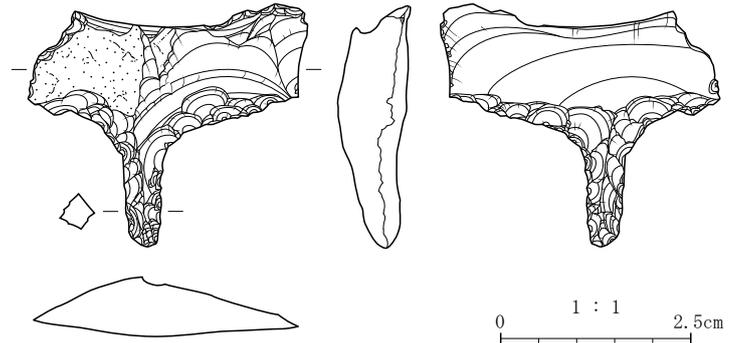
第43表 本調査区5中央部・南部 弥生土器観察表

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	種別	器種	部位	口径	底径	器高	地文/施文	外面調整/内面調整	備考
74- 1	27- 2	B025	本5西/IX層	弥生土器	高坏脚	脚天井～端部	-	9.9	(8.0)	植物茎回転文/層波文	ミガキ/脚内部ケズリ・坏底部ミガキか	骨針微量
74- 2	25- 3	B026	本5西/IX層	弥生土器	壺		13.4	-	(17.4)	LR詳細不明/-	-/-	骨針含む
74- 3	27- 1	B027	本5南東/IX層	弥生土器	壺	口～胴	20.9	-	(6.4)	/平行沈線(3本)	沈線→ミガキ/ミガキ	骨針微量
74- 4	27- 5	B028	本5南西/IX層	弥生土器	鉢	口縁～胴下部	-	-	(4.5)	縄文/沈線2条・穿孔1	-/ミガキ	内面口縁下位に沈線1条
74- 5	27- 6	B029	本5南東/IX層	弥生土器	鉢	口～底	7.5	4.3	5.6	/平行沈線	ミガキ→沈線/ミガキ?	底面に木葉痕骨針微量
74- 6	27- 4	B030	本5南東/VII層	弥生土器	甕	頸～胴部	-	-	(7.8)	L3R/沈線(四角文)	縄文・沈線/ナデ	
74- 7	27- 7	B031	本5南東/IX層	弥生土器	鉢	口～底部	8.2	4.7	7.2	LR詳細不明/-	縄文/ナデ	底面に布目
74- 8	28- 1	B032	本5南東/IX層	弥生土器	甕		23.5	8.6	23.0	L3R/刺突	ナデ→縄文→刺穴	
74- 9	29- 4	B033	本5南東/VII層	弥生土器	甕	口～胴部	(26.8)	-	(15.5)	L3R/刺突	ナデ→縄文→刺突/ミガキ	
74-10	28- 2	B034	本5南東/IX層	弥生土器	蓋	つまみ～体～端部	-	15.3	(6.9)	L3R/層波文	沈線→縄文→ミガキ→沈線/ナデ	
74-11	29- 6	B035	本5西/IX層	弥生土器	蓋	つまみ～体部	5.8	-	(3.6)	LR詳細不明/-	ナデ→縄文/ナデ	
74-12	29- 8	B036	本5西/IX層	弥生土器	蓋	つまみ～体部	7.1	-	(5.1)	LR詳細不明/-	ナデ→縄文/ナデ→ミガキ	骨針含む
74-13	28- 3	B037	本5南西/IX層	弥生土器	蓋	つまみ～端部	5.2	16.8	5.7	L4R/層波文・	ミガキ/ケズリか	内面口縁下位に沈線1条文骨針微量
74-14	29- 7	B038	本5東/IX層	弥生土器	蓋	天井～端部	3.7	-	(3.4)	/天井部 円形放射状沈線文	ナデ/ナデ	
74-15	30- 1	B039	本5東/VIII層	弥生土器	蓋	天井～体部	5.8	-	(4.2)	LR詳細不明/-	ナデ→縄文/ミガキ	底部木葉痕
74-16	30- 2	B040	本5南東/VII層	弥生土器	蓋	天井～体部	4.2	-	(3.1)		ナデ/ナデ	底面
75- 1	27- 8	B041	本5東/SD11/1層	弥生土器	甕	口縁から胴部	25.2	-	(19.0)	L4R/刺突文	ナデ→ミガキ/ケズリ→ミガキ	4950、4947と接合骨針微量
75- 2	39- 3	B042	本5南西/SD12/1層	弥生土器	脚部	脚天井～端部	-	9.3	(8.3)	-/-	ヘラナデ/ヘラナデ	
75- 3	39- 2	C003	本5南西/SD12/1層	非ロクロ土師器	坏	口縁～底部	13.5	4.0	7.4	-/-	ミガキ/ミガキ	
76- 1	26- 1	C004	本5南東/SD15/1層	土師器	壺	頸～底部	-	5.8	23.1	不明	ミガキ→赤色塗彩/ナデ	首～口縁部 欠損
76- 2	26- 2	C005	本5南東/SD15/1層	土師器	甕		18.8	6.0	24.3			
76- 3	26- 3	B043	本5南東/SD15/1層	弥生土器	鉢		11.3	5.0	8.0	LR不明/-	沈線・縄文/ナデ・沈線	
76- 4	27- 3	B044	本5南東/SD15/1層	弥生土器	鉢	口～底部	12.3	5.5	8.5	L3R/-	縄文→沈線→ミガキ/ミガキ→沈線	
76- 5	29- 3	B045	本5南東/SD15/1層	弥生土器	甕		-	-	(4.4)	植物茎回転文/-	ナデ→植物茎回転文→刺突/ミガキ	
76- 6	30- 3	B046	本5南東/SD15/1層	弥生土器	蓋	天井～体部	5.8	-	(3.8)	LR不明/-	ナデ→縄文/ミガキ	

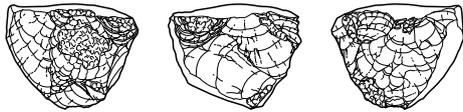
5 区東
SD24 _1 層



5 区東
SD26



5 区東
SD26



3

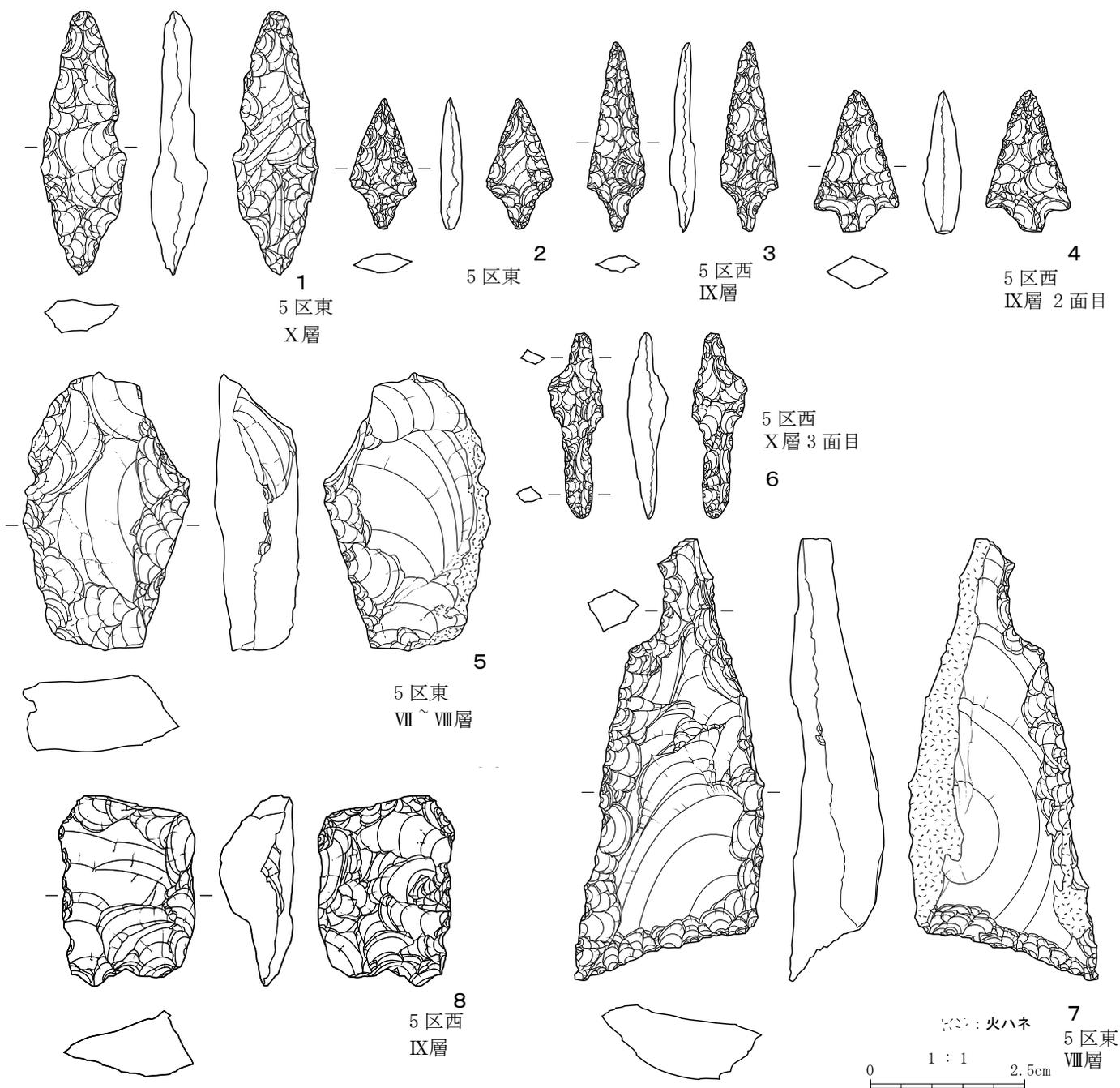
第 45 表 本調査区 5 区出土石器 観察表 (遺構出土遺物)

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	器種		石材 / 素材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
77- 1	42- 6	K024	SD24-1 層	打製石器	石鏃	鉄石英	(2.9)	1.1	0.5	1.3	茎部欠損。
77- 2	42- 7	K025	SD26	打製石器	石錐	黒色緻密質安山岩	3.2	3.7	0.9	5.5	摘部に素材剥片の剥離面を大きく残す。
77- 3	42- 9	K026	SD26	敲打具類	球状敲石	珪質凝灰岩	4.2	5.2	5.2	110.2	石核転用。上面周縁を中心に敲打に伴う小剥離と潰れ有。

第 77 図 本調査区 5 区 出土石器 (1)

右対称に近い形状に調整が施されている。逆棘部を作り出しておらず茎部と身部の境は不明瞭である。また、基部側の厚みを減らすための調整加工が不完全なため先端部側と比べると倍近い器厚となっている。2～4は有茎式の石鏃である。2は先端部から逆棘部にかけて直線的な側縁を持ち、裏面には素材剥片の主要剥離面を大きく残す。逆棘部の作り出しはあまり顕著ではなく、若干太めの茎部と身部の境はやや不明瞭である。3は長幅比が3:1となる細身の石鏃で、先端部から逆棘部にかけては直線的な側縁が作り出されている。2・3の横断面形は器体中軸線上に稜を持たない薄手の形態に整えられている。4は比較的大きめの二次加工によって全体的な形状を整えた後、側縁部を中心に微細な調整を施している。先端部から逆棘部にかけての側縁は直線的で、逆棘部の作り出しも顕著である。横断面形は器体の中軸線上に稜を持つ菱形状を呈する。5は流紋岩を素材とした石鏃の未成品である。左側縁部に礫面を有しており、右側縁方向から連続的な二次加工を施して形状を成形する途中で作業を中断している。6は流紋岩の剥片を素材とした石錐で、上下両端に先端部を持つ。先端部の横断面形は、上部側が器体中軸から外れた平行四辺形状を、下部側が細部調整の角度がやや緩いため角があまり明瞭ではない菱形状を呈している。器体の縦断面形を見ると上半部側に上最大厚を有し下端部側へ向かって滑らかに先鋭化している様子が観察されるため、石鏃の未成品あるいは欠損品を転用した可能性も考えられる。7は硬質泥岩のやや大ぶりの剥片を素材とした縦型の石匙で、左側縁と下端縁に表裏面両方向から施された細部調整により直線的な刃縁を作り出している。摘みの挟り部分は主に左側縁と中心に加工されており、左右非対称の形態に整えられている。8は流紋岩の剥片を素材とした二次加工痕を有する剥片で、ピース・エスキューと考えられる。表面には素材剥片の剥離面を大きく残し、裏面には左右両側縁方向から器体の厚みを削ぐことを目的とした二次加工が施されている。

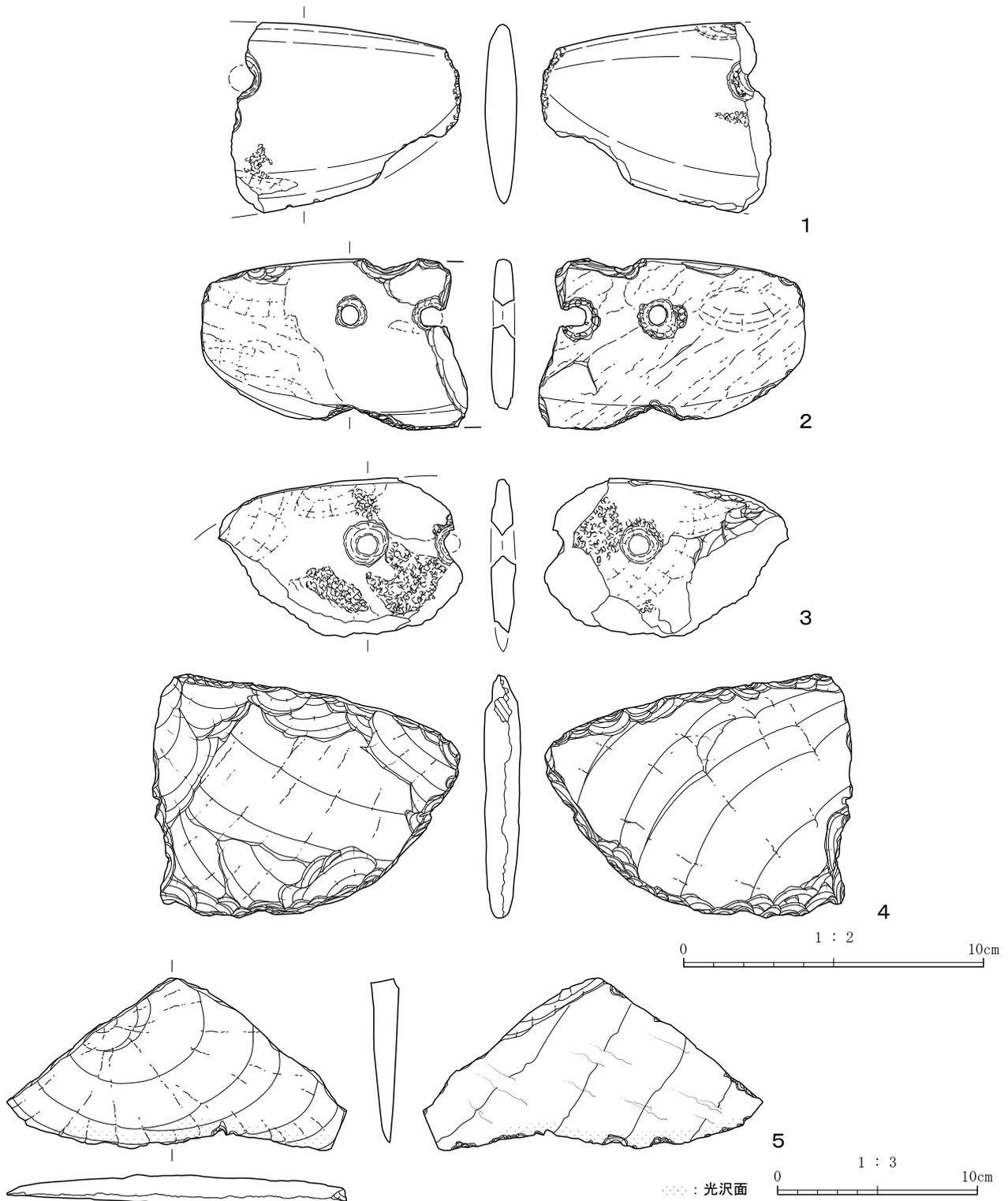
第 79 図 1～5は石庖丁とその未成品である。1は紐孔部で破損した成品破片で、残された形状から直線的な背部と側縁を作り出す外湾刃半月形の石庖丁と考えられる。研磨前に施されていたと考えられる剥離や敲打による成形加工の大半は研磨によって消されている。2も1と同様の形態を持つと見られるが、側縁部分は器体長軸に対してほぼ垂直な角度で直線的に成形されている。また、裏面の研磨成形はあまり顕著ではなく、全体的に敲打による成形加工の痕跡が残されている。右の紐孔部で折損した後、背部と刃部のほぼ対向する位置に挟り状の二次加工を施しており、石錘に転用された可能性が考えられる。3も1に類似した形態を持つ石庖丁の破片と考えられるが、折損後に刃部側に施された剥離によって形状が大きく変わってお



第46表 本調査区5区出土石器 観察表

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	器種	石材 / 素材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	
78-1	42-8	K027	X層	打製石器	石鏃	片岩類	4.3	1.4	0.9	3.8	調整加工から石鏃と判断。
78-2	42-10	K028	X層	打製石器	石鏃	鉄石英	2.1	1.1	0.4	0.7	裏面に素材剥片の主要剥離面を残す
78-3	42-11	K029	IX層	打製石器	石鏃	片岩類	3.1	0.9	0.4	0.7	細身で長幅比3:1の形状を呈する。
78-4	42-12	K030	IX層	打製石器	石鏃	流紋岩	2.4	1.4	0.6	1.5	表裏面中央部に稜を持ち、横断面形は菱形を呈する。
78-5	42-13	K031	VII~VIII層	打製石器	石鏃 未完成品	流紋岩	4.5	2.7	1.4	16.9	左側縁部に素材の元礫面に近い部分を残す。
78-6	42-14	K032	X層	打製石器	石錐	流紋岩	3.0	0.9	0.6	1.1	柄部を持たない棒状を呈する。
78-7	42-15	K033	VIII層	打製石器	石匙	硬質泥岩	7.1	3.2	1.5	20.7	右側縁は「火はね」後に二次加工が施される。
78-8	43-16	K034	IX層	打製石器	RF	流紋岩	3.1	2.2	1.2	7.3	素材の厚みを削ぐ為の二次加工が観察される。

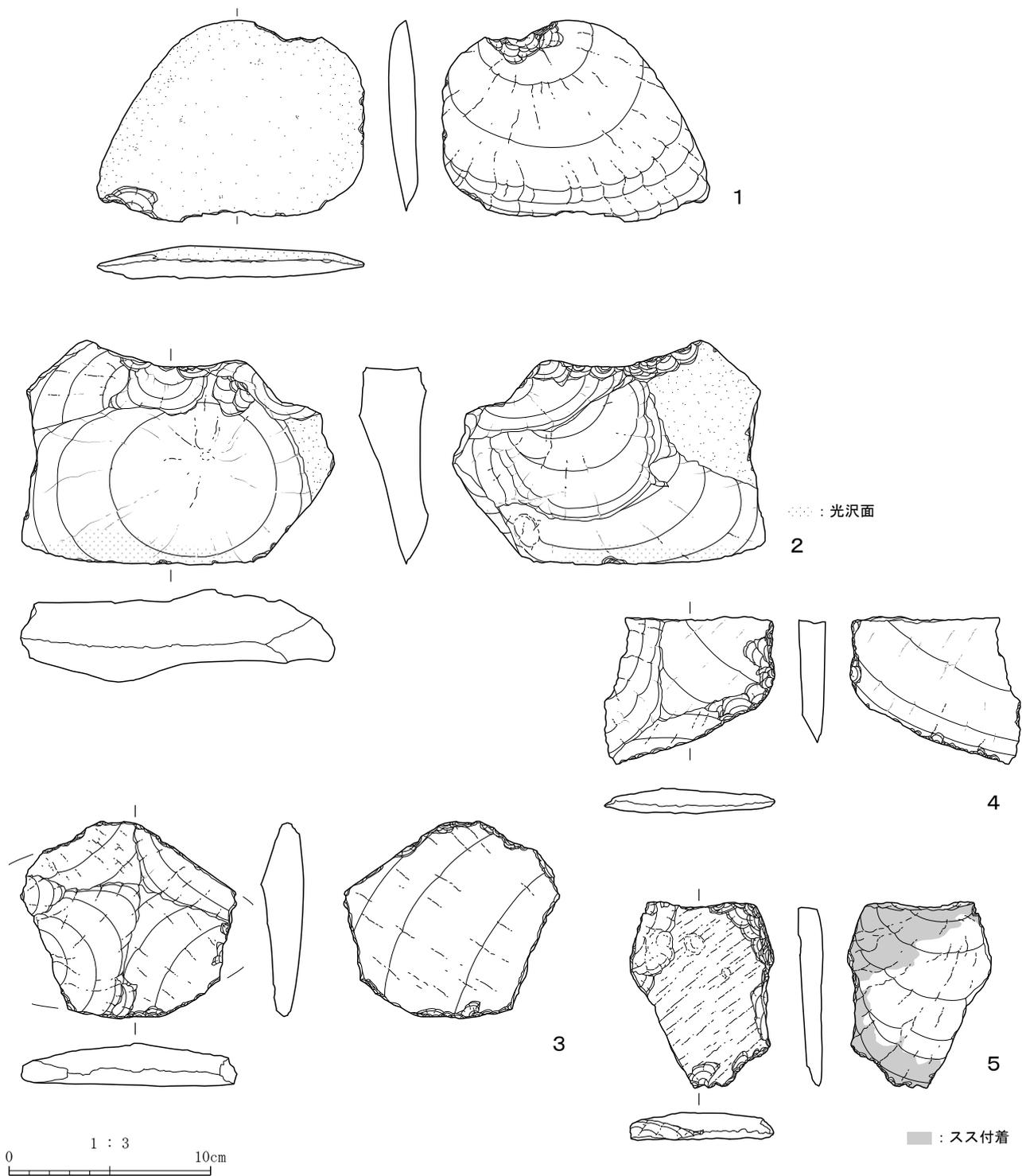
第78図 本調査区5区 出土石器 (2)



第47表 本調査区5区出土石器 観察表

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	器種	石材 / 素材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
79- 1	43- 2	K035	X層	石砲丁	成品破片 片岩類	(6.5)	(7.7)	1.1	(72.3)	紐孔部で折損している
79- 2	43- 3	K036	X層	石砲丁	成品破片 片岩類	(5.8)	(8.9)	0.9	(54.7)	折損後、上下縁辺の対向する位置に挟り状の二次加工を施している
79- 3	43- 4	K037	X層	石砲丁	成品破片 片岩類	(5.3)	(8.1)	1.1	(47.2)	折損後に下端縁を中心に二次加工を施す
79- 4	43- 5	K038	X層	石砲丁	未成品 片岩類	8.2	10.3	1.2	(124.5)	周縁に成形を目的とした二次加工が観察される
79- 5	44- 1	K040	VII~VIII層	打製石器	大型 板状石器 凝灰岩質 安山岩	8.7	17.0	1.4	186.3	

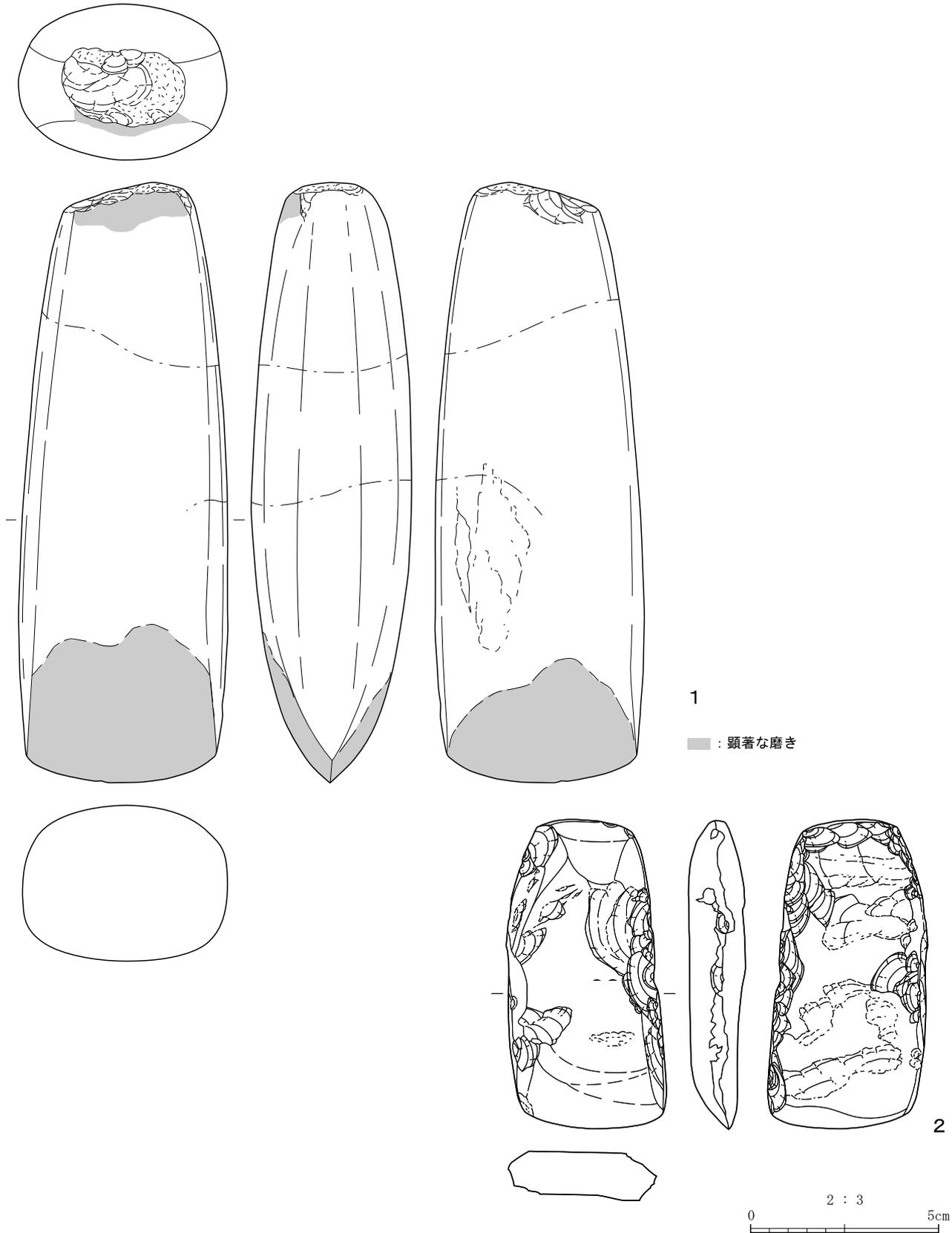
第79図 本調査区5区 出土石器 (3)



第48表 本調査区5区出土石器 観察表

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	器種	石材 / 素材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
80-1	43-6	K039	IX層	打製石器 大型板状石器	凝灰岩質 安山岩	10.2	13.2	1.5	247.5	周縁の一部に二次加工。原礫面を大きく残す
80-2	44-2	K041	IX層	打製石器 大型板状石器	凝灰岩質 安山岩	11.2	15.5	3.4	(686.0)	
80-3	44-4	K042	IX層	打製石器 大型板状石器	凝灰岩質 安山岩	9.9	(10.7)	2.1	(252.3)	左右側縁部欠損。
80-4	44-3	K043	IX層	打製石器 大型板状石器	凝灰岩質 安山岩	7.4	8.4	1.3	79.5	
80-5	44-5	K044	IX層	打製石器 大型板状石器	凝灰岩質 安山岩	9.4	7.1	1.2	98.5	敲打具として転用か。炭化物付着ありz

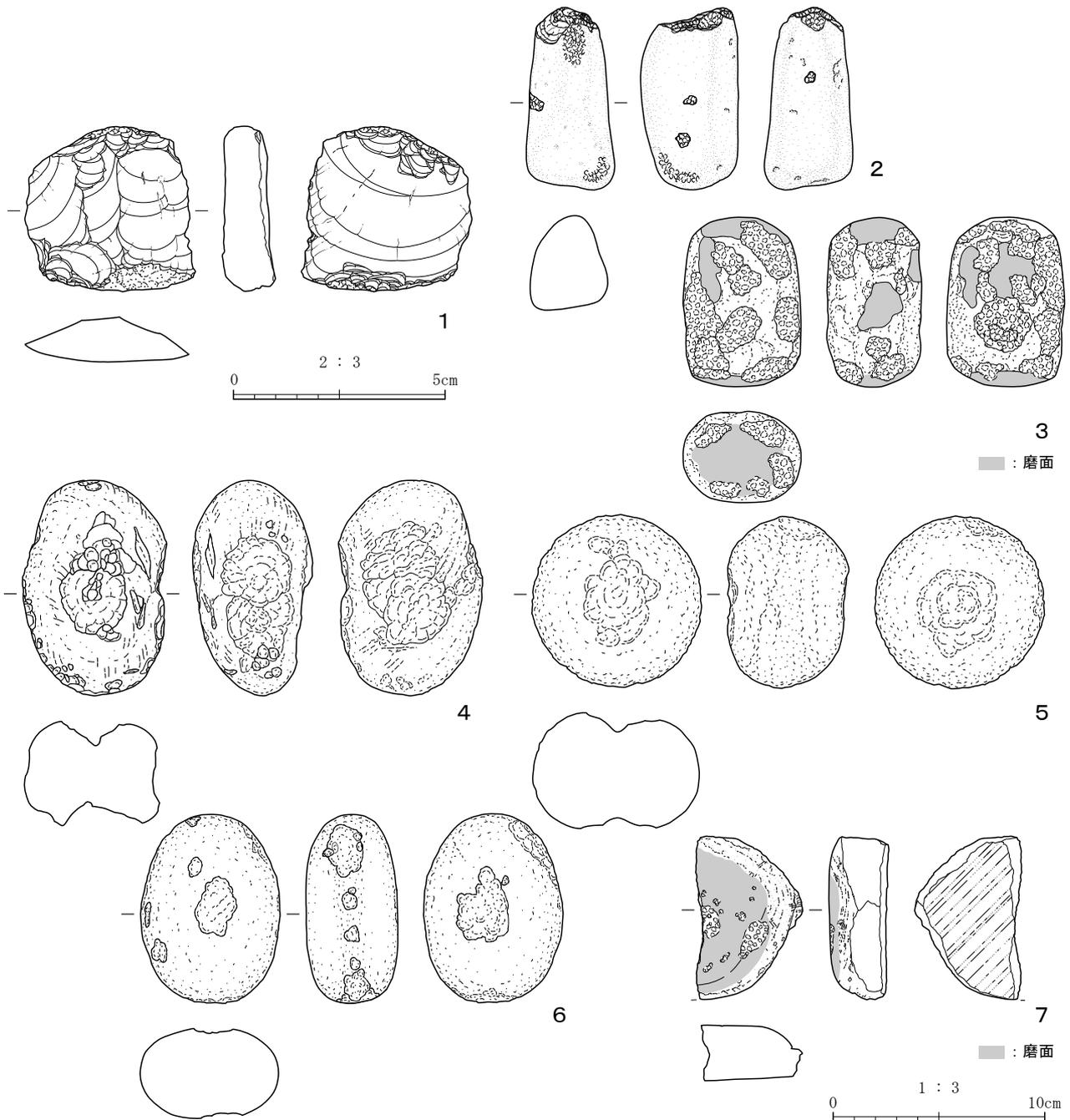
第80図 本調査区5区 出土石器 (4)



第49表 本調査区5区出土石器 観察表

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	器種	石材 / 素材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
81- 1	44-6	K045	X層	磨製石斧 大型蛤刃	斑レイ岩	16.1	5.6	4.6	698.0	刃縁部分のみ再研磨が施されている。
81- 2	44-7	K046	IX層	磨製石斧 扁平偏刃	安山岩	8.3	4.3	1.5	91.0	研磨前の剥離痕を大きく残す。

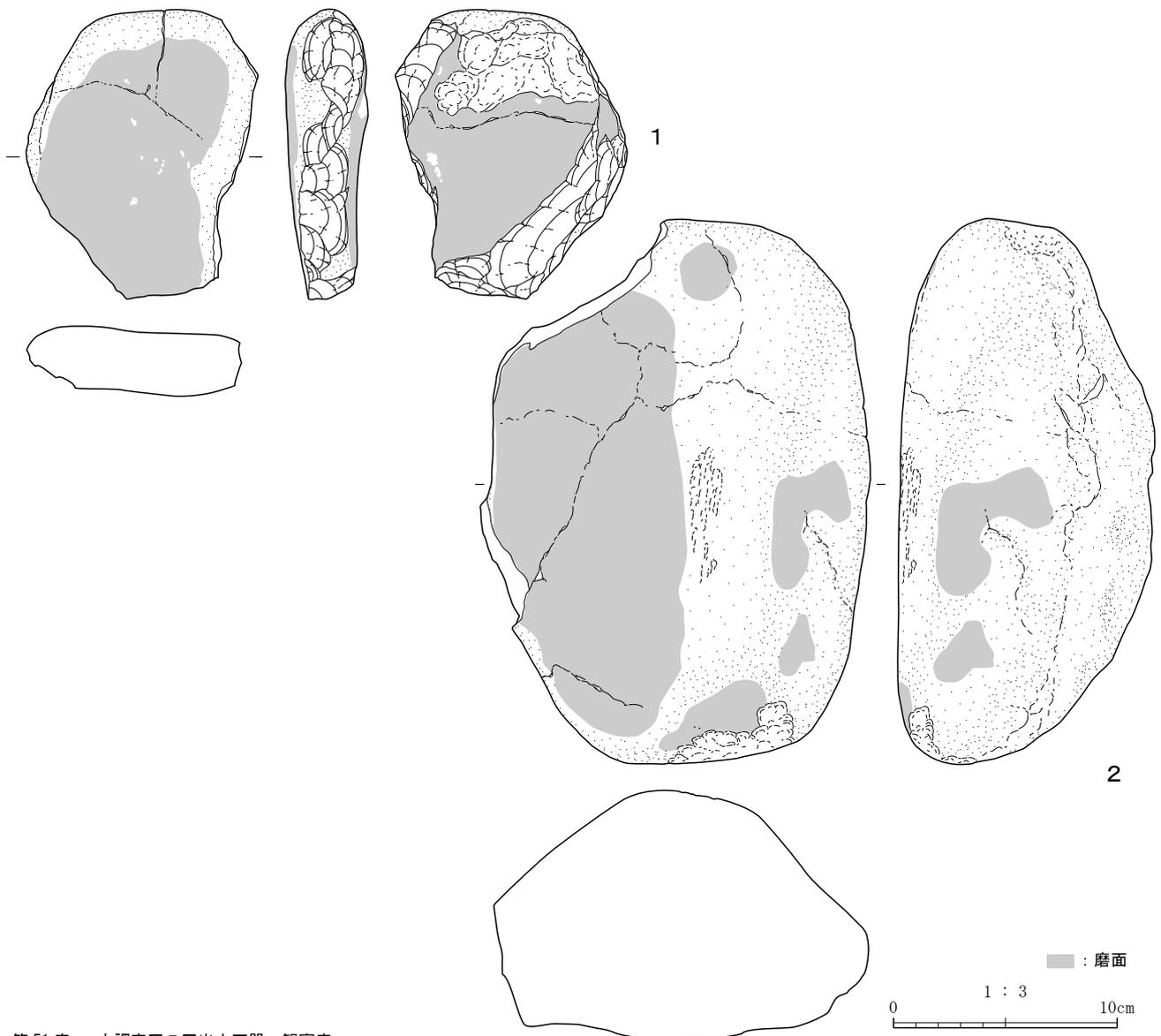
第81図 本調査区5区 出土石器 (5)



第50表 本調査区5区出土石器 観察表

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	器種	石材 / 素材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	
82-1	45-1	K047	IX層	敲磨具類	ハンマー	流紋岩	3.9	4.0	1.3	17.0	剥片素材。両端部に敲打痕の累積あり
82-2	45-2	K048	IX層	敲磨具類	ハンマー	凝灰岩	8.7	4.2	4.7	228.0	上端部に敲打に伴う剥離あり
82-3	45-3	K049	X層	敲磨具類	磨・敲	石英斑岩	8.1	5.6	4.5	338.5	上下端部を中心に顕著な磨面あり
82-4	45-4	K050	VII層	敲磨具類	敲	安山岩	10.3	6.8	5.7	320.5	表裏面と右側面に顕著な凹痕あり
82-5	45-5	K051	X層	敲磨具類	敲	多孔質安山岩	8.2	8.0	5.8	266.0	表裏面に凹痕。左右側面に弱い敲打痕の累積
82-6	45-6	K052	IX層	敲磨具類	敲・磨	安山岩	9.0	6.6	4.4	329.5	表裏面の中央部に敲打痕が累積する
82-7	45-7	K053	VII~VIII層	敲磨具類	磨	珪質凝灰岩	7.8	(5.1)	2.9	132.8	表面に顕著な磨面が広がる

第82図 本調査区5区 出土石器 (6)



第 51 表 本調査区 5 区出土石器 観察表

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	器種	石材 / 素材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	
83- 1	45- 8	K054	IX層	石皿類	磨	安山岩	(13.0)	(10.4)	3.7	598.0	曲面的な磨面。被熱。
83- 2	45- 9	K055	IX層	石皿類	砥石	安山岩	24.6	17.5	11.5	5900.0	限定的な砥面が数ヶ所観察される

第 83 図 本調査区 5 区 出土石器 (7)

り定かではない。表面側には研磨面下に成形時の剥離面や敲打痕がわずかに残されているが、裏面側にはやや粗めの剥離成形がほぼそのままの形で残されておりあまり入念な研磨成形は行われていない。4・5はいずれも研磨成形に至る前の段階で作業が中断している未成品もしくは素材であると考えられる。4は周縁部の剥離による成形までが施された段階の未成品であり、全体の約 1/2 弱が残存する。紐孔部の設定もなされていないため全体形状は推測であるが背部の成形が比較的直線的であることから外湾刃半月形の石庖丁となる可能性が高いと考えられる。裏面に観察される剥離面は大きな一つのものであり、素材獲得時の剥離面がそのまま用いられている。5は凝灰岩を石材とする石庖丁の初期未成品と考えられる。表面には原礫面を大きく残し、裏面の打点周辺の厚みを削ぐための剥離成形と下端縁を直線的に整えるような二次加工痕が認められる。

第 80 図 1~5 はいずれも板状節理を有する凝灰岩質安山岩を石材とした大型板状石器とその破片、転用品と考えられる資料である。1の表面は節理面、裏面も節理に沿って分割した形に近い剥離面をそのまま用いており、上端縁を折り取って平面形が三角形状になるように整えている。下端縁は直線的に調整されており、刃縁近くには使用に伴うと考えられる弱い光沢面

が部分的に観察される。2はやや身厚な剥片を素材としており、主に背部側に連続的な二次加工を施して形状を調整している。光沢面はやや不明瞭である。3は両側縁部を欠損した成品破片である。背面側に施された二次加工はいずれも浅く、素材縁部の角を潰すような目的で調整されたものと考えられる。下端面裏面側にはやや弱い光沢面が観察される。4は鋭い一縁辺を残して他の部分を折り取り、全体的にやや小形の四角形状に成形している。残された下端縁には微細な剥離痕が観察され、裏面にはやや弱い光沢面が観察される。5は大型板状石器の破片を敲打具として転用したのと考えられる。表面の大半は節理面で裏面にはすす状の炭化物が付着している。右側縁上部を中心に敲打に伴う微細な剥離痕が累積している。

第81 図1は斑レイ岩を石材とした太型蛤刃石斧である。横断面形状は隅丸の方形形状を呈し、両側面が比較的明瞭に作り出されている。基端部には製作時の剥離面が部分的に残り、刃部は弧状を呈する。器体には研磨成形によって消えきらなかった製作時の剥離面も部分的に残るが、刃縁周辺は非常に鋭利に保たれ、器体の研磨面に後続する研磨面を形成していることから、刃部のみ再研磨を施している可能性がある。また、基端部側及び刃縁側の両端に赤褐色の付着物がやや不明瞭に残る範囲が観察されており、図上では一点鎖線にて示した。器体中央部分には確認されないことから、斧柄との着柄と使用に伴う痕跡ではないかと考えられる。2は安山岩を石材とした扁平片刃石斧である。平面形は左側縁がわずかに外湾する台形状である。右側縁部が直線的であるのは右側面に平面的な研磨面が存在していることに起因しており、成形調整時の剥離痕を消す目的として実施された研磨の可能性が高いと判断される。表裏面ともに研磨面下には成形時の剥離面が比較的明瞭に残されており、研磨面には擦痕が伴っている。

第82 図1～7は敲打具類で、いずれも調査区中央部分の遺物包含層中から出土したものである。1は流紋岩を石材とした剥片素材の敲打具で、上下両端には敲打に伴う微細な剥離と潰れ痕が観察される。縦断面形は上下両端がやや平坦になった長方形形状を呈している。2は凝灰岩の自然礫を素材としており、上端部には剥離面と剥離面によって構成される稜線上に敲打痕跡が観察される。1・2共に比較的鋭利な箇所が選択的に用いられており、石器製作の際に使用されたものである可能性も考えられる。3は全面に剥離面と敲打に伴うツブレ痕跡が観察され、それらすべてに後続する形で非常に特徴的な光沢をもった磨面が形成されている。磨面は平坦ではなく連続的かつ曲面的であり、詳細は不明であるが対象物が比較的大きく柔らかいものであった可能性が考えられる。4～6は磨痕と敲打痕と凹痕が複合して残されている礫石器で、4・6は安山岩を5は多孔質安山岩を石材としている。4は表裏両面に加えて右側縁部にも発達した凹痕が観察される。5・6の側縁部には敲打痕と磨痕が複合しており、作業の累積によって面を形成しつつある箇所も観察される。7は珪質凝灰岩を石材としており、被熱によって部分的に赤化している。裏面は節理面で構成されており、本来であれば扁平な自然礫であったと考えられる。器体中央部分に光沢をもった磨面が広く形成されており、曲面的な磨面であるためその一部は側面側にまで及んでいる。

第83 図1・2は共に安山岩を石材とした石皿である。1は扁平な礫を素材としており、表裏両面にはやや湾曲した磨面が観察される。右側面には表裏両面からの剥離調整によって形状を成形した痕跡が確認され、磨面との重複関係から、裏面の磨面→右側面の剥離調整→表面の磨面、といった先後関係が存在している。また、裏面上部には磨面に後続する敲打痕跡も確認される。2は横断面形が三角形形状を呈する大形の礫を素材とし、その2面に比較的平坦で局所的な磨面が複数観察されていることから、砥石としての使用を行っていた可能性が考えられる。

6. 本調査区 6・7 (第 84 図)

周知の遺跡範囲の西側に位置する本調査区 6・7 は、平成 28 年度試掘調査において部分的に確認した試掘調査区 3-1～3-4 を内包する形で設定した、東西約 130m・南北約 3～4m の範囲に及ぶ調査区である。本調査区 6・7 は、基本層 X 層上面の標高の違いから以下の二つのまとまりに大別した。

①本調査区 6：基本層 X 層上面の標高は西側で約 2.3m、東側で約 2.4m で、直上の堆積層は主に自然流路である SR10-4 層で、その上部は弥生時代の津波堆積層と考えられる粗粒砂～中粒砂を多く混在する堆積層が覆う。全体的に低平な平坦

面であり、基本層 X 層上面は顕著に起伏する。SR10 自然流路跡の南岸部に相当する部分だが、流路の立ち上がり際縁辺が調査区内をかすめている程度であるため、流路の最深部からは若干の距離があると考えられる。

②本調査区 7：基本層 X 層上面の標高は最深部で約 1.15m、最高部で約 2.7m で、直上の堆積層は東側では基本層 IX 層、西側では自然流路 SR11-4～6 層、自然流路 SR10-2 層などで、場所により弥生時代の津波堆積層と考えられる粗粒砂～中粒砂を多く混在する堆積層が直接覆っている所も確認される。調査区内に 2 本の自然流路が存在することによって起伏に富んだ地形面が形成されている。自然流路跡の東岸にあたる調査区東側は、標高約 2.6～2.7m 前後の微高地状となっており多くの遺構が確認されている。

以下では二つのエリアごとに検出遺構と出土遺物を概観する。

(1) 本調査区 6 (第 84～89 図、第 52・53 表)

平面確認において弥生時代の津波堆積層上面を確認面とし、調査区西端の北西方向から南東方向へ向けて直線状に延びる畦畔状のプランを確認した。断面で確認できた堆積層は基本層 II・III・VI・VII・X 層で、これに加えて VI～VII 層間に a 層：灰白色火山灰層と VII 層下位に b 層：洪水堆積層、SR10 自然流路跡の堆積物が確認されている。

出土遺物は全体的に少なく、弥生土器 137 点と石器・礫 9 点が出土した。

【水田畦畔跡 (基本層 IX 層相当)】

弥生時代の津波堆積層の上面確認の際に確認された、津波堆積層に覆われていない SR10-4 層の範囲に、調査区西端の北西方向から南東方向に向けてほぼ直線状に延びる。検出幅は約 0.4m で平面的な高まりとしてはとらえられなかった。南壁断面では SR10-2 層と SR10-4 層の間に、本来であれば SR10-3 層に加えて c 層：弥生時代の津波堆積層が存在するが、検出範囲の壁断面では両層が存在していない状況が確認された。断面で確認された上端と下端の比高差は約 0.1m である。

このため、平面的な高まりとしてはとらえられなかったが水田畦畔の可能性のある平面プランとして報告する。周辺からは弥生土器片が少量出土している。

【SR10 自然流路跡】

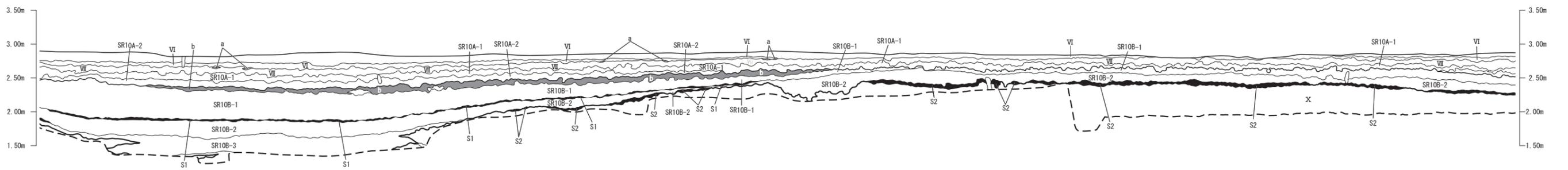
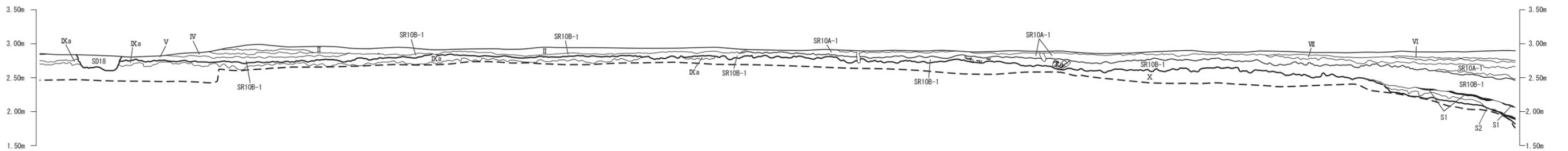
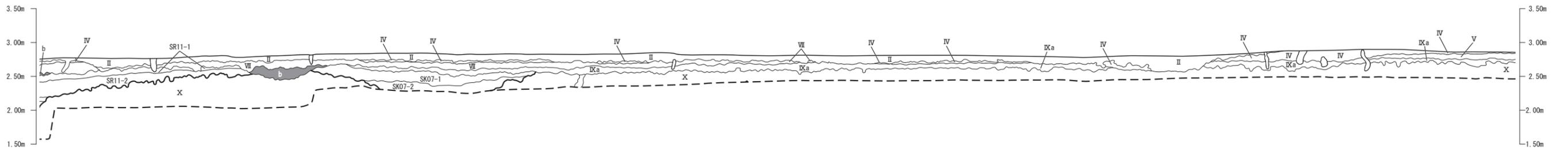
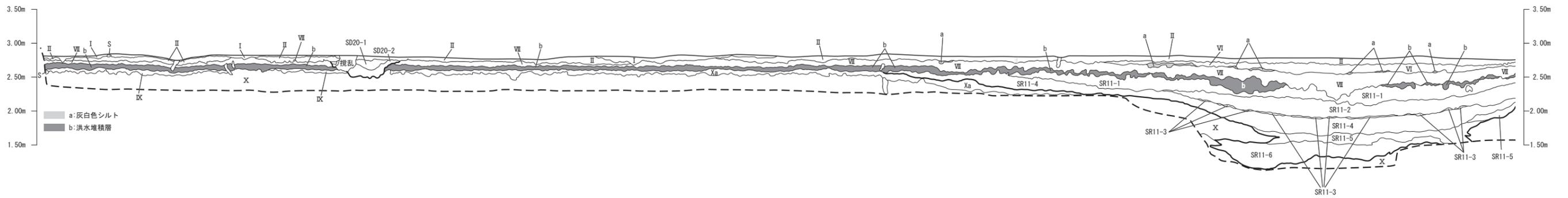
標高約 2.3m の X 層上面で確認した。調査区の北側から調査区内へ進入する、流路の南岸部分のみが確認されている。平面的な位置関係からみると、第 1 次調査の SR 1 の上流側延長部分である可能性があり、本報告の SR01 自然流路跡と同一の流路である可能性もある。

調査区南壁断面を検討すると、基本層 X 層上面で確認した自然流路の南岸に相当する立ち上がりは、本流路の下層部分の堆積層の平面プランであり、本来の流路堆積土は標高約 2.6m 前後まで存在していたことが判明した。このことから、本来の SR10 自然流路跡の南岸は本調査区 6 よりもさらに南側に位置しており、本調査区全体がほぼ SR10 自然流路の範囲内であるものと考えられる。

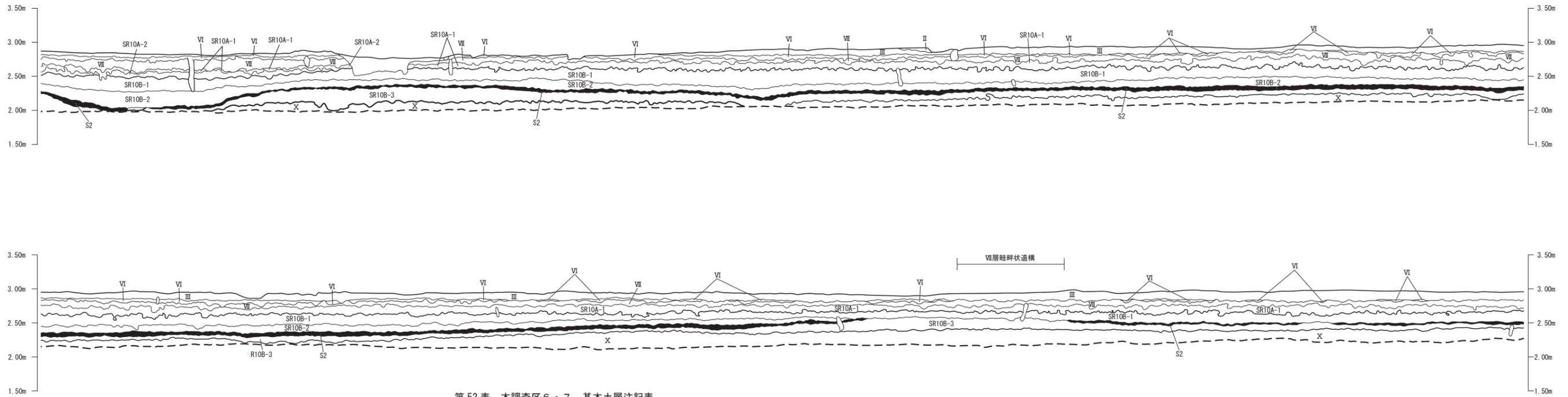
確認された堆積土は 4 層で、上面は b 層：洪水堆積物によって覆われている。



第 84 図 本調査区 6・7 区位置図 (1:8000)

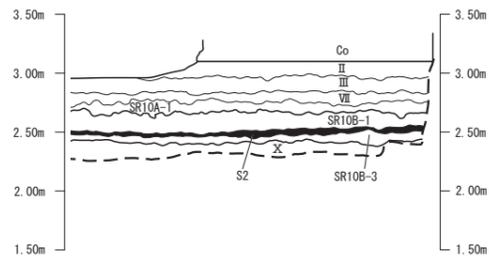


第85図 本調査区6・7 断面図 (1/60)

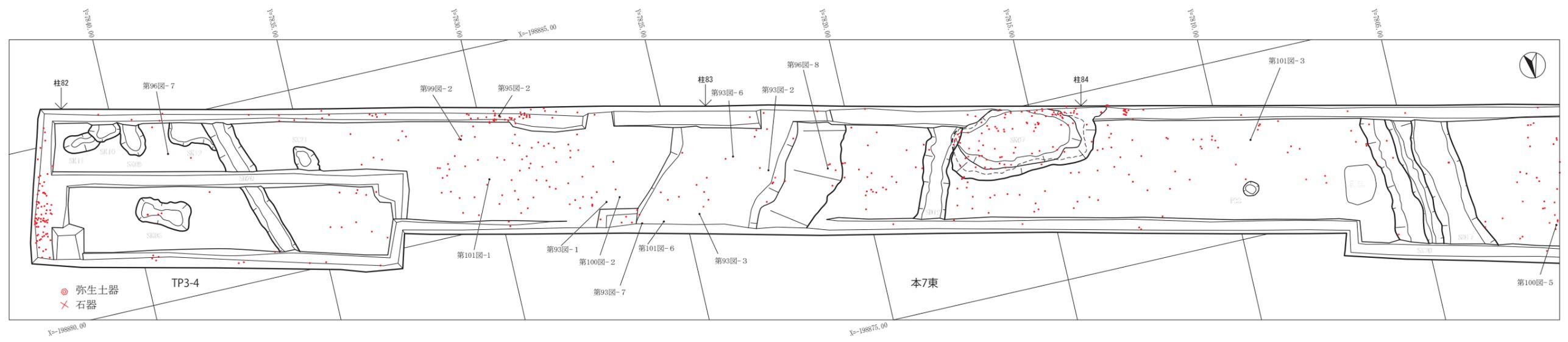


第52表 本調査区6・7 基本土層注記表

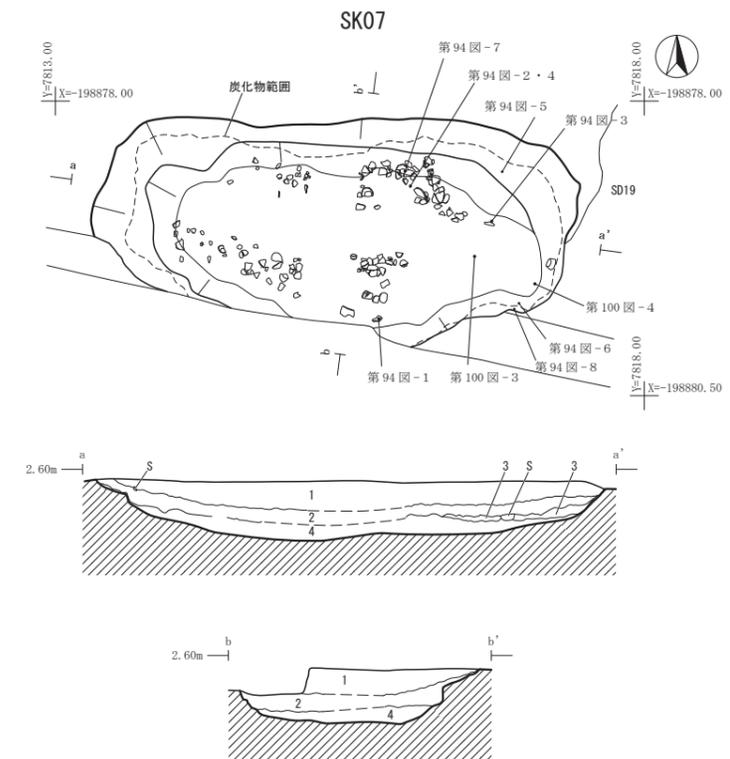
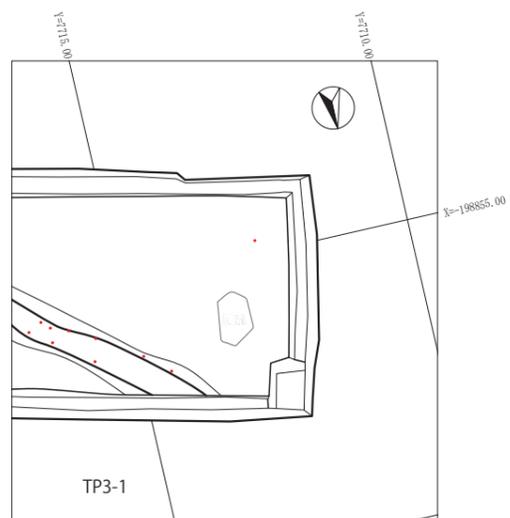
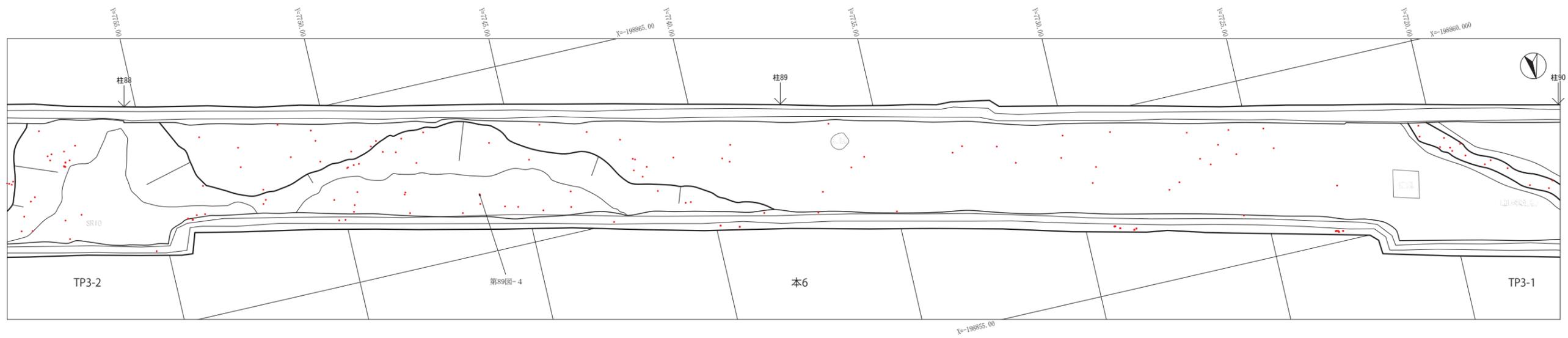
遺構名	層位	土色	土性	備考	遺構名	層位	土色	土性	備考		
本調査区6・7 共通	I	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質粘土	現代の耕作土、盛土	SK06	1	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトをブロック状に含む。マンガング粒状に集積。
	II	10YR5/1	褐灰色	シルト質粘土	2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。砂をやや多く含む。マンガング集積。		2	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	層下位はやや黒味が強い。砂を少量含む。酸化鉄斑紋状
	III	10YR4/1	褐灰色	シルト質粘土	2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトをブロック状にやや多く含む。酸化鉄層状、マンガング粒状に集積。		3	10YR3/1	黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄斑紋状。層全体にマンガングが集積する。
	IV	2.5Y5/2	黄灰色	シルト質粘土	10YR5/2(褐灰色)粘土質シルトをブロック状に含む。マンガング粒状に集積。		SK07	1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト
	V	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトをブロック状に含む。マンガング粒状に集積。	2		10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	上面は砂に覆われる。炭化物、土器破片を多く含む。
	VI	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。層下位に灰白色シルトを小ブロック状または粒状に含む箇所がある。	3		10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	水分をやや多く含む炭化物を多量含む。土器破片を多く含む。
	a	2.5Y8/1	灰白色	シルト	灰白色シルト層。	4		10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	炭化物を多量に含む。10YR5/3鈍い黄褐色粘土質シルトを少量含む。
	VI	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。VI層との境に灰白色シルトをブロック状にやや多量、または層状に含む箇所がある。	SR10A	1	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。砂を多く含む。酸化鉄斑紋状。
	b	5Y6/4	オリーブ黄	粘土質シルト	洪水堆積層。下位に砂を多く含む。		2	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトをブロック状に含む。
	VIII	10YR3/1	黒褐色	シルト質粘土	2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトをブロック状に含む。マンガング粒状に集積。	SR10B	1	7.5Y4/1	灰色	シルト質粘土	酸化鉄斑紋状。層全体に集積
S1・S2	10Y5/1	灰色	混砂シルト	粗粒砂～中粒砂を層中に多く混在する。場所により砂の割合に高低が見られる。	2		10Y5/1	灰色	粘土質シルト	層下位に10YR5/2(灰黄褐色)粘土の薄層を挟む。酸化鉄斑紋状。層全体に集積	
IX a	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	全体的に砂をやや多く含む。層中に砂の薄層を挟む箇所がある。酸化鉄斑紋状。層全体に集積。	3		N3/	暗灰色	シルト質粘土	場所により5GY5/1(オリーブ灰色)粘土と互層を呈する。	
X	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト	酸化鉄斑紋状。層全体に集積。	4		10Y6/1	灰色	粘土質シルト	層中わずかに中粒砂を混在する。	
SD17	1	7.5Y4/1	灰色	シルト質粘土	酸化鉄斑紋状。層全体に集積	SR11	1	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	層下位はやや黒味が強い。砂を少量含む。酸化鉄斑紋状
SD18	1	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	10YR4/2(灰黄褐色)シルト質粘土をブロック状に含む。酸化鉄斑紋状		2	10YR3/1	黒褐色	シルト質粘土	砂を少量含む。酸化鉄斑紋状
SD19	1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトをブロック状に含む。砂を少量含む。		3	10Y5/1	灰色	混砂シルト	粗粒砂～中粒砂を層中に多く含む。S1またはS2に相当する可能性があるが、部分的な検出にとどまり詳細は不明。
SD20	1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトをブロック状に含む。砂を少量含む。		4	N3/	暗灰色	シルト質粘土	5GY5/1(オリーブ灰色)粘土と互層状堆積
					5		10Y5/1	灰色	粘土質シルト	グライ化層	
					6		10Y5/1	灰色	粘土質シルト	グライ化層。木質を多く含む。	



第86図 本調査区6・7 断面図 (1/60)



第 87 図 本調査区 6・7 平面図 (1/120)



第88図 本調査区6・7 平面図 (1/120)・SK07個別遺構図 (1/60)

(2) 本調査区 7 (第 84 ~ 88・90 ~ 102 図)

平面確認において b 層：洪水堆積層を確認面とし、調査区西側から進入し調査区内で北側へと方向を転じる SR10 自然流路跡を確認した。これは西側の調査区 6 で確認した流路の下流と考えられる。また、SR10 自然流路跡の東側では、前述の本調査区 5 中央に類似した遺物の出土状況を示す堆積層が観察されると共に、これに先行してつくられたと考えられる土坑 (SK07) を始めとした複数の遺構が検出された。

断面で確認された堆積層は基本層 II ~ VII・IX 層で、これに加えて VI ~ VII 層間に a 層：灰白色火山灰層が、VII 層下位に b 層：洪水堆積層、SR10・11 自然流路跡の堆積土が確認されている。また、場所により IX 層の上層部分に弥生時代の津波堆積層と考えられる粗粒砂～中粒砂を多く混在する堆積層も見られる。

出土遺物は主に包含層中より出土した弥生土器 771 点と石器・礫 98 点を始めとして、多くの遺物が出土した。

【SD17 溝跡】

標高約 2.7m の IX 層上面で確認した。検出長約 3.6m、検出幅 2.2m で確認面からの深さは 0.2m である。断面形は浅い皿状で、調査区外の南側と北側へ直線的に伸びる。堆積土は 1 層を確認した。調査区南壁断面の観察では、基本層 II 層が遺構内に落ち込んでおり、少なくともその時点まで周辺より窪んでいた比較的新しい溝跡と考えられる。遺物は出土していない。

【SD18 溝跡】

標高約 2.8m の V 層上面で確認した。SR10 自然流路跡の東側に位置しており、検出長約 3.7m、検出幅約 0.4 ~ 0.6m で確認面からの最大深度は約 0.2m である。断面形は逆台形状を呈し、調査区外南側と北側へ直線的に伸びる。基本層 IV 層より古い。堆積土は 1 層を確認した。遺物は出土していない。

【SD19 溝跡】

標高約 2.6m の X 層上面で確認した。SK7・SR11 と重複関係があり、両者より新しい。検出長は約 2.6m、検出幅は約 0.9m で、確認面からの最大深度は約 0.22m である。断面形は浅い皿型を呈し、調査区外南側と北側へ直線的に伸びる。基本層 VII 層より古い。堆積土は 1 層を確認した。遺物は出土していない。

【SD20 溝跡】

標高約 2.8m の基本層 VII 層上面で確認した。調査区の東端部で確認されており、検出長約 4.1m、検出幅約 1.0m で確認面からの最大深度は約 0.3m である。断面形は口の開いた U 字型を呈し、調査区外南側と北側へと直線的に伸びる。基本層 II 層より古い。堆積土は 1 層を確認した。遺物は出土していない。

【SK06 土坑】

標高約 2.7m の基本層 IX 層上面で確認した。長軸約 1.5m、短軸約 0.8m の長方形形状を呈し、確認面からの最大深度は約 0.15m である。基本層 VII 層より古い。堆積土は 3 層を確認した。遺物は少量の弥生土器が出土している。

【SK07 土坑】

標高約 2.6m の基本層 X 層上面で確認した。SR11 溝跡と重複関係があり本遺構が古い。検出長軸約 4.1m、検出短軸約 1.9m で、確認面からの最大深度は約 0.45m である。断面形は底面が平坦な皿状を呈し、遺構の南辺と西辺の一部は調査区外に伸びる。弥生時代の津波堆積層より古い。堆積土は 3 層を確認した。遺物は弥生土器 61 点と石器・礫 8 点が出土し、このうち土器 10 点と石器 2 点を図示した。

遺構直上の土層と確認面の標高、遺物出土状況の在り方などが、調査区 5 北部で確認された SK15 土坑と類似しており、同時期の遺構である可能性がある。

【SR10 自然流路跡】

調査区 6 で検出した SR10 自然流路跡の東側下流部分と考えられる。流路の東岸にあたる調査区中央部付近では標高約 2.8 ~ 2.9m の X 層上面で確認した。検出長は約 21.0m で、西側から進入した後に北側へと方向を転じて調査区外へと伸びる。本調査区 6 と同様に、東流する流路の南岸のみしか確認されていないため、流路幅は不明である。

本調査区6南壁断面で確認した流路堆積層上面の標高は約2.6mで、本調査区7のSR10の流路堆積層上面との間には約0.2～0.3mの差があるが、流路肩部が検出されている本調査区7で確認した標高の方が実際の数値に近いものと考えられる。恐らく本調査区6で確認された流路堆積層上面の標高は、河岸から若干離れて落ち窪んだ部分が調査区内で検出されていることによるものと考えられる。

確認された堆積土は5層で、堆積土間にb層：洪水堆積層が挟まっていることから、それを境に上下に大別して〈SR10A- 1・SR10A- 2・b層：洪水堆積層・SR10B- 1・SR10B- 2・SR10B- 3〉と区分した。流路堆積土上面は基本層VII層の直下である。遺物は弥生土器128点と石器・礫9点などが出土しており、この内土器5点と石器4点を図示した。

【SX10 遺物集中部】

SR10 自然流路内の蛇行部分で確認された河床内の落ち込み部で、遺物が比較的まとまって出土している。落ち込みの形状は長軸約2.8m、短軸約1.9mの不整形を呈し、確認面からの最大深度は約0.7mである。

確認された堆積層は2層で、33点の弥生土器片が出土している。このうち6点を第91図に図示した。

【SR11 自然流路跡】

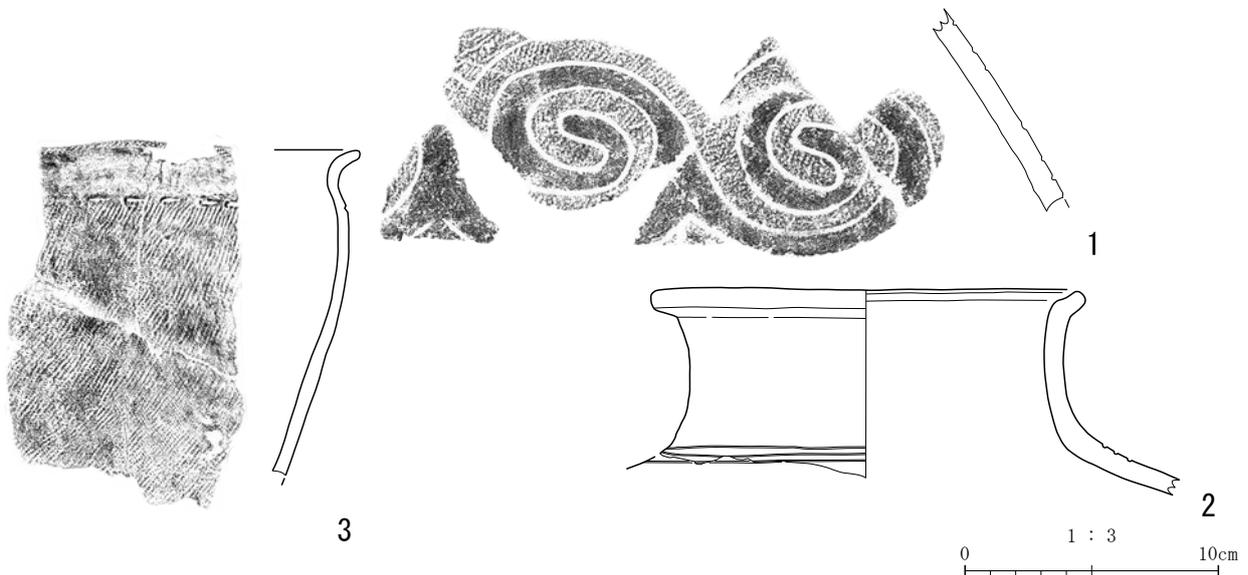
本調査区7の中央部分東寄りの標高約2.6mの基本層IX層上面で確認した。調査区内での検出長は約4.1mで、検出幅は最大で約12.4m、確認面からの最大深度は約1.4mである。調査区外南側と北側へ直線的に延びると考えられるが、南北でこれまでに確認されている自然流路跡のいずれに対応するかについては不明である。

調査区6南壁断面で確認した流路堆積土は6層で、上面がb層：洪水堆積層あるいは基本層VII層の直下である。

遺物は弥生土器121点と石器・礫11点などが出土しており、このうち土器7点と石器6点を図示した（第93・96・97・99・101図）。

本調査区6・7出土の弥生土器

第90図はSR01自然流路跡から出土した弥生土器である。1は高坏の坏部である。体部は直線的に広がる。内面の一部が剥落するが、部分的には内外面ともによく残存している。口唇端部にも回転縄文を施文し、体部全体に縄文を



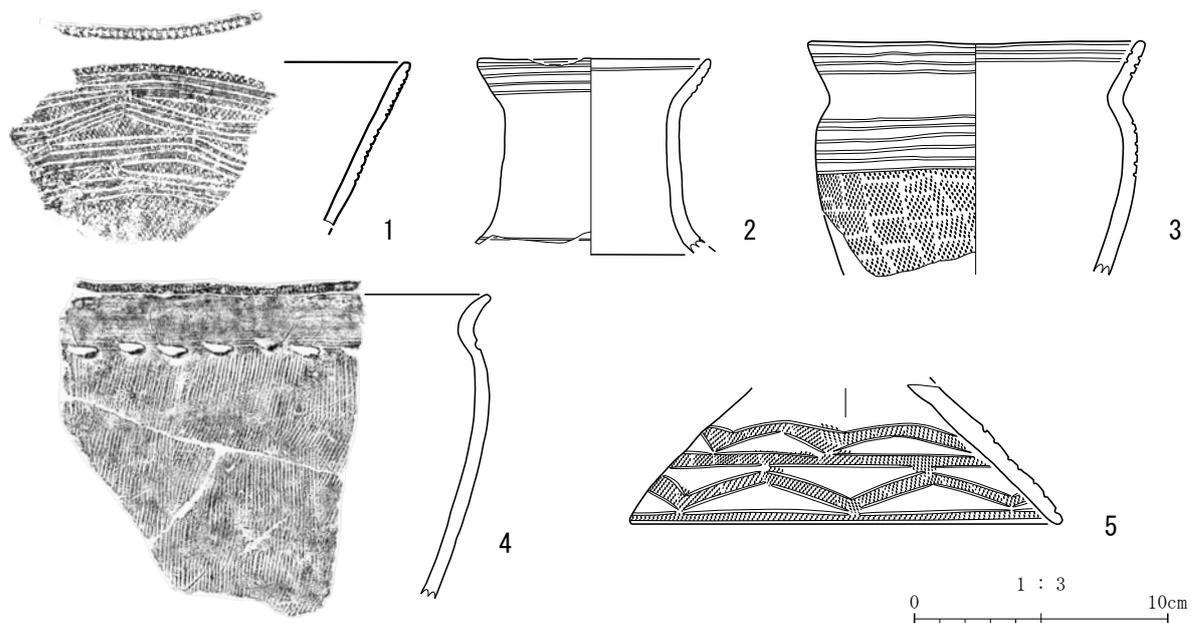
第53表 本調査区6 土器観察表

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	種別	器種	部位	口径	底径	器高	地文/施文	外面調整/内面調整	備考
89-1	30-6	B047	本6/SR/下層	弥生土器	壺?	口縁～胴部	-	-	13.5	L6R/円弧文(S字文)	沈線→縄文→ミガキ(磨り消し)/不明	
89-2	30-4	B048	本6/SR10/砂層	弥生土器	壺	胴部	-	-	7.5	-/沈線	ミガキ→沈線/ミガキ	
89-3	30-5	B049	本6/SR10/Dべルト	弥生土器	甕	口縁～胴部	17.0	-	(7.5)	L3R/刺突	ナデ→縄文→刺突/ナデ	

第90図 本調査区6区 出土土器

施文してから、4本沈線で層波文を3段に描く。層波文の各波頂部に単沈線で垂線を入れる。層波文の一部にミガキを施して地文を磨り消している部分があるが、全体には及んでいない。内面は全体をナデで調整し、粗い磨きを施している。2は壺である。口縁部～頸部が残存し、胴部～底部を欠いている。頸部は胴部から大きく屈曲して立ち上がり、やや内傾して直線的に立ち上がる。頸部の上端で口縁部が僅かに内湾しながら外傾する。口縁部の外面に3条の沈線が巡り、内面の口唇直下にも沈線が1条巡る。内外面とも丁寧にミガキが施されている。3は甕である。口縁部～胴部上半が残存する。口縁部は頸部の屈曲から直線的に外傾して立ち上がる。胴部は頸部から内湾しながら開き、最大径から下半は湾曲を緩めながら、底部に向かって直線的に内傾する。口縁部の外面に3条の沈線が巡り、内面の口唇直下にも沈線が2条巡る。頸部はナデで平滑に調整されているが、部分的にミガキも観察できる。頸部から胴部最大径にかけて6条の並行沈線が施される。沈線は胴部下半の縄文施文の後に施され、沈線間の縄文はミガキで消されている。内面にはミガキ調整が施されている。4は甕である。口縁～胴部上半が残存する。口縁部はやや外湾しながら胴部から短く外反する。口縁部の外面はナデで調整され、胴部に植物茎回転文が施文された後に、棒状の工具で左上から右下に刺突文の点列が施される。口唇部上端にも植物茎回転文が施文されている。内面はナデで平滑に調整され、全体に丁寧なミガキが施されている。5は蓋である。体部のみで天井部からつまみ部を欠いている。体部は極わずかに内湾しながら、外傾して直線的に開く。体部外面では口唇部に狭い縄文帯を巡らせ、その上部に層波文を2段描くが、中間に縄文帯を1条巡らせている。体部では縄文の後に沈線で文様を描き、細い带状に描いた層波文以外の空間をミガキで磨り消している。内面はナデで平滑に調整され、全体にミガキが施されている。

第91図はSX10自然流路内落ち込みから出土した弥生土器である。1は鉢である。底部から直線的に開き、口縁部付近でほんのわずかに内湾する。口唇部上端に縄文が施文され、端部の一部は平坦になっている。口唇部の直下に小

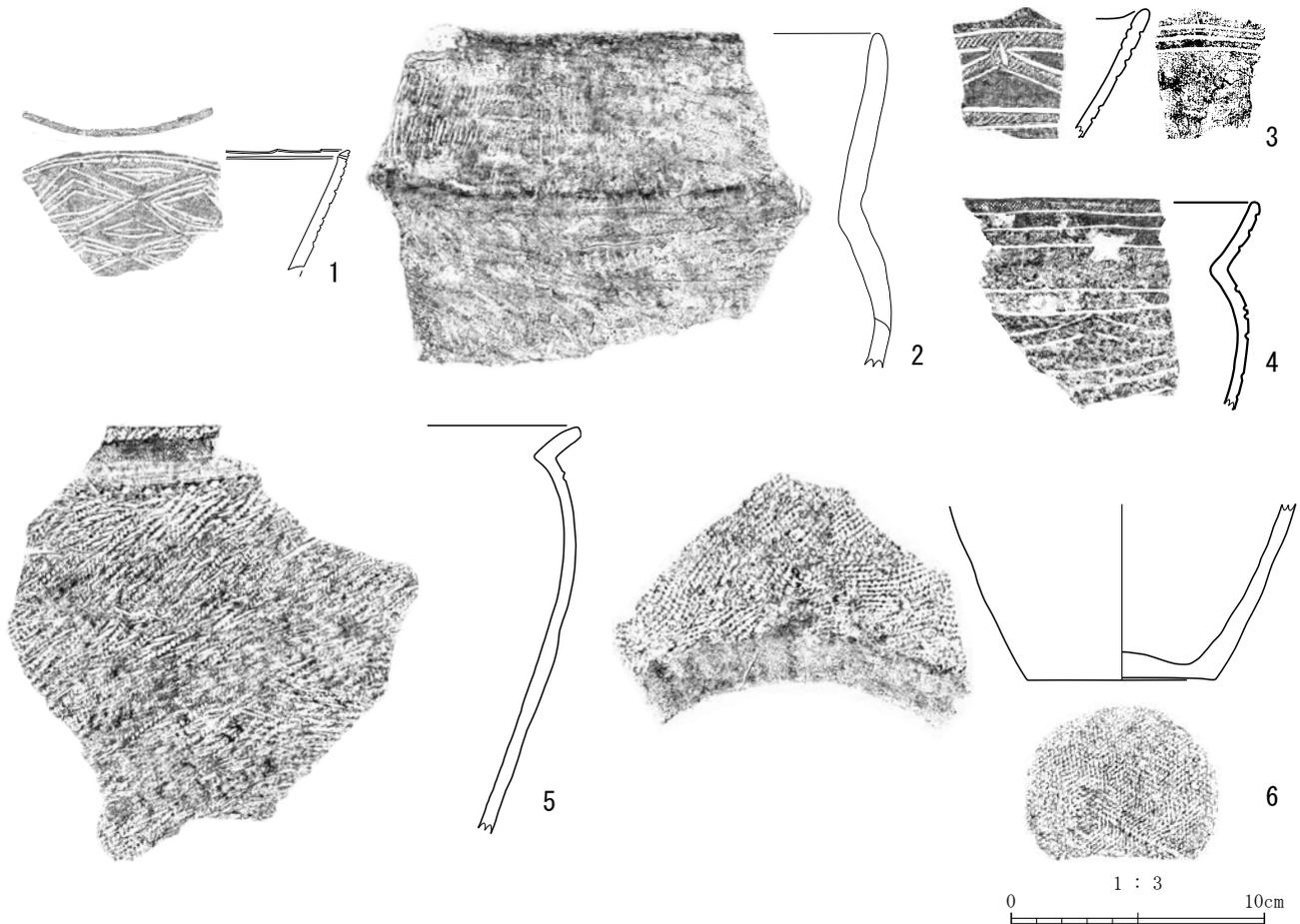


第54表 本調査区7 土器観察表

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	種別	器種	部位	口径	底径	器高	地文/施文	外面調整/内面調整	備考
90-1	32-5	B050	本7西/SR10/下層	弥生土器	坏	口縁～胴部	体-	-	6.5	縄文(L3R)/層波文	縄文→沈線→ミガキ 一部に沈線→縄文/ミガキ	
90-2	31-1	B051	本7西/SR10/上層	弥生土器	壺	口縁	9.3	-	7.5	沈線(表4本・内1本)	ミガキ→沈線/ ミガキ→沈線	
90-3	36-3,4	B052	本7西/SR10/最下層	弥生土器	甕	口縁～胴部	12.3	-	8.5	縄文(L3R)/沈線(表・内)	縄文→沈線→ミガキ/ ミガキ	
90-4	34-1	B053	本7西/SR10/下層	弥生土器	甕	口縁～胴部	-	-	12.0	植物茎回転文/刺突文	植物茎回転文→刺突/ ミガキ	
90-5	37-2	B054	本7西/SR10/砂層	弥生土器	蓋	体部	-	16.1	5.2	縄文(L3R)/層波文	沈線→縄文→ミガキ/ ナデ・ミガキ	

第90図 本調査区7区 出土土器(1)

孔が二つ並んで穿孔されている。体部外面には3本の沈線で層波文に由来する文様が描かれるが、線の繋ぎが変形して重菱形文に近似している。沈線で文様を描いたあとに縄文を施文し、部分的に磨り消して文様の細部を調整しているが、磨り消した範囲に一貫性がない。内面は口唇直下に沈線が1条巡るが、最終的なミガキ調整で、沈線がつぶれている。2は甕である。胴部中央の張り出しから下部を欠損している。口縁部が胴部からほぼ直線的に外傾して立ち上がり、口唇部付近で僅かに内湾する。内外面に文様はなく、成型や調整の跡として、植物茎回転文やナデやケズリの痕跡が観察できる。最終的には内外の全体がミガキ調整されている。3は鉢である。口縁部に小突起が配置されている。外面には上下段を狭い縄文帯で挟まれた2本沈線の層波文が描かれ、波頂部に単沈線が垂線として施される。層波文と縄文帯は、地文の縄文が施された後に沈線で描かれ、不要な部分をミガキで磨り消している。口縁部内面にも縄文が施文され、3本の沈線を巡らせた後に、沈線間をミガキで磨り消している。内面はミガキで平滑に仕上げられている。4は甕の口縁から胴部上半である。口縁はわずかに内湾しながら外傾して立ち上がる。胴部は上半に最大



第55表 本調査区7 土器観察表

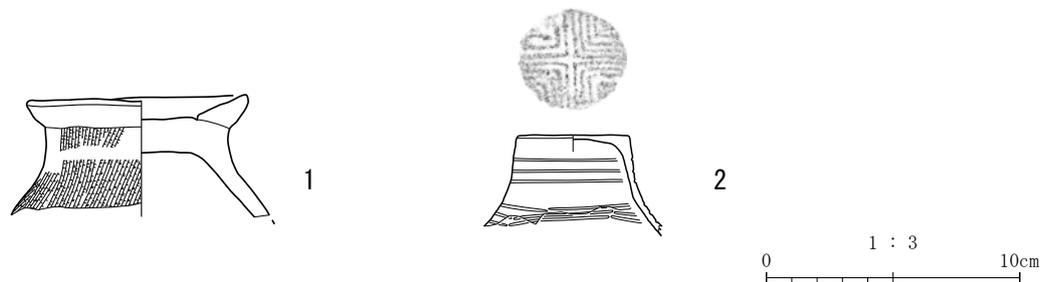
図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	種別	器種	部位	口径	底径	器高	地文/施文	外面調整/内面調整	備考
91-1	33-2	B055	本7西/SX10	弥生土器	鉢	口縁	-	-	5.1	縄文(L3R)/層波文・内面沈線あり・突起あり	沈線→縄文→ナデ/沈線→ミガキ	
91-2	36-1	B056	本7西/SX10/下層	弥生土器	甕	口縁～胴部	-	-	13.3	植物茎回転文/無文	ミガキ→植物茎回転文/ミガキ	
91-3	32-3・4	B057	本7西/SX10/下層	弥生土器	鉢	口縁～胴部	-	-	4.7	縄文(L3R)/層波文・内面沈線あり	縄文→沈線→ミガキ/縄文→沈線→ミガキ	小把起あり
91-4	36-5	B058	本7西/SX10/下層	弥生土器	甕	口縁～胴部	-	-	8.0	縄文(L3R)/層波文・赤色塗彩	沈線→縄文→ミガキ→赤色塗彩/ミガキ	
91-5	34-2	B059	本7西/SX10/下層	弥生土器	甕	口縁～胴部	-	-	16.5	縄文(L(L+R))/刺突	ナデ→縄文→刺突/ミガキ	口唇端部に縄文あり
91-6	36-8	B060	本7西/SX10/下層	弥生土器	甕	胴部～底部	-	7.4	7.0	縄文(L3R)/底面布目圧痕	縄文→ミガキ/ミガキ	

第91図 本調査区7区 出土土器(2)

径をもち、口縁部から内湾しながら底部に向かって窄まる。外面の摩耗が激しく、表層の7割ほどが剥落している。口縁部外面には3本の沈線が巡るが、口唇部に近い最上段に縄文が施文されて狭い帯状の縄文帯となっている。括れから下位の胴部には2本の沈線で層波文が描かれ、縄文を施文した上で磨り消しているが、磨滅と剥離が激しい。内面は全面にナデが施された後にミガキ調整されている。5は甕である。底部に近い下部を欠損している。口縁部が胴部から短く強く外反する。頸部にナデ調整が残り、以下には縄文が施文され、その境界に円形棒状工具で右下から左上に刺突文による列点が施される。縄文は1段LとRを合わせて2段Lに撚ったもので、撚りもどされた2段Lの長い単節縄文と、通常の2段Rの単節縄文が、交互に繰り返す特徴的な原体を使用している。同じ原体で口唇部にも施文している。内面は全体を丁寧にミガキ調整している。6は甕である。胴部の上半を欠損している。胴部は底部からやや内湾しながら大きく外傾して開く。胴部の全面に縄文が施文されるが、底面に近い2cmほどの範囲がミガキ調整されている。底部外面には布目痕が残る。内面は全体を丁寧にミガキ調整している。

第92図は本調査区7西部のIX層で出土した弥生土器である。1・2は蓋である。天井部側縁がせり出しながら立ち上がってつまみ部を作るため、天井部が碗状に窪む。このつまみ部が接合部で剥離し、剥離面に木葉痕が観察できる。天井部内面はやや平坦に仕上げられ、体部はほぼ直線的に外反して開く。体部外面に植物茎回転文が施されているが、その他の文様は観察できない。天井部外面と、体部内面は全面がミガキ調整される。2は天井部は側縁の張り出しはなく、天端の立ち上がりもなく平坦である。天井部外面の中心に沈線で十字を描き、十字に沿って余白を沈線による鉤状の文様で埋めている。体部の外面には、天井部近くに3本の沈線を巡らせ、下半には層波文が施されるが、下半のほとんどが欠損しているため、文様の詳細は不明である。体部は天井部から外湾しながら開く。全体的に内外面の磨滅や剥離が激しく器厚も薄くなっているが、内面の一部にミガキの痕跡が残っている。

第93図は本調査区7のSR11自然流路跡で出土した弥生土器である。1は甕の口縁から胴部である。口縁は短く外反し、胴部の張り出しからなだらかに下位に向けて窄む形状を持つ。内外面ともに摩耗しており表層の剥落が激しいが、体部外面の縄文施文は辛うじて観察できる。頸部にナデ調整が残り、体部の地文との境に竹管状の円形工具の刺突による列点文が施される。内面は全面にナデ調整が施される。2は鉢である。底部から開き気味にやや内湾しながら立ち上がる。口縁部に5単位の小突起が均等に配置されている。1つの小突起の中央位置に合わせて小孔が穿孔され、対置する反対側の口縁直下にも小孔が空けられている。外面の口縁部直下には3本の並行沈線で区画文が描かれ、そこから体部上半にかけて、沈線3本で層波文が2段描かれる。各波頂部には層波文を区切るように3本の単沈線で垂線が描かれる。内面の口縁直下には2本の並行沈線文が施される。内外面とも摩滅が激しい。底部外面に木葉痕が残る。3は壺である。胴部中央の張り出しから上部を欠損している。胴部下半はやや直線的になだらかに窄む形状を持つ。体部には縄文施文後に沈線で錨形文が描かれ、文様区画外をミガキで磨り消している。文様の下端には区画線としての縄文帯が一条めぐる。内外面ともミガキ調整されている。4・5・6は蓋である。4のつまみ部は高さ2.5cmほどで、ほぼ直線的に外傾して立ち上がり、体部もほぼ直線的に外傾して開く。つまみ部から体部上部に文様はなく、上部から端部にかけて重四角文が描かれる。重四角文は地文の植物茎文の上に沈線で文様を描いた後に、不要部



第56表 本調査区7 土器観察表

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	種別	器種	部位	口径	底径	器高	地文 / 施文	外面調整 / 内面調整	備考
92-1	38-1	B061	本7西/1面	弥生土器	蓋	天井～体部	8.0	-	4.4	植物茎回転文	ナデ→植物茎回転文	
92-2	37-5	B062	本7西/11B6グリップ	弥生土器	蓋	天井～体部	4.5	-	3.5	沈線文(底面にも沈線文)	磨滅のため不明 / ナデ	

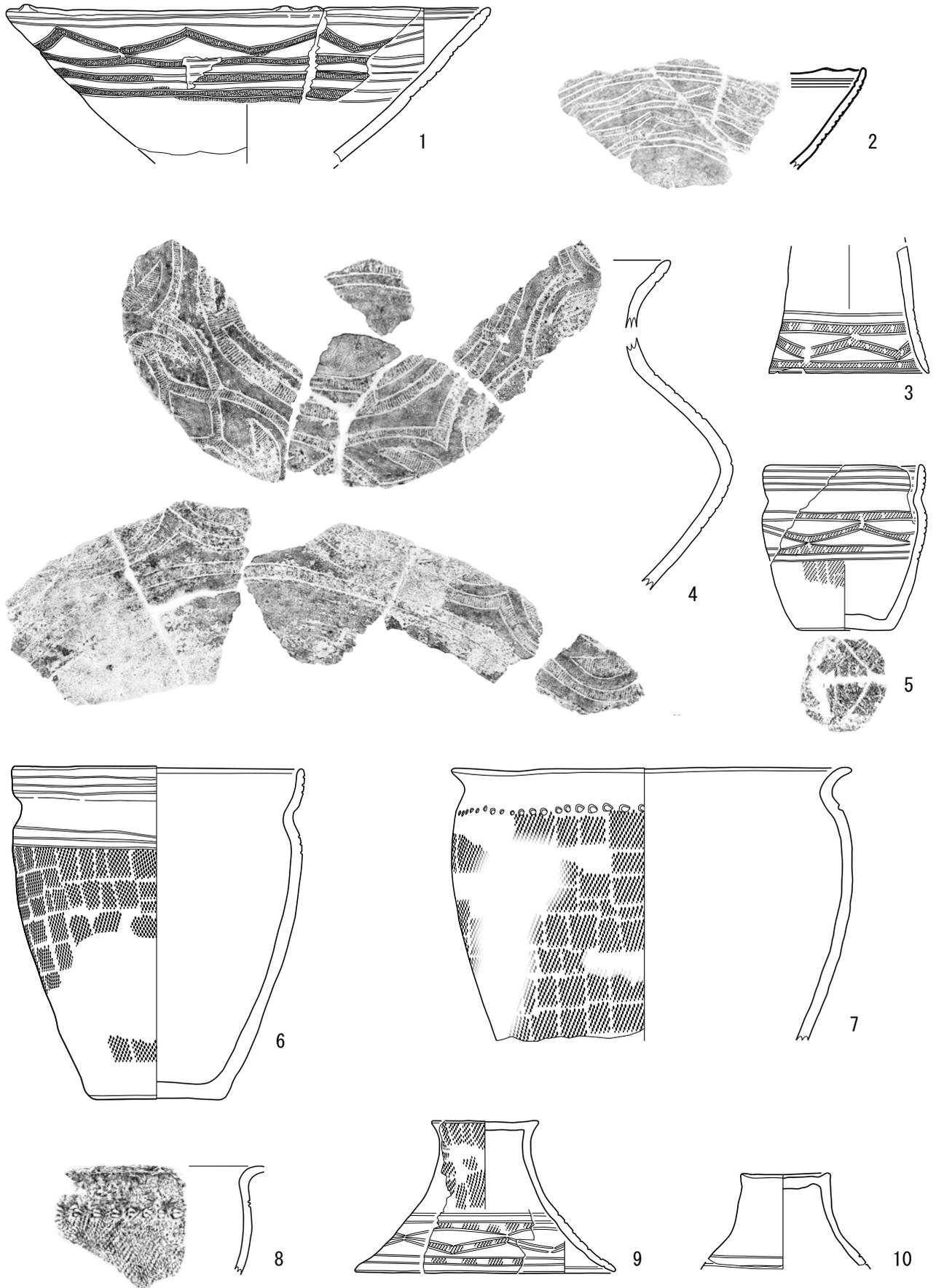
第92図 本調査区7区 出土土器(3)



第 57 表 本調査区 7 土器観察表

図版 番号	写真 番号	登録 番号	遺構・層位	種別	器種	部位	口径	底径	器高	地文/ 施文	外面調整/ 内面調整	備考
93- 1	36-6	B063	本 7 東/ SR11 東片 部	弥生土器	甕	口縁～	-	-	12.5	L3R/ 刺突 (円形)	縄文→刺突 / ナデ	
93- 2	33-3	B064	本 7 東/ SR11 砂 1 層	弥生土器	壺	口縁～	15.4	6.5	10.5	L3R/ 錨文	縄文→沈線→ミガキ/ ナデ	底面に木葉痕
93- 3	32-3	B065	本 7 東/ SR11 砂 1 層	弥生土器	鉢	口縁～	-	-	10.7	不明 / 層波文	内外面磨減顕著のため 不明	小把起 (5 単位)
93- 4	37-3	B066	本 7 東/ SR11 砂 1 層	弥生土器	蓋	口縁～	5.0	14.5	8.0	植物茎回転文 / 四角文	沈線→植物茎回転文→ ミガキ / 沈線→ミガキ	
93- 5	37-4	B067	本 7 東/ SR11 砂 1 層	弥生土器	蓋	口縁～	5.0	-	3.3	L3R/-	ナデ→縄文 / ミガキ	天井部に木葉痕
93- 6	38-3	B068	本 7 東/ SR11 砂 1 層	弥生土器	蓋	口縁～	6.0	-	4.0	L4R/-	ナデ→縄文 / ミガキ	底面に布目痕
93- 7	34-3	A001	本 7 東/ SR11 河床 面 / 砂 2 層	縄文土器	深鉢	口縁～	-	-	8.7	L2R/ 工字文風沈線	縄文→沈線→ミガキ/ 沈線→ミガキ	小把起

第 93 図 本調査区 7 区 出土土器 (4)



第94図 本調査区7区 出土土器(5)

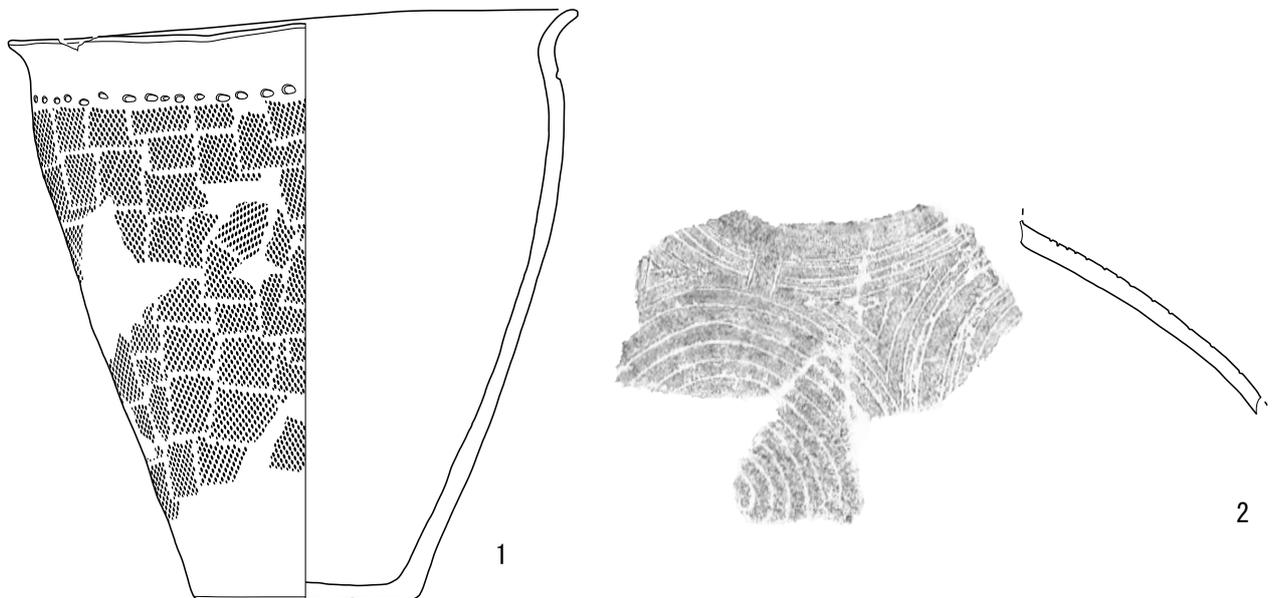
第 58 表 本調査区 7 土器観察表

図版 番号	写真 番号	登録 番号	遺構・層位	種別	器種	部位	口径	底径	器高	地文/ 施文	外面調整/ 内面調整	備考
94- 1	33- 1	B069	本 7 東/ SK7/側溝 内一括	弥生土器	高坏	口縁～ 体部	24.7	-	8.0	植物茎回転文/層波文・ 内面沈線	沈線→植物茎回転文→ ミガキ/沈線→植物茎 回転文→ミガキ	
94- 2	32- 6	B070	本 7 東/ SK7/側溝 内一括	弥生土器	高坏	口縁～ 体部	-	-	5.5	縄文/層波文・内面沈 線あり・口唇部縄文	沈線→縄文→ミガキ/ ミガキ→沈線	
94- 3	30- 7	B071	本 7 東/ SK7/A プ ロック/2 層	弥生土器	脚部	脚部部～ 端部	-	8.7	7.0	LR 詳細不明/層波文	縄文→沈線→ミガキ/ ナデ	
94- 4	31- 2	B072	本 7 東/ SK7/3 層	弥生土器	壺	口縁～ 底部	-	-	17.1	植物茎回転文/錯文・ 四角文	植物茎回転文→沈線→ ミガキ/ミガキ	
94- 5	36- 2	B073	本 7 東/ SK7/A プ ロック	弥生土器	鉢	口縁～ 底部	6.7	5.3	9.0	L4R/-	縄文→沈線→ミガキ/ ミガキ	
94- 6	35- 1	B074	本 7 東/ SK7/B プ ロック	弥生土器	甕	口縁～ 底部	15.0	6.7	17.0	L3R/ 平行沈線	縄文→沈線→ミガキ/ ミガキ	底面木葉痕
94- 7	35- 2	B075	本 7 東/ SK7/A プ ロック	弥生土器	甕	口縁～ 胴部	20.5	-	14.0	L3R/ 頸部下位に刺突文	ナデ→縄文→刺突/摩 耗につき不明	
94- 8	36- 7	B076	本 7 東/ SK7/B プ ロック/2 層中	弥生土器	甕	口縁～ 胴部	-	-	5.8	L3R/ 刺突文	ナデ→縄文→刺突/ミ ガキ	
94- 9	37- 1	B077	本 7 東/ SK7/炭化 物層	弥生土器	蓋	天井～端 部	5.1	12.3	7.5	L3R/-	縄文→沈線→ミガキ/ ミガキ→沈線	
94-10	38- 2	B078	本 7 東/ SK7/炭化 物層	弥生土器	蓋	天井～体 部	4.3	-	4.5	不明/沈線文(2本)	不明	骨針含む

分をミガキで磨り消している。つまみ内部の調整は摩滅により判然としない。体部内面の一部にミガキが残るが、磨滅が激しい。口縁内部に沈線が2条巡る。5は天井部の端部がやや外反して短く立ち上がり、せり出したつまみ部分を作る。体部はやや外反して開き、下半部を欠損している。外面天井部に木葉痕を残す。体部外面上端にやや空白を残すが、全面に縄文を施している。内面は一部にミガキ痕が観察できる。6は天井部の端部が磨滅により欠損しており、つまみ部の形状は不明である。体部は直線的に外傾して開き、輪積帯で欠損して端部を欠いている。外面天井部に布目痕を残す。体部外面には全面に縄文を施している。内面は全面にミガキが観察される。7は縄文土器の鉢である。胴部下半を欠損する。底部からやや内湾しながら立ち上がる器形で、口縁部に小突起が施される。1つはやや高いひと山の突起で、他はそれより低いふた山の突起である。ひと山の中心に胴部文様である変形工字文のつなぎ部が位置しており、文様の中心となっている。胴部文様は地文に縄文を施文した後に、やや太い棒状工具で深目の沈線を施して変形工字文を描く。内面の口縁部直下には沈線が1条めぐり、突起の裏面に垂直の沈線が施されて、これと繋がる。内外面ともに丁寧なミガキが施され、堅密に仕上げられている。

第 94 図は SK07 土坑跡で出土した弥生土器である。1・2は高坏の杯部である。1は胴部はわずかに内湾しながら大きく開いて、直線的に立ちあがる。口縁部に2山一組の小突起を5単位配すると考えられる。胴部には植物茎回転文を施文した後に、2本の並行沈線文で口縁部直下に1条と胴部中段に2条の帯文を配し、その間にV字の層波文を描く。その後に植物茎文の不要部分をミガキで磨り消している。口縁部内面にも植物茎文を施文した痕があり、2本の沈線を巡らした後に最上段を残して、内面全体をミガキ調整している。2は胴部はやや内湾しながら大きく開き、直線的に立ちあがって口縁部付近でやや内傾する。口縁部上端に小突起を2cm程度の等間隔に配置する。胴部には縄文を施文した後に、2本の並行沈線で口縁部直下に2条と胴部中段に1条と最下段に1条の帯文を配し、その間にV字の層波文を描く。その後に縄文の不要部分をミガキで磨り消している。口縁部内面にも縄文を施文し、2本の沈線を巡らした後に最上段を残して他をミガキで磨り消している。内面全体はミガキ調整しているが、磨滅が激しい。3は高坏の脚部である。坏部底部付近からやや内湾しながら直線的に下降するが、脚部下半でやや外湾しながら立ち上がる。内外面の磨滅が激しく文様の詳細が不明だが、外面には地文としての縄文の後に2本の沈線で層波文を描き、不要部分をミガキで磨り消している。脚部の内外面の一部にミガキが残る。4は壺である。口縁～胴部下半部が残存するが、頸部は胴部から大きく外湾して立ち上がり、口縁部で直線的に外反する。口縁部の上端には植物茎回転文が施文され、外面には2条、内面には1条の沈線が施される。口唇部の一部に小突起が付くが、単位や配置は不明で

ある。胴部は算盤玉状に大きく屈曲し、屈曲の張り出しを介して胴部の上下に入り組んだ錨文が描かれる。2本の並行沈線で文様を描いた後に植物茎文を施文し、帯文からはみ出した部分をミガキで磨り消している。内外面ともにミガキ調整している。5～7は甕である。5は底部からやや内湾しながら外傾して立ち上がり、胴部最大部分から内傾する。口縁部は頸部の屈曲からやや内湾しながら外傾して直線的に立ち上がる。口縁部の外面に4条の沈線が巡り、胴部最大径から下部に1段の層波文が帯状に区画されて巡る。文様は全面に縄文を施文した後に沈線で描き、不要な部分をミガキで磨り消している。内外面の一部は摩滅と剥離で荒れているが、両面ともにミガキが施されている。底部外面に木葉痕が残る。6は5と同様に底部からやや内湾しながら外傾して立ち上がり、胴部最大部分から内傾する。口縁部は頸部の屈曲から再び外反して、やや強く内湾しながら口唇部に向かって直線的に立ち上がる。胴部には全面に縄文がほどこされ、その後口縁部の外面と胴部最大部分付近に3条の沈線が施される。頸部の括れはナデで調整されて無文となり、沈線間にはみ出た縄文もミガキで磨り消される。内面の一部は摩滅と剥離で荒れているが、ミガキが施されている。底部外面に木葉痕が残る。7は口縁から胴部である。口縁は強く外反し、胴部の張り出し部分から、なだらかに下位に向けて窄む形状を持つ。内外面ともに摩耗しており表層の剥落が激しいが、体部外面の縄文は部分的に観察できる。頸部にナデ調整が残り、体部の縄文を施文した後に、地文との境に刺突文による列点が施される。工具は右横から左へほぼ水平に刺突されている。内面はほとんどが磨滅しているが、口縁部の一部にミガキの痕跡が見られる。8は口縁から胴部である。口縁は強く外反し水平に近い角度で屈曲している。胴部は内湾しながらなだらかに下位に向けて湾曲する。頸部にはナデ調整が残り、体部の縄文を施文した後に、地文との境に半截竹管状工具を被せたような2点一対の刺突文による列点が施される。工具は右やや下から左上へ向かって刺突されている。内面は全面にミガキの痕跡が認められる。9・10は蓋である。9は天井部の側縁がやや外部に張りだしてつまみ部分を作る。体部は外反しながら開く。外面天井部に木葉痕を残す。体部外面全面に縄文を施し、その後2本の並行沈線で層波文を描き、不要な部分はミガキで磨り消している。口縁部内面にも沈線を1本施し、その後全面をミガキ調整している。10は天井部の天端が上部につまみ上げられ、天井部天板部が窪んだように見える。全面が磨滅により剥落するが、胴部外面の下部に2本の沈線が観察できる。層波文の一部と考えられる。内外面の調整については摩滅により不明である。



第59表 本調査区7 土器観察表

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	種別	器種	部位	口径	底径	器高	地文/施文	外面調整/内面調整	備考
95-1	35-3	B079	本7東/VIII~IX層	弥生土器	甕	口縁~底部	22.0	8.5	22.6	L4R/頸部下位に刺突文	縄文→刺突/ミガキ	骨針微量
95-2	32-4	B080	本7東/VIII~IX層	弥生土器	壺	胴部	-	-	7.4	円弧文	ミガキ→円弧文/ミガキ	

第95図 本調査区7区 出土土器(6)

第95図は本調査区7のⅧ～Ⅸ層で出土した弥生土器である。1は甕である。口縁はあまり強くは外反しない。胴部の張り出し部分から、なだらかに下位に向けて窄む形状を持つ。部分的に内外面ともに摩耗しており、表層が剥落する場所もある。頸部にナデ調整が残り、地文の縄文を施文した後に、刺突文による列点が施される。刺突痕は右下から左上方向に工具が作用している。底部内面は摩滅で詳細不明だが、内面の全面にミガキが認められる。底部外面に木葉痕が残る。2は壺である。胴部中央の張り出しから上部のみが残存し、口縁部～頸部は欠いている。胴部上半は頸部直下からやや内湾しながら大きく開く。体部は全面にミガキが施された後に、沈線で円文が描かれる。破損部分が円文の中心部分に掛かるため、円文が渦文か同心円文か判然としない。並列する円文の上部間隙に逆三角形の区画ができ、中を逆重三角文で充填している。

本調査区6・7・11で出土した石器

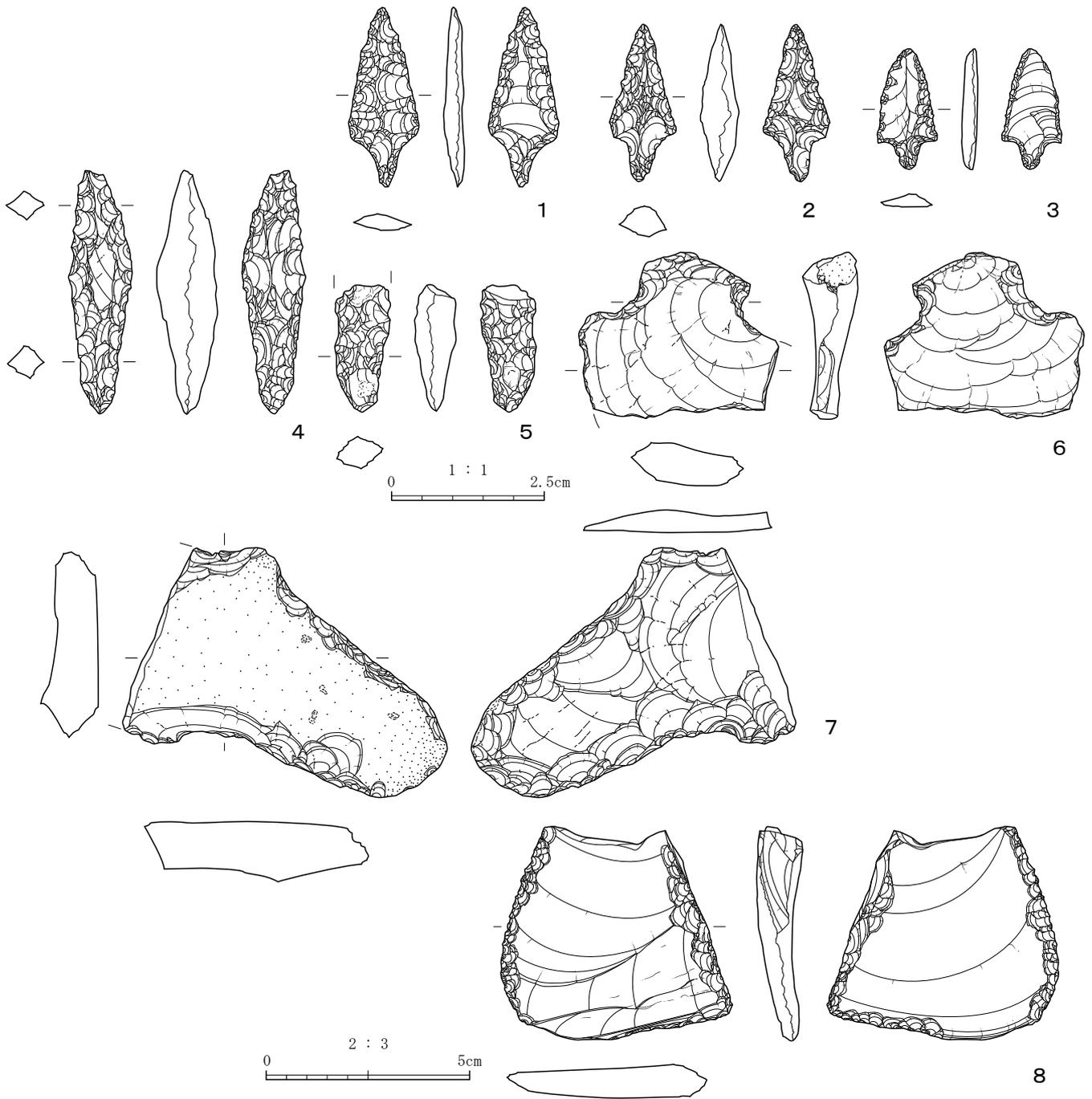
本調査区6・7・11では総計106点の石器が出土した。器種組成を見ると二次加工痕を有する剥片(RF)や微細剥離痕を有する剥片(UF)、剥片、碎片の出土数が卓越しており、これに加えて復元される全体形状がやや掴みにくい大型板状石器破片を含めると、全体の約6割強を占める。次いで石皿類や礫石器類の合計が約3割を数え、残りが磨製石斧や石鏃などの定形石器となっている。石材組成では流紋岩と安山岩で全体の約5割強を占め、その他には凝灰岩質安山岩といった特定の器種との結びつきが強い石材がやや目立つ。また玉髓や頁岩類、凝灰岩などを石材とした小型打製石器の素材類も一定の数量確認されている。こうした傾向からは、本調査区1～4等の自然流路周辺での石器製作・使用の在り方に近い部分が読み取れる一方で、本調査区5のような石器を使用した作業が展開していた場、としての側面も併せ持っているとも見られる。

第96図～第102図に出土した石器のうち32点を図示した。

第96図1～3は石鏃である。1は珪質頁岩を石材とし、裏面には素材剥離面の主要剥離面を大きく残す。先端部から逆棘部までの両側縁は直線的で、茎部と身部の境は内湾してやや連続的である。2は鉄石英を石材とする石鏃で、やや身厚である。器体の最大厚は逆棘部の若干上に位置しており、先端部から逆棘部までの両側縁部はわずかに内湾するものの直線的に整えられている。3は玉髓を石材とするやや小形の石鏃である。表裏両面には素材剥片の剥離面を大きく残し、表面中央部の稜は素材剥片の剥離の際に生じた稜をそのまま生かしており、二次加工は周縁部の形状成形のためのわずかな部分に留まっている。先端部から逆棘部までの両側縁はやや外湾しており、その点でも他の石鏃とは趣を異にしている。4・5は石錐で、ともに流紋岩を石材としている。4は両端に先端部が作り出されている棒状の石錐である。横断面形は両先端部共にやや身厚な菱形を呈しており、基部と先端部の境は側縁がやや屈曲しているため判別が可能である。5は先端部の破片である。石材に内在する不純物により折損したものと考えられ、細かめの二次加工を不連続的に施すことによって棒状の先端部を作り出している。横断面形はやや歪な菱形を呈する。6は横型の石匙である。身厚な打面部を摘部に設定し、上端部には素材剥片の打面が大きく残る。表裏面には素材剥片の剥離面が大きく残り、両側縁部から下端縁にかけて欠損している。7は二次加工を有する剥片で片岩類を石材としている。表面には素材の自然面を大きく残し、左側面部分を欠損する。二次加工の多くは表面側から施されており、比較的急斜で形状成形を目的としていると考えられる。いわゆる異形石器の類かと考えられるが、全体形状も含めて不明である。8は珪質頁岩を石材とする二次加工痕を有する剥片である。表裏両面共に素材剥片の剥離面を大きく残しており、右側縁から下端縁には2辺を直線的に加工することによって鈍角な先端部が、左側縁は下端縁に向けて外湾する刃部が、それぞれ作り出されている。

第97図1は管玉の未成品と考えられる資料である。剥離により全体の形状成形が開始された段階と考えられ、敲打や研磨による調整はまだ開始されていない。2～4は石庖丁の成品破片でいずれも片岩類を石材としている。2は紐孔が2カ所観察され、器体中央部分の破片と考えられる。全体の形状は推測となるが直線的に成形された背部から外湾刃半月形と考えられる。裏面には研磨に先行して施された剥離成形の痕跡が部分的に残る。3は紐孔が1ヶ所確認され、表裏両面には研磨に先行する敲打成形の痕跡が部分的に確認される。3は表裏面に部分的に残る研磨面から、破損後の転用を企図して二次加工を施したものと考えられるが、完成にはいたっていないと見られる。

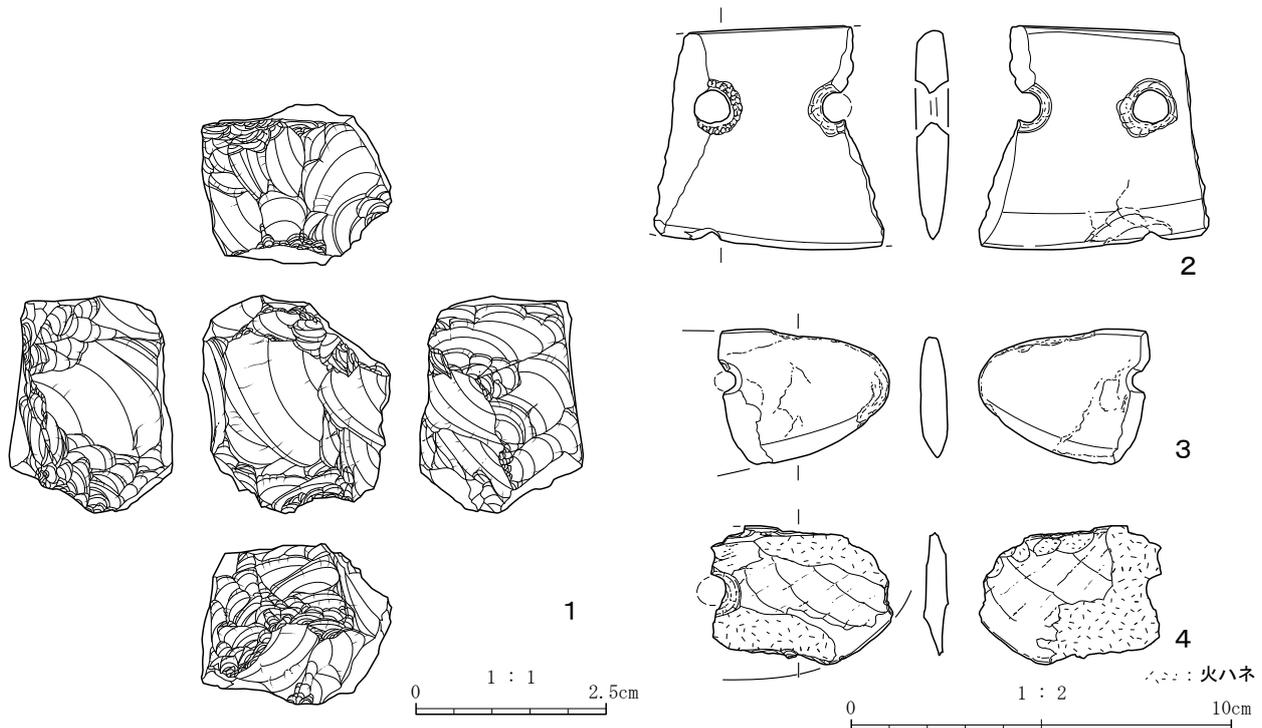
第98図1～3はいずれも石庖丁の未成品で片岩類を石材としている。1は片岩類を石材としており、貫通してはいないものの紐孔部の成形を開始している。周縁を剥離によって成形した後に器体部分に面的な敲打成形を施し、表



第 61 表 本調査区 7 区出土石器 観察表

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	器種	石材 / 素材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	
96- 1	46- 1	K056		打製石器	石鏃	珪質頁岩	3.0	1.2	0.4	0.8	裏面に素材剥片の主要剥離面を大きく残す
96- 2	46- 2	K057		打製石器	石鏃	鉄石英	2.6	1.1	0.6	1.1	表面中央部に稜を持ち、身厚
96- 3	46- 3	K058		打製石器	石鏃	玉髓	2.0	1.0	0.3	0.4	表裏面に素材剥片の剥離面を大きく残す
96- 4	46- 4	K059		打製石器	石錐	流紋岩	4.0	1.1	1.0	3.3	棒状を呈する
96- 5	46- 5	K060		打製石器	石錐	流紋岩	(2.1)	(0.9)	(0.7)	(1.3)	上半部を欠損する
96- 6	46- 6	K061		打製石器	石匙	流紋岩	(4.1)	(4.9)	(1.4)	(17.3)	摘部に素材剥片の打面を残す
96- 7	46- 7	K062	X層	打製石器	RF	片岩類	(6.2)	(8.0)	(1.8)	(70.8)	表面に元礫面を大きく残す。異形石器の類か？
96- 8	46- 8	K063	SR11	打製石器	RF	珪質頁岩	5.3	5.7	1.1	27.9	周縁部に微細な二次加工を施す

第 96 図 本調査区 7 区 出土石器 (1)



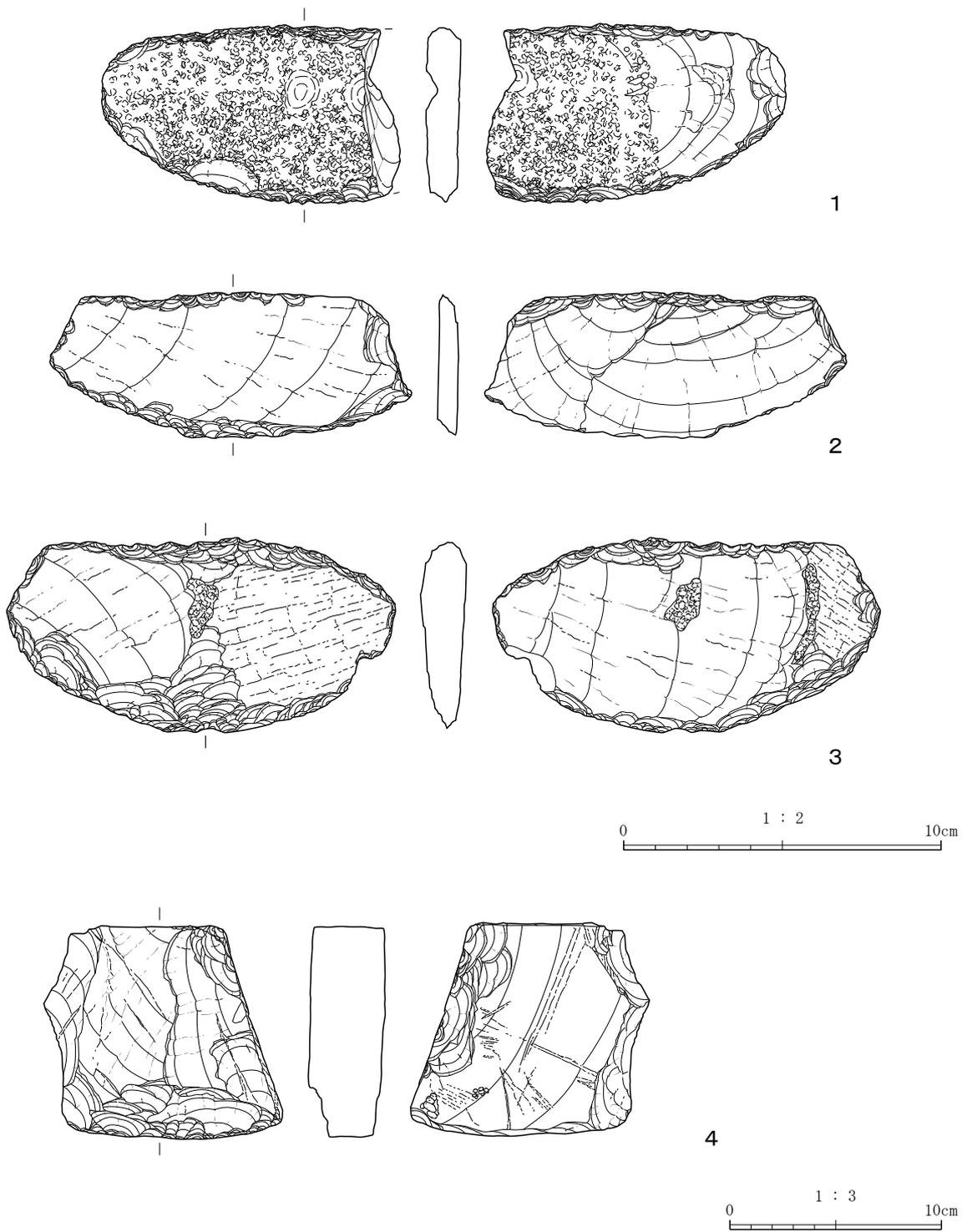
第 62 表 本調査区 7 区出土石器 観察表

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	器種	石材 / 素材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	
97- 1	46- 9		SK7	管玉	未成品	片岩類	2.9	2.5	2.2	19.1	成形初期段階の未成品
97- 2	47- 1	K064		石庖丁	成品破片	片岩類	6.0	(6.1)	10	(47.1)	紐孔部破片。2孔あり
97- 3	47- 2	K065		石庖丁	成品破片	砂質片岩	(3.6)	(4.5)	0.8	(15.9)	紐孔部破片
97- 4	47- 3	K066	SR11	石庖丁	成品破片	泥質片岩	(3.7)	(4.8)	0.7	(12.7)	紐孔部破片。破損後に二次加工あり

第 97 図 本調査区 7 区 出土石器 (2)

敲打痕が面的に累積している。6 はかなり大形で重量のある自然礫を素材としており、部分的に弱い磨面が複数ヶ所で観察される。また表面中央部分には、平坦で光沢の強い特徴的な磨面が観察され、他の磨面とは対象物や使用方法も異なっていた可能性も考えられる。

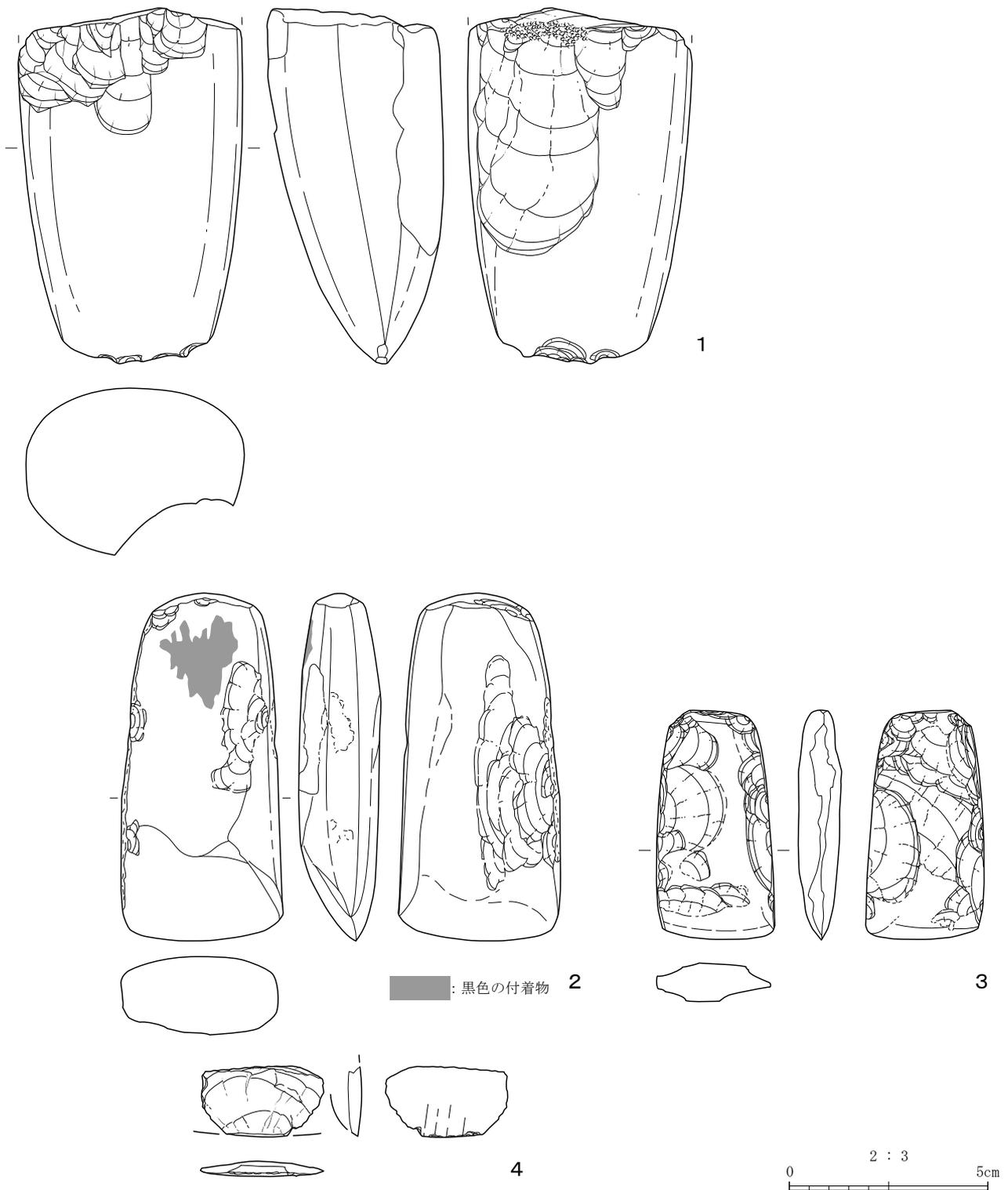
第 102 図 1・2 はともに安山岩を石材とした石皿類である。1 は扁平な礫を素材としており、上下両端部分を欠損している。また裏面側には被熱によるハジケによって割れを生じている。左側面と表面には線状痕を伴う弱い磨面が広範囲に広がり、裏面の一部には敲打痕が累積する個所が部分的に観察される。また表面の中央部分には平坦で強い光沢をもった顕著な磨面が限定的に確認される。2 は表面の広い範囲に比較的平坦な磨面が確認される。



第 63 表 本調査区 7 区出土石器 観察表

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	器種	石材 / 素材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	
98- 1	47- 4	K067	SR10	石庖丁	未成品	片岩類	5.7	(9.4)	1.2	85.8	研磨成形途上の未成品。紐孔は未貫通
98- 2	47- 5	K068	SX17	石庖丁	未成品	砂質片岩	4.7	11.4	0.7	49.1	敲打成形途上の未成品
98- 3	47- 6	K069	X層	石庖丁	未成品	片岩類	6.2	12.2	1.7	125.7	敲打成形途上の未成品
98- 4	47- 7	K070	SR13	石庖丁	未成品	珪質凝灰岩	10.0	11.5	3.4	599.5	形状成形段階の未成品

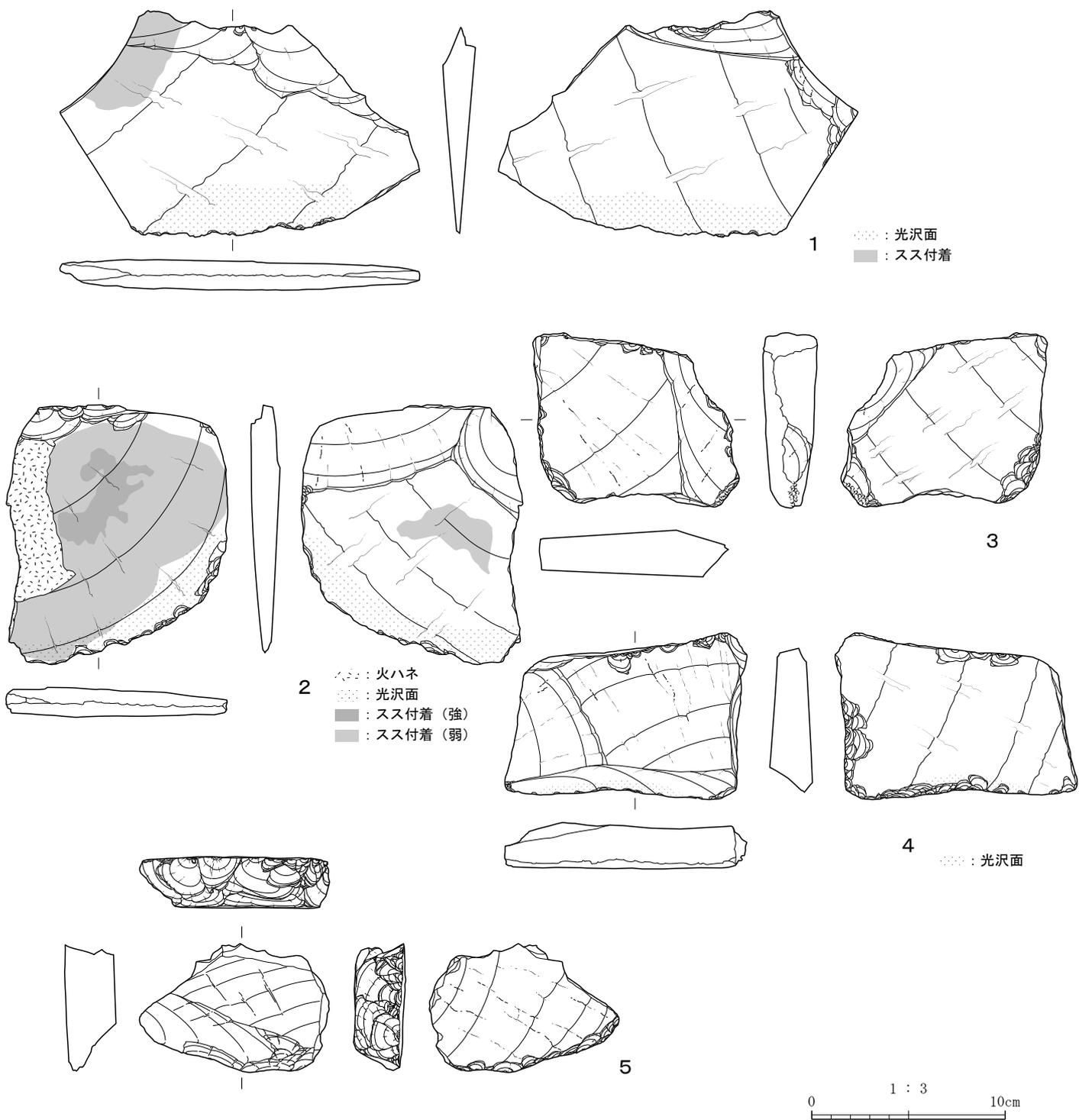
第 98 図 本調査区 7 区 出土石器 (3)



第 64 表 本調査区 7 区出土石器 観察表

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	器種	石材 / 素材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
99- 1	48- 1	K071		磨製石斧 太形蛤刃	斑レイ岩	(9. 0)	5. 7	(4. 5)	(325. 0)	欠損後に敲打具として転用
99- 2	48- 2	K072	SR11	磨製石斧 扁平偏刃	斑レイ岩	8. 8	4. 1	2. 1	131. 3	基端部表面に付着物?あり
99- 3	48- 3	K073	SX17	磨製石斧 扁平偏刃	安山岩	5. 8	3. 0	1. 1	28. 5	成形時の剥離面が研磨後にも残る
99- 4	48- 4	K074	IX層	磨製石斧 扁平偏刃	安山岩	(1. 8)	(3. 1)	(0. 4)	(2. 6)	扁平偏刃石斧の刃部破片

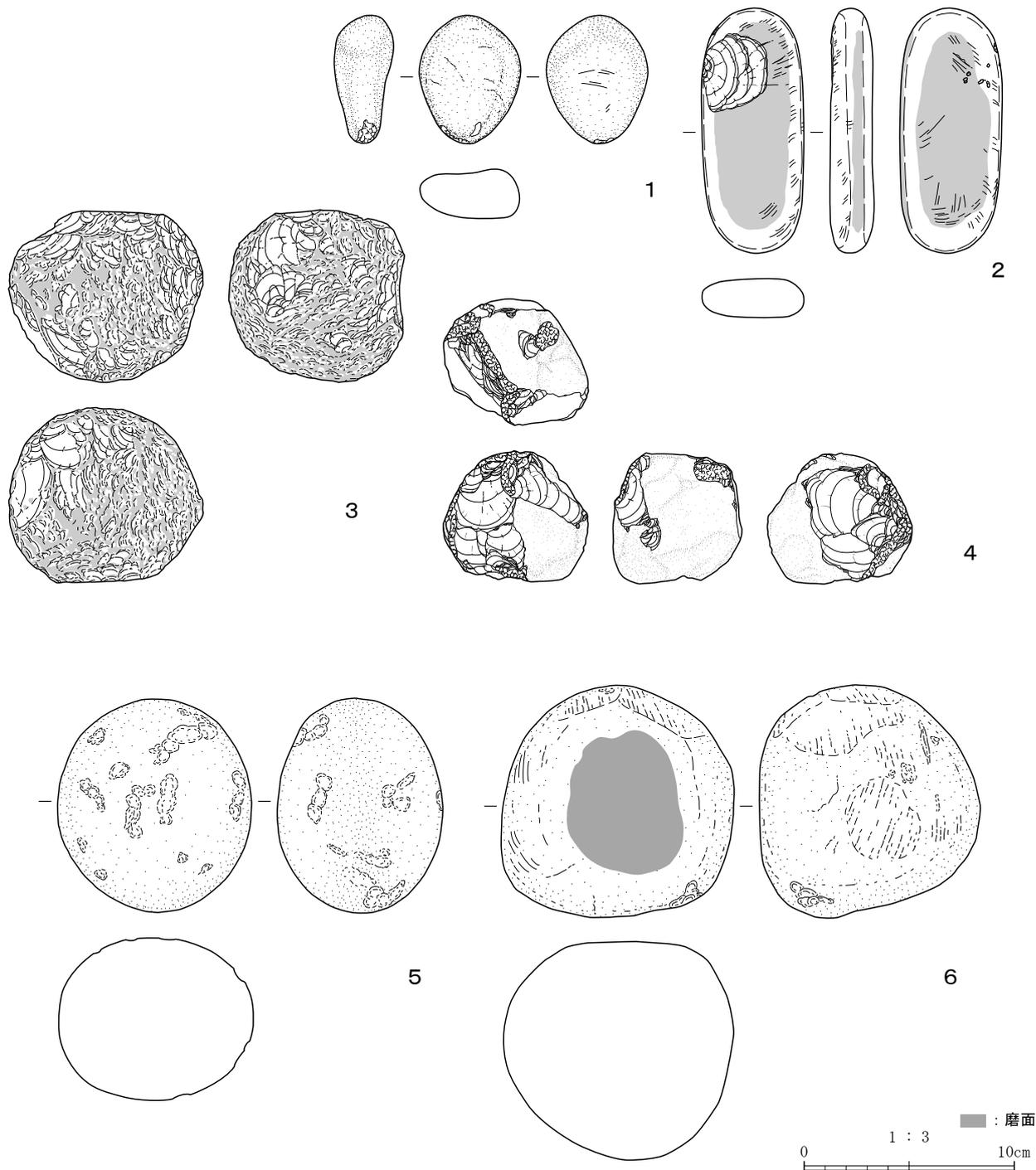
第 99 図 本調査区 7 区 出土石器 (4)



第 65 表 本調査区 7 区出土石器 観察表

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	器種	石材 / 素材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
100- 1	48- 5	K075	SX19	打製石器	大型板状石器 凝灰岩質 安山岩	11.8	18.8	1.7	313.0	
100- 2	48- 6	K076	IX層	打製石器	大型板状石器 凝灰岩質 安山岩	(13.5)	(11.4)	1.5	265.0	
100- 3	49- 2	K077	SK7	打製石器	大型板状石器 凝灰岩質 安山岩	(10.8)	(9.3)	3.0	352.5	敲打具として転用か
100- 4	49- 1	K078	SK7	打製石器	大型板状石器 凝灰岩質 安山岩	(9.0)	(12.6)	2.4	345.0	
100- 5	48- 7	K079	IX層	石製品	紡錘車 未成品 片岩類	6.8	9.8	2.7	238.5	主に裏面側を打面として全体形状を成形する

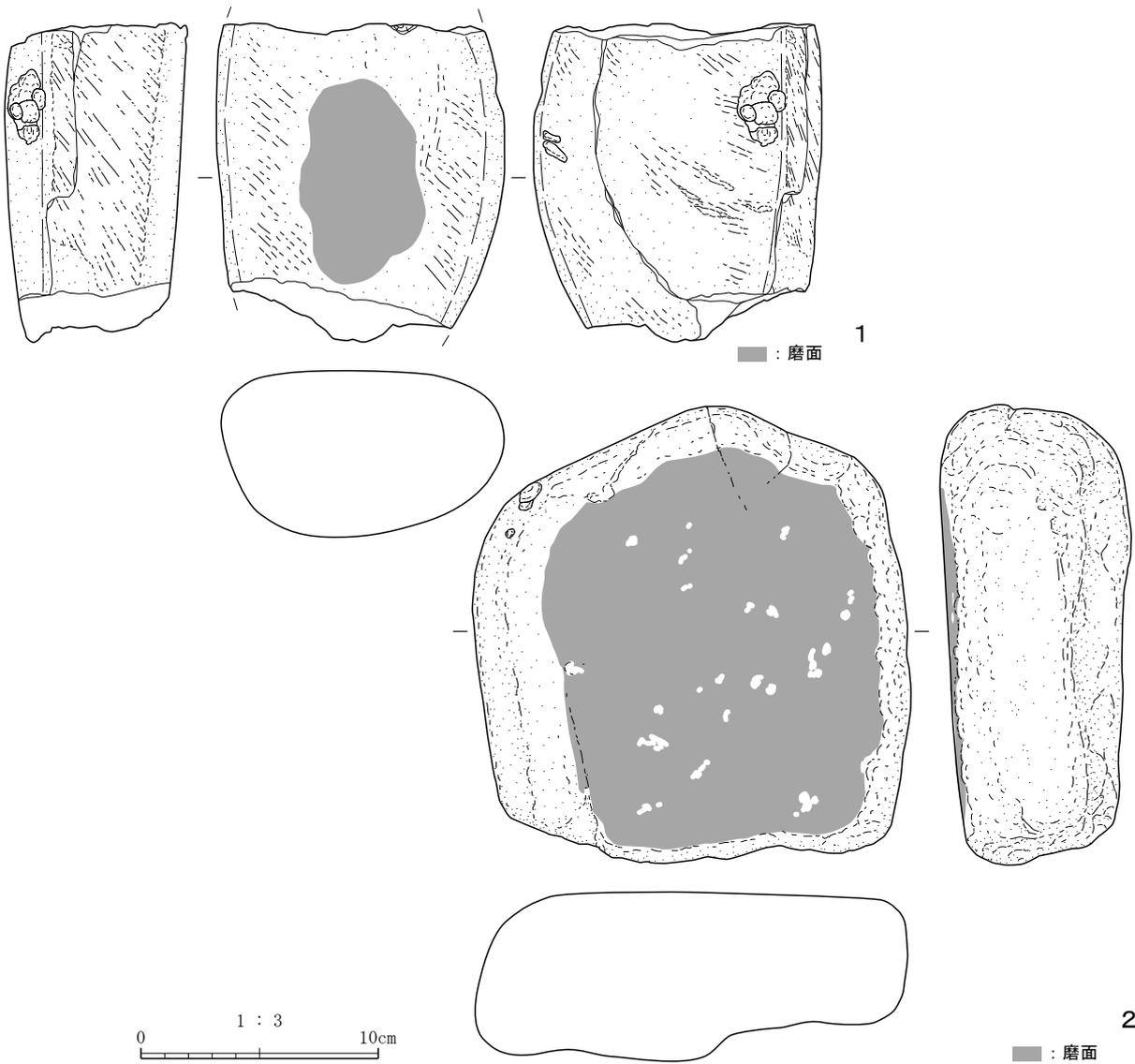
第 100 図 本調査区 7 区 出土石器 (5)



第 66 表 本調査区 7 区出土石器 観察表

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	器種	石材 / 素材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	
101- 1	49- 3	K080	SR11	敲磨具類	ハンマー	片岩類	6.1	4.9	2.9	100.9	下端部に敲打に伴う平坦面が限定的に見られる
101- 2	49- 4	K081	SR	敲磨具類	ハンマー・磨	砂岩	11.8	4.9	2.1	196.5	表裏面に顕著な磨り。左側縁に敲打に伴う剥離
101- 3	49- 5	K082	X層	敲磨具類	球状敲石	硬質泥岩	8.4	9.3	8.4	911.5	全周に敲打に伴う剥離と潰れあり
101- 4	49- 6	K083		敲磨具類	球状敲石	珪質凝灰岩	6.3	6.9	6.1	331.5	敲打による剥離と部分的な潰れ。礫面有
101- 5	49- 7	K084	SR	敲磨具類	磨・敲	安山岩	10.3	9.3	7.9	1004.5	周縁には弱い敲打痕が面的に累積する
101- 6	49- 8	K085	SR11	敲磨具類	磨・敲	安山岩	11.2	11.1	10.5	1926.0	表面に鏡面状の磨面が限定的に見られる

第 101 図 本調査区 7 区 出土石器 (6)



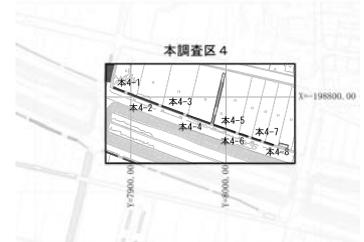
第 67 表 本調査区 7 区出土石器 観察表

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	器種		石材 / 素材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
102- 1	50- 1	K086	SR10	石皿類	石皿	安山岩	(13.6)	12.2	7.7	1971.0	表面に顕著な磨面が限定的に見られる
102- 2	50- 2	K087	SR10	石皿類	石皿	安山岩	19.5	18.5	8.2	4100.0	表面に平坦な磨面が広がる

第 102 図 本調査区 7 区 出土石器 (7)

7. 本調査区 8 (第 104 ~ 108 図・第 69 ~ 71 表)

本調査区 8 は周知の遺跡範囲内で、日辺排水路の東西に跨って設定した調査区である。平成 28 年度に試掘調査を行った試掘調査区 5 南端部で、南側へ落ち込む流路 (SR2 自然流路跡) の北肩を確認したため、延長部分の状況確認を主な目的として南北約 30m に渡って調査を実施した。現地表面の標高は約 3.0 ~ 3.1m 前後である。調査区の中央は日辺排水路によって南北方向に削平され、確認面は 2.1m 前後である。日辺排水路範囲外にあたる調査区西端と東端で観察される基本層 X 層の標高は約 2.6 ~ 2.7m である。調査の結果、調査区北西から南東にかけて延びる溝跡 1 条 (SD22)、自然流路跡 1 条 (SR13) が確認された。断面観察の結果、SD22 は 1 時期、SR13 は 2 時期にわたると考えられる。



第 103 図 本調査区 8 位置図 (1:8000)

【SD22 溝跡】

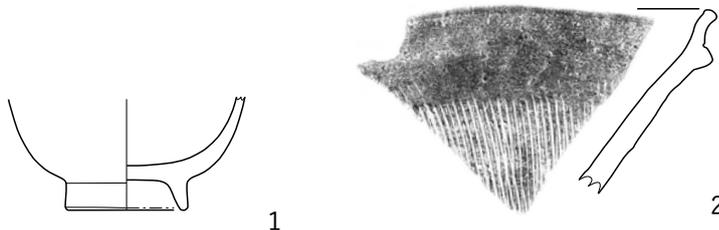
調査区北西から南東にかけて直線的に延びる溝跡で、検出幅約 2.0 m 検出長は約 10 m、壁断面で観察された深さは約 1.0 m である。検出範囲の大半が日辺排水路の開削の際に削平を受けており遺構堆積層の上部は確認できなかったが、SR13 自然流路跡の堆積層が遺構上部を覆っている状況が確認された。遺物は出土していない。

【SR13 自然流路跡】

SR13 では西壁断面付近の 2 層上面で礫敷き範囲を確認し、この面を境として時期が別れると考えられる。礫敷き範囲からは相馬焼の碗のほか、播鉢、下駄などが出土した。

【SK13 土坑】

東西 1.1m、南北 1.8m の弧状の平面形を持ち、底面は概ね平坦である。東側は日辺排水路により攪乱され、西側の一部は調査区外へ延びる。SR13 と重複関係を持ち、SR13 より古い。検出状況から SR13 へと接続する溝状遺構の可能性であった可能性も考えられるが詳細は不明である。遺物は出土していない。



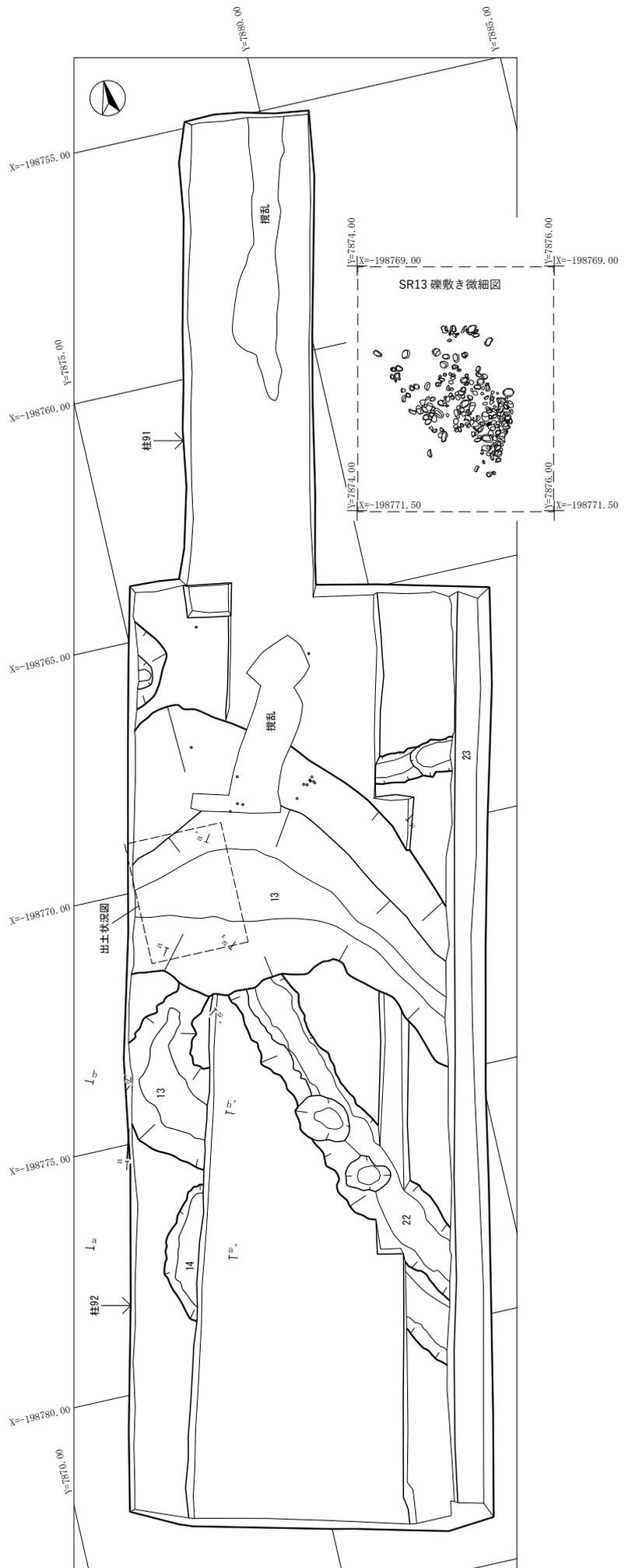
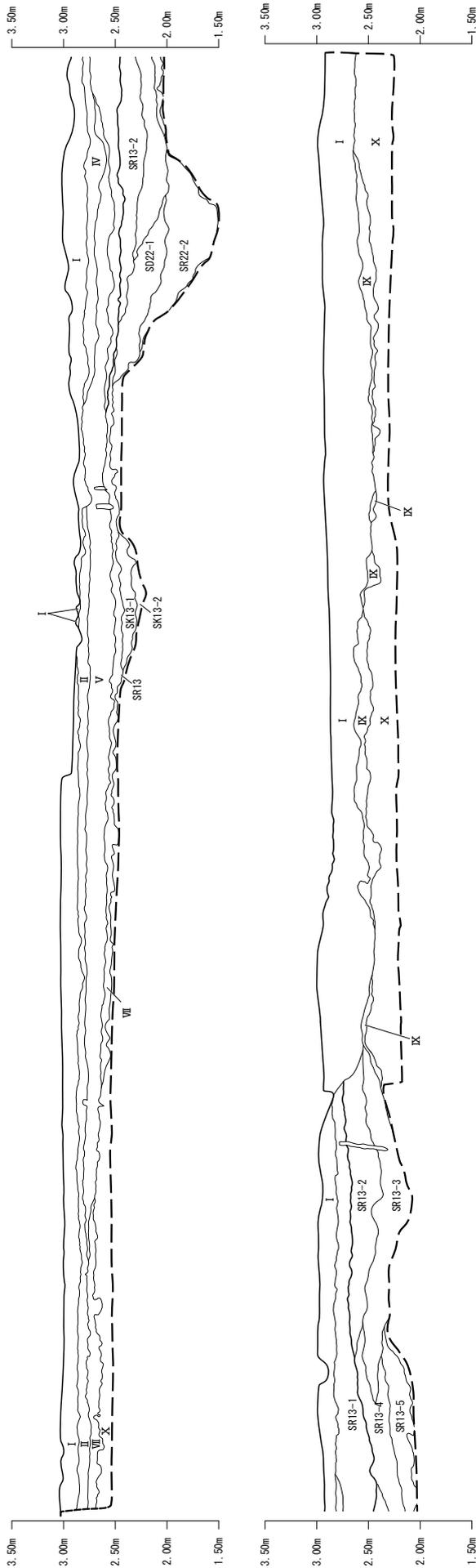
第 104 図 本調査区 8 出土遺物 陶器

第 68 表 本調査区 8 出土遺物観察表 陶器

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	種別	器種	部位	口径	底径	器高	地文/ 施文	外面調整/ 内面調整	備考
104- 1	39-6	I003	本 8/ SR13/2 層 上面	陶器	碗	-	-	4.8	4.4	ロクロ・回転糸 切底 / 灰釉	淡黄灰 / 大堀相 馬	畳付き以外全面施釉
104- 2	39-7	I004	本 8/ SR13/1 層	陶器	播鉢	-	-	-	7.3	ロクロ・回転糸 切底 / 鉄釉	暗褐 / 不明在地	櫛目 6 本か / 2.5 mm 幅

第 104 図は SR13 の礫敷き範囲から出土した近世陶器である。1 は相馬焼の碗である。高台内まで施釉され、畳付きのみ拭き取られている。2 は播鉢である。内面の口縁下位 3.5cm ほどの位置まで櫛目が施され、櫛目の端部はナデにより概ね揃えている。

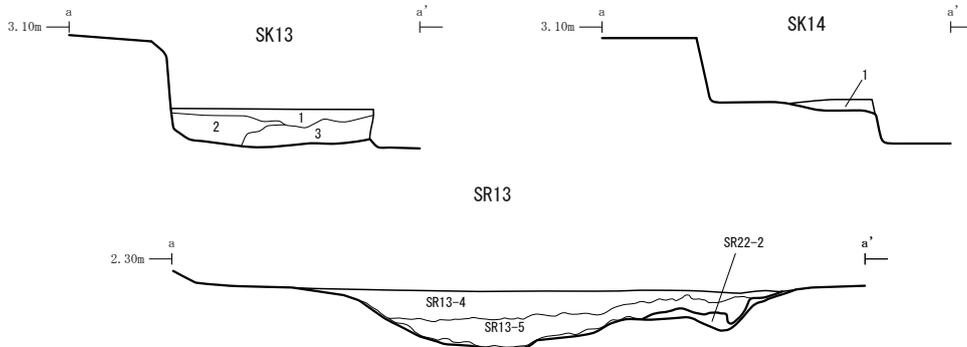
第 107 図 1 は SR13 自然流路の堆積土内より出土した。安山岩の自然礫を石材とした礫石器で、上下端部に敲打痕が累積して生じた平坦面が複数面観察される。一つの敲打痕の累積は比較的狭い範囲に集中しており、敲打の対象と目的が広範囲に及ぶものではなかったことが推測される。敲打痕が累積する平坦面は、自然礫の端部稜上などに限定的に見られることから、石器製作などに用いられたハンマーのような用途が考えられる。2・3 は基本層 VII ~ VIII 層で出土した。2 は安山岩の自然礫を石材とし、表面の左上半部にやや発達した磨面が、表裏中央部分にやや弱い敲打痕の集中する部分が、それぞれ観察される。周縁部側面には弱い敲打痕が累積する部分が観察され、その結果として左右両側は若干平坦な敲打面が形成されつつある。また、上端部には自然礫稜上の限定された範囲に集中的に敲打痕が累積する状況も観察される。3 は節理の発達した凝灰岩質安山岩を石材としている。下端縁には二次加工痕が観察さ



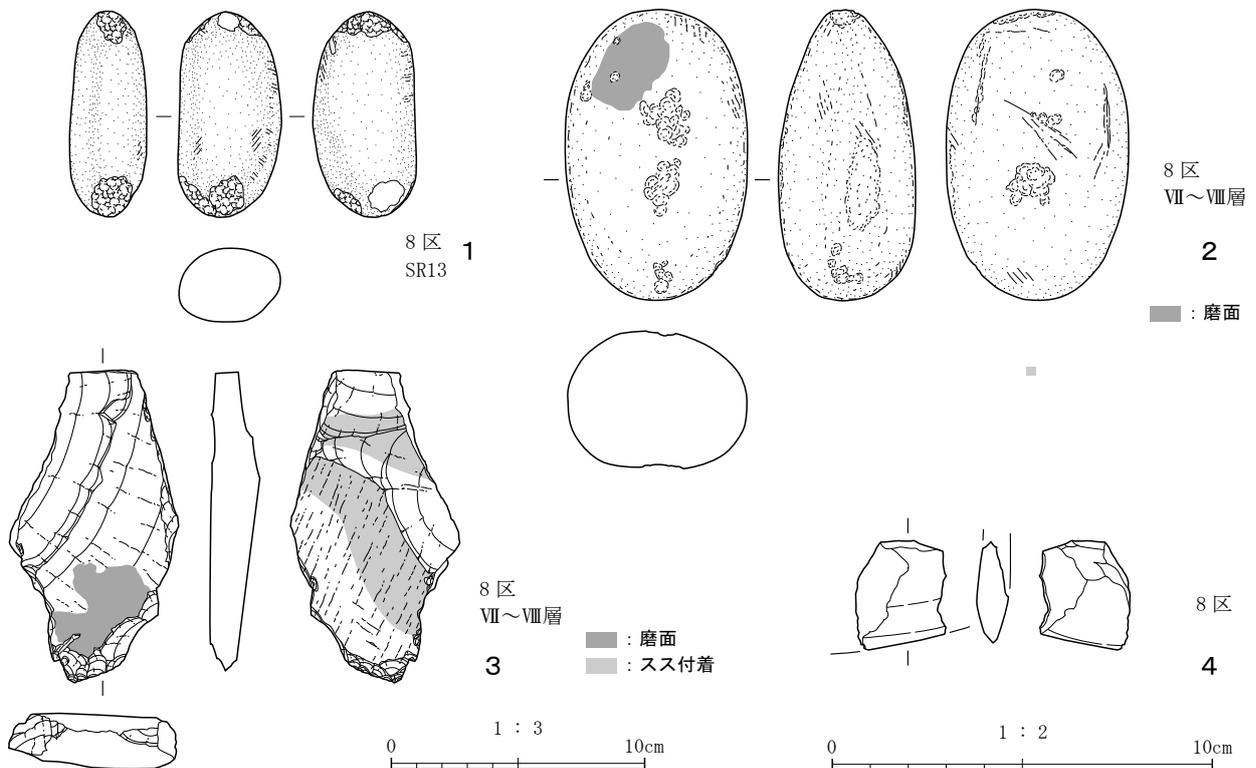
第 105 図 本調査区 8 X 層上面平面図 (1/120)・断面図 (1/60)・SR13 漆敷き微細図 (1/60)

第 69 表 本調査区 8 土層注記表

遺構名	層位	土色	土性	備考	
本調査区 8 共通	I	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質粘土	現代の耕作土、盛土
	V	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト	酸化鉄斑紋状に集積。
	VII	2.5Y4/1	黄灰色	粘土質シルト	酸化鉄斑紋状に集積。
	IX	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	マンガン集積。
SD22	1	2.5Y6/1	黄灰色	粘土質シルト	酸化鉄が層全体に斑紋状に多く集積。
	2	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	10YR2/1 黒粘土質シルトをブロック状に含む。酸化鉄斑紋状に層全体に集積。
SR13	1	7.5Y5/1	灰	粘土	7.5Y6/2 灰オリーブの粘土を層下部に大ブロック状に含む。酸化鉄が層全体に斑紋状に多く集積。
	2	7.5Y5/1	灰	粘土	7.5Y6/2 灰オリーブの粘土を層下部にやや多く含む。
	3	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂質シルト	10Y5/1 灰色のシルトを粒状に含む。
	4	7.5Y5/1	灰	粘土	7.5Y6/2 灰オリーブの粘土を含む。グライ化。
	5	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	10YR2/1 黒粘土質シルトを含む。
SK13	1	10YR4/1	褐灰色	シルト質粘土	10YR4/3 にぶい黄褐色の粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。酸化鉄斑紋状に層全体に集積。
	2	7.5Y5/	灰	粘土	7.5Y6/2 灰オリーブの粘土を層下部にやや多く含む。
	3	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	10YR4/1 褐灰色のシルト質粘土をブロック状に含む。
SK14	1	10YR4/1	褐灰色	シルト質粘土	10YR4/3 にぶい黄褐色の粘土質シルトをブロック状に含む。酸化鉄斑紋状。



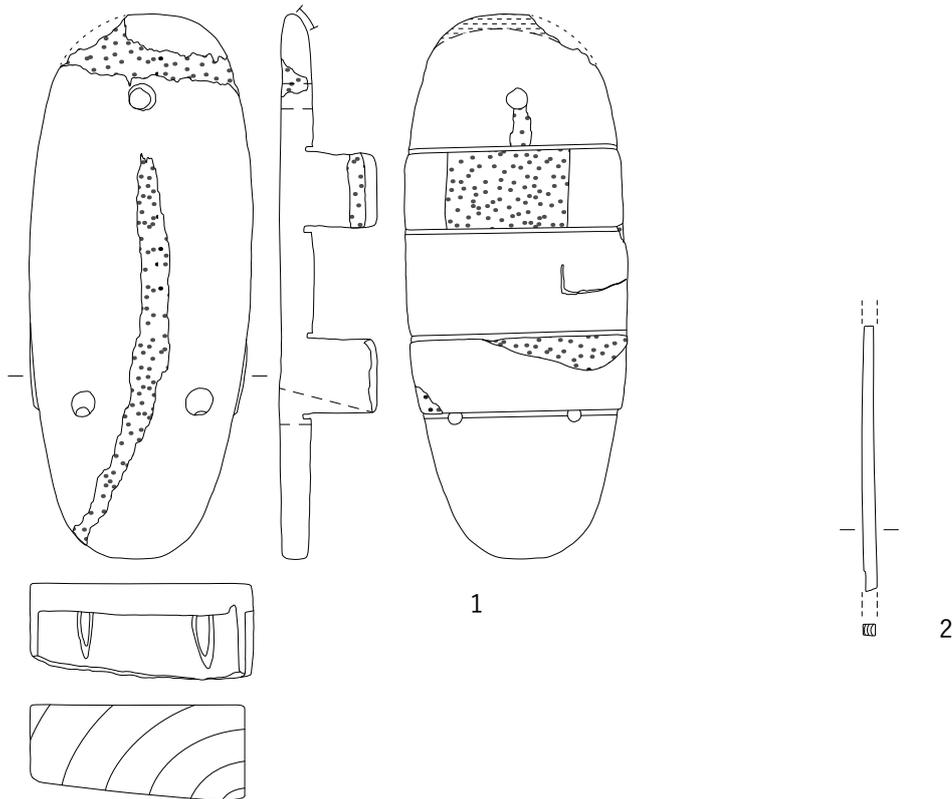
第 106 図 本調査区 8 断面図 (1/60)



第 107 図 本調査区 8 出土遺物 石器

第70表 本調査区8 出土遺物観察表 石器

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	器種	石材 / 素材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	
107- 1	50-3	K089	SR13	敲打具類	ハンマー	安山岩	8.2	4.1	2.9	153.5	端部に敲打痕が累積する狭い平坦面あり。
107- 2	50-4	K090	VII~VIII	敲打具類	磨・敲	安山岩	11.6	7.3	5.4	677.0	表裏面と側縁部に敲打痕と弱い磨面あり。
107- 3	50-5	K091	VII~VIII	打製石器	大形板状石器	凝灰岩質安山岩	12.5	6.7	2.0	195.0	表面の一部に半光沢面あり。
107- 4	50-6	K092		石庖丁	成品破片	砂質片岩	(2.9)	(2.4)	(8.5)	-	刃縁部破片。



第71表 本調査区8 出土遺物観察表 木製品

図番号	写真番号	登録番号	種別	樹種	木取	遺構・出土層	全長	最大幅	最大厚	備考
108- 1	53-10	L020	下駄	サワラ	分割材 (偏半割)	SR13	21.6	8.8	3.9	
108- 2	53-11	L021	部材片	ヒノキ	分割材		(10.5)	0.6	0.6	

第108図 本調査区8出土遺物 木製品

れ、表面には剥離面に先行する弱い光沢面が部分的に観察される。裏面の下半部は節理面であり、上端部は折取りによって形状が整えられていたと考えられ、大型板状石器の破損品が素材として用いられた可能性が考えられる。4は石庖丁の成品破片である。下端縁に刃縁部が残存しているが、部分的な破片であるため全体形状は推測できない。また、紐孔部も残っていない。第108図1はSR13で出土した連歯式の下駄である。鼻緒の孔は台部に対してほぼ垂直に、横緒の孔は台部から歯部にかけてやや斜めに設けられている。第108図2は上下両端部を欠損する不明部材片である。横断面形はほぼ正方形で、表面は削り加工が施されて滑らかに整えられている。

8. 本調査区9（第109図・第72～77表）

本調査区9は周知の遺跡範囲の北側にあたり、本調査区3・4に概ね直行する形で設定した南北方向に約55mの調査区である。調査区周辺の現地表面の標高は約2.7～2.8m、基本層X層の確認される標高は調査区最北部で約2.5m前後、そこからやや下って調査区北側では約2.3～2.4m、調査区南側では約2.2～2.3mである。第1次調査で確認されていたSR2自然流路跡の北側延長部分は、本調査区では確認されず、前述の本調査区4～5で確認されているが、本調査区は南端部分に自然流路



第109図 本調査区9位置図（1:8000）

北岸の自然堤防状の高まりが存在し、その北側にやや標高の下がった平坦な地形面が広がっていたものと考えられる。また調査区の北端部付近では基本層X層の確認上面標高がやや高くなってきていることから、調査範囲外北側には微高地状の高まりが存在していた可能性も考えられる。

調査区内で確認された基本層はI～X層に加えてa層：灰白色火山灰層で、b層：洪水堆積層の堆積は確認されていない。また水田耕作土層と考えられる基本層III・V層の残存状況が良好で、その耕作の影響によるものかIV・VI層は断片化している様子が観察されている。また他の調査区に比べると基本層VIII層の残存状況が良好な点も本調査区の特徴の一つである。基本層X層上部の堆積層の多くは層の下面が著しく起伏した基本層VIII層であり、その所々で基本層IX層が残されている様子が平面と断面で観察されている。基本層IX層は、弥生時代に到来した津波堆積物と考えられる粗粒砂～中粒砂を層中に多く混在しているIXb層と、ほぼ砂によって構成され層中に比較的多くの遺物を内包しているIXa層の、上下2層に細分される。遺物のほとんどは基本層IX層と、水田耕作に伴ってこれを層中に巻き上げたと考えられる基本層VIII層中より出土しており、若干磨滅が顕著な弥生土器の小破片を中心に多くの遺物が確認されている。

本調査区9では、溝跡3条（SD31・32・30）と土坑2基（SK01・02）、遺物の集中出土箇所1箇所（SX01）に加えて2条の畦畔状の高まりを確認した。

【SK01 土坑】

標高2.3m前後のX層上面で検出した。長軸約1.2m短軸約0.9mの長形状で、確認面からの最大深度は約0.2mである。遺構内には粗粒砂を多く含んだ基本層IXb層が堆積しており多くの土器が出土したが、磨滅した小破片が多く凶化した遺物はない。

【SK02 土坑】

標高2.3m前後のX層上面で検出した。長軸約1.1m短軸約0.8mの不整形形状で、確認面からの最大深度は約0.15mである。遺構内には粗粒砂を多く含んだ基本層IXb層が堆積しており、弥生土器片と剥片・破片などが出土した。

【SD30 溝跡】

標高2.3～2.4mの基本層VI層の下面、X層上面で検出したが、調査区西壁断面の観察の結果、基本層VII層上面から掘り込まれた遺構であることが判明した。検出長約2.3m検出上端幅約2.0m、検出中端幅約1.2mで、確認面からの最大深度は約0.5mの口が開いたU字型の断面形を呈する。遺構の堆積土は3層である。層中からは非ロクロ土器小片が出土している。

【SD31 溝跡】

標高2.4m前後の基本層VI層の下位、VII層上面で検出した。検出長約3.0m検出幅約0.5mで、確認面からの最大深度は約0.2mの浅い皿状の断面形を呈する。遺構内の堆積土は1層である。弥生土器・非ロクロ土器・石庖丁未成品破片など9点の遺物が出土している。

【SD32 溝跡】

標高2.4m前後の基本層VI層の下位、VII層上面で検出した。検出長約2.4m検出幅約0.6mで、確認面からの最大深度は約0.15mの浅い皿状の断面形を呈する。調査区9の南端部分で南西方向から北東方向に向けて直線的に確認された。遺構の堆積土は1層である。層中からは弥生土器が出土している。

第 72 表 本調査区 9 土層注記表

遺構名	層位	土色	土性	備考
本調査区 9 共通	II	10YR5/1	褐色	シルト質粘土 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。砂をやや多く含む。マンガン集積。
	III	10YR4/1	褐色	シルト質粘土 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトをブロック状にやや多く含む。酸化鉄層状、マンガン粒状に集積。
	IV	2.5Y5/2	黄灰色	シルト質粘土 10YR5/2(褐色)粘土質シルトをブロック状に含む。マンガン粒状に集積。
	V	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトをブロック状に含む。マンガン粒状に集積。
	VI	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。層下位に灰白色シルトを小ブロック状または粒状に含む箇所がある。
	VII a	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。VI層との境に灰白色シルトをブロック状にやや多量、または層状に含む箇所がある。
	VII b	10YR4/2	褐色	粘土質シルト 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。層中わずかに細粒砂を混在する。
	VIII	10YR3/1	黒褐色	シルト質粘土 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトをブロック状に含む。マンガン粒状に集積。
	IX	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト 全体的に砂をやや多く含む、層中に砂の薄層を挟む箇所がある。酸化鉄斑紋状、層全体に集積。
	X	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト 酸化鉄斑紋状、層全体に集積。
SD31	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト 10YR4/2 灰黄褐色の粘土質シルトをブロック状に含む。酸化鉄斑紋状に集積。
SD32	1	10YR2/1	黒色	粘土質シルト 10YR4/2 灰黄褐色の粘土質シルトをブロック状に含む。
SD30	1	2.5Y2/1	黒色	シルト質粘土 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトを小ブロック状に少量含む。層下位に灰白色シルトを薄層状に含む。
	2	2.5Y5.2	暗灰黄色	粘土質シルト 層中に細粒砂を若干混在する。白色シルトをブロック状に含む。
	3	2.5Y4/1	黄灰色	粘土質シルト 層中に白色シルトをブロック状にわずかに含む。
SK01	1	7.5Y3/1	オリーブ黒色	粘土質シルト 全体的に砂をやや多く混在する。酸化鉄斑紋状、層全体に集積。
SK02	1	7.5Y3/1	オリーブ黒色	粘土質シルト 全体的に砂をやや多く混在する。酸化鉄斑紋状、層全体に集積。
SX01	1	10YR3/1	黒褐色	シルト質粘土 2.5Y4/1(黄灰色)粘土質シルトをブロック状に含む。マンガン粒状に集積。
	2	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト 全体的に砂をやや多く混在する。酸化鉄斑紋状、層全体に集積。

【SX01 性格不明遺構】

標高 2.2m の基本層 VIII 層の下面、X 層上面で検出した。長軸 2.1m 短軸 0.9m の不整楕円形状で、調査区外西側へ広がる。確認面からの最大深度は約 0.3m である。遺構内の堆積土は 2 層で、基本層 IX 層と類似した土を基調として粗粒砂～中粒砂を多く含む。遺構堆積土の上面は基本層 VIII 層によって覆われている。

遺構内からは弥生土器、剥片や碎片を始めとした小形の打製石器が出土している。

【V 層畦畔状遺構】

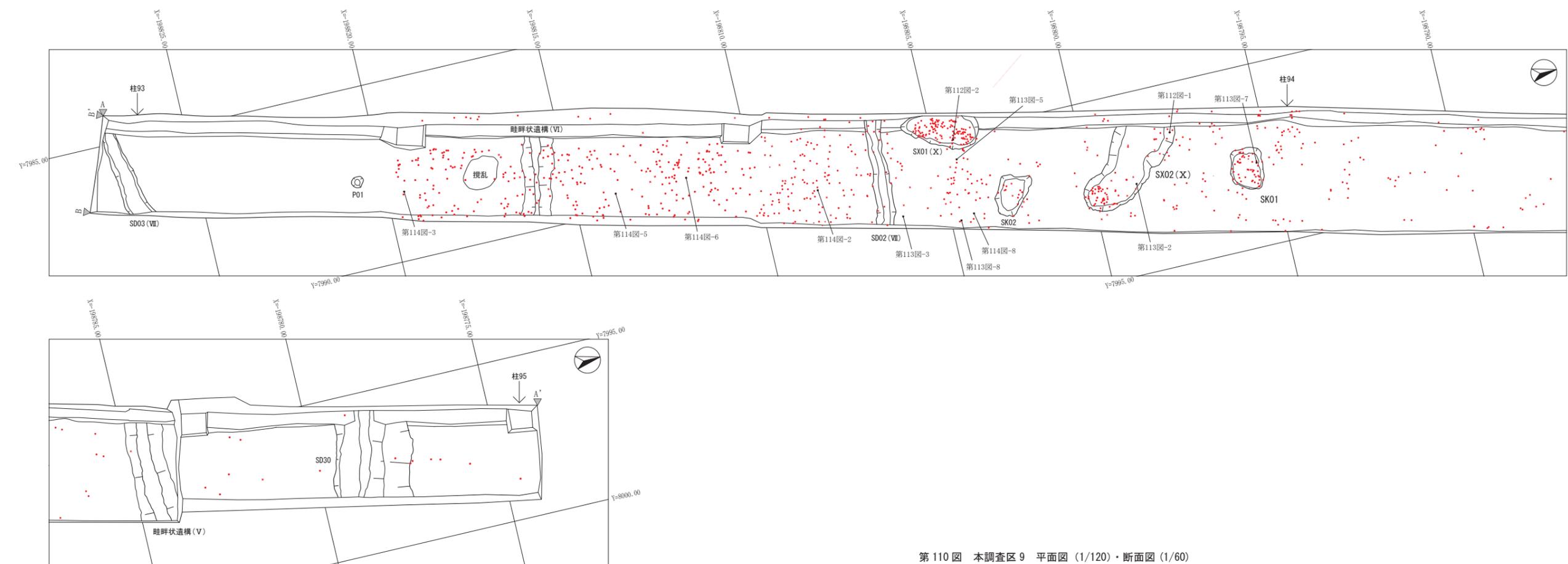
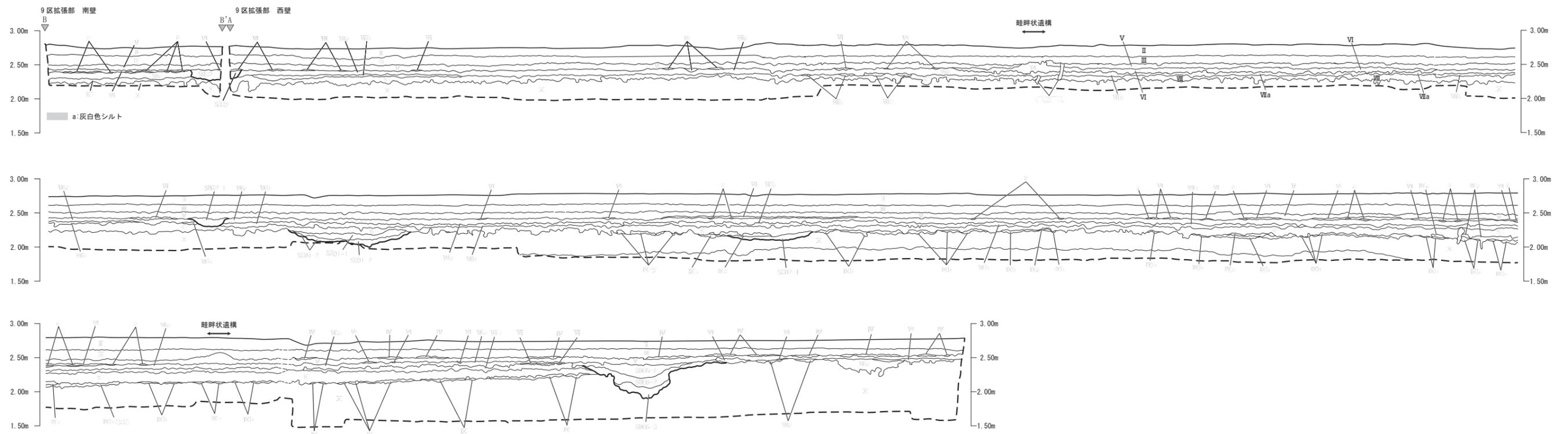
調査区の北半部、標高 2.5～2.6m の基本層 III 層中で確認した、基本層 V 層が畦畔状に高まっている部分である。検出長約 2.8m、検出上端幅約 0.5m、検出下端幅 1.0m でほぼ東西方向に直線的に延びる。上端-下端間の比高差は約 0.1m である。壁断面で観察した周辺の堆積状況からは、基本層 IV 層が断片化あるいは削平されている様子が確認されており、基本層 III・IV 層を主な母材層とした水田跡に関係した水田畦畔であった可能性も考えられるが、水田跡の平面的な確認ができなかったため詳細は不明である。

【VI 層畦畔状遺構】

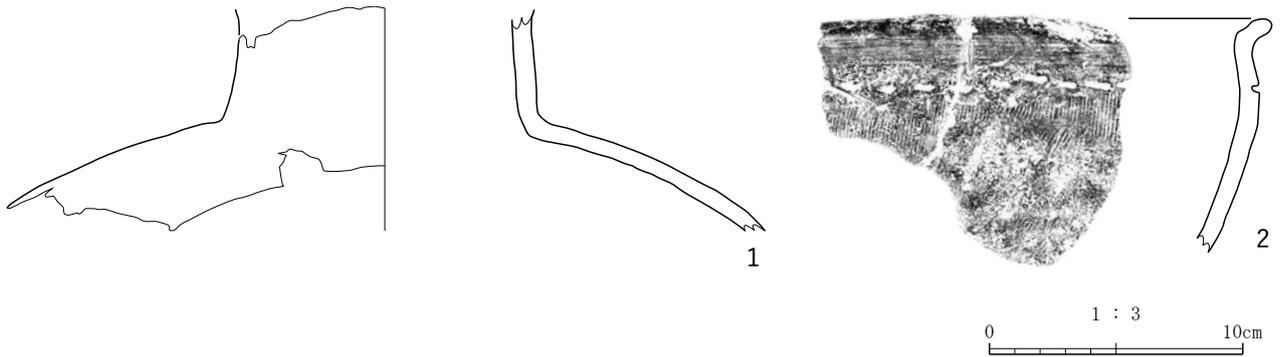
調査区の南半部、標高約 2.5m 前後の基本層 V 層上面で確認した、基本層 VI 層が疑似畦畔状に高まっている部分である。検出長約 2.6m、検出上端幅約 0.25m、検出下端幅約 1.0m で直線的に延びる。上端-下端間の比高差は約 0.1m である。壁断面で観察した周辺の堆積状況からは、基本層 VI 層が断片化あるいは削平されている様子が確認されており、基本層 V 層を主な母材層とした水田跡に関係した水田畦畔の可能性が考えられるが、水田跡の平面的な確認ができなかったため詳細は不明である。

【P1 ピット】

調査区の南半部、標高 2.4m 前後の VII 層上面で検出した。長短軸約 0.3m の不整形を呈するピットで、確認面からの最大深度は約 0.3m で、断面形は U 字型を呈する。堆積土は 1 層で、周辺から関連する他の遺構が確認されていないため、詳細な性格は不明である。遺物は出土していない。



第110図 本調査区9 平面図 (1/120)・断面図 (1/60)



第 73 表 本調査区 9 出土遺物観察表 土器

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	種別	器種	部位	口径	底径	器高	地文 / 施文	外面調整 / 内面調整	備考
111- 1	38-5	B084	本 9		壺					L5R		
111- 2	38-4	B085	本 9/SX1	弥生土器	甕					植物茎回転文	ナデ / ミガキカ	

第 111 図 本調査区 9 出土遺物 土器

本調査区 9 出土の弥生土器

本調査区 9 では、砂を多く含む IX 層の落ち込みが調査区の特にて北側でやや広範囲に確認されたが、その範囲からやや多くの弥生土器の破片が出土した。第 111 図の 1 は弥生土器の壺の頸部から胴部にかけての破片である。頸部は直立して立ち上がり、肩部が張っている。内外面ともにミガキ調整がされている。2 は甕口縁の破片である。地文には植物茎回転文を施し、胴部上端に刺突文による列点を施す。

本調査区 9 出土の石器

本調査区は高田 B 遺跡第 1 次調査の SR3 自然流路跡の北岸に位置する調査区で、出土遺物のうちの多くは基本層 VII~X 層上面の間で確認されている。本調査区の基本層 IX 層は、調査区遺構記載でも触れたように弥生時代の津波堆積物に由来すると考えられる粗粒砂~中粒砂を層中に多く混在、あるいはほぼ純粋に砂のみのブロックに覆われている状況が確認されることから、自然流路との大きな比高差を持たない比較的低平な平坦面上として人々の活動に利用されていた可能性が考えられる。

第 74 表 本調査区 9 出土石器組成表

	定形石器							定形石器							石皿類			敵磨具類					他		小計	総計					
	石鏃	石錐	石匙	石庖丁	磨製石斧	大形板状石器	管玉	RF	UF	碎片	石核	残核	石庖丁素材	大型板状石器破片	調整剥片	剥片	石皿	台石	砥石	小計	球状敵石	ハンマー	磨	敵			複合	磨・敵	紡錘車		
流紋岩	4	2					6	2	1	25		1	1		2	20	52														58
黒色緻密質安山岩	1						1																							1	
鉄石英	1						1																							1	
玉髓	2						2		1	3					10	14														16	
黒曜石	1						1			1	1				3	5														6	
珪質頁岩							2				1					3														3	
頁岩										1					1	2														2	
硬質泥岩																											1	1		1	
珪質凝灰岩																															
凝灰岩	1						1	1		6		1			5	13														14	
凝灰岩質安山岩					4		4							5	5															9	
安山岩																							4	1						5	
多孔質安山岩																															
花崗岩																															
花崗閃緑岩																															
石英斑岩																															
砂岩																															
片岩類				3			3						16		1	1	18													21	
緑色岩?																															
?																															
(空白)				1			1																							1	
総計	10	2	4	4			20	5		36	2	18		3	40	112							4	1		1	6		138		

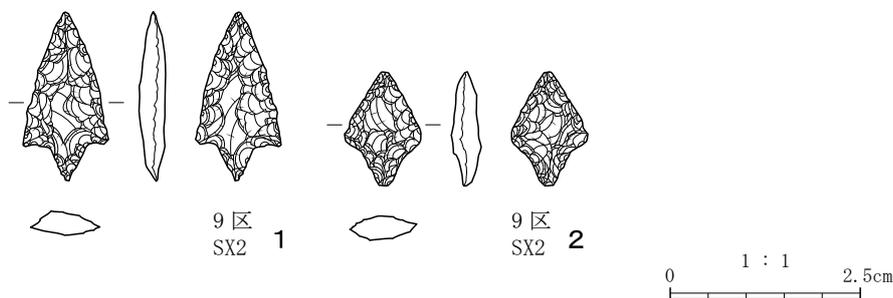
調査区内には溝跡や土坑を始めとした複数の遺構が確認されていたが、石器の大半は遺構外の包含層より出土したものであり、遺構との直接的な関係性はあまり認めることはできない。出土遺物の器種組成をみると約8割を占めているのは比較的小形の剥片類が卓越しており、石材組成では流紋岩が5割弱を占める。その一方で石器製作にかかわると考えられる小形のハンマーや敲磨具類、石皿類の出土は少ない傾向が見取れる。その中で石庖丁の素材剥片と考えられる、比較的薄手の片岩類の剥片がややまとまって見られることに注目される。第112図～第114図に本調査区から出土した石器の内、12点を図示した。

第112図1～2はSX2より出土した石鏃である。どちらも有茎式の石鏃で側縁はわずかに外湾するがほぼ直線的である。1は薄手に調整が施されており、表裏両面には素材剥片の剥離面が部分的に残存する。石材は鉄石英である。2は全体的に小形で茎部の作り出しも若干不明瞭である。石材は玉髓である。

第113図1～3は包含層中より出土した石鏃である。いずれも有茎式の石鏃で、1・3は茎部からカエシ部分の発達はまだ頭著ではなく、やや外湾する側縁を持つ。ともに裏面には素材剥片の主要剥離面を比較的大きく残しており、3の左側縁は裏面側からのみ調整加工が施された結果、表面側は素材剥片の剥離面がそのまま残されている。そこからは、横長に近い素材剥片を横位に用い、素材の縁辺を中心に二次加工を施すことによりあまり大きく剥片の厚みを減ずることなく成品を作り出すような作業過程が想定される。4・5は石鏃の未成品である。4は先端部から両側縁部にかけて比較的急斜な二次加工が施されているが剥離があまり奥にまで到達しておらず、結果として全体形状の成形が進行していない。石材は頁岩である。5は素材剥片の打面部側を基部側に設定し、主に両側縁を成形した状態の未成品で先端部を欠損する。下端面には素材剥片の打面がまだ大半残されており、表面に施された加工から判断すると凹基あるいは平基の石鏃を完成形として志向していたとも考えられるが、高田遺跡B遺跡出土の石鏃の大半が有茎である事を考えるとやや違和感が残る。6～8は石錐で、いずれも流紋岩を素材とする。6はつまみ部の作り出しが小さく横断面形が鋭利な四角形状の機能部を有する。7の最大厚は器体のはほぼ中央部付近にあり、機能部と把握部の境があまり明瞭ではない。機能部の横断面形はやや太めの菱形状を呈する。8は機能部端を折損するが、身厚で素材の自然面を残した大きめのつまみ部を持つ。

第114図1～3は紐孔部で折損した石庖丁の成品破片でいずれも片岩類を素材としている。1・2には入念な研磨成形が施されており、研磨に先立つ剥片剥離や敲打による成形加工の痕跡はあまり観察されない。残された形状から1は背部が側縁近くで屈曲する外湾刃半月形、2は背部が側縁近くで湾曲しており杏仁形を呈すると考えられる。3には紐孔部が2箇所観察されるが、孔間の距離が短く2孔以上が設定されていた可能性も考えられる。背部側縁辺は本来の形状が残されていると考えられるが、左側縁及び刃縁側縁は、破損後の二次加工によって直線的に成形されている。4は片岩類を素材とした石庖丁の未成品である。1と同様の完成形を目指していたと考えられ、周縁部を中心に成形を目的とした剥離と敲打による成形が施されている。紐孔部の設定はまだおこなわれていないが、刃縁の一部には粗い研磨加工が施され始めている。5の裏面には敲打成形と見られる敲打痕が比較的広い範囲で観察される。最終的に目的としていた形状は、外湾刃半月形と考えられる。

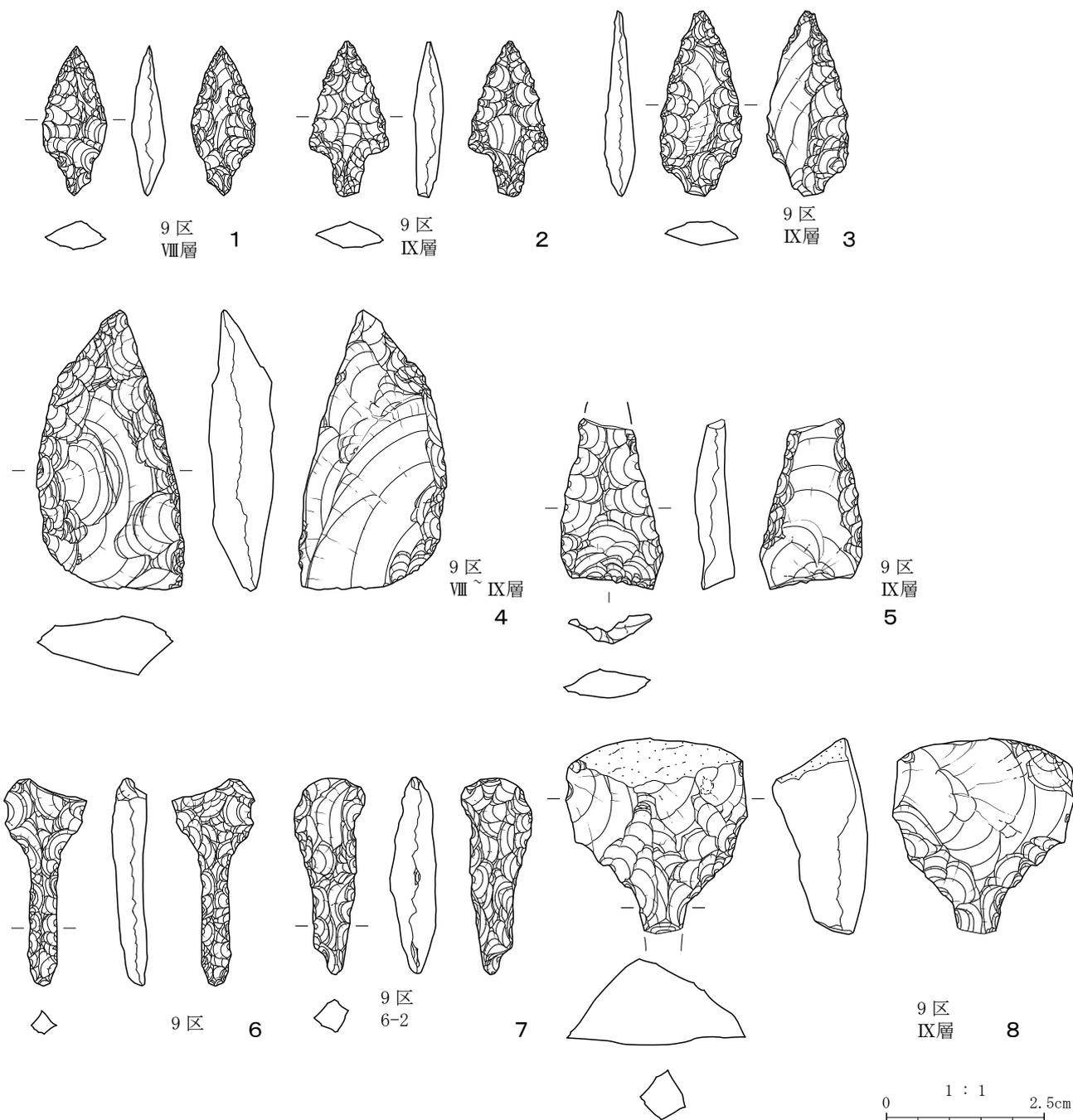
第114図6は下端縁の一部に敲打痕の累積が観察される敲打具類で、凝灰岩質安山岩を素材としている。表面の一部には比較的顕著な光沢をもつ磨面が確認されるため、大型板状石器の破片を用いた転用品の可能性が考えられる。



第75表 本調査区9 出土遺物観察表 石器

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	器種		石材 / 素材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
112- 1	51-1	K093	SX2	打製石器	石鏃	鉄石英	2.2	1.1	0.35	0.6	表裏両面の中央部分に素材剥片の剥離面を残す。
112- 2	51-2	K094	SX2	打製石器	石鏃	玉髓	1.5	1.0	0.4	0.4	小形。

第112図 本調査区9出土石器(1)



第76表 本調査区9 出土遺物観察表 石器

図版番号	写真番号	登録番号	遺構・層位	器種	石材 / 素材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	
113- 1	51-3	K095	VIII層	打製石器	石鏃	片岩類	2.4	1.0	0.5	1.0	裏面に素材剥片の主要剥離面を大きく残す。
113- 2	51-4	K096	IX層	打製石器	石鏃	流紋岩	2.5	1.3	0.5	1.0	
113- 3	51-5	K097	IX層	打製石器	石鏃	黒色緻密質安山岩	3.0	1.3	0.5	1.5	表裏両面に素材剥片の剥離面を大きく残す。
113- 4	51-6	K098	VIII~IX層	打製石器	石鏃 未完成	頁岩	4.5	2.3	1.0	9.8	裏面の二次加工ははまだ限定的。
113- 5	51-7	K099	IX層	打製石器	石鏃 未完成	流紋岩	(2.7)	1.6	0.6	2.1	下端に素材剥片の打面を残す。
113- 6	51-8	K100		打製石器	石錐	流紋岩	3.3	1.3	0.5	1.4	機能部の横断面形は菱形を呈する。
113- 7		K101	6-2	打製石器	石錐	流紋岩	3.2	1.1	0.7	1.9	最大厚を器体中央部分に持つ。
113- 8	51-9	K102	IX層	打製石器	石錐	流紋岩	(3.1)	2.9	1.5	9.1	把握部に素材の主要剥離面と元礫面を残す。

第113図 本調査区9出土石器 (2)